

# 千葉東南部ニュータウン 16

——大膳野北遺跡——

1 9 8 5

住 宅・都 市 整 備 公 団  
財団法人 千葉県文化財センター

# 千葉東南部ニュータウン 16

だいせんのきた  
——大膳野北遺跡——

1 9 8 5

住 宅・都 市 整 備 公 団  
財團法人 千葉県文化財センター

## 序 文

千葉市の南部を流れる村田川流域には、その恵まれた自然環境等により先土器時代から歴史時代に至る数多くの遺跡が残されており、この地が古代文化の一つの中心地として繁栄したことを物語っています。

近年、首都圏の人口増加は著しく、それに対応して大規模な宅地造成事業が各地で実施されています。本県においても、住宅・都市整備公団（前日本住宅公団）がこの地域に約600ヘクタールに及ぶ千葉東南部地区土地区画整理事業を計画しました。

このため、千葉県教育委員会では昭和46年度に事業地区の埋蔵文化財の所在について分布調査を実施し、これらの遺跡の取扱いについて、住宅・都市整備公団をはじめ関係諸機関と協議を重ねてまいりました。

その結果、できるだけ公園・緑地に取込んで現状保存を図る一方、現状保存が困難な遺跡については、止むを得ず事前に発掘調査を行い、記録保存の措置を講ずることで協議が整い、当初、昭和49年度には（財）千葉県都市公社文化財調査事務所が、次いで同50年度以降は当センターが調査を実施してまいりました。

このたび、昭和55年度、同57年度に調査された大膳野北遺跡の成果のとりまとめが終了しましたので「千葉東南部ニュータウン16」として、その報告書を刊行することとなりました。

本書では、縄文時代、古墳時代、奈良、平安時代の遺構・遺物を収録しております。縄文時代の遺構・遺物に関しては、早期末葉とされる炉穴群、前期、中期の住居跡が発見されました。特に、前期の住居跡の発見は、千葉東南部地区では希少な例であり、この地域の縄文時代前期の空白を埋める良好な資料となることだと思います。また、古墳時代終末期の方墳は、副葬品が出土しなかったものの、千葉東南部地区の方墳群のあり方の一端を明らかにするものです。さらに奈良・平安時代においては集落が営まれており、断続的ではありますが、長い間人々がこの台地を利用し、多くの足跡を残したことことがうかがえます。

本書が学術的な資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護・普及のために広く一般の方々に活用されれば幸いです。

終りに、住宅・都市整備公団、千葉県教育庁文化課及び千葉市教育委員会の御指導、助言に御礼を申し上げるとともに、極寒酷暑のなかで調査に協力された調査補助員の皆様方に、心から謝意を表します。

昭和60年3月

財團法人 千葉県文化財センター  
理 事 長 今 井 正

## 凡　　例

1. 本書は、住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部による、千葉市東南部地区におけるニュータウン建設計画に伴う、埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 本書に所収した遺跡は、昭和55、57年度に調査された千葉市大館野北貝塚だいせんのかたである。なお、調査の結果貝塚は存在しなかったため、大館野北遺跡とした。また、当センターで使用している遺跡コードは、201-025である。
3. 発掘調査、整理作業、報告書作成作業は、調査部長白石竹雄、鈴木道之助の指導のもとに下記のとおりに行った。  
調査部長 白石竹雄（～59. 3. 31）鈴木道之助（59. 4. 1～）  
部長補佐 栗本佳弘（～56. 3. 31）中山吉秀（～57. 3. 31）根本弘（～59. 3. 31）岡川宏道（59. 4. 1～）  
班長 山田常雄（～56. 3. 31）古内茂（～59. 3. 31）清藤一順（59. 4. 1～）  
発掘 栗田 則久、柳原弘二、大野康男  
整理 大野康男
4. 本書の原稿執筆は大野康男が行い、清藤一順が補筆した。
5. 本書の編集は清藤一順、大野康男が行った。
6. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部、千葉県教育文化課、千葉市教育委員会の関係各位をはじめ、多くの方々から、御指導、御助言をいただいた。
7. 本書に使用した方位は座標北である。
8. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行の1:25,000 薩我（千葉15号-2）である。
9. 土器の色調の名称は、「新版標準土色帖」監修農林省農林水産技術会議事務局に基づいた。
10. 遺構番号は、調査時には1次、2次それぞれ個別に付けられたが、本書では通し番号として、変更したものについては、旧番号をカッコ内に記した。
11. 遺物、図面、写真などの資料は、昭和59年10月31日現在、（財）千葉県文化財センター千葉東南部事務所（千葉市小金沢町299-7、TEL0472(68)0916）に保管している。

# 目 次

## 序 文

## 凡 例

第1章 序 説.....	1
第1節 遺跡の位置と環境.....	1
第2節 調査の経過と方法.....	4
第2章 遺構と遺物.....	5
第1節 繩文時代.....	5
1. 炉穴.....	5
2. 住居跡.....	14
3. 土塁.....	31
4. グリッド出土の遺物 .....	38
第2節 古墳時代.....	48
第3節 歴史時代.....	57
1. 住居跡 .....	57
2. 方形圓溝状遺構 .....	111
3. 土塁 .....	114
第3章 大膳野北遺跡について.....	127
結 論.....	142

## 挿図目次

第1図 千葉東南部地区遺跡分布図	2
第2図 遺跡周辺地形図	3
第3図 32・33号炉穴実測図	6
第4図 35・36号炉穴実測図	8
第5図 37・38号炉穴実測図	9
第6図 45号炉穴実測図	11
第7図 53・67・68号炉穴実測図	12
第8図 炉穴出土土器拓影図	13
第9図 30号住居跡実測図	15
第10図 31号住居跡実測図	16
第11図 52号住居跡実測図	18
第12図 3号住居跡実測図	20
第13図 12号住居跡実測図	21
第14図 13号住居跡実測図	23
第15図 18-B号住居跡実測図	25
第16図 24号住居跡実測図	26
第17図 43・57号住居跡実測図	27
第18図 繩文式土器実測図(1)	29
第19図 繩文式土器実測図(2)	30
第20図 繩文式土器実測図(3)	31
第21図 住居跡出土土器拓影図(1)	32
第22図 住居跡出土土器拓影図(2)	33
第23図 住居跡出土土器拓影図(3)	34
第24図 14・15・16・17号土坑実測図	35
第25図 25・26・41・74号土坑実測図	37
第26図 グリッド出土土器拓影図(1)	39
第27図 グリッド出土土器拓影図(2)	42
第28図 グリッド出土土器拓影図(3)	44
第29図 石器実測図(1)	46
第30図 石器実測図(2)	47
第31図 1号墳実測図	49

第32図	1号墳内部主体実測図	51
第33図	2号墳実測図	53
第34図	2号墳内部主体実測図	55
第35図	2号墳出土遺物実測図	56
第36図	1号住居跡実測図	58
第37図	2号住居跡実測図	60
第38図	4号住居跡実測図	62
第39図	5号住居跡実測図	64
第40図	住居跡出土土器実測図(1)	65
第41図	6号住居跡実測図	67
第42図	7号住居跡実測図	69
第43図	8号住居跡実測図	71
第44図	住居跡出土土器実測図(2)	72
第45図	9号住居跡実測図	73
第46図	11号住居跡実測図	75
第47図	18-A号住居跡実測図	77
第48図	19号住居跡実測図	79
第49図	39号住居跡実測図	80
第50図	40-A・B号住居跡実測図	82
第51図	住居跡出土土器実測図(3)	85
第52図	42号住居跡実測図	86
第53図	44号住居跡実測図	88
第54図	46号住居跡実測図	90
第55図	47号住居跡実測図	92
第56図	48号住居跡実測図	94
第57図	住居跡出土土器実測図(4)	96
第58図	49号住居跡実測図	97
第59図	住居跡出土土器実測図(5)	99
第60図	51号住居跡実測図	101
第61図	55号住居跡実測図	102
第62図	56号住居跡実測図	104
第63図	59-A号住居跡実測図	106
第64図	59-A号住居跡カマド実測図	107

第65図	59-B号住居跡実測図	108
第66図	60号住居跡実測図	109
第67図	住居跡出土土器実測図(6)	110
第58図	住居跡出土鉄・銅製品実測図	111
第69図	34号方形周溝状遺構実測図	112
第70図	50号方形周溝状遺構実測図	113
第71図	54号方形周溝状遺構実測図	115
第72図	10・20・21・23・27号土塙実測図	116
第73図	28・29号土塙実測図	118
第74図	58号土塙実測図	120
第75図	61・62・63・64・65・66号土塙実測図	121
第76図	69・70・71・72・73・75号土塙実測図	124
第77図	土器実測図	126
第78図	I期遺構分布図	128
第79図	II期遺構分布図	129
第80図	III期遺構分布図	131
第81図	IV・V期遺構分布図	134
第82図	VI期遺構分布図	136

## 図版目次

図版 1	1. 遺跡遠景	2. 2号住居跡全景
	2. 遺跡遠景	3. 2号住居跡遺物出土状況
	3. 遺跡近景(調査中)	図版11 1. 4号住居跡全景
図版 2	1. 32・35号炉穴	2. 4号住居跡遺物出土状況
	2. 33号炉穴	3. 5号住居跡全景
	3. 35号炉穴	図版12 1. 5号住居跡遺物出土状況
	4. 36号炉穴	2. 6号住居跡全景
	5. 32号炉穴	3. 6号住居跡遺物出土状況
	6. 37号炉穴	図版13 1. 7号住居跡全景
	7. 45号炉穴	2. 7号住居跡遺物出土状況
図版 3	1. 30号住居跡全景	3. 8号住居跡全景
	2. 31号住居跡全景	図版14 1. 9号住居跡全景
	3. 52号住居跡全景	2. 9号住居跡遺物出土状況
図版 4	1. 3号住居跡全景	3. 11号住居跡全景
	2. 12号住居跡全景	図版15 1. 19号住居跡全景
	3. 12号住居跡遺物出土状況	2. 3902号住居跡全景
図版 5	1. 13号住居跡全景	3. 3902号住居跡遺物出土状況
	2. 13号住居跡炉断面	図版16 1. 4003号住居跡全景
	3. 24号住居跡全景	2. 4003号住居跡遺物出土状況
図版 6	1. 43号住居跡全景	3. 4003号住居跡遺物出土状況
	2. 57号住居跡全景	図版17 1. 4209号住居跡全景
	3. 57号住居跡遺物出土状況	2. 4209号住居跡遺物出土状況
図版 7	1. 1号墳全景	3. 4209号住居跡遺物出土状況
	2. 1号墳石室全景	図版18 1. 4407号住居跡全景
	3. 1号墳石室掘り方	2. 46(19)・48(20)号住居跡全景
図版 8	1. 2号墳全景	3. 46(19)号住居跡遺物出土状況
	2. 2号墳石室全景	図版19 1. 48(20)号住居跡全景
	3. 2号墳周溝遺物出土状況	2. 48(21)号住居跡遺物出土状況
図版 9	1～6. 1号墳石室解体状況	3. 49(20)号住居跡全景
	7～12. 2号墳石室解体状況	図版20 1. 56(20)号住居跡・73号土塁全景
図版10	1. 1号住居跡全景	2. 59(20)号住居跡全景

	3 . 59(2)号住居跡遺物出土状況	図版25 33・36号炉穴, 30・31・43号住居 跡出土土器
図版21	1 . 34(6)号方形周溝状遺構全景	図版26 52号住居跡出土土器
	2 . 54(2)号方形周溝状遺構全景	図版27 5・12・15・18・24号住居跡出土 土器
	3 . 50(4)号方形周溝状遺構全景	図版28 グリッド出土土器
図版22	1 . 10号土塙全景	図版29 グリッド出土土器
	2 . 21号土塙全景	図版30 グリッド出土土器
	3 . 28号土塙全景	図版31 2号墳, 2・5号住居跡出土土器, 鐵鎌
	4 . 29(1)号土塙全景	図版32 5・6・7・8・11・18-A号住 居跡出土土器
	5 . 58(3)号土塙全景	図版33 18-A・39・40-B・42・44・46 号住居跡出土土器
	6 . 61(3)号土塙全景	図版34 47・48・49号住居跡出土土器
	7 . 62(3)号土塙全景	図版35 49・51・59-A号住居跡出土土器
	8 . 63(3)号土塙全景	図版36 住居跡出土鐵・銅製品, 方形周溝 状遺構, 土塙出土土器
	9 . 64(3)号土塙全景	
	10 . 65(3)号土塙全景	
	11 . 66(3)号土塙全景	
	12 . 72号土塙全景	
図版23	3・12・13・52号住居跡, グリッド 出土土器	
図版24	13・43・57号住居跡, グリッド出土 土器, 石器	

# 第1章 序説

## 第1節 遺跡の位置と環境

大膳野北遺跡は、千葉市大金沢町543-2<sup>1</sup>他に所在しており、千葉東南部地区の南東端に位置している。本遺跡は、千葉市と市原市との境を流れる村田川水系の支谷に面した台地上に占地している。この村田川は、千葉市小食土町付近に源を発し、標高20~70mの下締台地を開析しながら略西流し、東京湾へと注いでいる。本遺跡は、数ある村田川の支谷のうち、千葉市落井町付近で村田川へ合流する支谷の最奥部に位置し、沖積面の標高は約23mである。この支谷は、最奥部で二叉に分れており、その小支谷に挟まれた台地上に遺跡が占地している。台地の標高は約50mを測り、沖積層面との比高は27mを測る。この支谷奥部にはバクチ穴遺跡、大膳野南貝塚、太田法師遺跡、大膳野北遺跡などが存在し、いずれも半径200m以内と至近距離である。

さて、本遺跡では先土器時代、弥生時代の遺構、遺物は検出されなかったが、縄文時代、古墳時代、歴史時代の遺構、遺物が検出された。千葉東南部地区の遺跡についてみると、先土器時代の遺跡は、対岸に位置するバクチ穴遺跡で良好な資料が得られているほか、六通金山遺跡、馬ノ口遺跡などにおいても豊富な資料が出土している。縄文時代の遺跡は上赤堀貝塚、有吉北貝塚、有吉南貝塚、六通貝塚などの貝塚が多く形成され、また形成時期も中期から後期に集中している。本遺跡でも中期加曾利E期の住居跡を検出し、その関係が注目される。本遺跡で検出された前期黒浜期の住居跡は、本地域では希少な例であり、バクチ穴遺跡のB区包含層からは多量の土器片が出土したが、遺構を検出することはできなかった。弥生時代の遺構、遺物は本遺跡では検出されなかったが、千葉東南部地区でも希薄な時期であり、バクチ穴遺跡、有吉遺跡<sup>2</sup>で僅かに住居跡が確認されているに過ぎない。これに対して村田川左岸から千原台地区にかけて多くの集落が営まれ、このような状況は古墳時代初頭まで続く。古墳時代後期になると有吉遺跡、高沢遺跡などに見られるように歴史時代にまで継続する大規模な集落が出現する。また、同時期の古墳も、椎名崎古墳群をはじめ生浜古墳群、馬ノ口古墳群、ムコアラク古墳群、六通金山古墳群などが築造されている。特に比較的近距離にあるムコアラク古墳群、六通金山古墳群では内部主体に横穴式石室を有する方墳が存在し、本遺跡の2基の古墳との密接な関係が考慮される。歴史時代の遺跡は先に掲げた有吉遺跡、高沢遺跡などの他にも椎名崎遺跡、ムコアラク遺跡など大規模な集落が多く営まれているが、その中にあって本遺跡は概して小規模な集落といえよう。

### 註

1 発掘調査に際して大膳野北貝塚と呼称していたが、調査の結果24号住居跡覆土内に貝ブロックが認められたが、ほかに貝塚の形成は見られなかつたため、本書では大膳野北遺跡とした。また「千葉市史」1976では本遺跡をバクチ穴遺跡としている。ちなみにここで言うバクチ穴遺跡は、長堀遺跡となっている。

2 既報<sup>3</sup>

3 これは千葉県立身体障害者職業訓練校の建設に伴って調査を行ったもので、今回の調査区域と隣接しており、同一の遺跡である。

白石 浩 1982 「千葉市大膳野北遺跡」 千葉県文化財センター

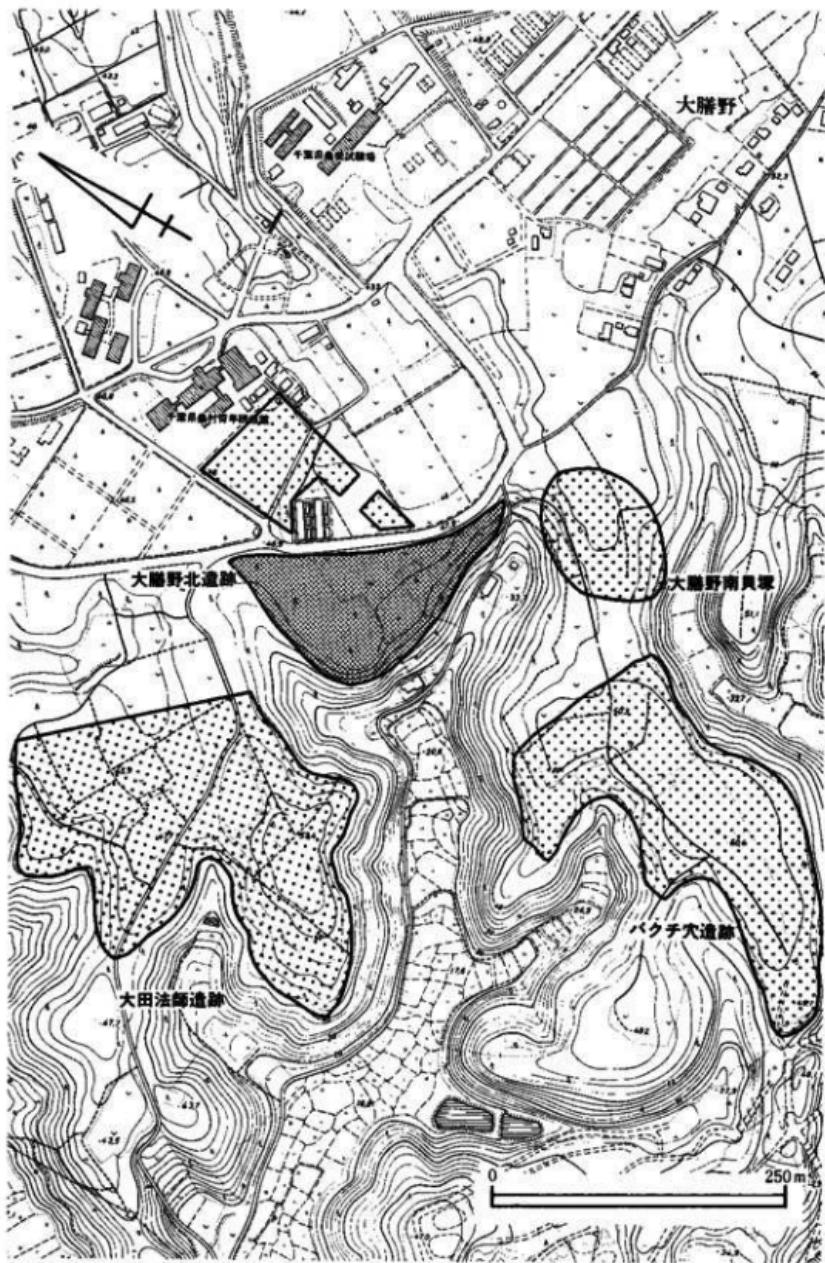
4 萩田 刑久 1983 「千葉東南部地区における方墳の様相」 千葉県文化財センター研究連絡誌第5号



1:25,000 蘇我

- |               |            |            |               |               |
|---------------|------------|------------|---------------|---------------|
| 1. 大藪野北遺跡     | 2. 有吉遺跡    | 3. 上赤塚貝塚   | 4. 上赤塚古墳群     | 5. 高沢古墳群      |
| 6. 生浜古墳群      | 7. 高沢遺跡    | 8. 南二重塚遺跡  | 9. 城ノ台        | 10. 有吉城跡      |
| 11. 有吉南遺跡     | 12. 鶴取遺跡   | 13. 有吉北貝塚  | 14. 有吉南貝塚     | 15. 馬ノ口遺跡     |
| 16. 椎名崎遺跡     | 17. 伯父名古遺跡 | 18. 木戸作遺跡  | 19. 椎名崎古墳群A支群 | 20. 椎名崎古墳群B支群 |
| 21. 椎名崎古墳群C支群 | 22. 今台遺跡   | 23. 神明社裏遺跡 | 24. 小金沢貝塚     | 25. 六道遺跡      |
| 26. 六通貝塚      | 27. 小金沢古墳群 | 28. 御塚台遺跡  | 29. ムコアラク遺跡   | 30. 六通金山遺跡    |
| 31. 六通神社南遺跡   | 32. 白鳥台遺跡  | 33. 大藪野南貝塚 | 34. バクチ穴遺跡    | 35. 富岡古墳群     |
| 36. 大田法師遺跡    |            |            |               |               |

第1図 千葉東南部地区遺跡分布図



第2図 遺跡周辺地形図

## 第2節 調査の経過と方法

大膳野北遺跡の調査は昭和55年12月1日から翌56年2月15日、昭和57年11月1日から翌58年3月31日までの2次に分けて行った。調査は公共座標第Ⅳ系を基準として遺跡全体に40m×40mの大グリッドを設定し、X軸（東西軸）を1, 2, 3…と数字で、Y軸（南北軸）をA, B, C…とアルファベットで表示し、個々のグリッドについては1A, 2A…と呼称した。さらに大グリッド内に4m×4mの小グリッドを設定し、X軸を00, 01, 02…、Y軸を00, 10, 20…と表示し、個々のグリッドは11, 22, 33…と呼称した。

1次調査は前記のとおり、昭和55年12月1日から翌56年2月15日までの約2か月の調査期間で、対象とした範囲は遺跡東側の部分であり、面積は1,500m<sup>2</sup>である。調査方法は遺構の確認トレンチを設けずに当初から重機を使用して表土除去を行った。その結果住居跡以外に2基の古墳が存在していることが確認され、住居跡と古墳の調査を併行して行うこととした。住居跡の調査は原則として4分割にして精査を行い、図面は土層断面図、平面図、遺物出土状況図及び必要に応じて炉、カマドの図面を作成した。古墳は全く墳丘が遺存しておらず、表土除去以前は古墳の存在を予測していなかったものである。調査は周溝の検出から着手し、調査順に1号墳、2号墳とした。周溝の調査が終了したところで内部主体の調査に着手した。1・2号墳とも横穴式石室を内部主体とするもので、石室内の崩落土の除去、前庭部の精査から作業を開始した。最後に石室展開図を作成し石室の解体を行った。先土器時代の確認調査は、上層遺構の調査が終了した部分から、順次2m×4mの試掘坑を設定して行ったが、遺物は検出されなかった。

2次調査は、残りの西側部分について昭和57年11月1日から翌58年3月31日までの4か月の調査期間で、面積は7,300m<sup>2</sup>である。2次調査では大グリッドを基本として2m幅の確認トレンチを設定した。確認調査の面積は上層遺構10% (730m<sup>2</sup>)、先土器時代4% (292m<sup>2</sup>) を目安とした。確認調査は12月24日までをその期間とし、住居跡8軒、方形周溝状遺構1基、土塙14基、炉穴2基を確認した。文化課からの指示を受け翌58年1月5日から本調査に着手した。本調査は確認調査の結果に基づき、重機を使用しての表土除去から開始したが霜などの悪条件のため約1か月を費した。これと併行して順次遺構の調査を開始した。しかし、部分的に新期テフラの堆積が見られ、確認調査の結果を参考に、歴史時代の遺構については新期テフラ上面でプランを検出した。遺構の調査は1次調査と同様に4分割して精査を行った。但し、土塙などについては2分割とした。また、カマドの遺存が良好な住居跡については袖を残したが、多くの住居跡はさほど良好な遺存状態ではなかった。遺構番号は再び1号から付したため、本書では番号を付け替え、調査時の遺構番号はカッコ内に記した。先土器時代の確認調査は、2m×2mの試掘坑を設定して行ったが、1次調査同様遺物は検出されなかった。

## 第2章 遺構と遺物

### 第1節 繩文時代

#### 1. 炉穴

10か所に炉穴が検出された。但し、数基が重複しているものもあり実数は21基である。特徴的なのは、これらは1基をのぞき、すべて南西斜面に並ぶかのように集中していることで、他の地点には1基しか認められていない。土器を伴う例は少なく、従って詳細な時期を決定されるものは少ない。

##### 32(4)号炉穴（第3図、図版2）

炉穴群のはば中央に位置し、A・B2基が重複している。平面プランは楕円形を呈し、規模は5.0m×1.5mを測る。北端及び中央の2か所に火床が設けられているため便宜的にA・Bとした。ロームへの掘り込みは約35cmを測り、覆土の観察からB→Aの構築順序が確認された。Aの火床は掘り込みの北端に設けられ、100cm×80cmの規模を有する。底面はよく焼けており約10cmの厚さに焼土が堆積している。Bの火床は掘り込みの中央に設けられ、Aよりもやや小さく直径70cmの規模を有する。底面は同様に良く焼けており、約10cmの厚さに焼土が堆積している。足場となるテラスはA・Bとともに火床の南西側に設けられ、底面は平坦で、大きなレベル差はない。長軸方向はともにN-32°-Eを指す。

遺物は土器片、蝶が僅かに出土しただけであり、特に図示できる遺物は出土していない。

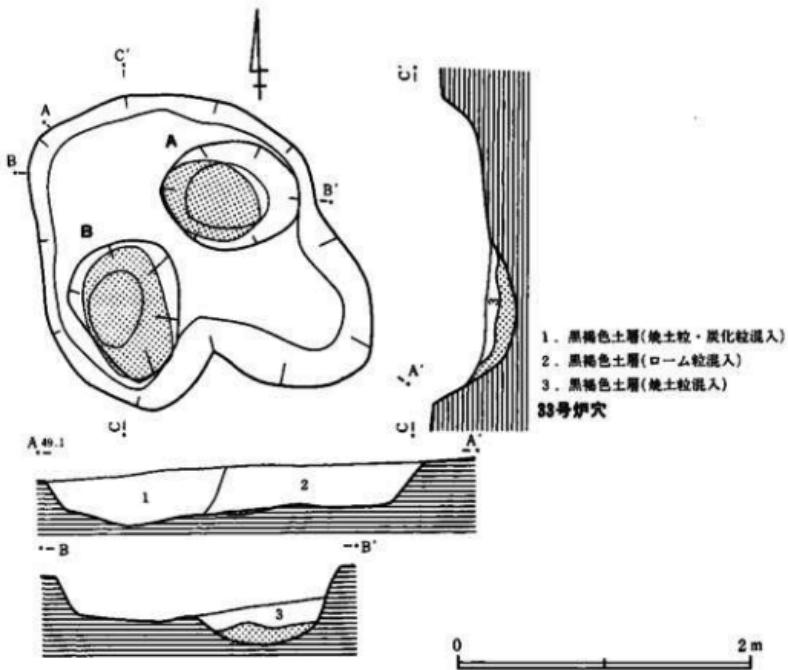
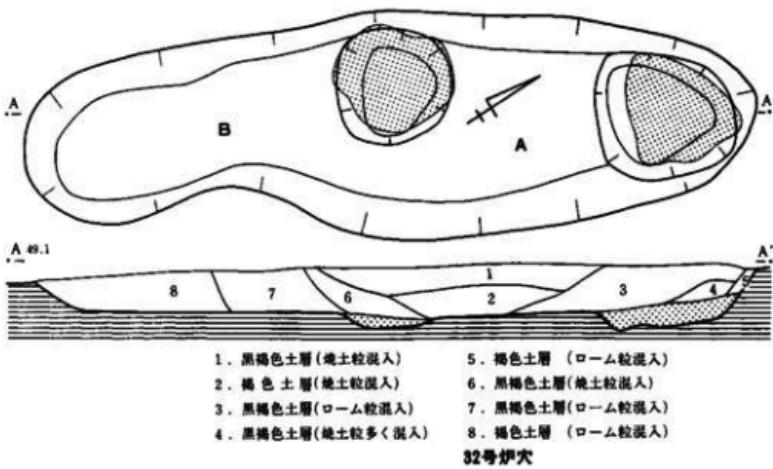
##### 33(5)号炉穴（第3・8図、図版2・25）

36号炉穴の南3mに位置しており、A・B2基が重複している。覆土の観察の結果A→Bという先後関係の可能性が強い。

Aは2.4m×1.1mの楕円形の平面プランを呈していたと考えられる。北側に火床が設けられ、90cm×70cmの範囲で浅くぼみ、焼土が堆積している。Bは2.0m×1.0mの楕円形の平面プランを呈していたと考えられる。南側に火床が設けられ、Aとはほぼ同じ規模を有する。足場となるテラスはともに平坦で、A・Bのレベル差は認められない。しかし火床は一段低く、確認面から40~50cmの深さを測る。火床と足場の関係はA・Bと全く異っている。長軸方向はAがN-30°-W、Bはほぼ南北を指している。

覆土内からは僅かではあるが土器片が出土した。

遺物 細片であったが3点を採集した。いずれも胎土に植物纖維を混入するものであるが、2のその量は特に少ない。1・2は細隆起線の区画に太い沈線を充填するもので、竹管の刺突も伴っている。1は口縁部の破片で、やや内窓しており、更に波状を呈するようである。2の器壁は遺存が良くないが、1はかなり堅緻な状態をとどめている。色調は1が赤褐色、2が黄褐色を呈している。3は内外面とも擦痕が観察されるが、その方向は外面縱位、内面横位となる。



第3図 32・33号炉穴実測図

植物繊維の混入は1・2に比べて多く、脆弱である。色調は黒褐色を呈している。

### 35(7)号炉穴(第4図、図版2)

32号炉穴の北1.5mに位置しており、A・B2基が重複している。北側は34号方形周溝状遺構構築のため破壊されている。全体は1.9m×1.8mの不整形のプランを呈する。確認面からの深さは約30cmを測り、底面は比較的平坦である。火床は2か所に検出され西側をA、東側をBとした。覆土は焼土粒、ローム粒を含む黒褐色土が主体をなすが、覆土の観察からはA、Bの先後関係は把握できなかった。Aの火床は北端を34号方形周溝状遺構に切断されるが、直径70cmの不整円形を呈し、周囲より約10cm低くなっている。底面はかなり火熱を受けており、約20cmの厚さで焼土が堆積している。足場となるテラスがどの方向に設けられていたかは明確ではないが、焼土の堆積が南北に長い範囲にあり、また覆土の状態を考え合わせても火床南側の部分が足場であったとしてよさそうである。Bの火床はAよりもやや小さく直径50cmほどであり、周囲より僅かに低くなっている程度である。底面もAに比べるとそれほど火熱を受けていとはいえず、東側に偏って焼土が堆積している。足場となるテラスは西側に設けられ、Aと共有する可能性がある。長軸方向はN-70°-Eを指す。なお、遺物は出土していない。

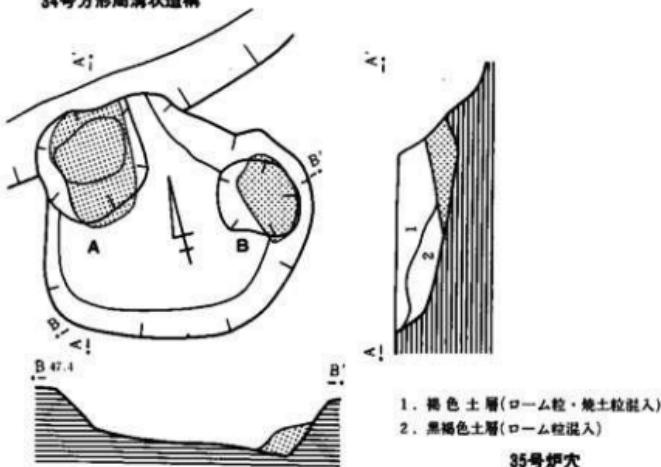
### 36(8)号炉穴(第4・8図、図版2・25)

33号炉穴の北3mに位置しており、A・B・Cの3基が重複している。覆土の観察からはA・Bの分離はできなかったが、B→Cの先後関係は明確となった。A・Bは3.0m×0.8mの長梢円形のプランを呈し、確認面から約25cmの深さを測る。北側の火床をA、南側の火床をBとした。Aの火床は70cm×50cmの規模を有し、やや低くなっている。焼土の堆積は炉穴の長軸にそって長く、約15cmの厚さである。また火床の北側に直径40cmほどの浅いピットが検出されたが、炉穴に伴って使用されたものではないようである。足場は火床の南西側に設けられ、斜面下方に向いている。Bの火床はCの構築によって南端を破壊されるが、直径約70cmと推定される。周囲より約10cm低く長軸方向に長く、25cmの厚さに焼土が堆積している。足場となるテラスは明確ではないが、底面の立ち上がりからしてAと重複していたと考えるのが妥当であろう。長軸方向はともにN-40°-Eを指す。

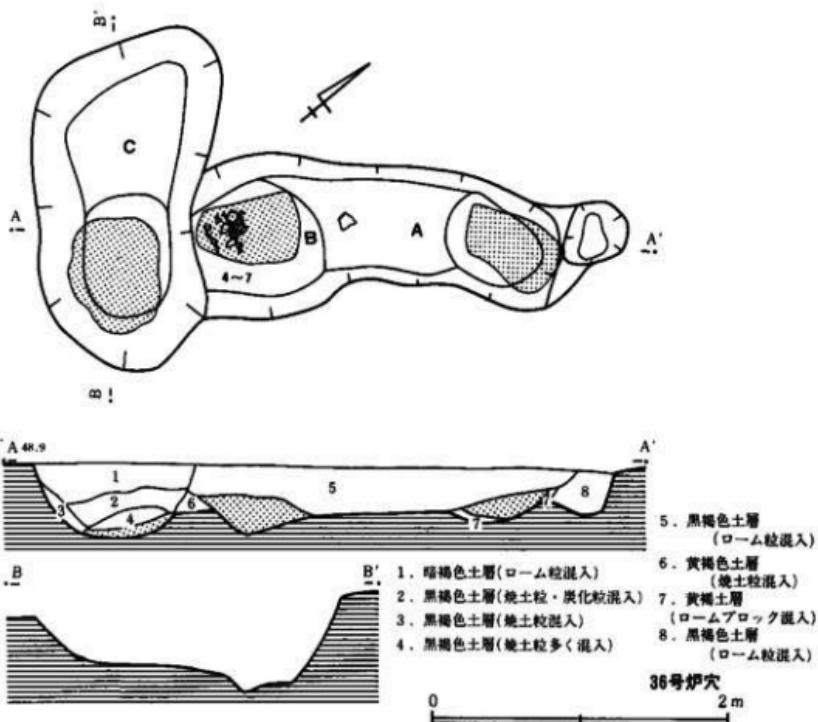
Cは2.3m×1.1mの不整梢円形のプランを呈する。確認面からの深さは約40cmを測り、壁は確かに立ち上がっている。火床は80cm×60cmの梢円形を呈し、周囲より約10cm低くなっている。焼土の堆積は火床を中心として70cm×60cmの範囲に認められ、約15cmの層厚である。足場となるテラスは火床の北西側に設けられ、A・Bと90°方向を異にしている。

出土遺物は他の炉穴に比べると多く、Bの焼土上面からは土器片がやまとまって出土した。遺物4点を採掘したが、多くの土器片は細片であるため図示できなかった。いずれも胎土に植物繊維を混入するが、その量はそれほど多くない。また、破損した後に火熱を受けた土器片も多く、遺存状態は良くない。4・5・7は口縁部の破片で、直線的に開いている。端部は棒

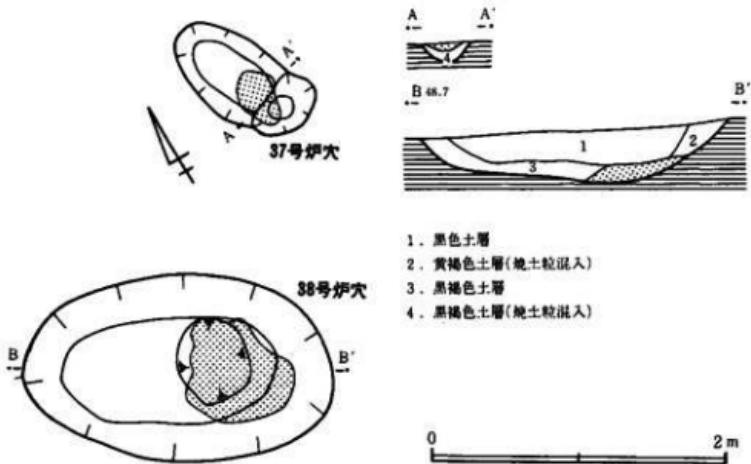
34号方形周溝状造構



35号炉穴



第4図 35・36号炉穴実測図



第5図 37・38号炉穴実測図

状工具を押圧しており、比較的整っている。また、部分的な破片であるため明言はできないが、4は波状を呈するようである。条痕は内外面とも横走し、内面については遺存の良い7についてのみ採拓した。6は胴部上半から中位にかけての破片と考えられる。外面は同様横走する条痕であるが、内面は縦走する条痕が観察される。以上4点は口唇部の押圧、条痕、胎土、出土状況等からして同一個体の可能性が高いものであるが、先述したように遺存状態が悪く、接合はしなかった。色調は黒褐色を呈していたようであるが、火熱を受けた破片は赤褐色となっている。

### 37(9)号炉穴（第5図、図版2）

36号炉穴の北7mに位置している。平面プランは2.2m×1.2mの楕円形を呈し、確認面からの深さは、約30cmを測る。壁の立ち上がりはやや緩かで、覆土には焼土粒が混入している。底面は平坦で、火床は直径40cmの範囲が僅かに低く、かなり焼けて硬化している。焼土の堆積は火床より広い範囲に認められ、特に西側に伸びている。しかし火床がかなり焼けていることを考えれば堆積は薄く、層厚は10cm前後である。足場となるテラスは火床の西側に設けられ、斜面下方に向いている。長軸方向はN-60°-Wを指す。なお、遺物は出土していない。

### 38(10)号炉穴（第5図、図版2）

炉穴群の北端であり、37号炉穴の北約1mに位置している。平面プランは1.0m×0.5mの楕円形を呈し、極めて小規模なものである。確認面からの深さも約10cmと浅く、焼土の堆積は認

められたものの炉穴としての機能を果たすためのものとするには疑問が残る。焼土の堆積は40cm×30cmの範囲で、5cm程度である。底面は火熱を受けたような痕跡はなく、南端に直径約30cmのピットが検出された。なお、遺物は検出されなかった。

#### 45 (18) 号炉穴（第6図、図版2）

炉穴群の南端に位置し、A～Gの7基以上が重複している。部分的に擾乱を受け不明瞭な箇所も存在したが、A・B・D→E→F→Cの順に構築されたと考えている。但し、Gとした部分については、焼土の堆積、あるいは火床と考えられるような痕跡が認められなかつたため、特に触れない。

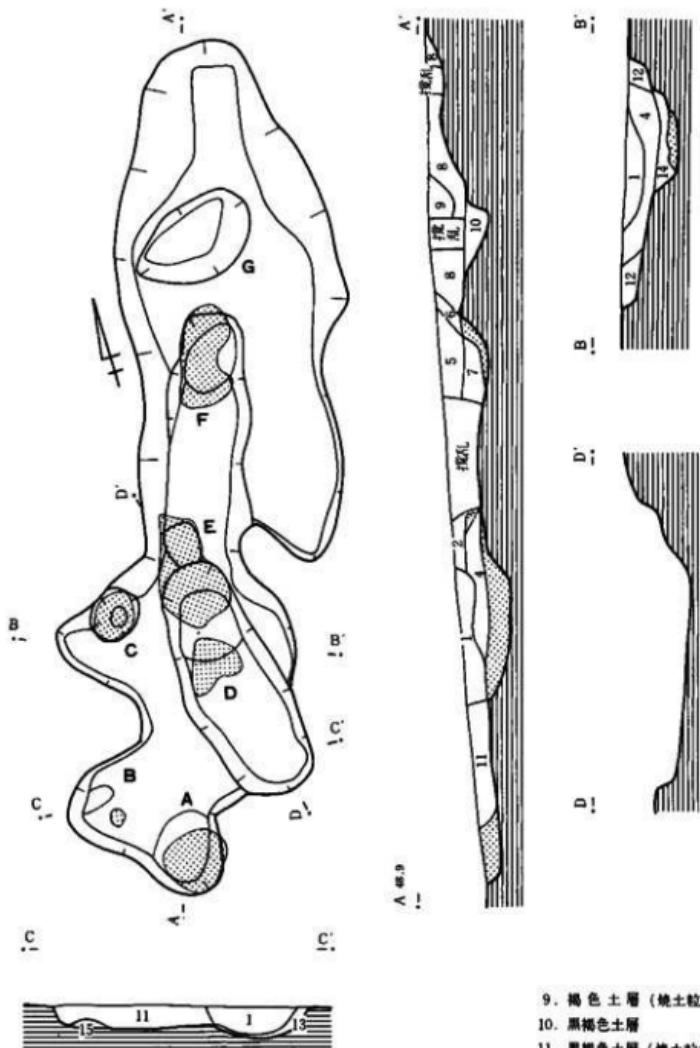
A・Bはその先後関係を明らかにできなかった。Aは直径約50cmの火床が確認され、その範囲が僅かに低くなっている。火床を中心として、約10cmの厚さで焼土が堆積している。足場の設けられた方向は、火床の形態を考えると北西側の平坦な部分がこれにあたると思われる。Bの火床はかなり狭い範囲であるが、火熱を受けて硬化している。しかし焼土の堆積は、火床からややずれて検出され、その量も火床の規模に比例してわずかであった。足場は火床側のプランを見てもAと共有していたことは明確である。

CはA、Bの北側に火床が検出された。平面的にプランを確定することができなかつたが、覆土の観察により1.5m×1.0mの楕円形のプランが想定される。確認面からの深さは約10cmと浅く、Aとのレベル差は認められない。火床は直径約30cmを測り、その部分がやや低くなっている。焼土は火床を中心に5cmほど堆積している。足場は火床の南側に設けられ、(1)がその覆土である。

Dは掘り込みが最も深いため、平面プランを楕円形と確定できた。規模は2.5m×1.5mを測り、確認面から約60cmの深さを有する。火床は70cm×60cmの楕円形となり、火熱を受けて硬化している。焼土は火床から足場の方へずれて約20cm堆積している。従って火床の中心には焼土が見られない。足場は火床の南側に設けられ、平坦である。火床と足場の位置関係はCに近いものとなる。

EはDの上面に構築され、平面プランを把握することはできなかつた。しかし長軸長は1.5m以上であることは確実である。火床はDの北側に検出され、直径約40cmの範囲が火熱を受けて硬化している。火床はあまり低くないが、焼土は広い範囲に堆積し、特に足場側に伸びDの火床上面にまで及んでいる。但し、Dの焼土とは約10cmのレベル差があり、区別される。足場は火床の南側に設けられたが、明確に面を把握できなかつた。Dの立ち上がりの東側に、もう一段の面が存在し、これがEの足場面と考えられる。

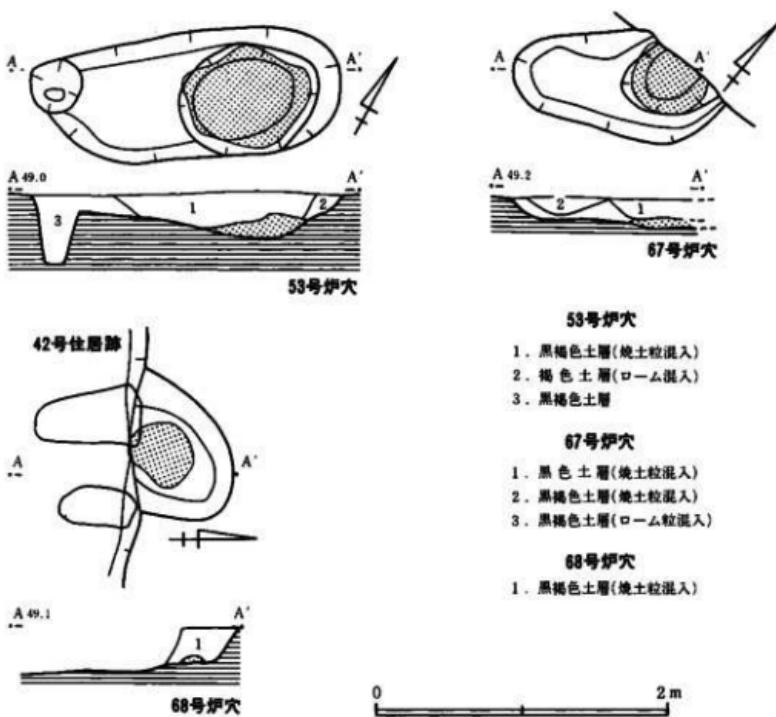
Fも平面プランを明確に把握できなかつたが、2.3m×0.7mの楕円形と推定している。底面は平坦であるが擾乱が入り、確認面からの深さは約30cmを測る。火床は60cm×40cmと長軸方向に長く、やや硬化している。焼土は火床を中心として約10cm堆積している。足場は火床の南側



- |                     |                 |                      |
|---------------------|-----------------|----------------------|
| 1. 黑褐色土層（焼土粒混入）     | 5. 黒褐色土層        | 9. 棕色土層（焼土粒混入）       |
| 2. 黒褐色土層（焼土粒混入）     | 6. 黒褐色土層（焼土粒混入） | 10. 黒褐色土層            |
| 3. 棕色土層（ローム粒・焼土粒混入） | 7. 黒褐色土層        | 11. 黒褐色土層（焼土粒少しある）   |
| 4. 黒褐色土層（焼土粒多く混入）   | 8. 棕色土層（ローム粒混入） | 12. 黒褐色土層（ロームブロック混入） |
|                     |                 | 13. 黒褐色土層（ローム混入）     |
|                     |                 | 14. 墓赤褐色土層（焼土混入）     |
|                     |                 | 15. 黒褐色土層（焼土粒混入）     |



第6図 45号炉穴実測図



第7図 53・67・68号炉穴実測図

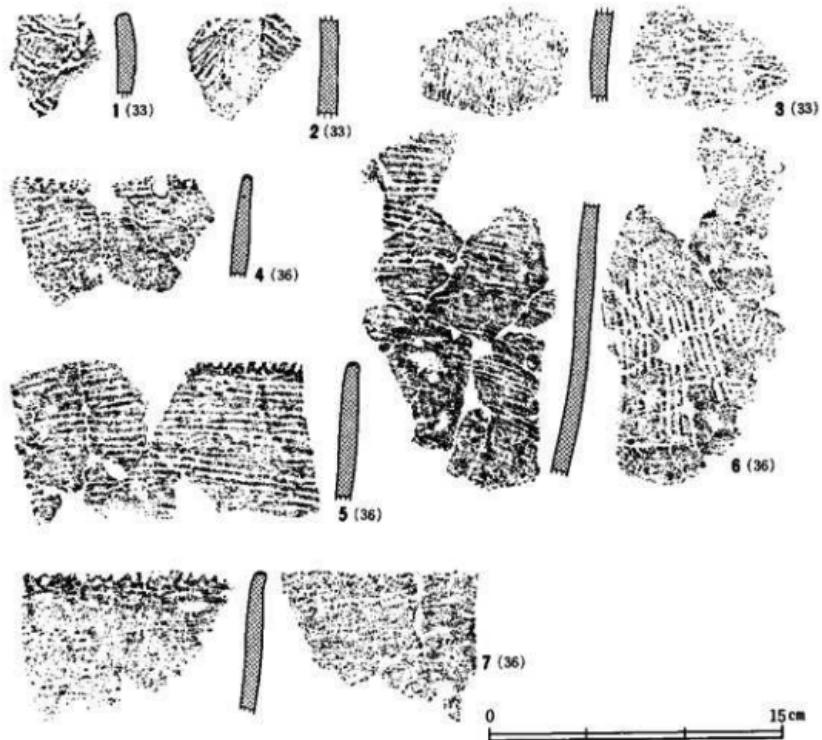
に設けられる。

遺物はA~Fまでごく僅かな土器片しか出土していない。

### 53(28)号炉穴（第7図）

36号炉穴の西約8mに位置している。平面プランは $2.1\text{m} \times 0.8\text{m}$ の楕円形を呈し、確認面からの深さは最深約20cmを測る。底面は火床が最も深く、足場へ向けて徐々に浅くなり、足場側の端部にピットが1か所検出された。覆土は焼土粒を含む黒褐色土が堆積している。火床は $100\text{cm} \times 60\text{cm}$ の楕円形の範囲が約10cm低く、火熱を受け硬化している。焼土は火床を中心として約10cm堆積している。足場は火床の南西側に設けられ、斜面に向っている。長軸方向はN-45°-Eを指す。

遺物は覆土内から土器片が数点出土した。



第8図 炉穴出土土器拓影図

#### 67 (40) 号炉穴（第7図）

52号住居跡の南側に隣接し、本炉穴だけが、台地中央の平坦部に位置している。北側を擾乱により破壊されているが、平面プランは $1.5m \times 0.7m$ の橢円形を呈していたと推定される。底面は平坦で、確認面からの深さは約10cmを測る。火床は直径約50cmの円形の範囲が僅かに低く、いくぶん火熱を受けている。焼土の堆積は火床を中心にして約8cm堆積しているが、さほど良好な焼土ではない。足場は火床の南西側に設けられ、焼土粒を含む黒褐色土が堆積している。遺物は出土していない。

#### 68 (41) 号炉穴（第7図）

42号住居跡のカマド付近に位置している。当初42号住居跡のカマドと認識していたが、覆土の状態から考えて、別個の遺構と判断した。火床のみが検出され、足場は42号住居跡構築により破壊されている。確認面からの深さは約20cmで、住居跡の床面レベルと大差はない。焼土は火床を中心として約8cm堆積している。なお、遺物は出土していない。

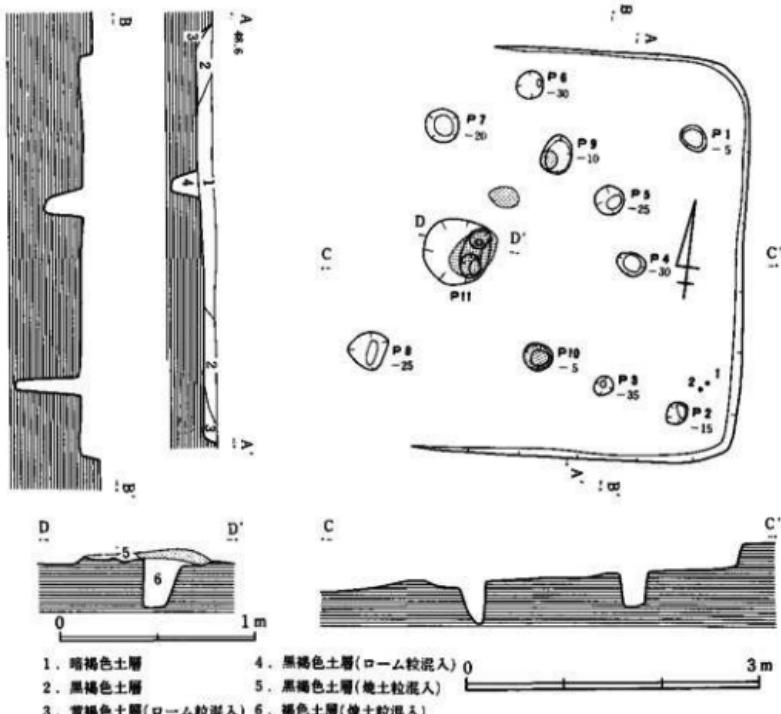
## 2. 住居跡

10軒の住居跡が検出された。これらは調査区東端に集合するグループと、2次調査区内に点在するグループに2分される。調査区東端のグループはさらに東へ伸びて展開すると考えられるが、一様に円形プランの住居跡であり中期に属する。一方2次調査区の住居跡は方形プラン3軒、円形プラン2軒からなり、方形プランの住居跡は前期に属する。

### 30(2) 号住居跡 (第9・21図、図版3・23)

調査区西端に位置している。住居跡が構築されている周囲は若干斜面にかかり、西側の壁はすでに消失している。平面プランは方形を呈しておらず、南北4mを測る。また、東西長を確定することはできないが、P8の存在から最低4mは有していたと考えられる。確認面からの深さは、最も遺存の良い東側で20cmを測り、壁の立ち上がりもしっかりしている。覆土は暗褐色ないし黒褐色の土層で、壁に近い部分ではローム粒の混入が増加する。床面は平坦に構築されるがやや軟弱である。ピットは合計11か所検出されたがあまり深いものではなく、また、特に規則的に配されている様子もない。住居跡としてのコーナーが明確である北東と南東には一応P1・P2が位置するが、ともに深さは15cmと浅い。その他のP3～P8は20～35cmの深さが確認され、P7・P8はやや浅いが、床面がすでに削平されていることを考えれば、30cm前後の深さとなるであろう。いずれにしても相対的に浅いものである。P9～P11は焼土が堆積しており、炉と判断した。但し、P9・P10は規模も小さく、また焼土が堆積する範囲もあまり広くはなく、日常使用されたとは考えられない。P11が掘り込みの範囲が大きく、焼土の堆積は貧弱ではあるが中心的な炉であったと考えている。火床は火熱を受け若干硬化しており、2個のピットが伴っている。住居跡のプランは確定できないが、炉は西壁に近寄って設けられたとしてよい。炉を住居跡の奥に位置するとえた場合の主軸方向はN-90°-Wを指す。遺物は少なく、土器片が出土した程度である。1は東壁に近い床面直上から出土した。

遺物 9点を採掘したが、実測できるものはない。1は内外面とも縦位の条痕で覆うもので、床面直上からの出土であるが、混入品と考えられる。従って、2～9の8点の土器片が本住居跡に伴うものと判断した。全て胎土に植物纖維を混入している。2～5は半截竹管を施工具に用いている。2はかなり密に沈線を施すが、原体は幅の異なる2種が認められる。幅の狭い沈線は約35mmと広い間隔の有節である。なお、地文に繩文を施しており、僅かに残された部分を見る限りでは原体はR { L } のようである。内面は横位にナデている。3・4も同じく地文に繩文を施している。原体は3がL { R } 、4がR { L - L { R } の羽状を呈する。内面は3が横位に磨くが、4は2同様横位のナデである。胎土にはともに砂粒を多く含んでいる。5は有節平行沈線となるものである。破片上位には無文帯が認められ、その部分で屈曲している。有節平行沈線から下位には繩文が施され、原体はR { L } である。内面の調整は器壁が荒れているため不明である。なお、胎土には直径1mm以下の白色の小石を含んでいる。6～9は繩文のみが観察

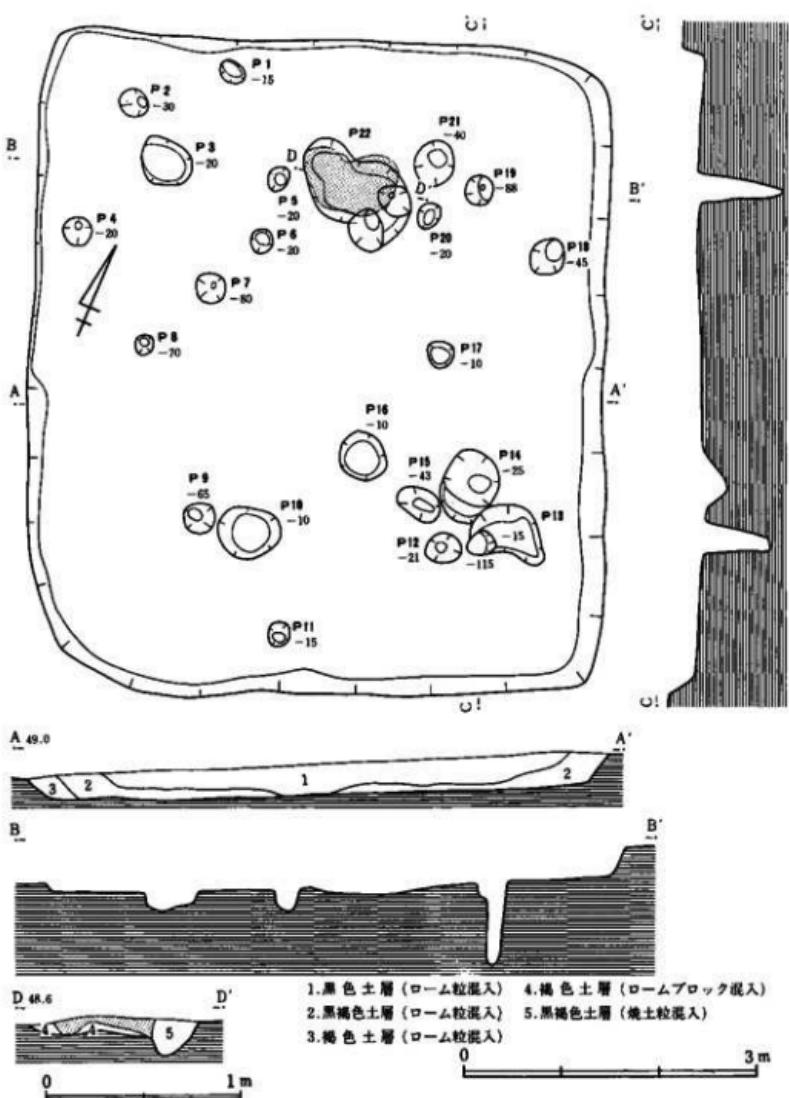


第9図 30号住居跡実測図

されるものである。原体は一様でなく、6がR $\left\{ \frac{1}{1} \right\}$ の格条体、7がR $\left\{ \frac{R}{R} \right\}$ の反撃り、8がL $\left\{ \frac{R}{R} - R \right\}$ の羽状、9がL $\left\{ \frac{r}{r} \right\}$ である。いずれも胎土は粗く、また、遺存状態も良くない。このうち9が口縁部で、現存部分では緩く波状を呈す。内面の調整は8だけが縦位に磨くが他は横位のナデである。

### 31(3)号住居跡 (第10-21図、図版3・25)

30号住居跡の北東約18mに位置している。平面プランは方形を呈し、規模は6.5m×6.0mと本遺跡中最大の規模を誇る。確認面からの深さは最も遺存の良い東側で30cmを測り、壁はやや開くが明瞭に検出された。覆土はローム粒を混入する黒色土層が主体を占めるが、壁に近づくにつれて明るくなり、堆積は自然埋没と考えられる。床面は平坦であるが、良好な状態とはいえない、全体に軟弱である。ピットは22か所が検出されたが、やや雑然としている。このうちP7・P8・P9・P13・P19は深さが70cmを超るもので、特にP13は115cmを測る。これらは主柱穴としても充分なものであるが、配列を考えた場合P9・P13・P19は良いものとして、P7の位置



第10図 31号住居跡実測図

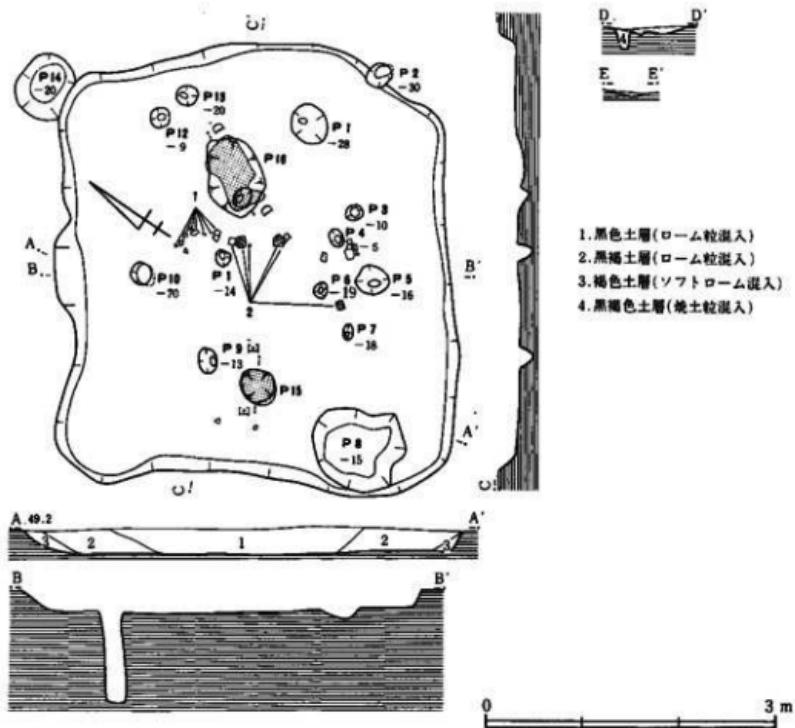
が適当でないようである。P12・P14・P15は主柱穴と考えられるP13に近接しており、補助柱穴としての可能性も指摘できる。P22は炉である。120cm×80cmの範囲を約5cmくぼめて火床としており、焼土が充満している。火床はかなり火熱を受け赤化及び硬化している。また、30号住居跡同様2個のピットが伴っている。炉は住居跡北壁に偏った位置に設けられ、主軸方向はN-20°-Wを指す。

遺物は住居跡の規模とは全く関係なく、土器片が約50点ほど出土したにすぎない。

遺物 9点を採拓した。10は雑な沈線だけが施されている。沈線は横走するが、特に規則性はない、やや鋭い。内面は縦位にナデた後に横位に再びナデを加えている。11-13は地文に繩文を有し、半截竹管で沈線を描くものである。12は曲線的な施文が僅かに見られるだけであるが、11・13は有節平行沈線となる。但し、11は13ほど整ったものではなく、原体が太いことも加えて、粗雑と言える。11・13とも口縁部の破片で、いずれも内弯しており、13は特に2か所で突起状の波状となる。繩文原体は三者三様で、11がL { R, 12がR { L, 13がL { Rである。内面は12・13に僅かではあるか横位の磨きが施されるが、11は横位のナデだけである。3点とも胎土はやや粗く、色調は褐色を呈する。14-16は繩文のみが観察されるものである。14のように口縁部の破片も含まれており、文様帶を有さないものも存在する。原体は14がR { L, 15がL { R-R { Lの羽状、16がL { Rである。17・18は貝殻腹縁文が施されるもので、胎土への植物纖維の混入は認められない。

### 52 (25) 号住居跡 (第11-18・22図、図版3-23-26)

31号住居跡の東約22mに位置している。平面プランは方形を呈するが、前記の30・31号住居跡と比較して不整形なプランである。規模は4.3m×3.9mを測る。確認面からの深さは10~15cmと浅く、壁の立ち上がりはやや緩かである。覆土はローム粒を混入する黒色土層、黒褐色土層が主体を占め、壁の近くではロームの混入も増加する。堆積はプライマリーな状態で、自然埋没と考えられる。床面は平坦であったが、極めて軟弱であり、その認定は土層断面の観察に頼った部分が多かった。ピットは16か所を検出した。ピットの配列はかなり雑然としたもので、P10が70cmと深い他は20cm前後とかなり浅い。P2・P14は壁外に検出され、P14については断定しかねるが、P2は本住居跡に伴うものと判断した。また、南西コーナーのP8は規模が大きく、柱穴とは考えられず、貯蔵穴的性格を有していたものかもしれない。P15・P16は炉であり、ともに焼土が堆積している。P15は直径約50cmと小さいもので、焼土の堆積もそれほど厚くはない。火床は僅かに火熱を受け硬化しているが、かなり狭い範囲にとどまっている。これに対してP16は90cm×60cmの椭円形を呈するものでP16が日常的な炉であったと考えられる。火床は5~10cmくぼみ、火熱を受け部分的に赤化し、また全体的に硬化している。焼土は炉全体を覆うが、層厚は5cm前後と厚くない。またピットが1個伴っている。深さは20cmほどであるが、前記した30・31号住居跡の炉も同様にピットを伴い、またいずれの場合も焼土が上面を覆って



第11図 52号住居跡実測図

いる。このことは、このようなピットが炉の構造に必要なものであったのかもしれない。P16を中心的な炉と考えた場合、炉は住居跡東壁に近く設けられ、主軸方向はN-55°-Eを指す。

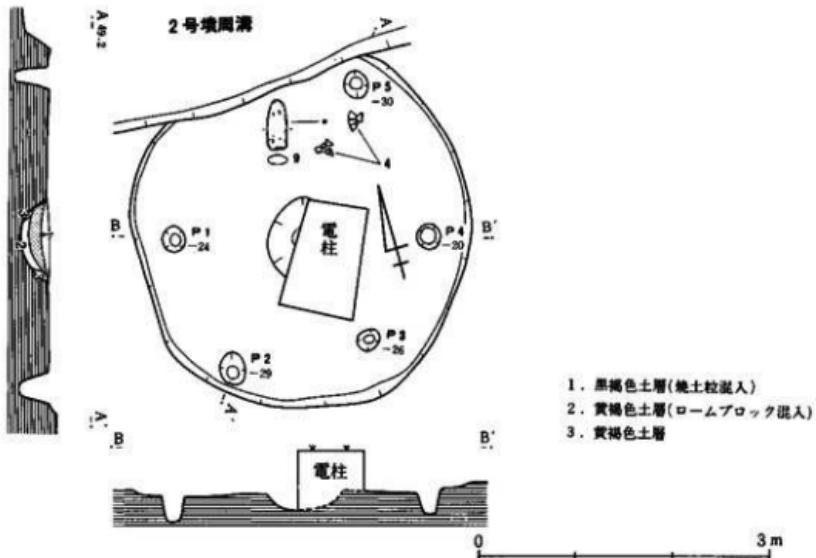
遺物は前記の2軒の住居跡と比較して、かなり豊富に出土しており、対照的である。特に炉(P16)の西側から住居跡中央にかけて土器片が多く出土した。1・2もその部分から出土したが、床面からは若干浮いた状態である。P1とP16の間から出土した土器片は接合したが、その状況からこれらは投棄されたものである可能性が指摘できよう。

**遺物** 第18図実測図の1・2、第22図拓影図に示したものである。1は胴部下半を欠損し、遺存部分も全周の約4/5程度である。器形は深鉢形を呈し、胴部上位で僅かに屈曲している。法量は口径16.2cm、現存高16.5cmを計る。口縁部は2個1対の突起が1か所残存しているが、全周に何か所配置されたかは不明である。文様帶は口縁部から胴部上位の屈曲部まで、竹管の円形刺突が施されている。刺突は口縁部に1列、屈曲部に2列で並び、突起部には特に集中している。このような集中は全周で4か所に配されるが、刺突の回数から対する2か所がそれぞ

れ組となるようである。地文には縄文が施され、原体は  $L \left\{ \begin{smallmatrix} R \\ R \end{smallmatrix} \right.$  である。内面は横位のナデで、全体にやや粗雑である。胎土には植物繊維を混入し、胴部下半は脆弱である。色調は赤褐色ないし黒褐色を呈する。2も1と同様の器形を呈するが、はるかに大きいものである。現存部分は全周約  $\frac{1}{4}$  程度で、法量は推定口径31cm、現存高25.1cmを計る。器面は縄文で覆われ原体は  $R \left\{ \begin{smallmatrix} L \\ L \end{smallmatrix} \right.$  で部分的に継回転として、一見羽状縄文となっている。内面は横位のナデで、また横位の磨きを加えているようであるが、器壁の荒れが著しく明確ではない。胎土には砂粒及び植物繊維を混入し、色調は赤褐色を呈している。拓影図には20点の土器片を示した。縄文を施すものが主体となるが、全く縄文が施されない例も僅かに含まれている。また、全ての胎土に植物繊維を混入している。27・28は竹管の刺突が施されるものである。特に27は口縁部の破片で、波状口縁を呈し、刺突文の配置が窺える。地文となる縄文はともに  $R \left\{ \begin{smallmatrix} L \\ L \end{smallmatrix} \right.$  で、27は斜位に回転している。内面は横位に磨くが、あまり入念なものではない。29・30は半截竹管による沈線が施されるものである。また、30は粗雑ではあるが有節平行沈線となる。縄文原体は前例と同じく  $R \left\{ \begin{smallmatrix} L \\ L \end{smallmatrix} \right.$  である。内面は29は器壁が荒れていて不明瞭で、30は横位に入念に磨いている。また、口唇部の調整も内側から丁寧に行われ、その部分も同様に磨いている。31～33は縄文が施されないもので、いずれも半截竹管を用いた平行沈線、有節平行沈線を施している。31の施文は連弧状を呈しやや粗雑であるが、32・33は整っており、33は肋骨文となるようである。色調は31が暗褐色となるが、32・33は赤褐色を呈している。34～46は縄文だけが観察できるものである。これらの中には30のように口縁部に何らかのモチーフを持つものも含まれていると考えられる。縄文は37・38に見られるように雖然と転がすものも含まれるが、基本的には39・40のように羽状となるようである。個々の原体については触れないが、多くは単節で、特殊なものを列挙すると、39に燃りの尻りを防ぐ紐が観察でき、44が  $R \left\{ \begin{smallmatrix} L \\ L \end{smallmatrix} + r \right.$  、45が  $L \left\{ \begin{smallmatrix} r \\ r \end{smallmatrix} \right.$  、46が  $R$  原体2本の格条体である。内面は横位の磨きを施すものが多く、46は特に入念である。色調は赤褐色から黒褐色を呈している。

### 3号住居跡（第12・18・29図、図版4・23・24）

2号墳内に位置し、2号墳の築造により北側を一部破壊されている。また、住居跡中央には電柱があり、その部分は調査をしていない。平面プランは直径3.5mの円形を呈しており、確認面から5～10cmの深さで床面に達する。覆土は黒褐色土層が堆積していたが、堆積状態などは明らかにできなかった。壁は2号墳周溝に切られた部分を除いて検出できた。床面は平坦であるがやや軟弱で、部分的に攪乱されている。ピットは5か所に検出され、壁にそって規則正しく配置されている。おそらくは2号墳周溝によって破壊された部分にもう1か所ピットがあり、6本の主柱があったものと考えている。ピットは直径20～30cmで、深さは床面から20～30cmとそれほど深くない。深さには約10cmのバラつきがあるが、ピットの底面レベルはほぼ一定で、P4だけがやや浅くなる。炉は住居跡中央に設けられているが、半分が電柱の設置により調査で



第12図 3号住居跡実測図

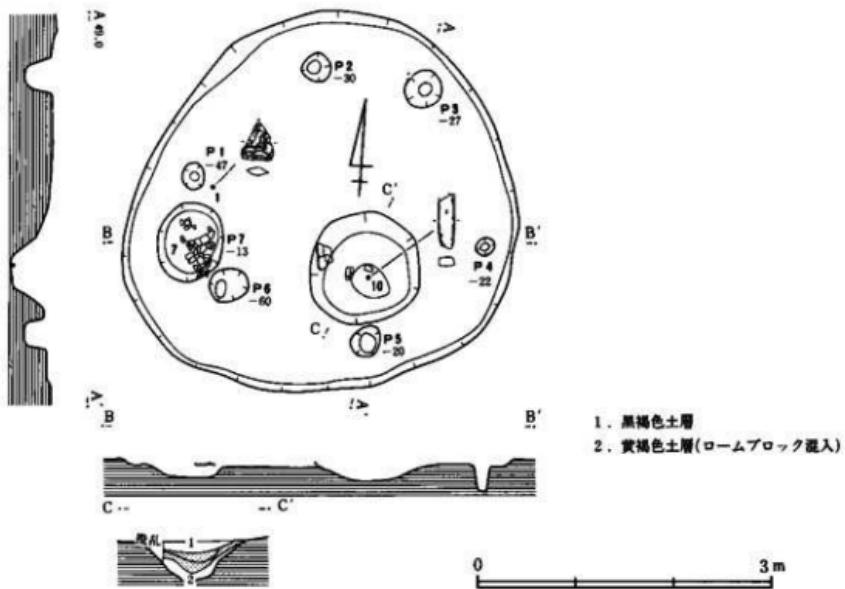
きなかった。長径85cmの楕円形を呈すると推定され、床面から約25cm掘り込んでいる。炉内には約15cmの厚さに焼土が堆積しており、火床はかなり火熱を受けたと見られ、赤化、硬化している。

遺物は炉とP5の間の床面から深鉢形土器(3)が出土し、またその近くから磨製石斧(9)が出土した。

遺物 図示した遺物は第18図4、第29図9の2点である。4は深鉢形土器で胴部下半を欠損している。法量は口径23cm、現存高17cmを計る。口縁部は内窵し6か所で波状をなす。口縁部文様帶は隆帯と太い沈線で構成され、円形の区内に繩文を施している。胴部の懸垂文は、口縁部文様帶との間に無文の部分を有して垂下させ、その構成は全周に8列の沈線で区画した繩文帶である。繩文原体は口縁部文様帶とともにR $\frac{L}{L}$ で、口縁部は横、胴部は縦に回転している。胎土には僅かに雲母粒子及び白色の粒子を含むが、焼成は良好である。色調は褐色を呈している。9は小形の磨製石斧である。それほど入念な整形はなされていないが、表裏、側面ともに整形の際に生じた細かい擦痕が観察される。刃部は使用のため潰れている。石材は玄武岩である。

#### 12号住居跡（第13・19・23・29図・図版4・23・24・27）

13号住居跡の西約2.5mに位置している。平面プランは円形を呈し直径は3.5mを測る。確認



第13図 12号住居跡実測図

面からの深さは3号住居跡同様かなり浅く、壁高は10cm以下で、明瞭な壁の検出は望めない。従って覆土の検討も充分に行えなかったが、黒褐色土層が地積し、住居跡中央で焼土粒を混入していた。床面は平坦であり、堅緻な床面が構築されていた。しかし、擾乱された部分も多く、遺存していたのは一部である。ピットは7か所検出され、P1～P6が柱穴である。柱穴は壁にそって配置されているが間隔は一定ではなく、P1とP6、P2とP3の間隔がやや狭い。ピットの深さもまちまちで最浅がP5の20cm、最深がP6の60cmである。しかし、P1・P6を除く4か所は20～30cmの間に納まり、P1・P6が深くなっている。また、P1とP6の間にP7が位置している。P7はP1～P6とは性質の異なるピットで、80cm×70cmの楕円形を呈し、深さも約10cmと浅いものである。ピット内には大形の深鉢形土器(7)が横位に漬れた状態で出土した。炉はP5に近接し、住居跡南東側に偏って設けられている。直径約110cmで床面を約40cm掘りくぼめている。焼土は約20cm堆積し、火床はかなり火熱を受け硬化していた。

遺物 図示した遺物は第19図7、第23図50～52、第29図1・10である。7は底部を欠損し、現

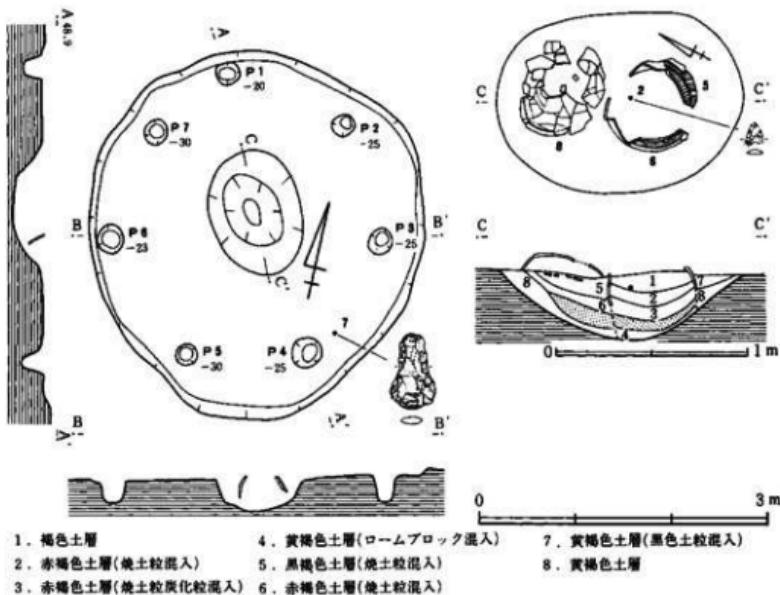
存部分は全周の約3/4が遺存している。器形は所謂キャリバー形を呈し、法量は口径32.7cm、現存高37.3cmを計る。口縁部は大きく内窵し、胴部中位でやや括れている。器面は微隆帯で基本的モチーフを構成し、口縁部、胴部下半にそれぞれ溝巻文を描いている。微隆帯の区画内には繩文が施されており、原体はR { L である。微隆帯の構成は2本を1組として、それに太い沈線が伴っている。溝巻文は口縁部、胴部とも全周に6か所が配され、各モチーフの間は方形の微隆帯区画で繋いでいる。胎土には若干砂粒を含むが、焼成は比較的良好で、色調はおおむね褐色を呈する。

拓影図には3点の土器片を示した。50は口縁部の破片で、太い沈線に区画された繩文帯が配されている。繩文原体はR { L で横回転の施文である。口唇部は若干肥厚して、丸く納めている。胎土には砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。色調は赤褐色を呈する。51・52は横描様の細い沈線が施されている。破片の部位は胴部中位と考えられ内窵している。また上位は無文であるよう、破片の上端で沈線は終っており、また、52には横方向のナデも観察される。胎土は50同様砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。色調は褐色を呈している。

石器は2点である。1は石錐である。形状は三角形を呈し、石材が良質でないことが相まって粗糙さはまぬがれない。石材はチャートである。10は小形の磨製石斧である。刃部及び基部を欠損するが、基部には僅かに研磨した部分が残っている。刃部は使用のためか実測図裏側で著しく剝離している。従って刃部の本来の形状は復原できない。各面は良く研磨されており、平滑となっている。石材は緑色片岩である。

### 13号住居跡（第14・18・19・29図、図版5・23・24）

3号住居跡の西約5m、12号住居跡の東約2.5mに位置している。平面プランは略円形を呈し、直径は3.7mを測る。確認面からの深さは前述までの住居跡 同様極めて浅いもので、壁高は10cm以下である。従って壁も不明瞭であり、覆土の観察も充分に行えなかった。覆土は黒褐色土層が主体を占め、焼土粒を混入している。床面は平坦で堅緻に構築され、良く遺存しており、検出も容易であった。ピットは壁にそって7か所が検出され、いずれも柱穴として問題ない。直径は30cm前後であるがP4がやや大きく、一定の間隔で配置されている。深さは20-30cmで、P1の20cmが最も浅く、最深がP5・P7の30cmである。炉は住居中央に設けられ、1.3m×1.1mの横円形を呈し、床面を約30cm掘りくぼめている。炉内には2組の土器囲いが存在しているように見える。北側は浅鉢形土器(8)を逆位にかぶせたもので、炉内に埋め込まれたものではない。これに対して南側の土器は完全に埋め込まれており、土層断面を観察しても掘り込まれた事は明白である。しかし、この土器囲いは1個体の土器ではなく、破損した2個体の土器を半分ずつ使用している。土器囲い内の覆土は焼土粒を多量に含む褐色土層が堆積し、下層に約5cmの焼土が堆積している。火床は火熱を受け硬化している。また、覆土内から石錐が1点出土した。土器囲い以外の部分の覆土は同じく焼土粒を多く含む褐色土層が堆積し、下層に約10



第14図 13号住居跡実測図

cmの焼土が堆積している。従って、炉を設置した段階では単なる地床炉であったもので、後に土器窯を設けたことが判明した。

遺物 遺物は前記の炉内出土遺物を除くと決して多くなく、床面から数点の土器片が出土したにすぎない。

遺物 図示した遺物は第18図5・6、第19図8、第29図2・7である。第18図5は炉内に埋め込まれた土器の1つで6とセットとなって埋められていた。器形は深鉢形を呈し、約 $\frac{1}{2}$ が現存している。法量は推定口徑31.8cm、現存高30cmを計る。口縁部は内寄し、現存部分に1か所の突起がある。口唇部は肥厚し、内面に稜を有する。口縁部文様帶はかなり簡略化されたもので、隆帯と太い沈線で区画している。区画内には繩文が施され、原体はR { L }となる。胸部は沈線で区画した繩文帶と無文帶を交互に配し、口縁部文様帶に直接接している。繩文原体は同じくR { L }で縦位に回転している。内面には上半が横位、下半が縦位のナデが見られる。胎土には砂粒を含むが、焼成は比較的良好。但し、胸部下半は火熱を受け脆弱である。色調は赤褐色ないし褐色を呈する。6は前記のように5とセットとなって炉内に埋められていたものである。口縁部及び底部を欠損し、現存部分も全周の約 $\frac{1}{4}$ でしかない。器形はやや浅い鉢形を呈し、法量は推定最大径53.8cm、現存高21cmを計る。かなり大形の土器と言えよう。口縁部は無文であ

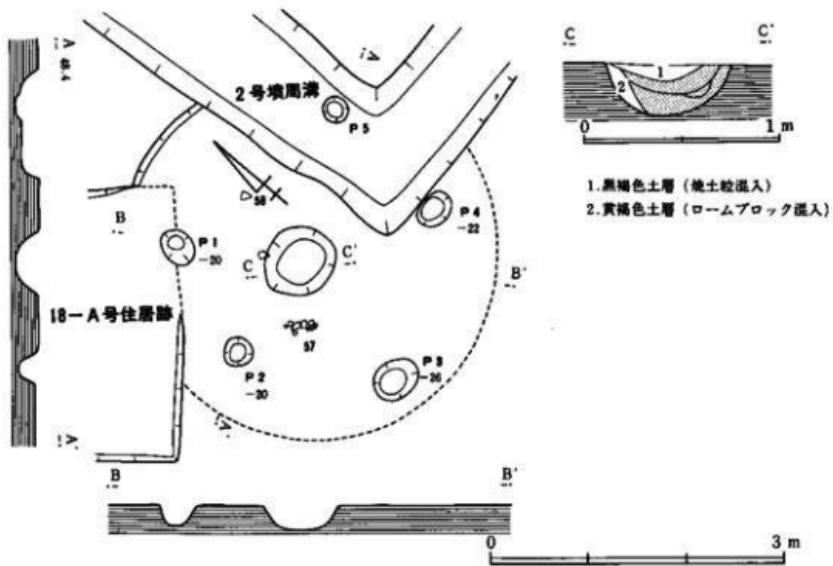
り、やや下位に隆帯で区画する文様帯が配されている。この文様帯の下端が最大径となり、そこから底部へ向けている。区画内及び区画下端から底部にかけては縄文が施されている。原体はR { Lで胴部は縦位に回転している。胎土には砂粒を多く含み、器内は17mmとかなり厚い仕上がりである。焼成は不良で、色調は赤褐色を呈する。8も炉内から出土したもので、出土状況は前述したとおり、5・6の北側に伏せられていた。器形は6に近く浅い鉢形を呈し、底部を欠損している。法量は口径36.3cm、現存高24.4cmを計る。口縁部は無文帯で、胴部とは沈線で区画している。沈線は最大径を有する位置であり、最大径は40cmとなる。沈線から下は縄文を施すが、底部近くでは施されず、無文となっている。縄文原体はR { Lで、縦位に回転している。胎土には砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。色調は灰褐色ないし黒褐色を呈している。石器は2点が出土した。2は石鎌である。両脚を欠損しているが、現存長16mmの小形品である。石材は頁岩であろうか。7は打製石斧である。周縁からの調整で形成され、自然面は残していない。全長7.4cmと比較的小さい。刃部は僅かに欠損しているようだ。現状ではあまり鋭くない。表面は部分的に磨耗しているが、通常の打製石斧に見るような顕著なものではない。石材は玄武岩である。

#### 18-B号住居跡（第15・23図、図版27）

2号墳周溝、18-A号住居跡によってかなりの部分を破壊されている。平面プランをピットの位置から推定すると円形となり、直径は4m前後である。ローム層への掘り込みもほとんど無く、壁が確認できたのは北側の2号墳周溝と18-A号住居跡の間で、約1mである。従って炉とピットの存在によって住居跡と認定し、現状の床面はほとんど確認面であった。従って、本来構築された床面であったとは限らないが、北側で壁の遺存する部分に検出した床面とレベル差は無いことから、ほぼ当初の床面に近いものとしてよいであろう。ピットは5か所に検出され、おそらくは壁に沿って配置されたと考えられる。間隔はP1とP5がやや離れており、中間にもう1か所の存在が推測されたが、検出できなかった。直径は30cm前後で、深さも20~26cmと浅く、個々のピット底面のレベル差は殆ど無い。P5は2号墳周溝底面で確認したが、ピット底面のレベルは他のピットと変らない。炉は住居の中央と推定される位置に設けられ、80cm×70cmの楕円形を呈する。床面を約25cm掘りくぼめており、約15cmの焼土が堆積している。火床はかなり火熱を受けており、赤化及び硬化している。

遺物は炉の周辺から土器片が出土したが、決して多くない。

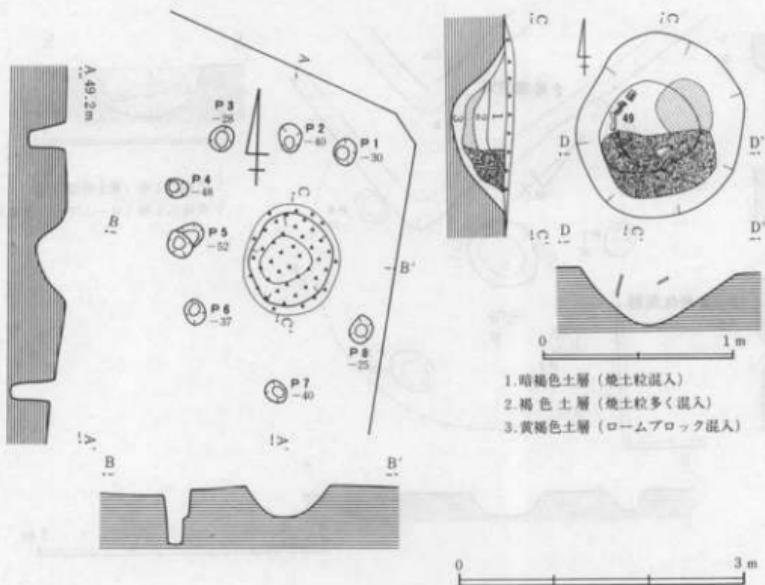
遺物 図示した遺物は第23図56~58の3点である。いずれも胴部の破片で、沈線で区画をして縄文帯と無文帯が交互に配された懸垂文である。縄文原体は全てR { Lで、縦位に回転している。また、58は縄文帯中に蛇行沈線を加えているなど、やや古い様相を残している。胎土はいずれも砂粒を多く含み、焼成はあまり良くない。色調は黒褐色ないし黒色を呈している。



第15図 18-B号住居跡実測図

#### 24号住居跡（第16-23図、図版5・27）

調査区の東端に位置し、東側は調査区域外へ続いている。ローム層への掘り込みが浅く、平面プランは確定できないが、ピットの配置から考えて円形を呈していたと思われる。なお、直径は3.5~4.0mと推定できる。床面がほとんど確認面であり、炉の北側に床面と認識できる硬化面を検出したが、南側はすでに削平されており、レベルも若干低くなっている。從って壁は全く遺存しておらず、炉とピットの配列で住居跡と確認した。ピットは8か所に検出されたが、本来は9~10本の柱穴があったと考えられる。直径は30cm前後で、P5だけが2段に掘り込まれている。深さは床面が遺存していない部分が多いため絶対高で比較すると、P1・P2・P3・P6・P8がほぼ同レベルで、床面の遺存の良好なP2で40cmとなる。最深はP5で遺存する床面からの深さは57cmとなる。P4・P7はP5より若干浅いものの、レベルはさほど変わらない。炉は住居跡の中央と推定される位置に設けられ、100cm×90cmの楕円形を呈する。床面を約30cm掘りくぼめて土器片で囲っている(59)。炉の上面には炉より若干広い範囲に貝の堆積が見られ、炉を完全に被覆している。貝はハマグリが主体を占め、シオフキが約10%、アサリが約4%の割合で含まれている。炉内は焼土粒を含む褐色土層が堆積し、下層に約7cmの焼土が堆積している。しかし、南側でこれらの土層を切り込んで多量の灰が入り込んでおり、土器片はこの灰層の中



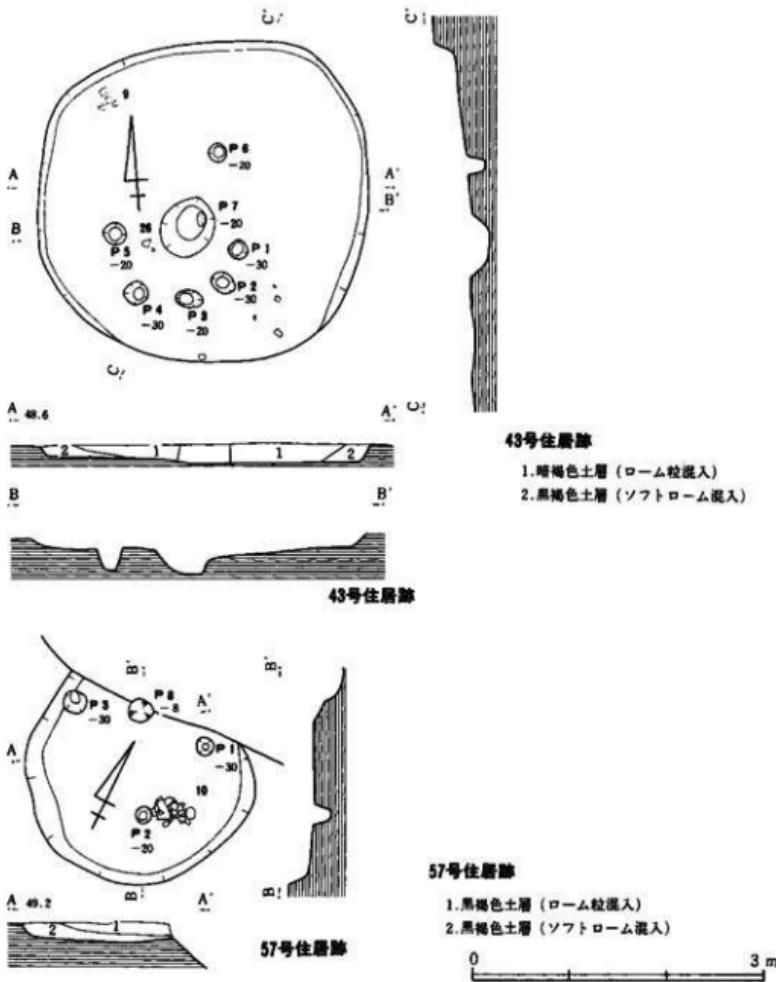
第16図 24号住居跡実測図

にも据えられている。火床は火熱を受け硬化していた。なお、遺物は炉内出土の土器片だけであった。

遺物 55は口縁部破片で、僅かに内弯している。文様帶は隆帶で渦巻文を構成し、区画内にも繩文を施している。59は深鉢形土器の胴部破片である。表面は沈線で区画して繩文帯と無文帯を交互に配している。繩文原体は  $R \{ L$  で縱位回転である。胎土はやや粗いが、焼成は比較的良い。但し、炉に埋設されていたため、火熱を受けて脆弱となった部分もある。色調は褐色ないし黒褐色を呈している。

#### 43 (16) 号住居跡 (第17・19・21図、図版6・24・25)

2次調査区に位置し、付近に同時期の住居跡は存在しない。平面プランは略円形を呈し、直径は3.4mを測る。確認面からの深さは最も遺存の良好な北側で20cm、南側ではほとんど壁は確認できなかった。覆土は部分的に攪乱されるが、ローム粒を混入する暗褐色土層が主体を占め、壁の近くに黒褐色土層が堆積している。床面をすでに削平されており、南北の断面で見るようにならへ向って傾斜している。ピットは6か所が検出されたが、攪乱が床面に達している部分があり、P1とP6、P5とP6の間にもう何か所かのピットがあったと考えてよい。配列は炉を中心として円形にめぐらしていたようだが、非常に炉に近接している。個々のピットは直径約20cm、



第17図 43・57号住居跡実測図

深さは20~30cmであるが、床面が削平されていることを考えれば、もう少し深かったものである。絶対高を比較するとP6が最も浅く、他のピットは大差ないもののP4が最深である。ちなみにP6とP4の底面のレベル差は約20cmを測る。炉はピット配列の中心にあり、住居跡の南側に偏っている。60cm×50cmの楕円形を呈し、現状の床面から約20cm掘りくぼめてある。焼土の

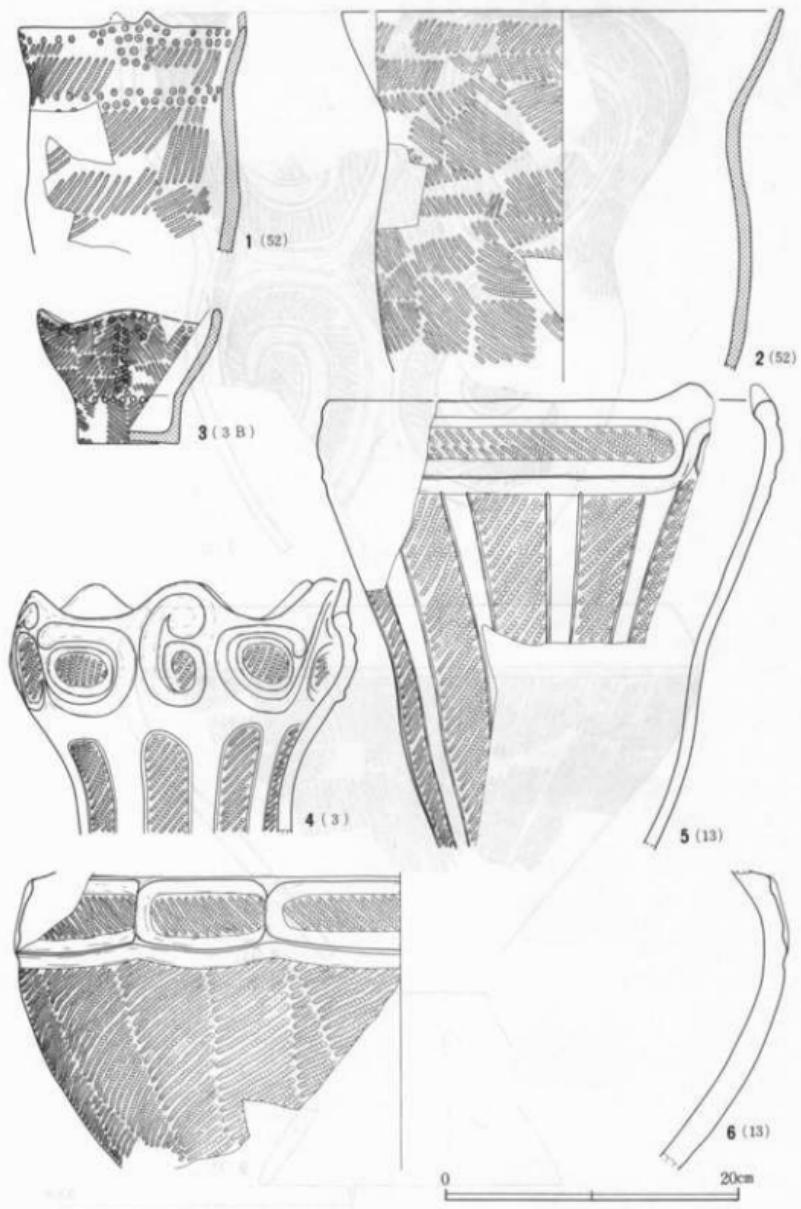
堆積は炉の東側に偏った15cm×10cmの狭い範囲にしか認められず、焼土粒、ローム粒を多く混入する黒色土が主体となっている。なお、火床はあまり焼けていない。

遺物は少なく、床面上から出土した土器片は11点でしかない。このうち炉の南から出土した土器片は胎土に植物纖維を混入しており、床面の状況などを考えると流れ込んだものと考えるのが妥当である。従って住居跡北側の壁の近くから出土した土器（9）が本住居跡の時期を決定するものとなろう。

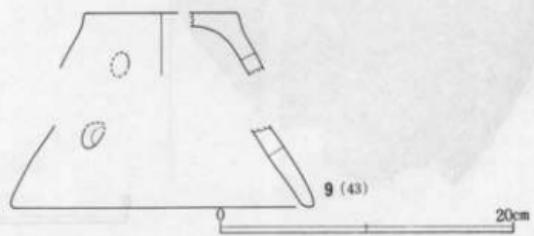
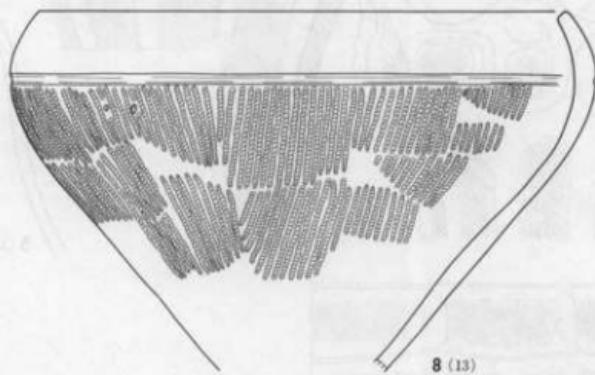
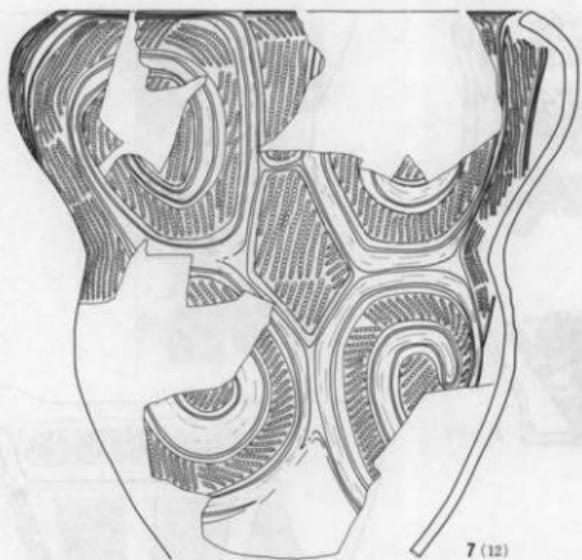
遺物 図示した遺物は第19図9、第21図19～26である。第19図9は器台形土器と考えられる。全周の約 $\frac{1}{3}$ が遺存しているが、図示した2点は接合しない。本来は縦に1孔であったようで、孔の位置から復原すると器高は9～10cmと推定できる。なお推定口径は20.8cmとなる。頂部は平坦で、通常の鉢形土器の底部とさほど変わらない。孔の全容は確定できないが、直径2cm前後で、全周に5～6か所が配されていたようである。外面は横位の雑なナデで、内面には横方向の磨きを加えている。胎土には砂粒、白色の粒子を多く含み、焼成は悪くないが、一部分で二次的な火熱を受け脆弱となっている。色調は赤褐色を呈している。拓影図（第21図）に示した土器は前期の土器も含めてある。このことは他の住居跡に比べ、前記の土器の混入が多かったためである。19～24が前期の土器であり、全て胎土に植物纖維を混入している。19・20は竹管を用いて施文しており、19は平行沈線、20は円形刺突である。ともに地文に縄文を施し、原体は19がL { R, 20はR { L - L { Rの羽状となる。内面はともに横方向に磨いている。21・22は貝殻腹縁文が押捺されている。同一個体の可能性が強く、かなり密な施文である。23・24は縄文のみの施文で、口縁部に何らかのモチーフが描かれていた可能性もある。原体はR { Lである。25・26が中期の土器である。25は深鉢形土器の胴部破片で、沈線で区画された縄文帯と無文帯の一部が観察できる。縄文原体はR { Lで縦位に回転している。26は細い沈線だけが施されている。ともに胎土には砂粒を多く含み、焼成はあまり良くない。

### 57 (30) 号住居跡 (第17・20図、図版6・24)

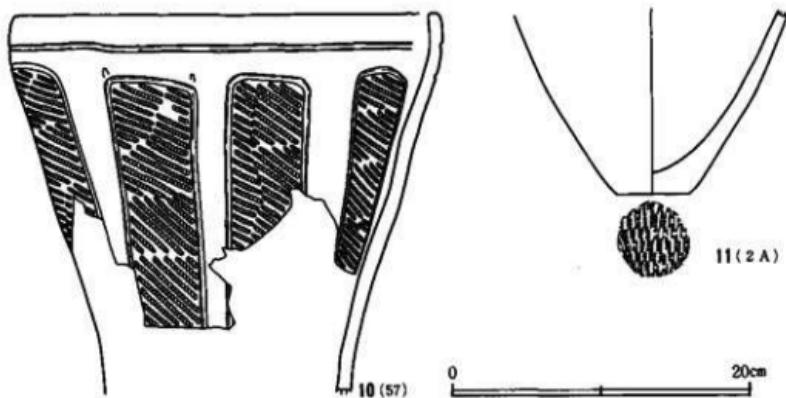
2次調査区に位置し、43号住居跡の北東約22mと、同時期の住居跡は近くに存在していない。北側は34号方形溝状構築によって破壊されている。平面プランは円形を呈していたと考えられ直径は約2.4mとかなり小規模な住居跡である。確認面からの深さは約20cmで、壁はやや開いて立ち上がっている。覆土は2層に分層したが、いずれもローム粒を混入する黒褐色土層である。床面はほぼ平坦で、ソフトローム層中に構築され、軟弱である。ピットは4か所に検出され、P1～P3は柱穴と考えて良い。直径はいずれも20cm前後で深さはP2が20cm、P1・P3は30cmとなる。柱穴の配列は特に整ったものではなく、P2とP3の間が少し広い。しかし、住居跡の規模を考えれば特に問題にならないかもしれない。P4は床面から8cmと浅いもので、柱穴とは考えられない。底面は丸く、覆土に焼土粒がかなり多く混入しており、さらに底面にわずかではあるが火熱を受けた痕跡があるため、炉と判断した。その位置は住居北側に偏って設け



第18図 繩文式土器実測(1)



第19図 繩文式土器実測図 (2)



第20図 繩文式土器実測図 (3)

られ、また、P4を炉と判断することによって規模は小さいながら小竪穴ではなく住居跡とした。

遺物はP2の脇から横倒しの状態で深鉢形土器(10)が出土したが、他には一点の遺物も出土していない。

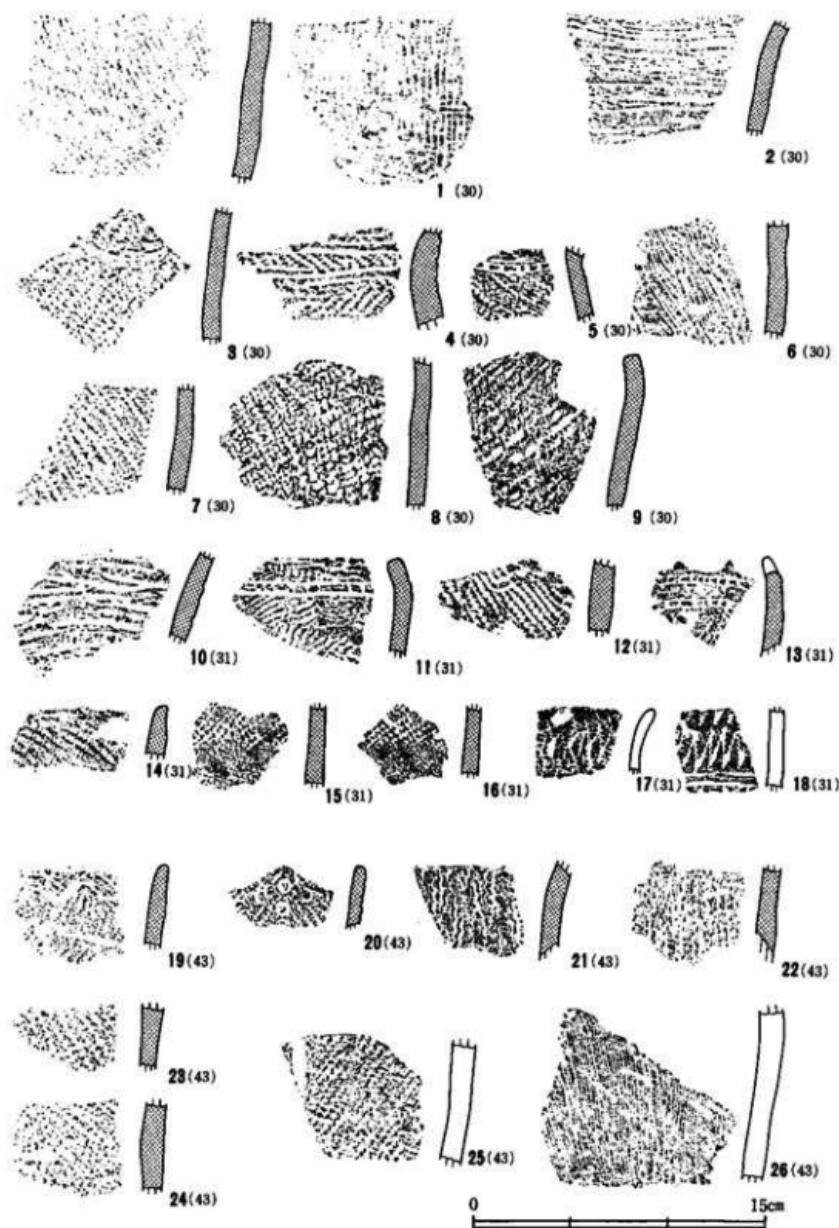
遺物 10は深鉢形を呈する土器である。底部を欠損し、残存部は全周の約1/4である。法量は口径29.3cm、現在高25.4cmを計る。口縁部は僅かに内弯するが、その他の部分はほぼ直線である。口縁部文様帯はすでに無文となり、沈線を1条通して上下を区分している。胴部は沈線で区画した縄文帯を垂下させ、無文帯と交互に配している。縄文帯は全周で8列あり、縄文原体はR<sub>L</sub>を横に回転している。胎土には若干砂粒を含み、焼成はあまり良くない。色調は褐色ないし黒褐色を呈している。

### 3. 土 坑

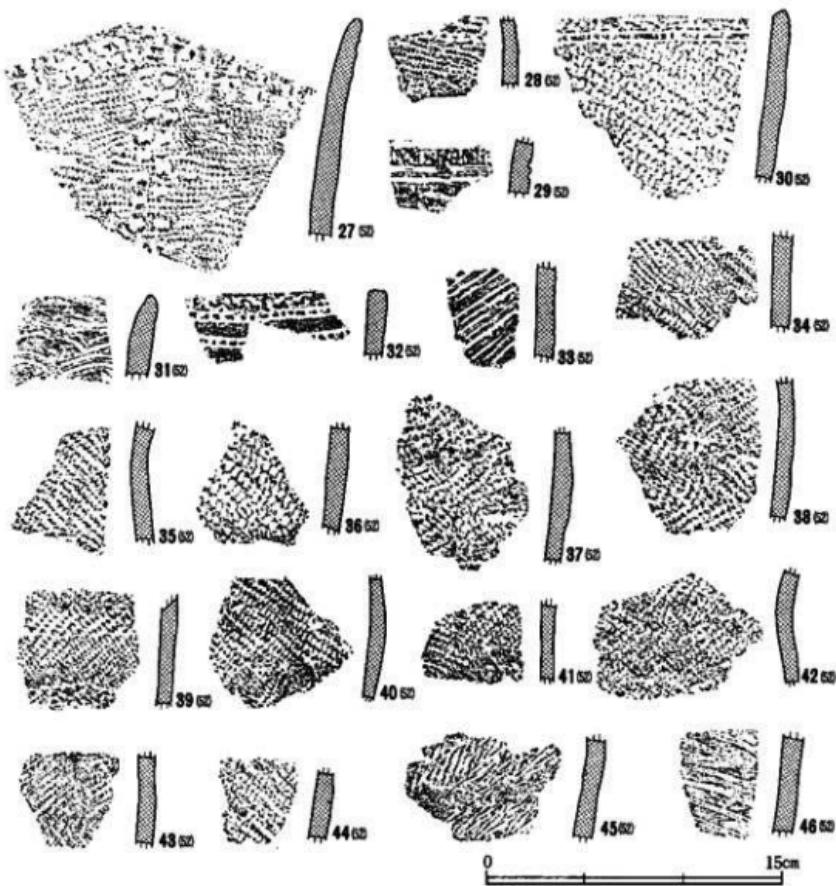
#### 14号土坑（第24図）

1次調査区のはば中央で、26号土坑の南約3mに位置している。平面プランは不整長方形を呈し、規模は2.8m×1.4mを測る。しかし、断面観察から2基の土坑が重複していることが判明した。北側をA、南側をBとして記述する。なお、B→Aの順で構築されている。

A 調査の段階ではBとの重複部分に明瞭な壁を検出することができず、土層の堆積状況から判断した。平面プランは隅丸長方形と推定され、規模は2.0m×1.4mを測る。長軸方向はN-13°-Wを指す。確認面からの深さは25~35cmで、南へ向って深くなる。壁はやや緩かに立ち上がり、あまり明瞭ではない。覆土は黒褐色土層が主体となり、若干ローム粒を混入している。底面は僅かに凹凸があり、また軟弱である。遺物は覆土から僅かに土器片が出土したが、図示ならびに時期を決定できるものではなかった。



第21図 住居跡出土土器拓影図 (1)

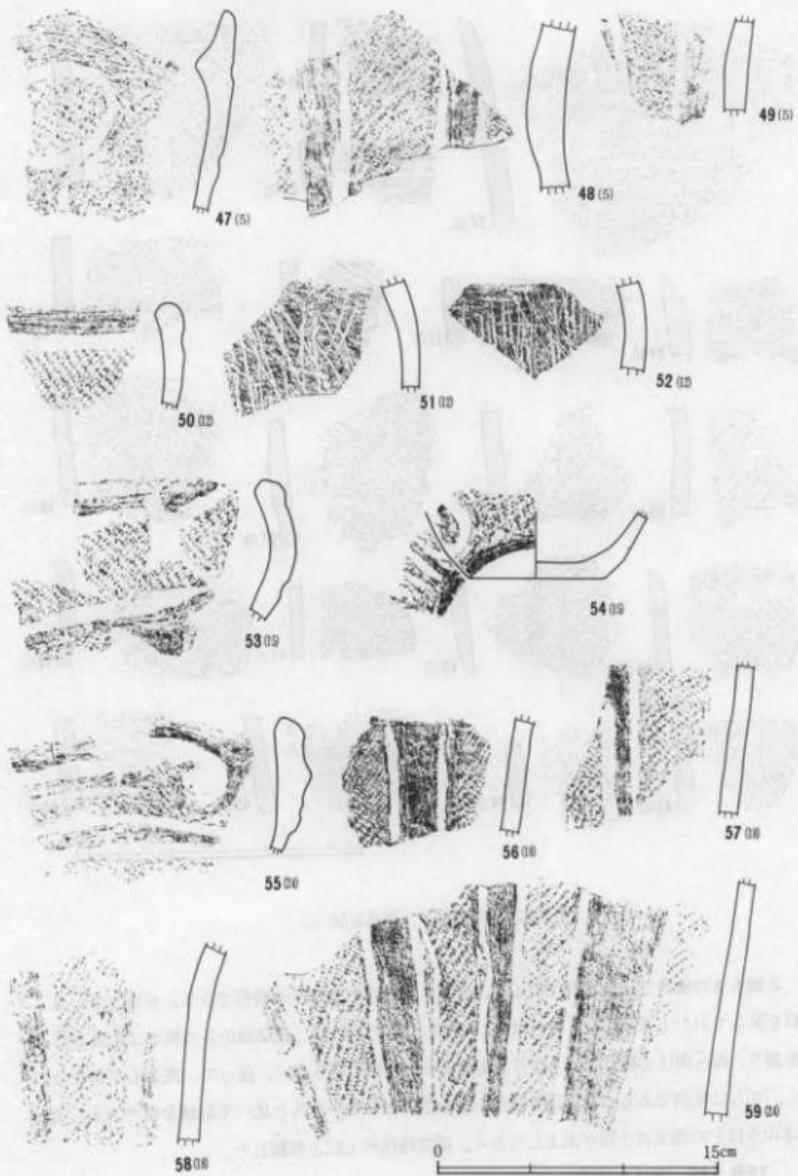


第22図 住居跡出土土器拓影図 (2)

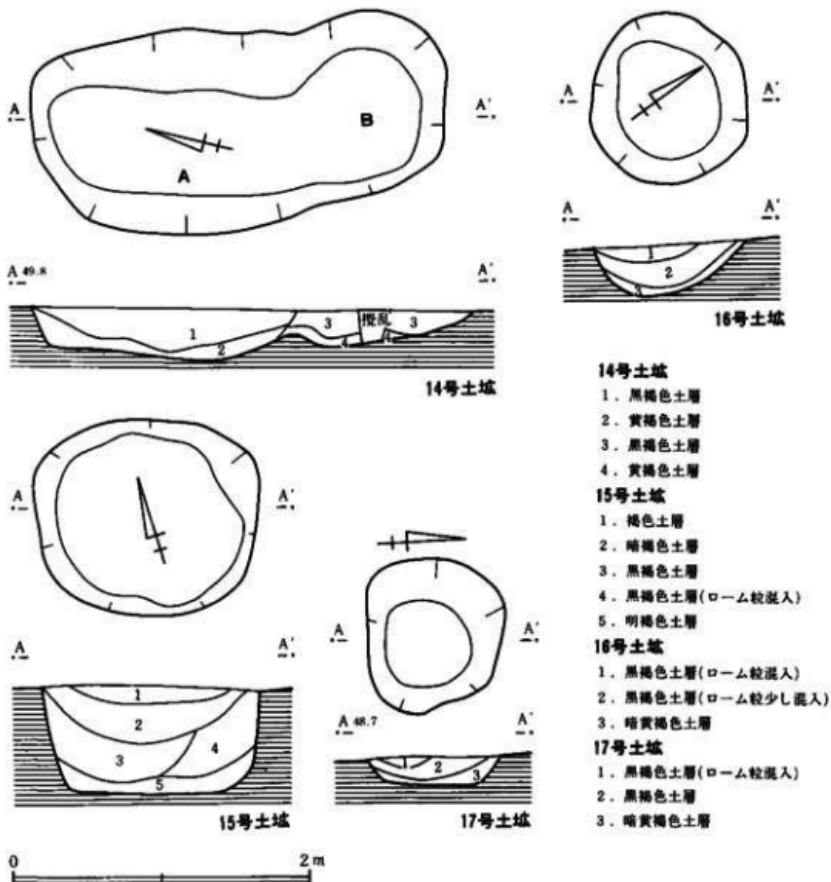
B 北側をAの構築で破壊されているが、僅かに壁の立ち上がりが観察できる。平面プランは円形を呈していたと考えられ、直径は1.2m前後と推定できる。確認面からの深さは北側で25cmを測り、南へ向けて徐々に浅くなり、南側は明瞭な壁を有さない。従って、底面も平坦ではなく、さらに軟弱である。覆土は黒褐色土層が主体となるが、Aと比べて堆積が粗である。遺物は10点ほどの縄文式土器が出土しており、縄文時代の土塙と判断した。

#### 15号土塙（第23・24図）

2次調査区のはば中央に位置し、14号土塙の南約3mにあたる。平面プランは梢円形を呈し、



第23図 住居跡出土土器拓影図 (3)



第24図 14・15・16・17号土塚実測図

規模は $1.5\text{m} \times 1.3\text{m}$ を測る。長軸方向はN-76°-Wを指す。確認面からの深さは80cmを測り、壁は垂直に近い角度で立ち上がり、掘り込み自体はかなりしっかりしたものである。覆土は4層に分層し、全体にローム粒、ロームブロックを含んでいる。特に2層・4層にロームブロックを多く含んでおり、人為的な埋め戻しの可能性が指摘できる。底面は東側が僅かに高いが、おおむね平坦で、ハードローム層へ達している。底面のプランは確認面でのプランより歪んでいるが、壁とははっきり区別できる。遺物は約10点の土器片が出土した。

遺物 第23図53・54の2点を図示した。53は口縁部破片で、内寄している。現存部分で1か所

緩く波状を呈す部分がある。口縁部文様帯は隆起と太い沈線で構成され、区画内に繩文を施している。繩文原体は  $R \{ \frac{L}{L} \}$  である。胴部は口縁部文様帯に接して懸垂文が垂下するよう、僅かに沈線文が観察できる。内面は横位にナデているが、あまり丁寧な調整ではない。胎土には砂粒を多く含み、焼成はあまり良くない。色調は赤褐色ないし黒褐色を呈している。54は底部で、底径は7.4cmを計る。胴部の懸垂文は底部まで至り、底部周縁をナデて1cm前後の無文部があるだけである。懸垂文は沈線で区画し、繩文帯と無文帯を交互に配している。しかし、現存部を観察する限り、各区画の幅は一様ではなく、繩文帯については1.2~5.6cmの開きがある。なお、繩文帯は全周に8列である。原体は  $R \{ \frac{L}{L} \}$  で縦位に回転している。胎土はやや粗く、焼成もあまり良くない。色調は暗赤褐色を呈する。

#### 18号土塙（第24図）

7号住居跡の北約3mに位置し、17号土塙と近接している。平面プランは略円形を呈し、直径は1mである。確認面からの深さは40cmを測るが、断面形が皿形を呈し、明確な底面は存在しない。壁の状態も良くなく、底面も含めて軟弱である。覆土はローム粒を混入する黒褐色土層が主体となっている。当初遺構として認定するのに疑問を持ったが、隣接する17号土塙が同様な形状を呈しており、本土塙も遺構として扱うこととした。しかし、遺物は出土せず、17号土塙との関係は具体的ではない。

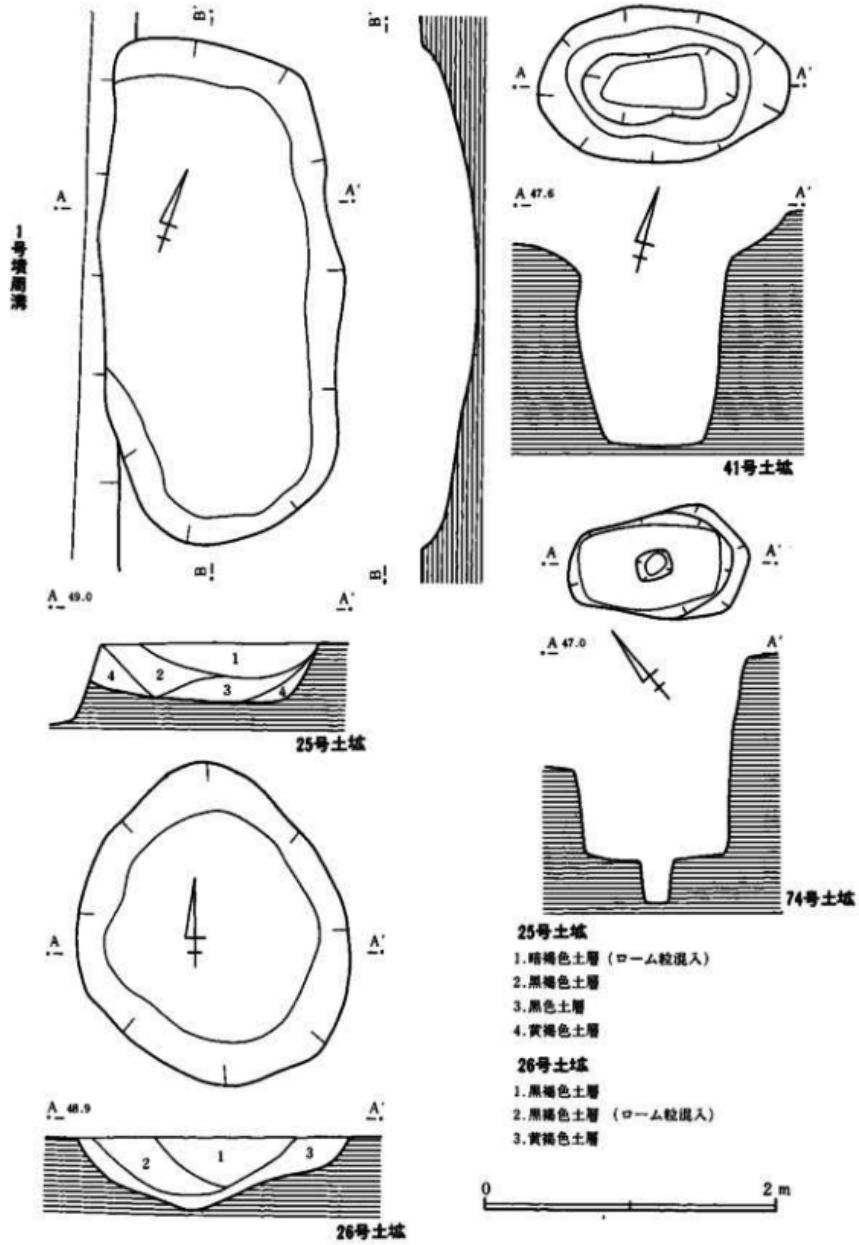
#### 17号土塙（第24図）

16号土塙の西側に隣接し、11号住居跡の南約6mに位置している。確認面でのプランはかなり歪んでいるが、底面プランは略円形となる。規模は1.0m×0.9mを測る。確認面からの深さは20cmで、壁は16号土塙より明確であった。覆土はローム粒を混入する黒褐色土層が主体をなし、その状況は16号土塙と変わらない。底面はほぼ平坦で、壁とは区別できる。遺物は図示はしなかったが、阿玉台式土器が数点出土した。掘り込み、底面などの状況から遺構と判断した。

#### 25号土塙（第25図）

1号墳周溝東辺と重複しており、本土塙の西側が破壊されている。現存部分の平面形は不整長方形を呈しているが、1号墳周溝と重複している部分は、さらに西側へ続いているようで、構築時のプランは復原できない。規模は南北長3.4m、東西長は現存1.8mを測る。長軸方向はN-18°-Wを指す。確認面からの深さは20~30cmで、1号墳周溝底面より20cm上位に底面がある。壁の状態は決して良くないが、掘り込み自体はしっかりとしている。覆土は暗褐色土層ないし黒褐色土層が主体となって堆積しており、上層ではローム粒を混入している。底面は東西断面を見た場合に平坦であるが、南北方向では壁際から中央へ向けて緩かにくぼんでおり、壁際と中央では約15cmのレベル差がある。

遺物は全く出土せず、構築時期も明らかにできないが、1号墳より古いことから本節に含めた。



第25図 25・26・41・74号土壌実測図

### 28号土塙（第25図）

25号土塙の南約4mに位置している。平面プランは略円形を呈し、規模は2.1m×1.8mで、南北にやや長い。確認面からの深さは40cmを測るが、明確な壁は存在していない。覆土は黒褐色土層が主体となり、上層でローム粒を混入している。底面はかなり凹凸があり、また軟弱であった。なお、遺物は全く出土しなかった。

### 41(14)号土塙（第25図）

40号住居跡の東約4mに位置している。形状は所謂陥し穴状を呈している。平面プランは橢円形を呈しており、規模は1.7m×1.0mを測る。長軸方向はN-15°-Wを指し、センターと直交している。確認面からの深さは東側で1.5mとかなり深い。壁は垂直に立ち上がるが、土質の軟かいソフトロームの部分は崩落しているのか、大きく開いている。覆土は最下層に粘質の黒色土層が薄く堆積し、その他は黒褐色土層が主体となる。なお、部分的にロームブロックを多量に含む層が認められた。底面は確認面の規模と比較してかなり狭いが平坦であった。遺物は全く出土しなかった。

### 74(13)号土塙（第25図）

40-B号住居跡東コーナーと重複しており、41号土塙の南西約6mにあたる。平面プランは隅丸方形を呈し、所謂陥し穴状土塙の形状をとる。規模は1.2m×0.7mを測り、長軸方向はN-54°-Wを指し、センターと直交する。確認面からの深さは100cmとやや深く、住居跡床面からも60cmとなる。覆土は黒色土層で、ローム粒、ロームブロックを含んでいる。底面は平坦で中央にピットが1か所設けられている。ピットは直径15cmで、底面から30cmの深さを有する。なお、遺物は全く出土しなかった。

## 4. グリッド出土の遺物

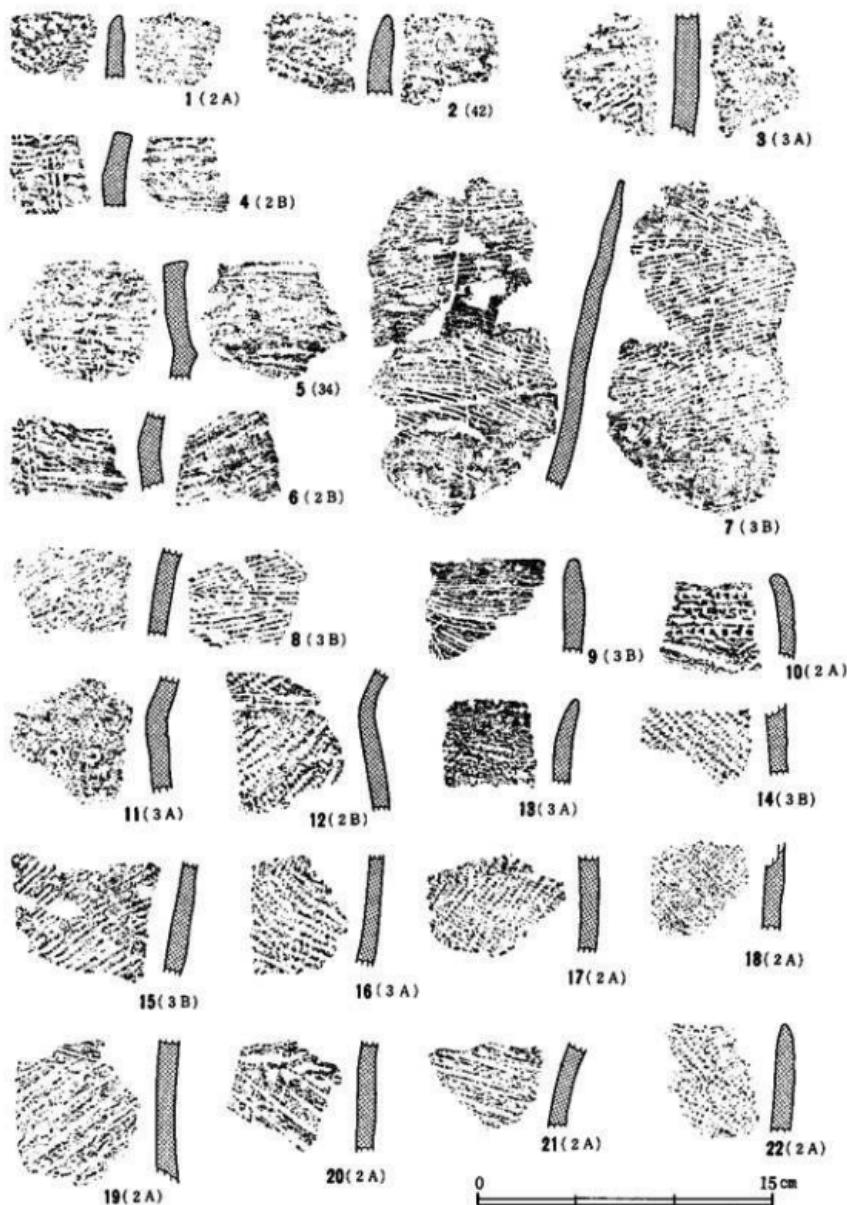
### 土器（第18・20・26～28図、図版23・24・28～30）

グリッドから出土した土器は、炉穴、住居跡が営まれた時期に属するものが主体となっている。しかし、概観するとバラエティーに富んでいる。興味深い時期の土器も含まれている。なお、他の時期の遺構に混入していた土器もここへ括した。それぞれ挿図へ出土グリッド、出土遺構をカッコ内に記した。以下便宜的に時期別に5群に分類して説明を加える。

#### I群（第26図1～8）

早期の土器を一括したが、全て条痕文を施す土器で、胎土に植物纖維を混入している。施されているモチーフにより細分した。

1類（1～3） 沈線あるいは微隆帯で区画して、区画内に竹管の刺突文を充填するものである。1・2は口縁部破片である。文様帶は細い沈線で区画しており、区画は三角形、菱形で直線的なものである。擬方向の基本的区画は見られないが、沈線の区画の交点には竹管の円形刺突が施されている。また、区画内には竹管の背を利用した刺突文を充填している。3の器面は荒れ



第26図 グリッド出土土器拓影図 (I)

ており、拓影も不鮮明であるが、微隆帯の区画である。区画内は沈線で充填し1・2とは若干趣が異なる。いずれも胎土への植物纖維の混入はあまり多くない。いずれも鶴ヶ島台式土器とされる。

2類（4～6）文様帶に竹管刺突を施すものである。4・5は口縁部破片で、端部は四角く納められ、比較的丁寧な調整である。口縁部は外反し、また、5に見られるようにややシャープな隆帯が過るようである。隆帯頂部及び口唇部は竹管の背を押圧している。文様帶はかなり細い竹管の背を刺突しており、その構成は4・5が3列で直線的に、6が2列で一部曲線的な部分が見られる。胎土への植物纖維の混入は1類同様あまり多くなく、4・5は焼成も良好である。恐らく茅山上層式に近いものであろう。

3類（7、8）条痕だけが観察できるものである。7については口縁部も遺存しており、文様帶を有していない。7の口縁部は粗雑な調整で、端部は棒状工具を押圧している。器面への調整も雑で、かなりの凹凸がある。条痕は7・8とも横位で、8の外面は擦痕に近い。胎土への植物纖維の混入は5・6に比べて多く、断面は黒色となる。時期的には3類に近いと考えられる。

## II群（第18図3、第26・27図）

前期の土器であるが、胎土に植物纖維を混入するものとしないものがある。施されているモチーフにより細分した。

1類（第18図3、第26図9～12）全て胎土に植物纖維を含んでいる。一応竹管を用いた文様帶を有するものとして分離したが、モチーフは様々である。第18図3はほぼ完形に復原できた。器形は小形の鉢形を呈し、口径12.4cm、底径7.1cm、器高9cmを計る。底部から垂直に立ち上がり、胴部下半から大きく開き、口縁部は内窵している。口縁部は4か所で波状を呈し、波頂部を中心に文様が構成される。器面は竹管の円形刺突が施され、口縁部及び胴部下半の屈曲部に1条ずつ廻っている。上下の刺突間は波頂部から同様に刺突列を垂下させ、全周で4列が配される。この刺突列は対する波頂部が組となって、1列、2列の2組からなる。個々の刺突はかなり細く、竹管の内側を削り取った原体を使用している。地文にはかなり細かい繩文が施されており、原体はL { Rで、横回転、縱回転を組み合わせて羽状としている。内面は横向方に磨いているが、植物纖維の混入が多く、剥離する部分が多い。また、底部も良く磨かれている。焼成は比較的良好がやや脆弱で、色調は黄褐色を呈する。第26図9は平行沈線を密に施している。平行沈線は殆ど横走しているが、破片左下に僅かに縱方向の沈線が見られ、縱走する沈線を軸として横走する沈線を配したと考えられる。10は口縁部の破片で若干内窵している。文様帶は3条の有節平行沈線で構成され、押圧はかなり深い。有節平行沈線以下は繩文が施され原体Rの格条体である。内面は丹念に磨いている。焼成は良好で、色調は黄褐色を呈している。なお、繩文原体、胎土、焼成からして19～21も同一個体の可能性が高いため、ここに含めて触れておく。いずれも原体Rの格条体で、19・20では羽状を呈している。内面は10同様丹念に磨

き、色調は殆ど変わらない。12も粗雑ではあるが有節沈線となっている。11は円形刺突が施されている。地文には繩文が施され。原体は  $R \{ \frac{L}{L} \}$  である。11・12とも焼成は不良で、内面は若干剥落している。いずれも黒浜式土器である。

2類（第26図13～18・22）繩文だけが施されているものである。このうち13・22は口縁部破片であり、文様帯を有さない土器も含まれていることが窺える。原体は  $13 \cdot 14 \cdot 16 \cdot 22$  が  $R \{ \frac{L}{L} \}$  、  
15が  $L \{ \frac{r}{r} \}$  、17が  $L \{ \frac{R}{R} \}$  、18が  $L \{ \frac{R-R}{L} \}$  の羽状となる。内面は特に磨かれるものではなく、横位のナデが殆どである。時期的には1類に伴うと考えられる。

3類（第27図23）1点だけの図示であるが、浮線文を付するものである。口縁部は欠損しているが、口縁部に近い部分の破片で、大きく内弯している。浮線文は直線、曲線に配され、頂部を棒状工具で押圧する。地文に繩文が施されていた可能性もあるが、現状では全く観察されない。胎土には1mm前後的小石を多く含むが堅緻で、色調は灰褐色を呈している。諸磯b式土器である。

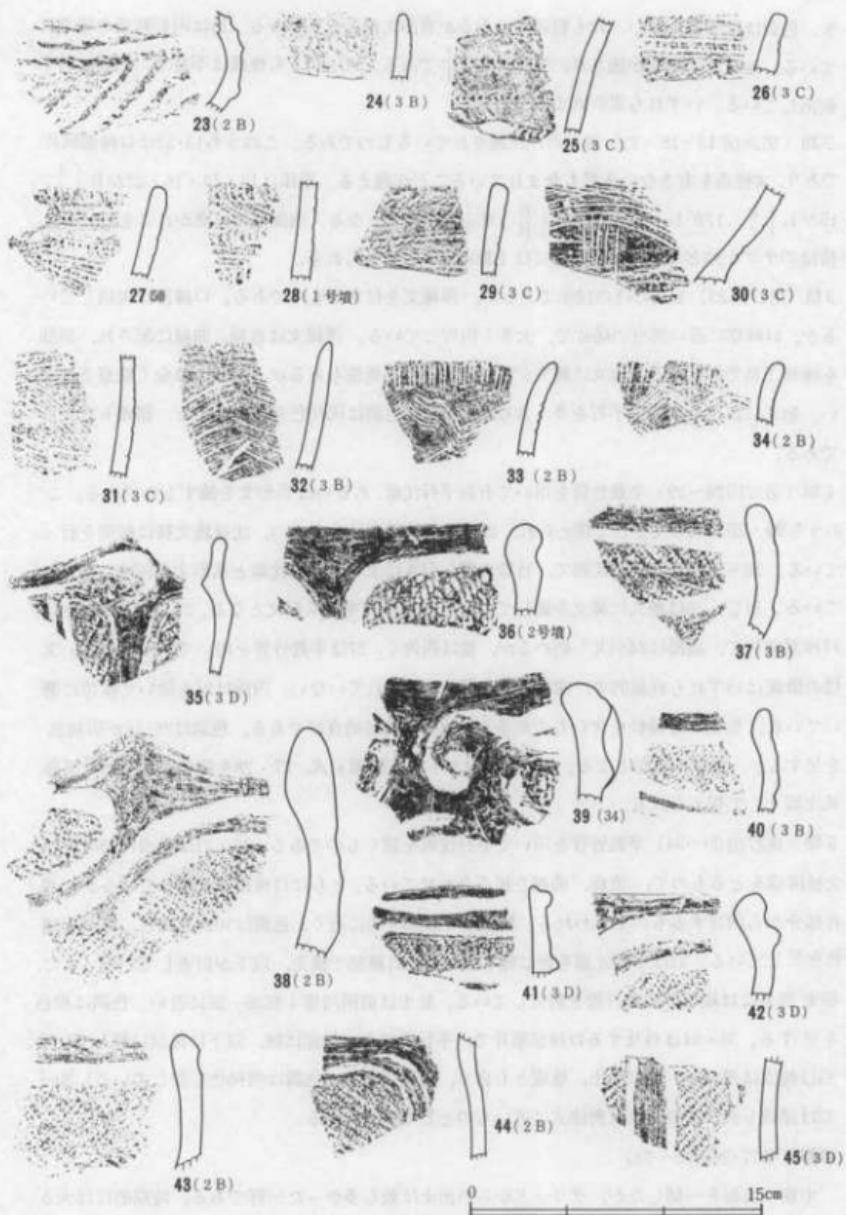
4類（第27図24～29）半截竹管を用いて有節平行沈線、あるいは爪形文を施すものである。このうち24・25は爪形文として捉えられ、25は平行沈線が伴うものの、沈線施文後に刺突を行っている。26～28は有節平行沈線で、竹管の押し引きによって平行沈線と爪形文を同時に施している。但し、26は地文に繩文を施している。29は所謂変形爪形文となる。24・26・27・29は口縁部破片で、端部は24が丸く納めるが、他は四角く、27は半截竹管を用いて刻んでいる。文様の構成はいずれも直線的で、曲線となる部分は含まれていない。内面は24を除いて横位に磨いている。胎土には砂粒を含むものが多く、焼成は比較的良好である。色調は26・28が灰褐色を呈するが、他は赤褐色となる。形式的には24～26を諸磯a式、27・28を諸磯b式、29は浮島式土器として捉えられる。

5類（第27図30～34）半截竹管を用いて平行沈線を描くものである。30・31は前出の23に近い文様構成をとるもので、直線、曲線を組み合わせている。ともに口縁部を欠損しているが、現存部分から内弯するものと思われる。胎土は4類26・28に近く、色調は30が赤褐色、31が灰褐色を呈している。32は平行沈線を密に施すもので、口縁部で横走、以下が斜走している。また、横走部分には縦位に半截竹管を刺突している。胎土は前例同様4類26・28に近い。色調は橙色を呈する。33・34は外反する口縁部破片で、平行沈線を口縁部に縦、以下に波状に施している。33は焼成は悪いが、34は胎土、焼成とも良く、堅緻である。色調は明褐色を呈している。30～32は諸磯b式に、33・34は興津式に近いものとして捉えられる。

### III群（第27・28図35～53）

中期の土器を一括したが、グリッドからの出土は最も多かった一群である。時期的には大きな隔りはないようで、器面装飾の違いから2類に細分した。

1類（35～50）各部分の破片が含まれるが、形態として、口縁部に隆帯と太い沈線で構成され



第27図 グリッド出土土器拓影図 (2) (参考地図を除く) (15-17)

る文様帯を有し、胸部は沈線で区画して縄文帯と無文帯を交互に垂下させるものである。35～43は口縁部文様帯の破片である。これだけでは全容を把握することはできないが、35・38のように波状を呈するものがあり、多くは内弯している。文様帯の構成は39に渦巻文が見られるが、38等はかなり簡素なものとなっており、他の破片を見ても複雑な構成となるものはないようである。また、35の文様帯はかなり狭いものとなっている。文様帯の区画内には縄文が施されており、36・42がL { R である他は全て R { L である。44～50が胸部懸垂文が配されている破片である。前述のように沈線で区画して縄文帯と無文帯を交互に配している。このなかで47だけは縄文帯の中に蛇行沈線が描かれている。縄文原体はR { L 縦位回転が44・45・48・49で、他はL { R 縦位回転となる。口縁部の破片も含めて胎土には砂粒を含むものが多く、精緻なものとしては44・48が掲げられよう。しかし、焼成については著しく悪いものはない。

2類 (51～55) 器形としては1類と大差ないものであるが、器面は櫛描様の細い沈線で覆うものである。52は口縁部で低い隆帶で渦巻文を構成している。胎土は1類に比べてかなり砂粒を多く含み、焼成も不良である。1・2類とも住居跡と同時期で加曾利E II～E III式の範囲に含まれる。

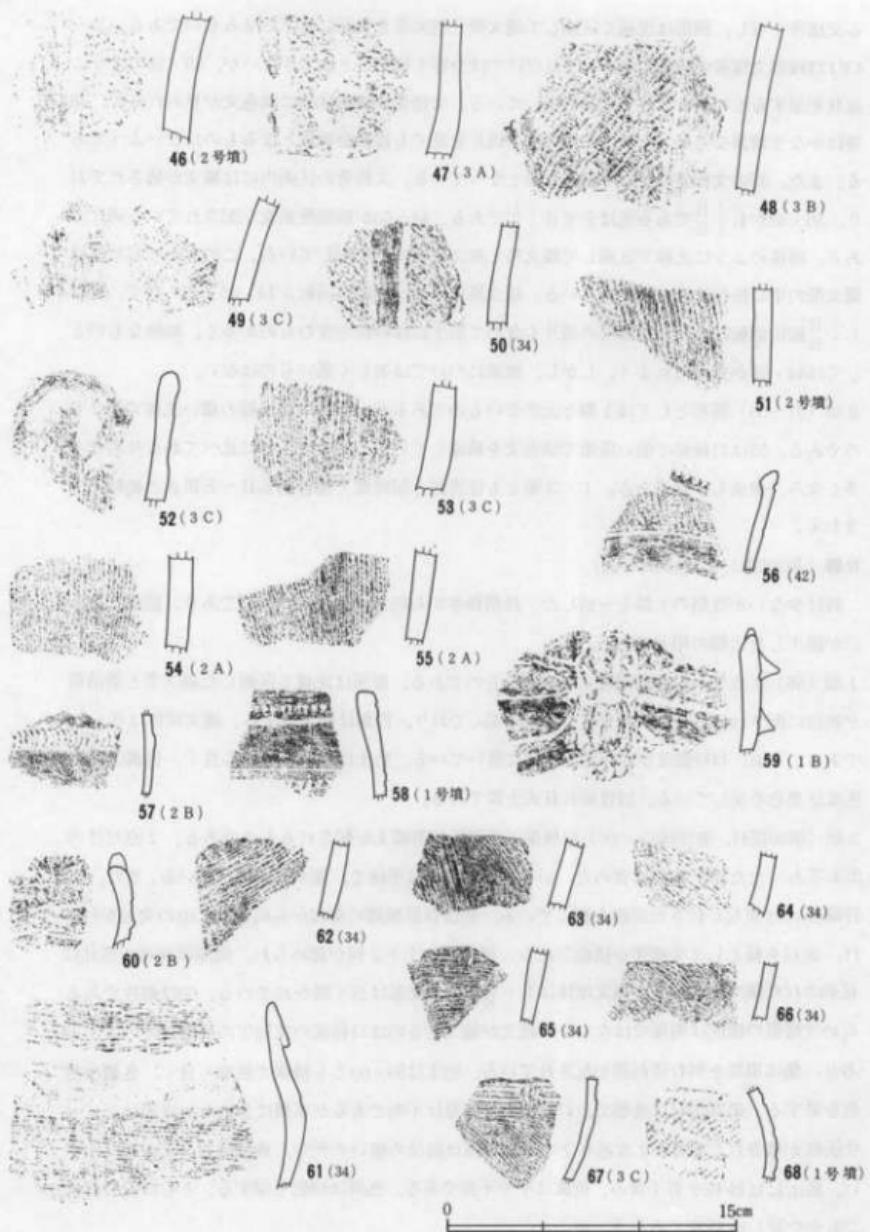
#### M群 (第20図11, 第28図56～60)

数は少ないが後期の土器を一括した。後期後半から終末にかけてのものであり、図示したものが出土した土器の殆どである。

1類 (56) 1点であるが磨消縄文を有するものである。器面は沈線で区画した縄文帯と磨消帯が横位に配されている。口縁部は外側から刻んでおり、内面は稜を有する。縄文原体はR { L である。なお、口唇部及び磨消帯は横位に磨いている。胎土は精緻で焼成も良く、色調は黄褐色及び黒色を呈している。加曾利B II式土器である。

2類 (第20図11, 第28図59・60) 口縁部に所謂隆起帯縄文が配されるものである。2点だけの出土であったため、本群に含めた。いずれも口縁部は平縁で、僅かに内弯している。また、口唇端部には突起が付され頂部を刻んでいる。59は口唇端部の突起から縦位に二山の突起が付され、突起を軸として文様帯が構成される。縄文帯は上下2列が認められ、間隙は沈線で窓状に区画された無文帯となる。縄文原体はL { R で、無文部は良く磨かれている。60は細片であるため文様帯の構成は明確ではないが、縄文が施されるのは口唇部の突起下の区画だけのようであり、他は頂部を刻む隆起帯が配されている。胎土は59・60とも精緻で焼成も良く、色調は橙色を呈する。第20図11は底部で、口縁部の形状等は不明であるが本類に含めた。底面はアンペラ压痕が残され1本潜み2本送りとなる。器面は斜位の粗いナテで、底径は5cmとかなり小さい。胎土には砂粒を若干含み、焼成はやや不良である。色調は褐色を呈する。ともに安行II式でもやや新しい時期であろう。

3類 (57・58) 所謂粗製の土器である。57は胸部の破片で、隆帯を爪形に刻んでいる。また、



第28図 グリッド出土土器拓影図(3)

器面には斜位の擦痕が観察される。58は口縁部破片で、口縁部はやや肥厚している。器形は若干内寄するもので、口縁部及びその下位に2列の刺突列が廻っている。無文帯と内面は横位のナデである。胎土はともに比較的精緻で焼成も良い。色調は57が黒色、58が明褐色を呈している。後期後半の土器であるが、具体的な比定は避ける。

#### V 磁（第28図 61～68）

晚期の土器を一括した。出土した殆どを図示したが、時期的に2類に細分できる。

1類（61～66）晚期後半の粗製土器である。器形は61である程度窺うことができ、胴部上位で屈曲する深鉢形と考えられる。口縁部は複合（折り返し状）となり、やや内傾している。口縁直下に幅3cm前後の無文帯があり、その他の口唇端部、口縁部、胴部とも横位の撚糸文が施されている。しかし、他の破片では斜位の撚糸文も見られ、胴部下半では斜位となるようである。胎土には砂粒を多く含み、焼成は不良である。また、内面は剥落しており、調整は不明である。色調は黄褐色を呈している。これらは口縁下に無文帯を持ち、千網式土器に伴う粗製土器としてよい。

2類（67・68）晚期終末の土器で図示した2点だけの出土である。67の文様帶は不明であるが、2条の沈線が残存し、沈線以下には条痕を施している。また、沈線には68と同様の刺突がなされている。68は所謂変形工字文で沈線の交点に浅い刺突様の施文がある。地文は繩文で、原体はR { L L である。胎土はともに砂粒をやや多く含むが、焼成はさほど悪くない。色調は黒色に近い。ともに大洞A'式併行である。

#### 石器（第29・30図、図版24）

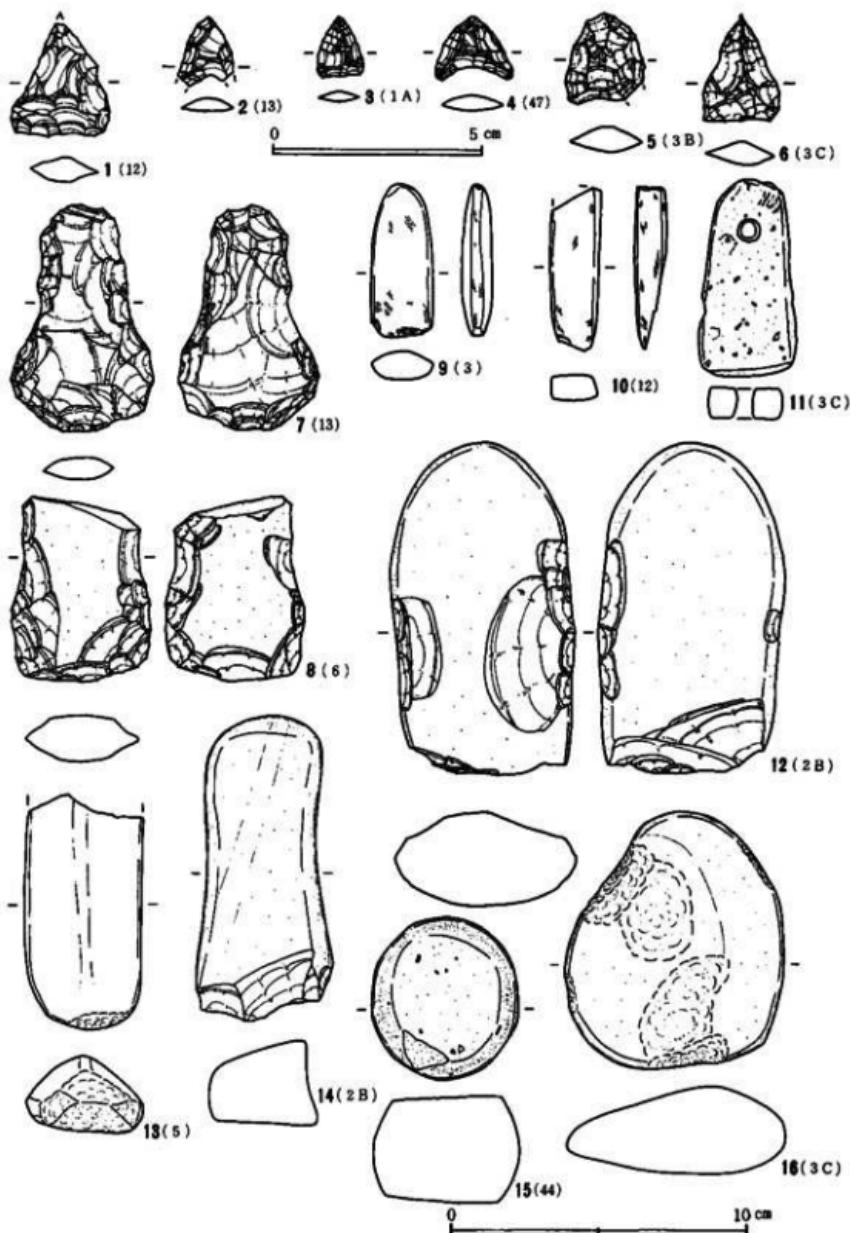
石器はそれほど多くなく、グリッド、他の時期の遺構への混入品を一括した。

石鑑（3～6）3は小形品で三角形を呈する。調整は比較的入念で、薄く仕上げられている。石材は黒曜石で質が良く半透明である。重量は0.33g。4は無柄凹基で脚が大きく開いている。やや厚い仕上がりで石材はチャートである。重量は1.0g。5は脚が片方欠損している。全体に粗雑な作りで先端もやや丸い。石材は安山岩となる。重量は2.41g。6は三角形を呈し平基となる。やや厚い仕上がりであるが、周縁から入念な調整剝離を行っている。石材は頁岩である。重量は2.5g。

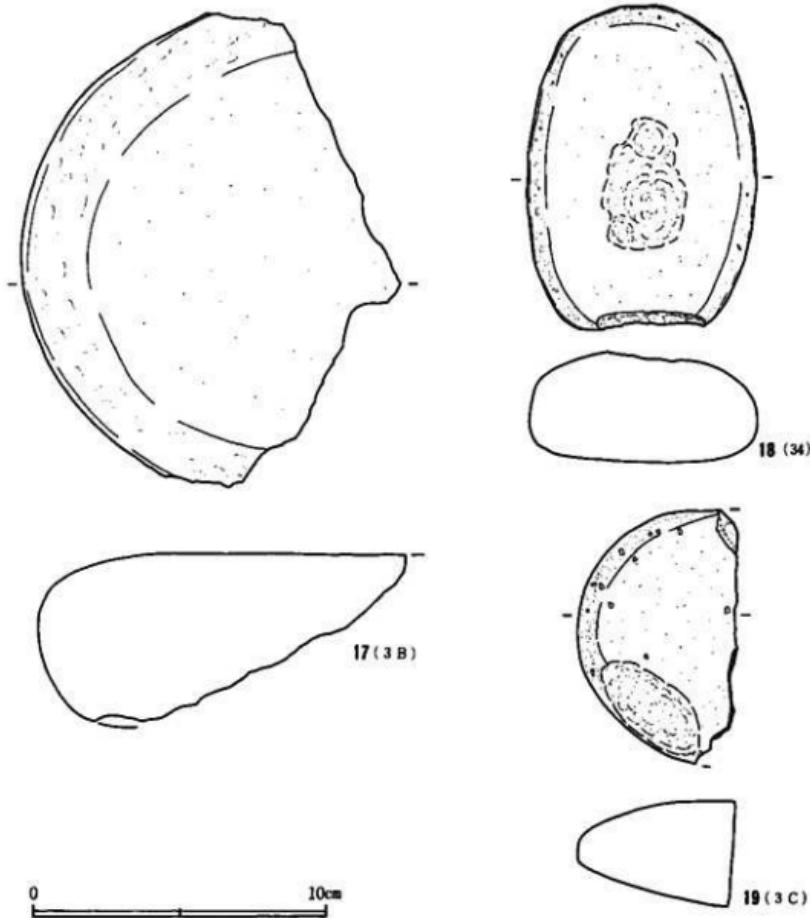
浮子（11）軽石を成形して、一端に孔を穿っている。孔径は5.3mmである。ちなみに水に浮く。

礪器（12・14）12は石斧としても良いもので、周縁及び刃部に剝離が施される。表裏とも自然面が大きく残されているが、研磨されており平滑である。石材は安山岩である。14は不整形の棒状の素材の一端に刃部を形成している。石材は玄武岩である。

敲石、磨石（13・15～16・18・19）13は棒状の素材をそのまま利用したもので敲石となる。第3節で述べるところの5号住居跡から出土したものである。15は磨石で円形に良く成形されたもので、表裏ともかなり使用され磨耗している。石材は安山岩となる。16・18・19は敲石、磨



第29図 石器実測図 (1)



第30図 石器実測図 (2)

石の両方の機能を有するものである。18は整った石錐形を呈しているが、他は自然石をそのまま利用している。16は砂岩、他は全て安山岩となる。

**石錐** 17の1点だけである。欠損しているが本来は円形を呈していたと考えられ、表面は平滑となっている。しかし全くくぼんでおらず、平坦である。石材は石英斑岩である。

## 第2節 古墳時代

本遺跡には2基の古墳が築造されていた。いずれも方墳で、調査順に1号墳、2号墳とした。調査は周溝の検出から着手し、周溝検出後に内部主体の精査を行った。なお、本遺跡からは当該時期の住居跡は検出されていない。また、職業訓練校建設に伴って調査を行った地区内にも方墳が1基検出されており、本遺跡の古墳とは約250m隔っている。

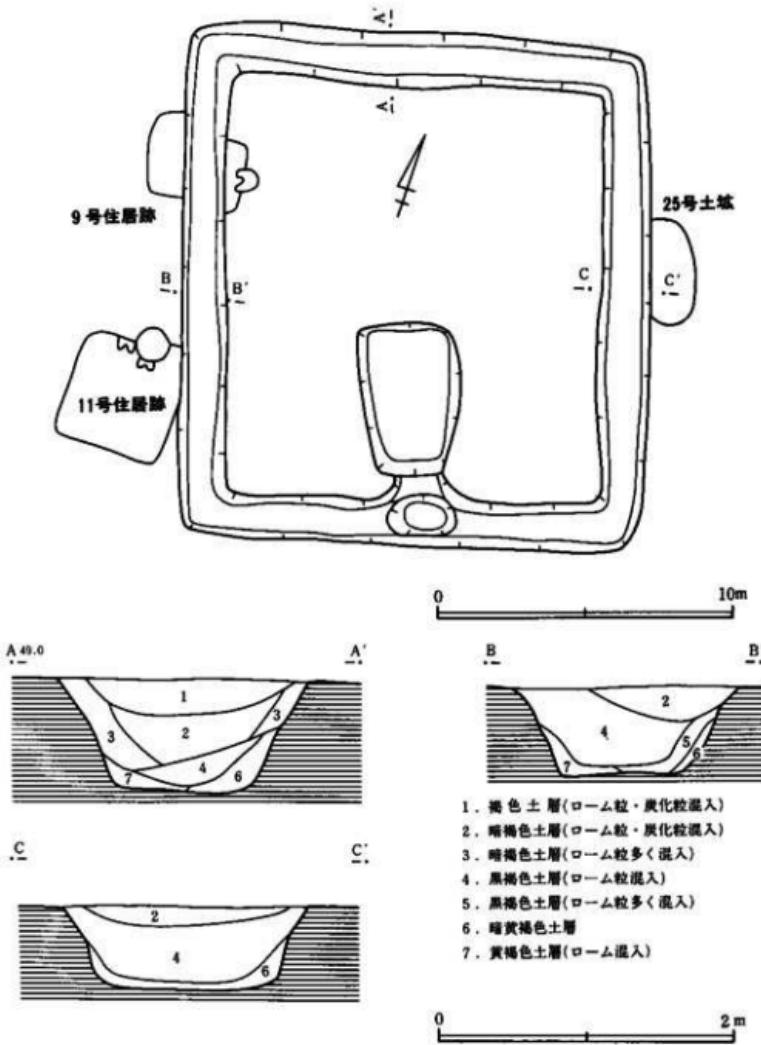
### 1号墳（第31・32図、図版7・9）

1次調査区に位置し、2号墳周溝とは約15mの間隔をおいている。調査前には墳丘は認められず、表土除去を行った段階で方墳であることを確認した。従って墳丘については、その規模、築造方法などは述べるべき手掛りは残されていない。また耕作等により旧表土が遺存していたのかも不明である。

周溝は対辺がほぼ同じ長さを有しており、各コーナー間の距離は北辺15.1m、南辺14.8m、東辺16.2m、西辺16.3mとやや南北に長い方形でめぐっている。また各辺とも僅かではあるが外側へ膨らんでおり、コーナーから見た張り出しへ北辺・東辺が南辺・西辺に比較して大きく、約50cmを測るが、ほぼ直線として考えられるものである。周溝の幅はおおむね一定であるが、コーナー近くで僅かに幅を減じている。各辺の最大幅は北辺1.9m、南辺1.6m、東辺1.8m、西辺1.6mである。しかしこの数値は確認面での幅であり、直接比較の対象とはなりえない。底面もほぼ直線的であり、その最大幅は北辺1.0m、南辺0.9m、東辺1.2m、西辺1.1mでやはりコーナー近くで幅を減じている。底面のレベルはそれほど大きな違いはなく、しいて言うならば南辺が他の3辺よりも約10cmほど高いレベルにある。周溝の断面形は逆台形を呈し、確認面からの深さは50~60cmを測る。構築面がさらに上位にあったことを考えると、かなりしっかりと周溝であったと思われる。覆土は黒褐色土層ないし暗褐色土層で、全体にローム粒を混入する層が多い。周溝内の施設は前庭部の前面に2.4m×1.3mの楕円形の掘り込みがある。周溝底面から10cm、前庭部底面から20cm掘りくぼめられているが、特に遺物もなく、周溝覆土と同じ土層が堆積している。周溝に区画された地域は243.8m<sup>2</sup>で、周溝を除いた面積は170.7m<sup>2</sup>である。周溝の区画が指す主軸方向はN-17°-Wを指す。なお周溝は9号住居跡・11号住居跡・25号土塙と重複し、25号土塙は本墳より古い土塙であったが、9号住居跡・11号住居跡は後に築かれた住居跡で、周溝覆土内に床面が構築されていた。

### 内部主体（第31図、図版7・9）

本墳の内部主体には横穴式石室が構築されている。石室は南向きに開口する石室で、主軸方向はN-19°-Wと周溝の主軸より2°西側へ振っている。構築は軟質砂岩の裁石を構築材として用いており、掘り方底面にロームブロックを主体とした土層で基礎を築き、その上に各石材を積んでいる。また、奥壁から右側壁にかけて搅乱されており、奥壁の約1/2と右側壁の一部が失

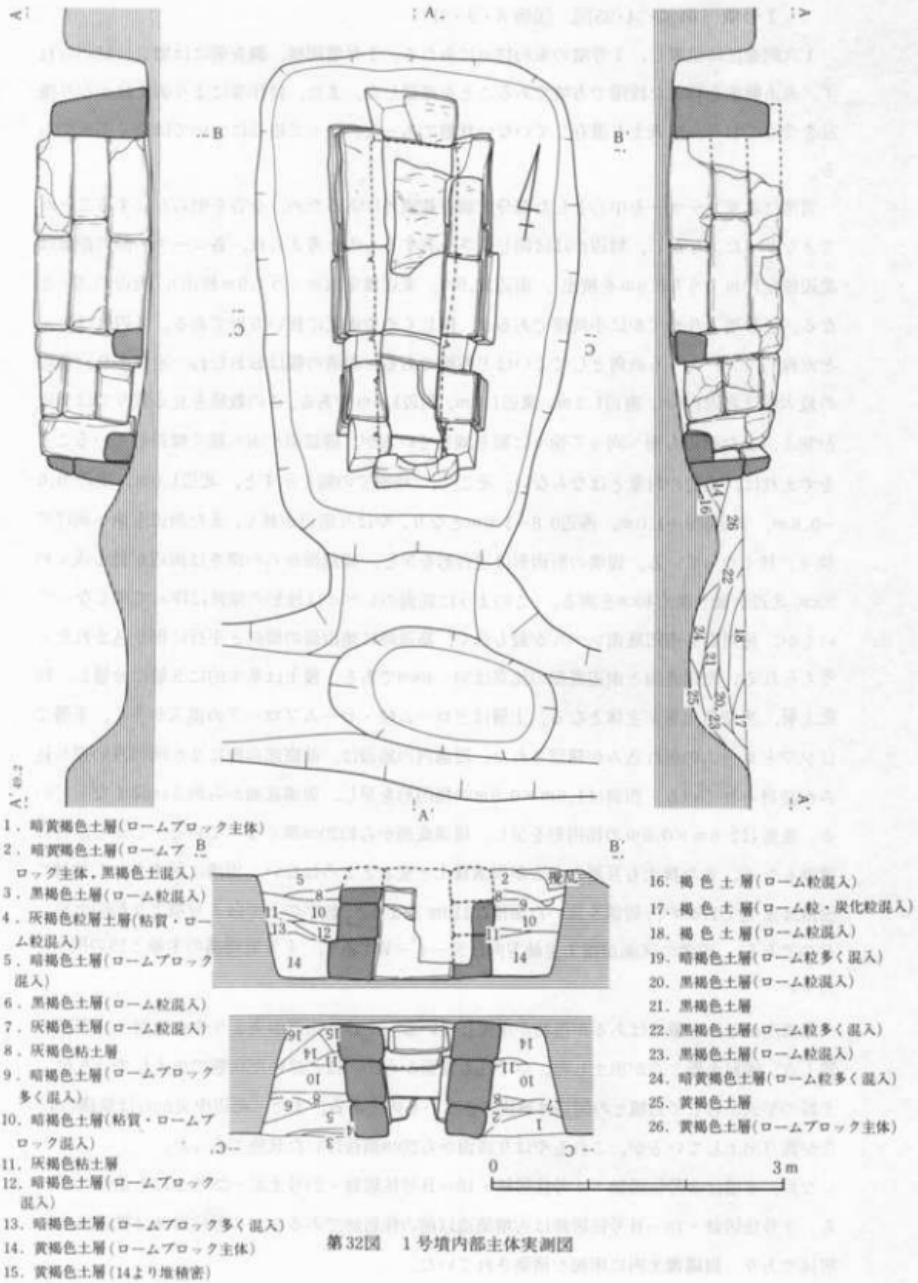


第31図 1号墳実測図

われている。石室の規模は、玄室長1.9m、玄室幅は奥壁で0.8m、玄門で0.6m、高さは天井石が遺存しておらず、側壁の高さは左右とも1.2mである。容積は1.6m<sup>3</sup>となる。狭道は長さ0.7m、幅0.6m、高さ1.0mで、奥壁から閉塞石までの長さは3.0mとなる。一応両側に袖石は設けられるが、プランとしては奥壁から狭道へ向け直線的に狭くなる。奥壁は一枚石を使用しており、本来の形状を保っていないが、高さ110cm、幅90cm、厚さ50cm程度のものであったと考えられる。側壁は左右とも根石2枚で3段に積んでいる。各段とも根石同様2枚の石材を使用しているが、目地は根石と3段目を揃え、2段目を奥壁側へずらして天井石の重圧を配分している。側壁は左右とも僅かに持ち送りがなされ、3段目は根石から10cm内側へせり出し、さらに、両側壁とも奥壁を挟み込むようにしている。各石材は高さ35~40cmと一定で目地はほぼ水平である。長さは80~130cmであるが、およそ80~90cm・110cm・130cmの3つの規格に分けられる。これらの3つの規格の石材の配置は左右の側壁とも共通しており、130cmの大きい石を奥壁側の根石と3段目に、110cmの石を2段目の玄門側に、80~90cmの小さい石を玄門側の根石、2段目の奥壁側、3段目の玄門側に使用している。袖部は高さ110cm、幅40cmの石を立てているが、両袖石とも奥壁側へ傾いている。玄門の間には狭道と玄室を区別する框石が置かれており、約30cmの高さがある。狭道部は左右側壁とも根石1枚の3段積みで、構築材の大きさは、長さ50~60cm、高さ30cmとほぼ同じ規格で、玄室の構築材よりはるかに小さい。狭門は玄門同様高さ90~100cm、幅30~40cmの石を立てている。その石に接し3個の石材でほぼ完全に閉塞している。

掘り方は全長3.6m、幅は奥壁側で2.2m、前庭部側で1.4mと奥壁側が幅広で前庭部に向けて狭くなる羽子板形を呈している。掘り方は周溝の主軸の中心までは達していないが、奥壁側のコーナーは周溝の対角線にはば接する。確認面からの深さは奥壁側で75cm、前庭部側で80cmを測るが確認面に傾斜があり、絶対高は奥壁側より前庭部側が15cm高くなっている。底面は一様に平坦ではなく、中央に向けて緩やかにくぼみ、横断面は浅い皿状となる。石室の裏込めは暗褐色土層、あるいは黒褐色土層で、ロームブロック、粘土ブロックを多く混入させ、基本的に6回にわたって充填している。奥壁側の裏込めは著しく擾乱されており、土層の観察はできなかった。前庭部は短く、石室側から緩く立ち上がり約50cmの長さを測る。確認面のプランは掘り方からくびれて周溝の内縁へ繋っている。西側は30cmと短く主軸と平行になる部分があるが、東側は明瞭な区分はなく周溝へ続く。幅は石室側で1.3mと最も狭くなっている。底面は周溝底面に至るまでほとんど主軸と平行であり、明確に前庭部として捉えることができる。しかし、このうち平坦な面を形成するのは約20cmであり、両端はそれぞれ石室・周溝へと下がっている。掘り方底面（閉塞石での底面レベル）より約30cm高く、周溝底面（前庭部前面の精円形の掘り込みの底面レベル）より約20cm高く掘り残してある。

石室内の遺物は玄室内に天井石が崩落していたほか、わずかに歯牙、骨粉が認められたが副葬されたと考えられる遺物は1点もない。



第32図 1号墳内部主体実測図

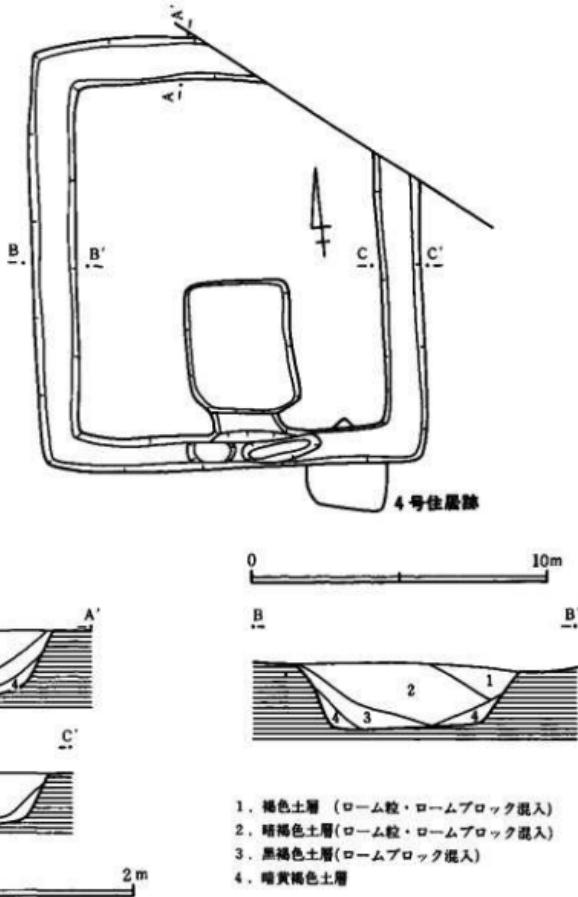
## 2号墳（第33・34・35図、図版8・9・31）

1次調査区に位置し、1号墳の東約15mにある。1号墳同様、調査前には墳丘は認められず、表土除去を行った段階で方墳であることを確認した。また、耕作等により表土はかなり擾乱を受けており、旧表土も遺存していない状態であった。従って墳丘については全く不明である。

周溝は北東コーナーを中心とした部分が調査範囲外にあるため、全容を明らかにすることはできなかった。しかし、対辺がほぼ同じ長さを有するものと考えられ、各コーナー間の距離は北辺推定13m（うち5.6mを検出）、南辺12.6m、東辺推定14m（うち9m検出）、西辺13.6mとなる。1号墳よりわずかに小規模であるが、同じくやや南北に長い方形である。各辺はほとんど直線で、コーナーも直角としてよいほど明瞭である。周溝の幅はおおむね一定であり、各辺の最大幅は北辺1.6m、南辺1.2m、東辺1.7m、西辺1.6mである。この数値を見る限りでは南辺が狭く、また西辺も南へ向って徐々に幅を減じているが、確認面が南へ緩く傾斜していることを考えれば、比較の対象とはならない。そこで、底面での幅を示すと、北辺1.0m、南辺0.6~0.8m、東辺0.9~1.0m、西辺0.8~1.0mとなり、やはり南辺が狭く、また西辺も南へ向けて徐々に狭くなっている。周溝の断面形は逆台形を呈し、確認面からの深さは南辺が最も浅く約20cm、北辺が最も深く40cmを測る。このように底面のレベルは地形の傾斜に伴って深くなっているが、絶対高も南辺底面レベルが最も低く、築造時に地表面の傾斜と平行に掘り込まれたと考えられる。北辺底面と南辺底面の比高は30~40cmである。覆土は基本的に5層に分層し、褐色土層、黒褐色土層が主体となる。上層ほどローム粒・ロームブロックの混入が多く、下層ではソフトロームの流れ込みが確認された。周溝内の施設は、前部前面に2か所の深い掘り込みが設けられている。西側は1.6m×0.6mの楕円形を呈し、周溝底面から約5cm深くなっている。東側は2.6m×0.6mの楕円形を呈し、周溝底面から約20cm深くなっている。しかし、特に遺物もなく、また覆土も互層となるが周溝覆土と変るところはない。周溝に区画された地域の面積は推定で176m<sup>2</sup>で、周溝を除いた面積は110m<sup>2</sup>となる。数字の上では1号墳より約60m<sup>2</sup>狭いものである。周溝の区画が指す主軸方向はN-4°-Wであり、1号墳周溝の主軸と13°の開きがある。

周溝内からは少量ではあるが遺物が出土している。土器は西辺中央よりやや南側で、甕形土器1点、壺形土器2点が出土した。いずれも底面から20cmほど浮いた状態で出土しているが、土器の型式からして古墳との関係は無視できないものである。また、北辺中央からは鐵鏃の破片が数点出土しているが、これもやはり底面から20cm前後浮いた状態であった。

なお、本墳は3号住居跡・4号住居跡・18-B号住居跡・23号土塙・28号土塙と重複している。3号住居跡・18-B号住居跡は古墳築造以前の住居跡であるが、4号住居跡は築造後の住居跡であり、周溝覆土内に床面が構築されていた。

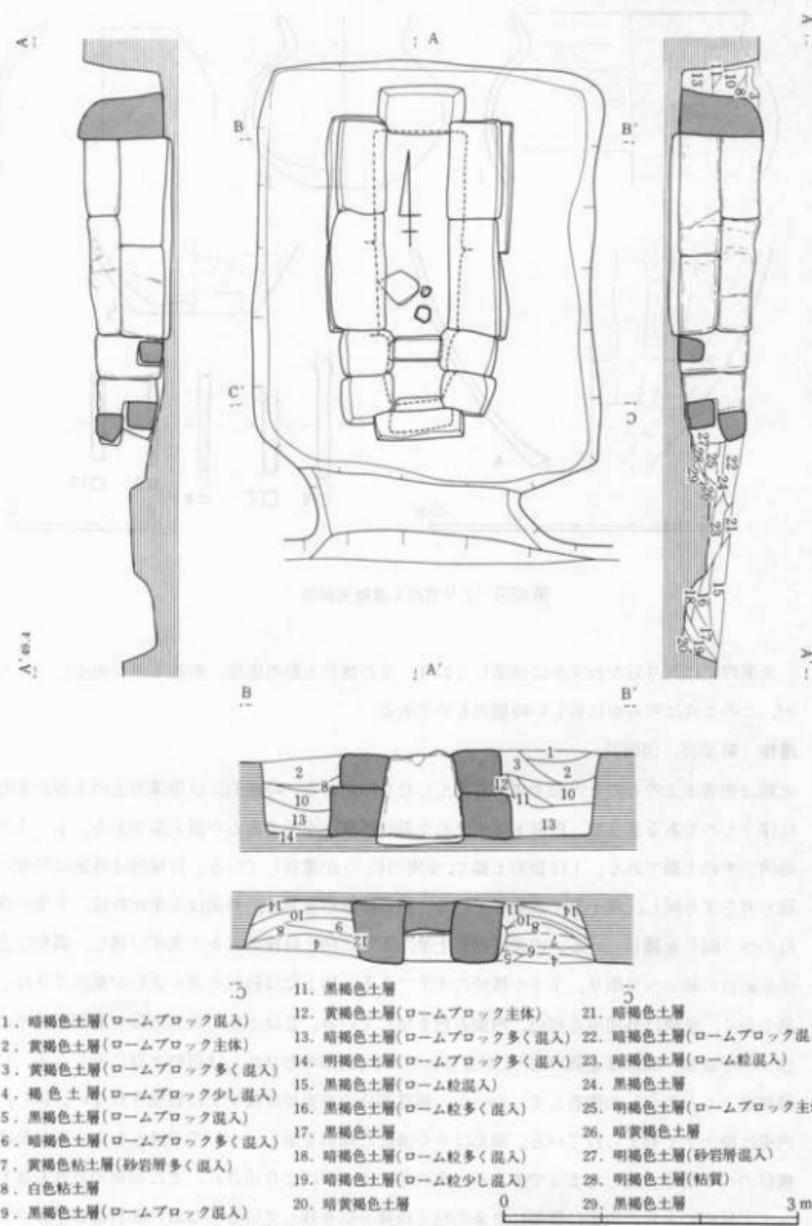


第33図 2号填埋場

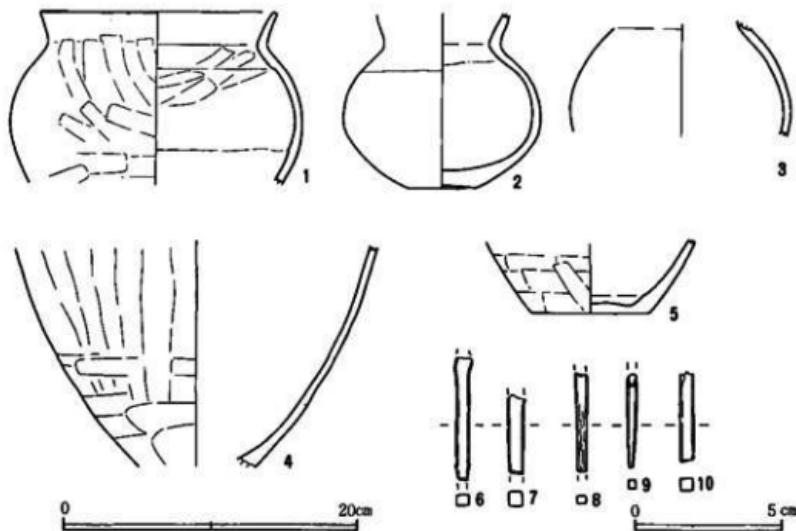
## 内部主体（第34図、図版8・9）

本墳の内部主体には横穴式石室が構築されている。石室は南向きに開口するもので、主軸方向は周溝の主軸と一致しN-4°-Wを指す。構築は軟質砂岩の裁石を構築材として用いており、掘り方底面にロームブロック、砂岩層を主体とした土層で基礎を築き、その上に各石材を積んでいる。石室の規模は、玄室長2.1m、幅は奥壁で0.9m、玄門で0.8mで玄室面積は1号墳よりやや広い。高さは奥壁で0.9m、玄門で0.7mで容積は1.4m<sup>3</sup>と1号墳よりやや少ない。狭道は長さ0.3mと短く、幅0.7m、高さ0.6mとなる。奥壁から閉塞石までの長さは2.7mである。玄室はほぼ長方形のプランを呈し、袖石が内側に出ており、一応両袖となる。奥壁は一枚石で、幅は床面で90cm、天井部で60cm、高さ80cm、厚さ40~45cmである。側壁は左右とも根石2枚で2段に積んでいる。2段目も2枚であるが上面は削平されている可能性がある。目地は2段目が奥壁側へ寄っており、1号墳と同様の積み方である。各石材は長さには若干まとまりがないが、80~100cmの(小)と120~130cmの(大)の2つの規格があり、大きい規格の石材は左右とも奥壁側根石と玄門側2段目に使用し、小さい規格の石を右玄門側根石、奥壁側2段目に使用している。横方向の目地は水平で、高さは右側根石40cm、左側根石50cm、2段目は右40cm、左30cmとやや異なる。持ち送りは石室の高さが1号墳より低い分だけ急角度であり、2段目上面は根石から約10cm内側へ出ている。従って、1、2号墳とも天井石が架構される幅は60cm前後となっている。袖石は高さ70cm、幅40cmの柱状の石を立てており、両袖とも内側へ約10cm出ている。その結果両袖石の間隔は55cmと狭くなっている。また袖石間に玄室と狭道を区別する樋石が置かれており、約25cmの高さがある。狭道は極めて短く、袖石と同規格の石を袖石と並べて立て、門柱石と併用する。すなわち特に狭道としての構築が行なわれているわけではなく、樋石と仕切石との間隙を狭道として認識される程度である。閉塞は2個の石材を2段に積んで行われているが、1段目は角を加工し狭道側へはめ込み、仕切石としている。そのため狭道はさらに短くなっている。現在閉塞石は不自然な状態にあるが、本来はもう1つ石材があったと考えられ、風化土壤化した砂岩層が前庭部側に認められた。

掘り方は全長5m、幅3.5mの羽子板形を呈している。1号墳の掘り方とは異なり、奥壁側と前庭部側の幅はほとんど変わらない。掘り方は周溝の主軸の中心までは達していないが、奥壁側のコーナーは周溝の対角線には接する。確認面からの深さは70~80cmで中央に向って緩く傾斜している。底面の絶対高は掘り方中央が最も低く、また奥壁側より前庭部側が約10cm高い。石室の裏込めはロームブロック、粘土ブロックを多く使用しており部分的に欠ける土層もあるが、基本的に7回にわたって充填している。前庭部は短く約50cmの長さを測る。幅は前庭部の中央で2.1mとやや広く、周溝と石室掘り方を斜めに繋いでいる。底面は平坦で、石室側より10cm、周溝底面より20cm高くなっている。なお、周溝へは比較的緩かに下がるのに対し、石室側へは急角度の段となっている。



第34図 2号墳内部主体実測図



第35図 2号墳出土遺物実測図

玄室内には天井石がわずかに崩落しており、また變形土器の底部、胴部下半が出土しているが、この2点は明らかに新しい時期のものである。

#### 遺物（第35図、図版31）

土器は周溝出土のものと内部主体から出土したものがある。時期的には周溝出土の土器が本墳に伴うものであるようで、内部主体出土の土器は原因は不明であるが混入品である。1～3が周溝出土の土器である。1は變形土器で、全周約 $\frac{1}{3}$ が遺存している。口縁部は外面に明瞭に稜を有さず外傾し、横ナデで調整している。胴部は球形を呈し、外面は上半が斜位、下半が横位のヘラ削りを施している。内面は胴部上半、下半に粘土紐接合痕を1条ずつ残し、調整は上半が斜位の軽いヘラ削り、下半が横位のナデである。胎土には砂粒を多く含むが焼成はさほど悪くなく、色調は外面暗赤褐色、内面赤色を呈している。2は小形の壺形土器で胴部最大径は13.6cmを測る。胴部は全周約 $\frac{1}{3}$ が遺存している。胴部の形状からは壺形土器に近くなる。口縁部はごく一部分しか遺存していないが、現存部分の外面では横ナデは観察されない。但し、内面は横ナデで整えられている。胴部はやや漬れた球形を呈し、ナデで平滑となる。下半部は横位のヘラ削りを施したようであるが、その殆どはナデにより消され、また器面の荒れも加わって不鮮明である。内面は頸部に2条の粘土紐接合痕を残している。なお外面肩部以下は赤彩が施されている。胎土は若干砂粒を含み、焼成は良いが遺存状態は頗る悪い。色調は黄褐色な

いし橙色を呈し、最大径となる部分が黒変している。3も2に近い器形となるようであるが、全周の約 $\frac{1}{3}$ が遺存しているに過ぎない。器面は荒れており調整は不鮮明であるが斜位のヘラ削りの上にナデを施している。内面は横位、斜位のヘラナデである。胎土には砂粒が多く含み、内面の状態から焼成は良いようであるが、遺存状態は悪い。色調は赤褐色を呈するが、胴部中位は黒変している。

4・5は玄室から出土した土器でともに夔形土器である。4は胴部下半の破片で、全周の約 $\frac{1}{3}$ が遺存している。器面は縦位のヘラ削りが施され、下端に横位のヘラ削りを加えている。内面は横位にナデを施している。胎土には砂粒をかなり多く含み、焼成は良くない。色調は外面暗赤褐色、内面明褐色を呈している。5は夔形土器の底部である。底径は8.1cmを計る。外面および底面はそれぞれ横位、不定方向のヘラ削りで、内面は横位ナデで整えられる。胎土には砂粒を多く含み焼成は良好であるが、外面の遺存状態は頗る悪い。色調は外面暗赤褐色、内面明赤褐色を呈している。

鉄鎌(6~10)はいずれも部分的な破片で、刃部の形態が明らかなるものはない。6・7・10は籠被部分、8・9が茎部分となる。いずれも断面は方形を呈している。なお、8には僅かに木質が遺存しているが、明瞭なものではない。

### 第3節 歴史時代

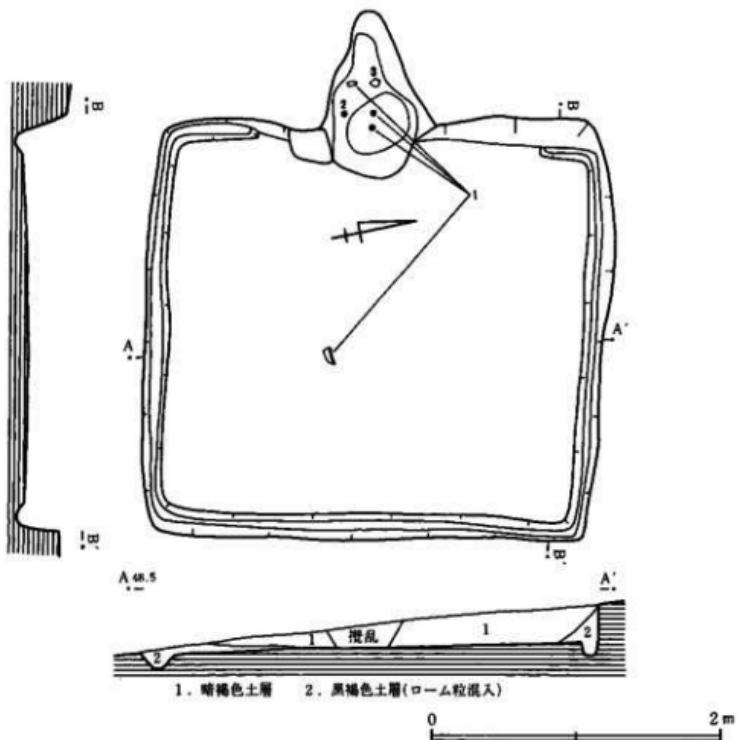
#### 1 住居跡

歴史時代の住居跡は26軒を検出した。これらは調査区内にほぼ均等に分布している。調査区中央が住宅未調査であるが、その部分を含めて、さらに北に伸びて分布していると考えられる。但し、道路を挟んで北側の職業訓練校の調査では住居跡は検出されておらず、集落のほぼ限界近くまでは調査区域に入っているようである。また、該期の住居跡が重複するのは、住居跡の分布が密でないため多くなく、5・9・40・56・59号住居跡がそれぞれ2軒が重複しているだけである。

##### 1号住居跡(第36~40図、図版10)

4号住居跡の南側に隣接している。平面プランは南北にやや長い方形を呈しており、規模は3.1m×2.8mを測る。カマドを通る主軸方向はN-73°-Wを指す。地形が南へ向って下がる緩斜面となっているため、確認面からの深さは北壁で35cm、南壁では10cmとなる。壁はかなりしっかりしており、覆土はローム粒を含む黒褐色土層が主体となり2層に分層した。なお、住居跡中央は擾乱されている。床面は極めて平坦に構築されており、かなり堅緻になっている。柱穴は床面には認められず、また、壁溝が東壁を除いて設けられている。

カマドは西壁中央に設けられている。遺存は悪く、左側袖がわずかに残っていた。カマド下



第36図 1号住居跡実測図

掘り込みは直径40cmで、床面から約10cmくぼめられている。火床は掘り込みの上面に位置し、煙道部にかけて焼土が堆積している。壁外への張り出しあは80cmと長く、三角形を呈している。煙道部の立ち上がりは緩かで、段をなして煙出しとなる。

遺物はあまり多くなく、3個体の土器が実測できるに過ぎない。1はカマド内と住居跡中央から出土した土器片が接合した。

遺物 1は變形土器で口縁部及び胴部上半が全周の約半分遺存している。口縁部は外方へ開き、横ナデで整えられる。胴部はやや丸味を帯び、外面は縱位ヘラ削り、内面は平滑にナデが施されている。胎土には砂粒を多く含むが、焼成は比較的良好。なお、肩部には砂質土が付着している。2は瓶の底部でカマドから出土した。孔は5孔が配されている。胎土にはやや砂粒を含み、還元炎焼成となる。3は變形土器の底部である。外面は横位のヘラ削り、内面は横位のナデで調整している。胎土には砂粒を多く含むが焼成は比較的良好である。なお、底部底面は剥落が著しい。

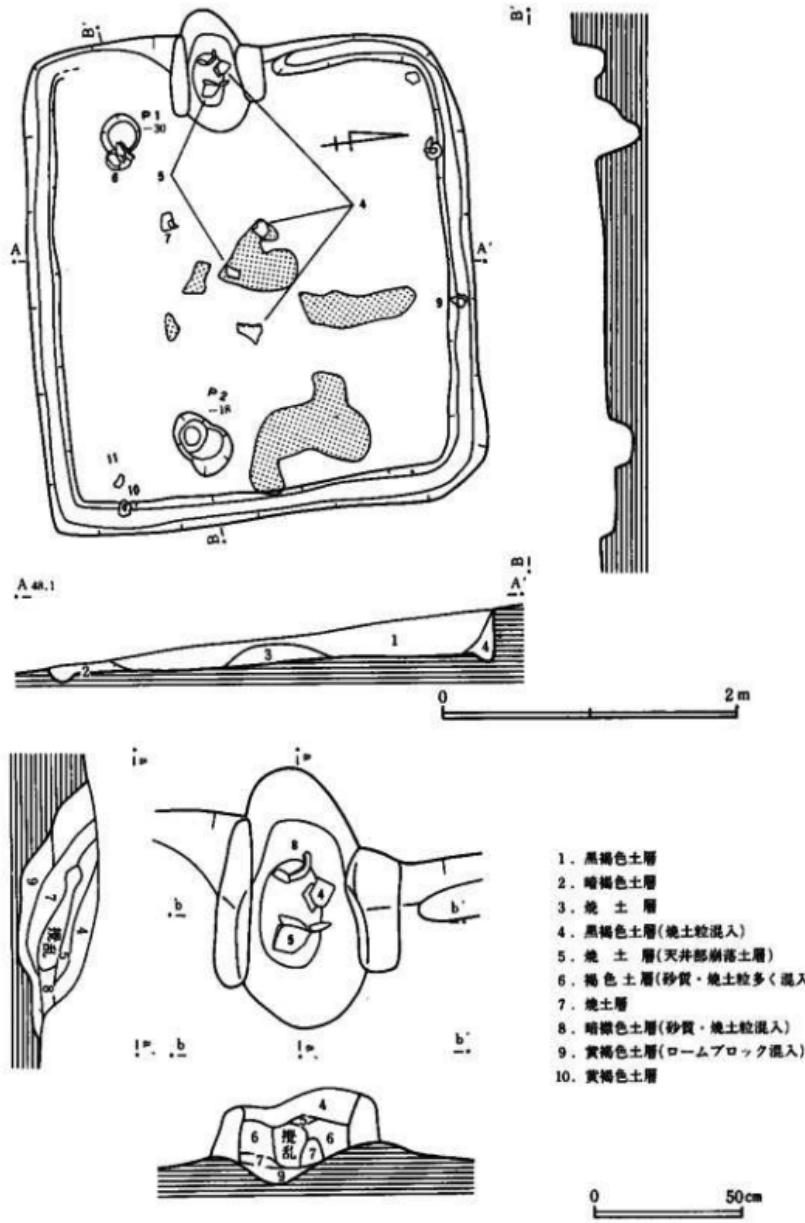
## 2号住居跡（37・40図、図版10・31）

1号住居跡の南西3mに位置している。平面プランはほぼ正方形で、その規模は一辺3.0mとあまり大きくなない。カマドを通る主軸方向はN-90°-Wと西を向き、1号住居跡と近い方向を指す。確認面からの深さは南へ下がる緩斜面に位置するため、北壁と南壁では30cm近い差がある。遺存の良い北壁で30cm、南壁は壁溝の存在でプランが確定できる程度であった。しかし、北壁の構築はしっかりとおり、垂直に近い角度で立ち上がっている。覆土は全体に焼土粒を多く含み、3層に分層した。また床面には部分的に焼土が堆積していたが、炭化材は殆ど見られなかった。床面はほぼ平坦であるが、カマドを付設する壁際が最も低く、カマドに対する壁際とは5cmのレベル差がある。また、斜面下位にあたる南側は若干床面が削平されている可能性があり、北壁より10cm低い。床面の構築状況は良好であり、多くの部分は堅緻である。壁溝はカマドが設けられている西壁を除いて巡っている。柱穴は南東コーナー、南西コーナーの2か所に検出された。ともに斜面下位にあたり、柱穴と考えてもよさそうである。P1は直径30cm、深さは18cm、P2は2つのピットが重複しており、北側の深いピットの底面レベルがP1と一致する。深い部分はさらに10cm深く、床面からは38cmを測る。

カマドは西壁のやや南寄りに設けられている。遺存は比較的良好で、袖も検出できた。袖は砂質粘土を用いて構築されており、天井部はすでに崩落していた。焚き口は床面よりわずかに低く、一段おいてカマド下掘り込みとなる。掘り込みは35cm×20cmの楕円形で床面から約10cm低く火床は掘り込み底面から7cm上位にある。壁外への張出しあは25cmで半円形となり、煙道部の立ち上がりはかなり緩かである。

遺物は床面、あるいは床面に近いレベルから出土している。器形としては甕、壺からなり、須恵器の瓶子の底部が1点含まれる。6はP1の縁に横倒しになっていたが、その破片は南東コーナーからも出土している。また、4・5もその大半はカマド内から出土したもの、住居跡中央から出土した破片が接合した。

遺物 4～6は甕形土器である。4は口縁部及び胴部上半が全周の約1/4遺存している。口縁部は外方へ開き、端部は内傾している。胴部にはヘラ削りが観察されず、まばらに横位のヘラナデが施されている。5は口縁部及び胴部上半が全周の約1/4遺存している。口縁部は短く開き、横ナデが施されている。端部は角を持ち、内傾している。胴部は縱位のヘラ削りが施され、内面は横位のナデであるがやや剥落している。胎土には砂粒を多く含むが焼成はさほど悪くなく、色調は赤褐色ないし黒褐色を呈している。6はほぼ完形に復原できた。口径15.1cm、底径6.7cm、器高14.0cmを計る。全体にやや歪みがある。口縁部はほぼ水平に短く開き、横ナデで整える。胴部は丸味を有し、最大径は口径と一致する。胴部の調整は縱位のヘラ削りで、下半に至って横位のヘラ削りを加える。内面は横位ないし斜位にナデしており平滑である。胎土には砂粒を多く含むが焼成は比較的良好、色調は赤褐色ないし黒褐色を呈している。7・8は壺形土



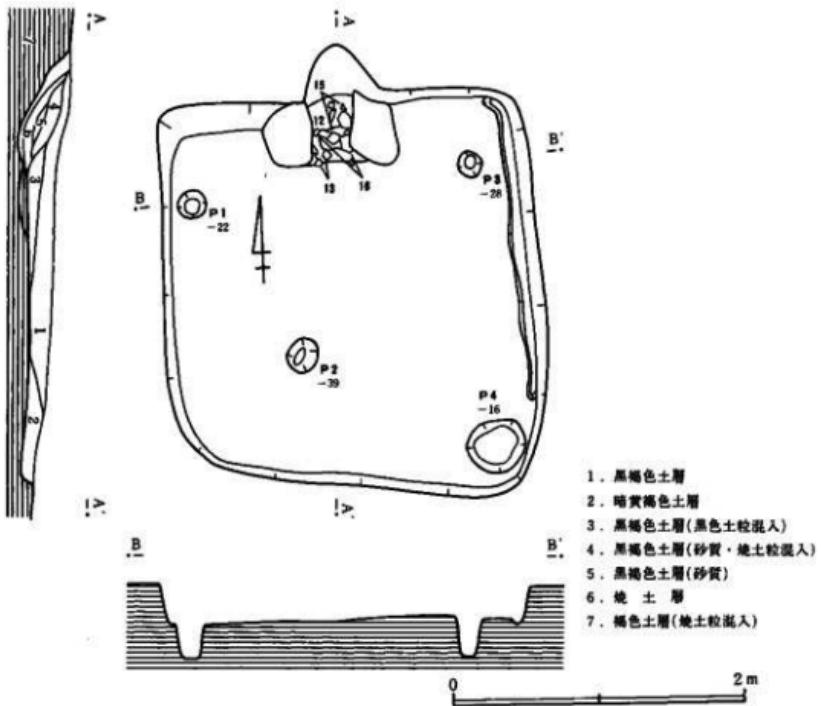
第37図 2号住居跡実測図

器である。7は住居跡中央の床面直上から出土したもので、全周の約 $\frac{1}{2}$ を欠損している。口径12.6cm、底径6.0cm、器高4.2cmを計り、底径が口径の約 $\frac{1}{2}$ となる。体部はやや内窓気味に立ち上がり、ロクロ調整である。なお、体部下端にヘラ削りは施されていない。切り離しは回転糸切りで、ロクロ回転方向は右である。胎土には砂粒を含み、色調は褐色を呈している。8はカマドから出土したもので、底部及び全周の約 $\frac{1}{2}$ を欠損している。体部はロクロ調整で、内窓気味に立ち上がっている。体部下端は7同様ヘラ削りは施されておらず、破損部を観察すると高台が付されていたようである。内面は横位に磨かれて、内黒となる。胎土には砂粒を多く含み焼成はやや不良である。9~11は底部の破片で、9は环、10は甌、11は須恵器の瓶子であろうか。9は北壁の壁溝上面から出土した。底径は6.0cmで、体部はロクロ調整である。体部下端は横位ないし斜位のヘラ削りを施す。また、底面は一定方向のヘラ削りである。ロクロ回転方向は右である。10は北壁壁溝上面から出土した。胴部下半は横位のヘラ削り、底面は不定方向のヘラ削りを施す。胎土にはやや砂粒を含むが、焼成は良好である。11は瓶子の底部と考えられ、南東コーナー近くの覆土上層から出土した。ロクロ調整で、高さ1.0cmの高台が貼り付けられている。胎土には砂粒を含むが焼成は良好で、色調は灰白色を呈している。ロクロ回転方向は左である。

#### 4号住居跡（第38・40図、図版11）

1号住居跡の北に隣接し、2号墳周溝内に構築されている。平面プランは台形に近く、東壁が2.7mを測るのに対し、西壁は2.3mと短い。南北長は2.6mである。カマドを通る主軸方向はN-5°-Wとほとんど北を指す。確認面からの深さは、南へ下がる緩斜面に構築されているため、北壁と南壁では壁高に20cmの差がある。壁高は遺存の良い北壁で25~30cmで、垂直に近い角度で立ち上がっている。覆土は黒褐色土層が主体である。床面はほぼ平坦であるが、西壁に近い部分がやや低位となる。また中央より北側の2号墳周溝と重複する部分は貼り床でかなり堅緻である。壁溝は東壁にだけ設けられている。ピットは4か所に検出されたが、特に規則正しい配置はとっておらず、P1・P3が北側の両コーナーに設けられる。P2はかなりずれて位置しており、さらにP4は南東コーナーに設けられ、直径35cmと他のピットより大きく、また深さも床面から16cmと浅い。おそらく貯蔵穴としての機能を有していたものと考えられる。P1~P3はいずれも直徑20cm前後で、P2がやや深いが、P1・P3の底面レベルは一致し、床面から20~30cmの深さを測る。

カマドは北壁中央に設けられており、遺存状態は比較的良い。袖部はロームを基礎として砂質粘土で構築されており、天井部も僅かに残存している。カマド下掘り込みは60cm×45cmの横円形で、床面から約8cm掘り込まれている。火床は掘り込みの上面にあり、レベルは床面とは同一である。壁外への張り出しは約30cmで三角形を呈している。煙道部の立ち上がりは緩かで、掘り込みの底面から直線的に立ち上がっている。カマド内の土層は約10cmの焼土層の上に、黒



第38図 4号住居跡実測図

褐色土層が堆積しており、いずれも焼土粒を多く含み、若干砂質である。

遺物は床面からの出土ではなく、また覆土中にもあまり多くの土器片は含まれていなかった。図示した壺、壺はいずれもカマドから出土したものであるが、カマド内に残された遺物という状況ではなく、すべて破片であった。

遺物 図示した遺物は12~15で、全て瓈形土器である。12は口縁部及び胴部上半が全周の約 $\frac{1}{2}$ 遺存している。口縁部は大きく外傾し、横ナデで整えられる。現存する胴部は直線的で、それほど影がないようである。外面は縱位のヘラ削り、内面は横位の丁寧なナデが施されるが、内面に僅かに粘土接合痕が残される。胎土には若干砂粒が含まれるが焼成は比較的良好、色調は暗褐色を呈している。13は口縁部及び胴部上半が全周の約 $\frac{1}{2}$ 遺存している。口縁部は短く外傾し、横ナデで整えられた端部は内傾している。胴部は12に比べて丸味を有し、外面は縱位のヘラ削り、内面は横位のヘラナデが施されている。胎土には砂粒を多く含み焼成はあまり良くない。色調は暗褐色を呈している。14は底部及び胴部下半が遺存しており、底径は7.0cmを計る。外面は縱位のヘラ削りが施され、下端には横位のヘラ削りを加えている。胎土には砂粒を多く

含み焼成はやや不良である。色調は暗褐色を呈している。15は全周の約5分が遺存している。胴部は14が丸味を有するのに対して直線的である。現存部分では主に縦のヘラ削りが観察できるが、部分的にタキ目が残され、さらに下端に横位のヘラ削りを加える。内面は横位のナデ調整であるが、僅かに粘土紐接合痕が残されている。胎土には若干の砂粒を含むが焼成は比較的良好で、色調は赤褐色を呈している。

#### 5号住居跡（第23・29・39・40・44図、図版11・12・27・31図）

1次調査区の北端、1号墳周溝北辺の北3mに位置している。A・B2軒の住居跡が重複しておりB→Aの先後関係が明白である。Bについては南側が僅かに残るにすぎず、Aを中心に記述をする。

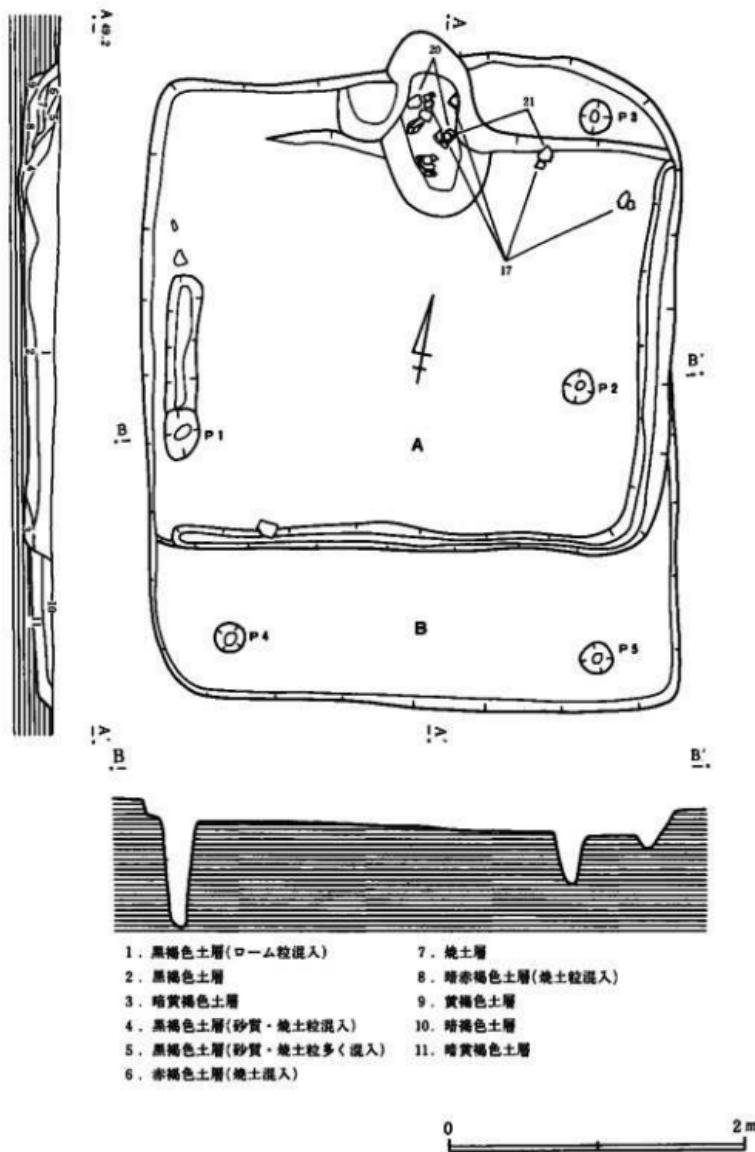
Aの平面プランは主軸方向が短い長方形を呈し、規模は3.5m×2.8mを測る。主軸方向はN-10°-Wを指す。確認面からの深さは約15cmと浅いが、壁は明瞭に検出できた。覆土は上層のほとんどが擾乱されているが、下層にローム粒、炭化粒を含む黒褐色土層が堆積している。床面も部分的に擾乱されているが、本来は堅緻な床面が構築されていたようである。床面のレベルは中央から東壁にかけて約5cm低いほかは、ほぼ同一レベルである。壁溝は周全しておらず、北東コーナーから南西コーナーまで、そして、西壁の中央に設けられている。ピットはP1・P2がAに伴う可能性があり、P1は壁溝と繋っている。ともに直径は20cm前後で、深さはP1が70cm、P2が30cmである。

カマドは北壁中央に設けられているが、遺存状態はかなり悪い。袖部は左右ともすでに失われており、覆土が若干砂質であった。カマド下掘り込みは床面より僅かに低くなる程度であり、掘り込み底面の約10cm上に火床が認められる。壁外への張り出しあは60cmを測り、三角形を呈する。また煙道部の立ち上がりは比較的急角度である。

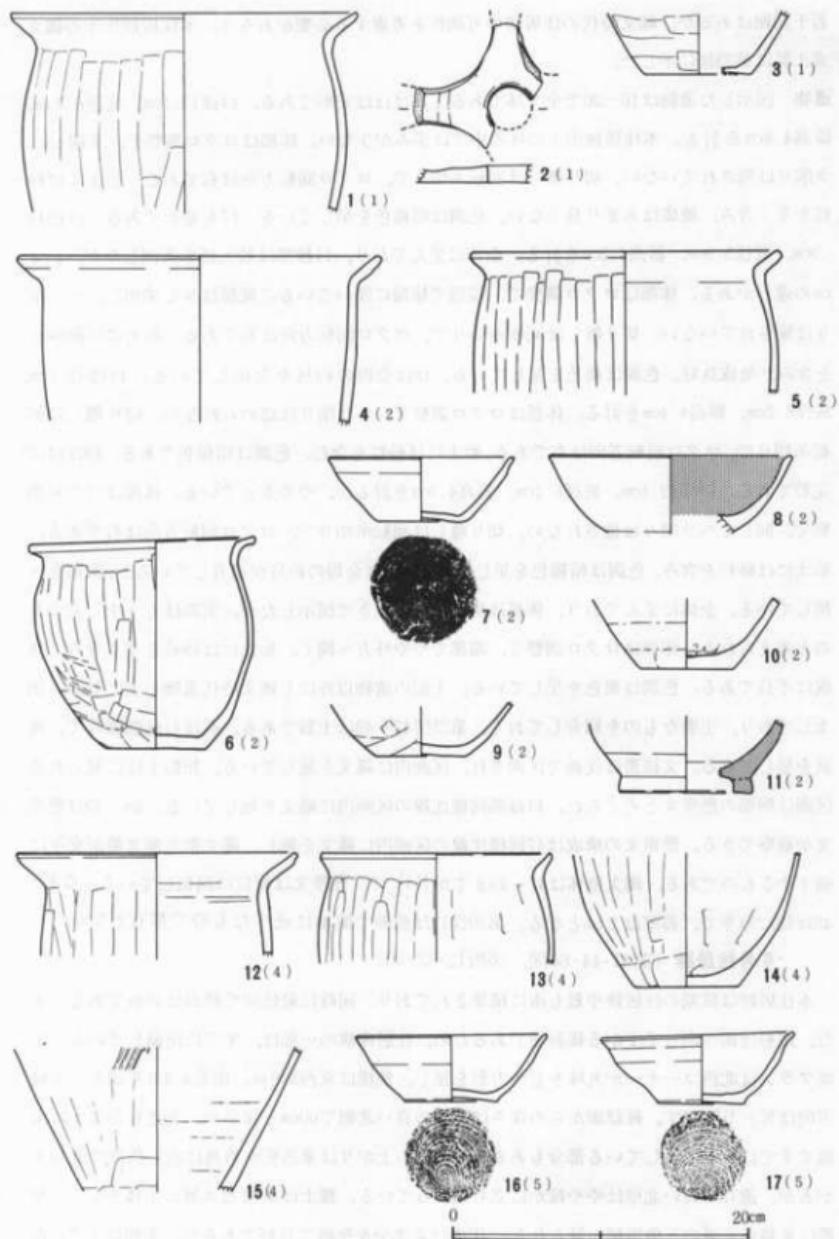
遺物はカマド、北東コーナーからやや多く出土している。西壁、南壁それぞれの床面直上からも土器片が出土したが、図示するには至らなかった。図示した部分はほとんどがカマド内から出土したものであるが16・20は北東コーナー付近から出土した土器片が接合した。

BはAの南側に1mほど残されており、またA北壁の外側に検出した床面もあるいはBに属するかもしれない。平面プランは南側に2か所のコーナーが検出されており、方形が想定される。規模は南北長が確定できないが、東西長はAとはほぼ同じく3.6mを測る。確認面からの深さはAよりやや浅く10~15cmで、床面レベルも僅かに高い。覆土は暗褐色土層、黄褐色土の2層に分層でき、堆積がやや密である。床面はごく一部しか観察できないが、残存部分は西から東へ向って徐々に低くなってしまい、10cmの比高がある。壁溝は認められず、ピットがコーナーに1か所ずつ検出された。P3・P4とも直径20cmで、底面レベルもほぼ一致する。床面からの深さはP3が40cm、P4が30cmを測る。なお、P5も直径、深さともほぼ同じ数値である。

カマドは残存していない。また、覆土からは縄文式土器が多く出土しており、平面プランに



第39図 5号住居跡実測図



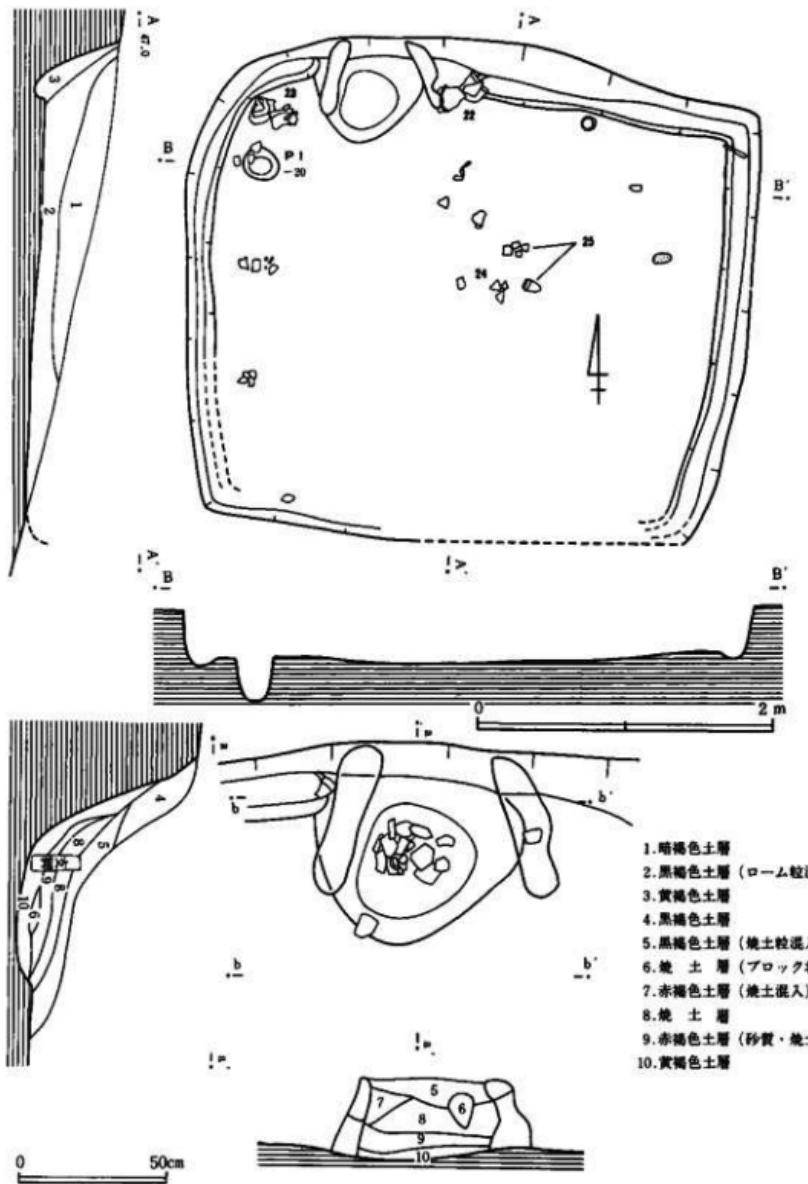
第40図 住居跡出土土器実測図 (1)

若干問題はあるが、縄文時代の住居跡の可能性を考慮する必要があろう。本住居跡出土の縄文式土器は第23図に示した。

遺物 図示した遺物は16~20で全て壺である。16はほぼ完形である。口径13.1cm、底径6.3cm、器高4.4cmを計る。本住居跡出土の壺の中では歪みが少ない。体部はロクロ調整で、下端にヘラ削りは施されていない。切り離しは回転糸切りで、ロクロ回転方向は右である。胎土には砂粒が多く含み、焼成はあまり良くない。色調は暗褐色を呈している。17も完形である。口径13.0cm、底径5.9cm、器高4.2cmを計る。全体に歪んでおり、口縁部は最大径を実測したが、約1cmの違いがある。体部はロクロ調整で、端部で極端に開いている。底部は少し突出し、ヘラ削りは施されていない。切り離しは回転糸切りで、ロクロ回転方向は右である。胎土には細砂粒を含み、焼成良好。色調は褐色を呈している。18は全周の約 $\frac{1}{2}$ を欠損している。口径12.8cm、底径6.2cm、器高4.4cmを計る。体部はロクロ調整で、ヘラ削りは認められない。切り離しは回転糸切りで、ロクロ回転方向は右である。胎土には砂粒を含む。色調は暗褐色である。19はほぼ完形である。口径12.4cm、底径6.1cm、器高4.3cmを計るが、やや歪んでいる。体部はロクロ調整で、同じくヘラ削りは施されない。切り離しは回転糸切りで、ロクロ回転方向は右である。胎土には砂粒を含み、色調は暗褐色を呈している。20は全周の約 $\frac{1}{3}$ を欠損している。全体に歪んでおり、体部は現存部分の傾きで図示したが、実際はもう少し立つものと考えられる。体部はロクロ調整で、端部でやや外方へ開く。胎土には砂粒を多く含み、焼成は不良である。色調は褐色を呈している。上記の遺物以外にも縄文時代遺物が主にBから出土しており、主要なものを紹介しておく。第23図47~49は土器である。47は口縁部破片で、波状を呈している。文様帶は沈線で区画され、区画内に縄文を施している。拓影下位に見られる区画は脇部の懸垂文と考えられ、口縁部同様沈線の区画内に縄文を施している。48・49は懸垂文が観察できる。懸垂文の構成は47同様沈線の区画内に縄文を施し、縄文帯と無文帯が交互に垂下するものである。縄文原体は47~49までがR $\perp$ Lで、懸垂文は縦位に回転している。なお、48は特に厚手で、器厚は2cmとなる。第29図13は前節で簡単に述べたもので敲石となる。

#### 6号住居跡（第41・44・68図、図版12・32・36）

本住居跡は該期の住居跡中最も南に構築されており、同時に最低位で標高は46mである。また、地形は南へ向って下がる緩斜面であるため、住居南側の一部は、すでに消滅している。平面プランは北西コーナーが丸味をもつ方形を呈し、規模は東西3.9m、南北3.4mを測る。主軸方向はN-0を指す。確認面からの深さは遺存の良い北側で60cmと深いが、先述したように南側ですでに壁が消失している部分もある。壁の立ち上がりは東西壁が直角に近い角度で立ち上がるが、遺存の良い北壁はやや緩かに立ち上がっている。覆土は黒褐色土層が主体をなし、隣接に黄褐色土層の三角堆積が見られる。床面は北半分が堅緻で良好であるが、南側はすでに削平されてしまったと考えられ、床面レベルも徐々に下がり、南壁部分で10cm下がっている。壁



第41図 6号住居跡実測図

溝は壁同様南壁で消失しているが、本来はカマドを除いて造っていたと考えられる。ピットは北西コーナーに1か所検出された。直径は25cmで、床面からの深さは27cmである。

カマドは北壁の北西コーナーにかなり寄った位置に設けられているが、隅カマドではない。遺存状態は良く、天井部は残存していないが、袖部は左右とも検出された。袖は砂質粘土で構築されており、上半はかなり火熱を受け硬化している。カマド下掘り込みは70cm×55cmの三角形を呈し、床面から約8cm低くなっている。火床は床面レベルとほぼ同じ高さに認められ、支脚が立ったまま残されている。壁外への張り出しはほとんど認められず、煙道部は急角度で立ち上がりっている。

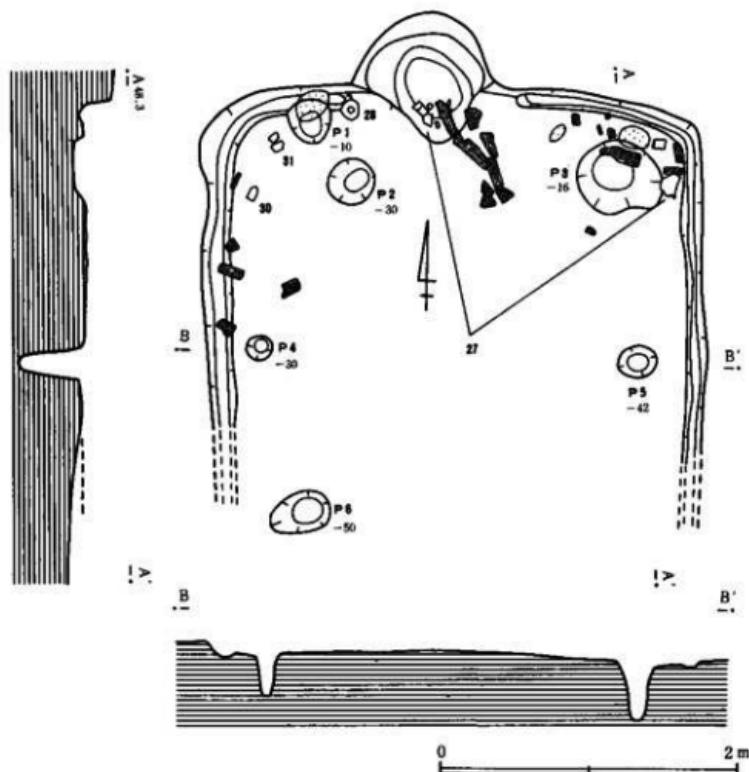
遺物はかなり豊富に残されている。カマドの両脇に甕が1個体ずつ、住居跡中央から壺が、北東コーナーから甕が出土している。他にも図示には至らなかったが、東壁付近、北壁付近、カマド内から甕の破片が出土した。

遺物 21・22は甕である。21はカマド東側から出土したもので、全周の約1/3を欠損している。口径20.3cm、底径8.0cm、器高22.2cmを計る。口縁部は“く”字状に屈折して外反し、端部は内傾し、横ナデで整えられる。胴部はあまり膨みを持たず、最大径を上位に有している。調整は内外面とも縱位しない横位のナデで、下端に横位のヘラ削りを施している。底面にはヘラナデで「十」と描かれており、かなり乾燥した段階で描かれたようである。胎土には砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。色調は褐色を呈している。22は住居跡北西コーナー床面から出土した。口径18.7cm、現存高17.9cmを計り、胴部下半欠損している。口縁部は外傾し、横ナデで端部は直立している。胴部はあまり膨まず、最大径は口径と一致する。器面は縱位のヘラ削りが施され、内面は横位にナデしている。胎土には細砂粒を含み、焼成は比較的良好。色調は黄褐色を呈している。23・24は壺とともに住居跡中央の床面から出土した。23は口径13.8cm、底径5.8cm、器高4.6cm。24は口径12.8cm、底径5.8cm、器高4.1cmを計る。いずれも体部はロクロ調整でヘラ削りは施されていない。切り離しは回転糸切りで、ロクロ回転方向は右である。胎土には砂粒を多く含むが、焼成は比較的良好である。色調は23が黒褐色、24が明褐色を呈している。25は支脚でカマドから出土した。ほぼ完形で、断面は梢円形を呈している。

第68図1は甕である。全長17.0cmを計る。刃部は鋸化による損傷が著しく、形態は不明で、縦断面も図化できなかった。握りの部分は良く木質が残り、木質の径は1.9cmを計る。

#### 7号住居跡（第42・44図、図版13-32）

8号住居跡の西4m、1号墳の南10mに位置している。平面プランは方形を呈していたと考えられるが、南へ向って下がる緩斜面に構築されているため、南側の壁は全く遺存していない。従って規模も南北長は不明であり、P6の位置をコーナーに近いと考えるならば、3.0~3.5mとなる。東西長は3.4mである。カマドを通る主軸はN-0を指し、6号住居跡と一致する。確認面からの深さは、遺存の良い北側でも約20cmで、あまり深くないが、壁は垂直に近い角度



第42図 7号住居跡実測図

で立ち上がっている。床面は北側半分に堅緻で良好な床面が検出され、ほとんど平坦であるが、P4とP5を結ぶ付近から南はすでに削平されてしまっている。壁溝についても南側に巡っていた可能性が強いが現状では判断しかねる。但し、カマドの部分については設けられていない。ピットは6か所で検出され、P2・P4～P6が柱穴と考えられる。配置を考えるとP3も柱穴であった可能性があるが、直径が60cmと大きく、また床面からの深さも16cmで、断面が皿状を呈するなど、形態からは貯蔵穴として捉えた方が妥当となる。またP1も10cmとかなり浅い。直径はP4・P5が15～20cm、P2・P6が30cmを測り、床面からの深さはP2・P4が30cm、P5が42cm、P6は床面が遺存していないので直接対比できないが、底面のレベルはP5より10cm低い。

カマドは北壁に設けられ、僅かに北西コーナーに寄っている。遺存は悪く、すでに抽は残さ

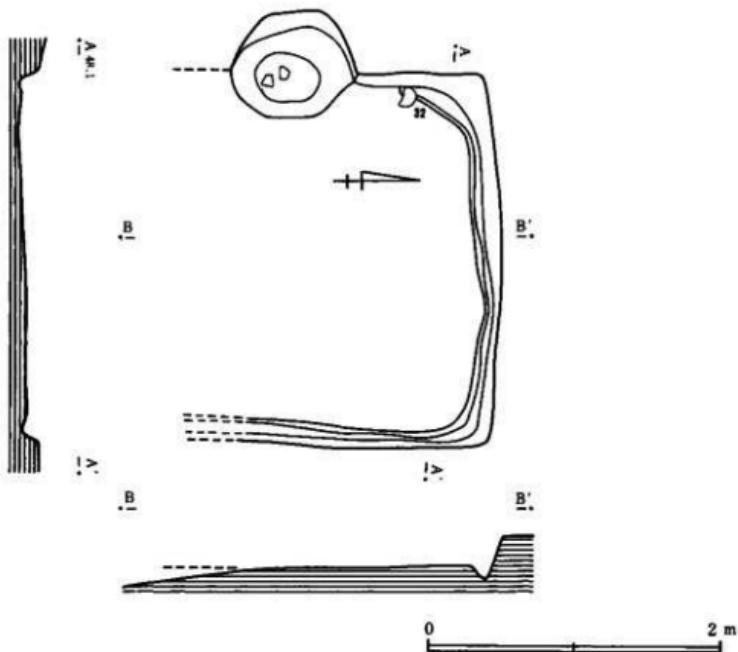
れていない。カマド下掘り込みも顕著ではなく、壁外への張り出しあは25cmで半円形を呈する。煙道部の立ち上がりは、底面から緩く立ち上がり、徐々に角度を増して急角度となる。

床面には炭化材が散乱しており、また北壁にそって部分的に焼土が堆積し、火災に遭った可能性が強い。遺物はカマド左脇から北西コーナーにかけての床面から壺が4個体出土し、カマド内の甕の破片と北東コーナーの破片が接合した。

遺物 26は甕である。胴部下半を欠損し、また、残存部も全周の約程度の遺存である。口縁部は外傾し、横ナデで整えるが、端部は若干肥厚し内傾している。胴部はあまり膨らまず、縦位のヘラ削りが施され、下半で横位のヘラ削りを加える。内面は横位のナデを施すが、粘土紐接合痕をかなり明瞭に残している。胎土には砂粒を含み、色調は褐色を呈している。27~29は壺である。27はカマド西側から出土したもので完形である。法量は口径12.9cm、底径5.0cm、器高4.3cmを計る。体部はロクロ調整で、口唇部が僅かに肥厚する。体部下端にヘラ削りは施されず、底部はやや突出する。切り離しは回転糸切りで、ロクロ回転方向は右である。胎土には若干砂粒を含むが、焼成は良好である。色調は暗赤褐色を呈している。28は西壁際から出土したもので、約1/2を欠損している。法量は口径13.3cm、底径6.7cm、器高3.9cmを計る。体部はロクロ調整で、下端に手持ちでヘラ削りを施す。また底部も一定方向のヘラ削りを施している。胎土には砂粒を多く含むが、焼成は比較的良好、色調は暗赤色を呈している。29は北西コーナー近くの床面から出土したもので、全周の約1/2が遺存している。推定口径16cmの大振りで、体部はロクロ調整である。体部下端には棱を有するが、現存部分にヘラ削りは認められない。胎土には僅かに砂粒を含み、焼成は良好で、色調は黒色を呈している。内面は内黒となる。30は皿となるもので、北西コーナー近くの床面から約7cm上位で出土した。全周の約1/2が遺存しているだけである。体部はロクロ調整で、下端に手持ちでヘラ削りを施している。また底部は一定方向にヘラ削りを施す。胎土には砂粒を多く含み、色調は明褐色を呈している。

#### 8号住居跡（第43-44図、図版13-32）

7号住居跡の東約4mに位置している。平面プランは方形を呈していたと考えられるが、南へ向って下がる緩斜面に構築されているため、南側半分はすでに消失している。縱って南北長は不明であるが、カマドが西壁中央に設けられていたと仮定した場合2.6m前後と推定される。東西長は2.5mである。カマドを通る主軸はN-90°-Wを指し、2号住居跡と一致する。確認面からの深さは遺存の良い北側で20cmで、壁はあまり急な立ち上がりをもたない。なお、西壁はカマドまで、東壁も北東コーナーから1.6mまでしか遺存していない。覆土の観察は充分に行うことができなかったが、黒褐色土層が主体となっていた。床面は本来堅緻で良好な床が構築されていたようで、部分的に堅緻な箇所が認められたが、掘り込みが浅く、また南側はすでに削平されており、現況は決して良いものではなかった。壁溝はカマド部分が掘り込まれていないが、他の壁には巡っていた可能性が高い。なお、ピットは検出されなかった。



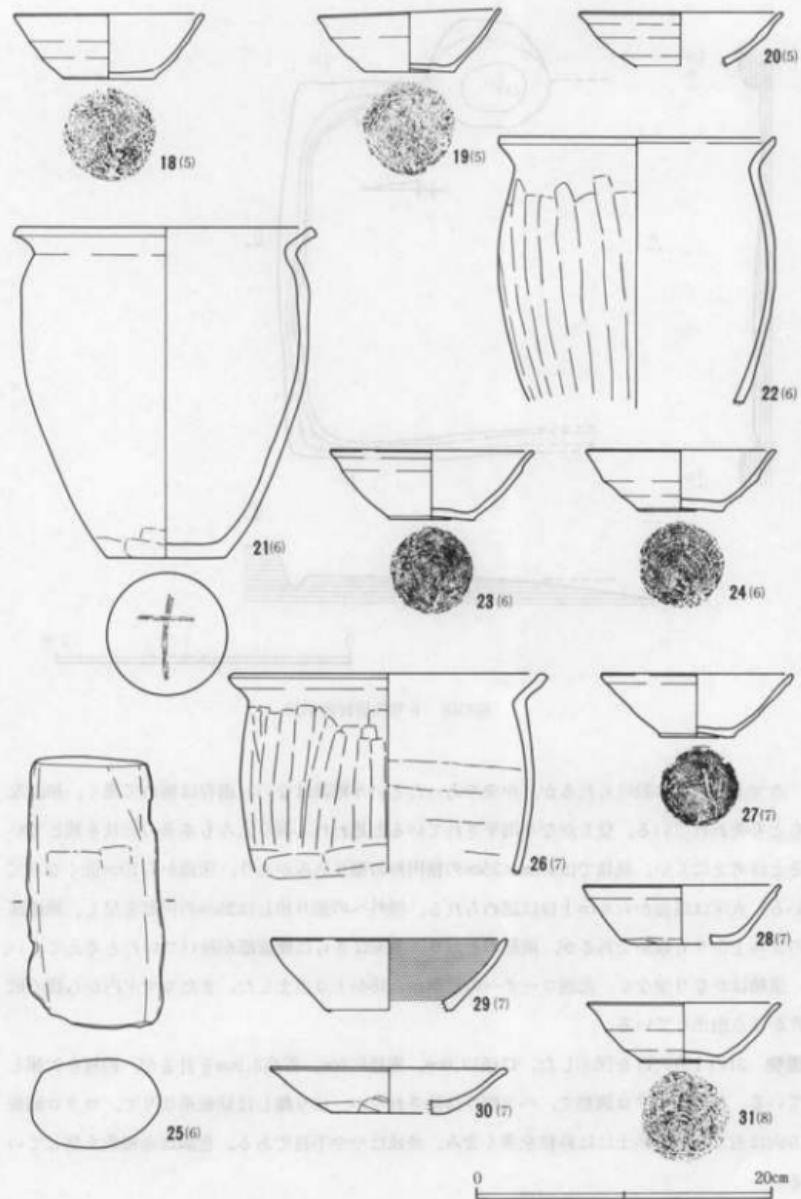
第43図 8号住居跡実測図

カマドは西壁に設けられるが、中央であったという確証はない。遺存は極めて悪く、袖は左右とも失われている。壁もかなり削平されていると思われ、掘り込みも本来の形状を残しているとは考えにくい。現状では40cm×35cmの楕円形の掘り込みがあり、床面から10cm低くなっている。火床は底面から6cm上位に認められる。壁外への張り出しが25cmの円形を呈し、煙道部の立ち上がりも緩かであるが、前記のとおり、本来はさらに煙道部が続いていたと考えてよい。遺物はかなり少なく、北西コーナーの壁溝から壺が1点出土した。またカマド内から甕の破片が2点出土している。

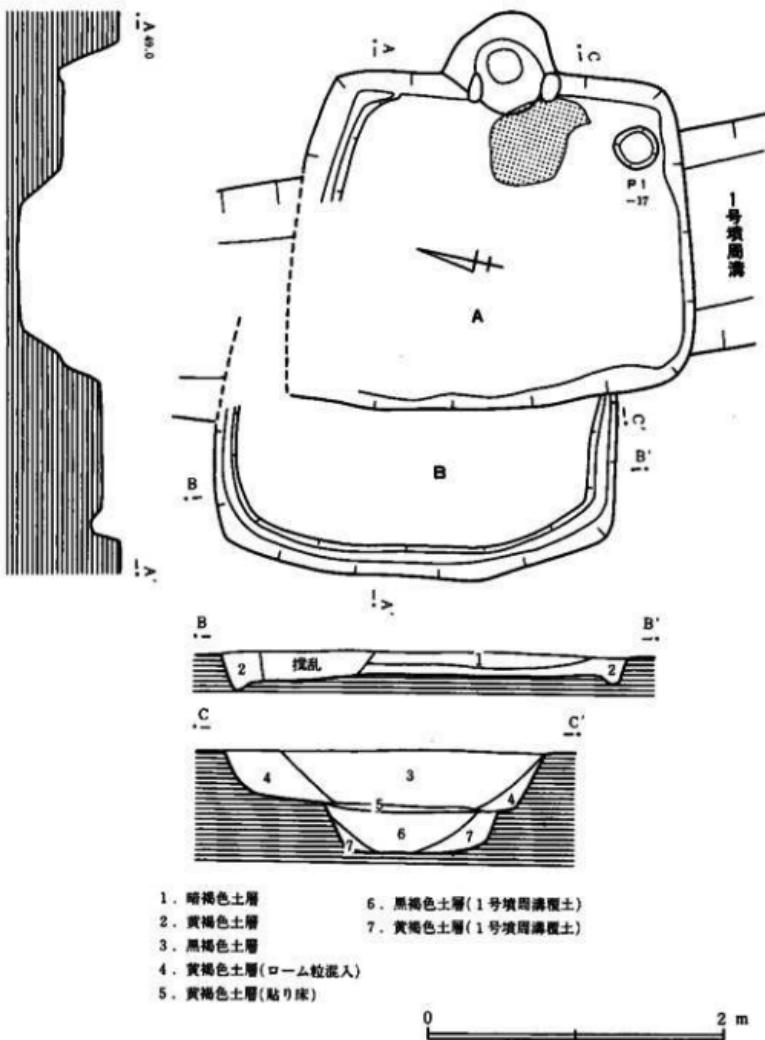
遺物 31の1点だけを示した。口径13.0cm、底径5.7cm、器高3.9cmを計るが、約1/3を欠損している。体部はロクロ調整で、ヘラ削りは施されない。切り離しは回転糸切りで、ロクロ回転方向は右である。胎土には砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。色調は赤褐色を呈している。

#### 9-A号住居跡（第45図、図版14）

1号墳周溝と重複し、5号住居跡の南約8mに位置している。また、A-B軒の住居跡が



第44図 住居跡出土土器実測図 (2)



第45図 9号住居跡実測図

重複しており、構築状況から先後関係はB→Aとして良いであろう。平面プランはやや不整な方形で、規模は東西2.7m、南北2.2mを測る。なお、1号墳周溝内に構築されているため、西壁の一部は検出できなかった。カマドを通る主軸方向はN-70°-Eを指す。確認面からの深さは約30cmを測り、壁の状態も良い。覆土は黒褐色土層が主体をなし、壁際に黄褐色土層の三角堆積が見られる。床面は平坦で堅緻に構築され、1号墳周溝と重複する部分では黒褐色土を使用した貼り床が検出され、5cmの厚さを有する。壁溝は北東コーナーから北壁に設けられている。また、その他の壁には認められず、北壁だけに設けられていたようである。ピットは南東コーナーに1か所検出された。直径は30cmで、床面から17cm掘られている。

カマドは東壁のはば中央に設けられている。カマド下掘り込みはあまり床面側に張り出さず、本体のはほとんどは壁外への張り出し部に納まっている。袖は左右とも壁に接して小さく残っており、構築材は砂質粘土である。火床は底面から12cm上位に認められ、約7cmの焼土が堆積している。壁外への張り出しが40cmで台形を呈し、煙道部は若干擾乱されるが、約45°の角度で立ち上がっている。なお、カマド前面の床面に薄く焼土が堆積していた。

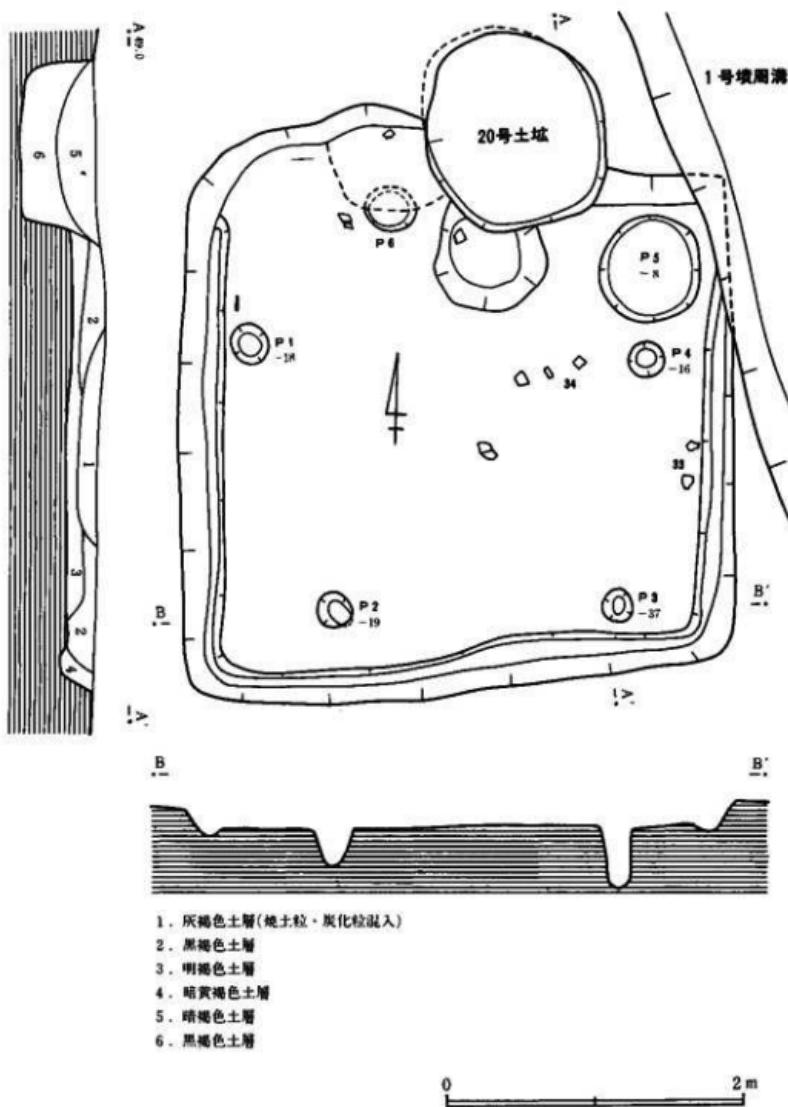
遺物は少なく、床面から5点、カマド内から12点の土器片が出土した。カマド内から出土した土器片は礫であるが接合せず、図示はできなかった。

#### 9-B号住居跡（第45図、図版14）

A号跡の西側に構築されているが半分近くをA号跡で破壊されている。平面プランは方形を呈するようで、南北長は2.7mを測る。主軸方向はカマドが設けられた位置が確定できないが、Aと同じと考えればN-70°-E、北壁であったならばN-20°-Wとなる。確認面からの深さは13~15cmで、床面レベルはAより15~20cm高位となる。覆土は暗褐色土層、黄褐色土層の2層で、一部擾乱されている。床面はAほど良好なものではなく、やや軟弱で、北壁際がやや低い。壁溝は現存する部分から想定すると全周していた可能性が高い。また、ピットは検出されなかった。カマドは破壊されて残っておらず、Aとの関係を考慮すれば、東壁に設けられていたのかもしれない。出土遺物はない。

#### 11号住居跡（第46・51・68図、図版14・32・36）

9号住居跡の南4mに位置し、北東コーナーが1号墳周溝と重複している。また、北壁中央に20号土括が構築され、カマドが一部破壊されている。平面プランは方形を呈し、規模は南北3.9m、東西3.8mを測る。主軸方向はN-0を指し、7・8号住居跡と一致する。確認面からの深さは各壁とも20cm前後で、壁の立ち上がりはやや開いている。覆土は4層に分層したが、全体に焼土粒、炭化粒を多く含んでいる。床面はほとんど平坦であるが、レベルとしてはカマド前面がわずかに低い。構築は良好でかなり堅緻であり、覆土と同様に焼土粒、炭化粒が付着している。また、カマド及びカマド痕跡の位置関係を検討すると、床面は本来の床面から拡張されて現状の規模に至っていると考えられる。壁溝は北壁にだけ設けられておらず、東・南・



第46図 11号住居跡実測図

西の各壁に巡っている。ピットは6か所に検出され、P1-P4は柱穴と考えて良い。直径は20~25cmで、床面からの深さはP3が40cmと深いが、P1・P2・P4は20~25cmであり深くない。P5は北東コーナーに設けられ、直径は65cmとやや大きい。床面からの深さは5~10cmで底面は皿状を呈し、貯蔵穴としての機能が考えられる。P6は上面にカマドが設けられ、覆土にも多量の焼土粒を含んでいた。

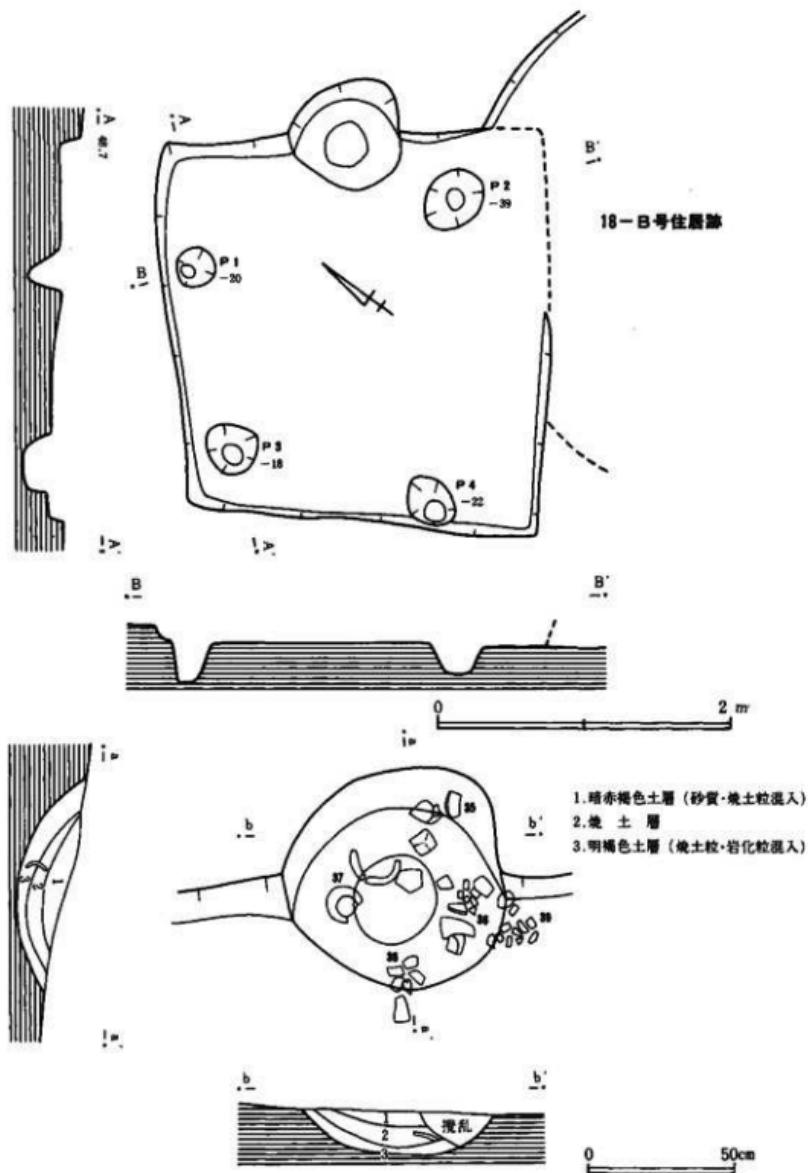
カマドは北壁に設けられているが、隣接して旧カマドの痕跡が検出された。前述したように、カマド痕跡が現状の壁からやや隔っており、住居拡張に伴ってカマドを作り変えたようである。カマドは20号土塙に破壊され、遺存状態も良くなかったため、土層断面の観察を行つただけである。袖部の構築材は砂質粘土であったようで、土層断面でかろうじて認められた。さらに、火床は識別できず、覆土にも焼土の堆積はなかった。壁外への張り出しは20cm程度で、緩く丸みを帯びている。カマドの痕跡はカマド下掘り込みが残されているが、北側はやはり20号土塙に破壊されている。なお、火床はさらに上位に位置していたようである。

遺物は土器の他にも鉄鎌、銅塊の破片がある。土器は壺を2個体図示したが、全体で30点ほどの破片がある。32・33はP4西側、東壁の床面に近い位置から出土した。鉄鎌はP1の近くの床面から5cm程上位で、銅塊はP6の近くの床面から出土した。

遺物 32・33は壺である。口径11.7cm、底径6.2cm、器高4.1cmを計り、約1/6を欠損している。体部はロクロ調整で、ヘラ削りは施されていない。切り離しは回転糸切りで、ロクロ回転方向は右である。胎土には砂粒を多く含むが、焼成は比較的良好、色調は暗褐色を呈している。33は覆土上層からの出土で、全周の約1/6が遺存している。体部はロクロ調整で、ヘラ削りは施されない。底部は僅かに突出し、切り離しは回転糸切りである。ロクロ回転方向は右である。胎土には砂粒を多く含み、焼成不良、色調は赤褐色を呈している。2は鉄鎌の破片であろうか。現存長6.9cmを計り、両端は欠損している。中央部分に開があり、両開となる。断面は開を挟んで長方形、正方形と異なる。3は銅塊の破片と考えられるもので、他にも数片出土したが、接合しない。破損に起因するものかどうかは不明であるが、口縁は円形とならず、図に示したように歪んでいる。内面には口縁下5mmに明瞭な段を有している。器厚は1.2mmと薄く仕上がっている。なお、外面は赤色の顔料が塗布されているようで、僅かにその痕跡が観察できる。

#### 18-A号住居跡（第47-51図、図版32-33）

2号住居跡の北西約7mに位置し、2号墳周溝に接している。また、縄文時代の住居跡、18-B号住居跡を破壊している。平面プランはやや不整な方形を呈し、18-B号住居跡との重複のため、東コーナーは検出できなかった。規模は2.7m×2.5mを測り、主軸方向はN-45°Eを指す。確認面からの深さは10-15cmとかなり浅く、壁の状態は良くない。覆土は黒褐色土層の単一層で、僅かにローム粒を混入している。床面は軟弱で、北コーナーが最も高く、徐々に低くなり、南コーナーは北コーナーより13cm低くなっている。壁溝は設けられておらず、ビ



第47図 18-A号住居跡実測図

ットが4か所に検出された。配置はやや不規則である。直徑もまちまちで、P1が最小で25cm、P2が最大で35cmを測る。床面からの深さはP1・P3・P4が20cm前後で、P2だけが39cmとなる。しかし絶対高としてはP1・P3が同レベルであるだけで、P4はさらに10cm、P2はP1より20cm下位になる。

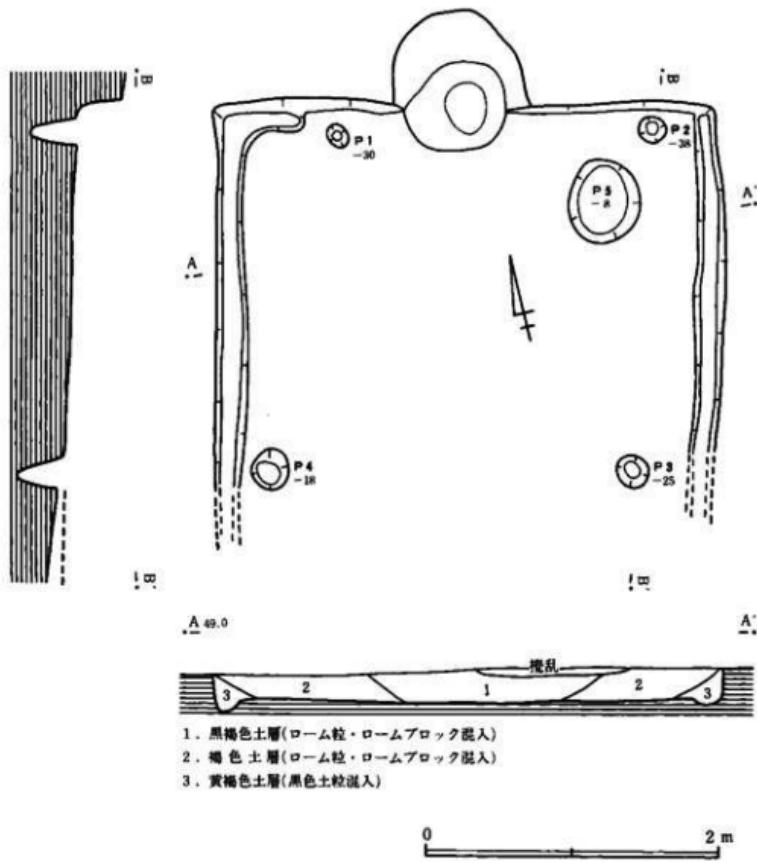
カマドは北東壁のほぼ中央に設けられているが、遺存状態は極めて悪い。袖は左右とも残されていない。カマド下掘り込みは燃焼部と区別なく、床面から8cm低くなっている。壁外への張り出しが40cmで、半円形を呈し、煙道部は約40°と緩く立ち上がっている。

遺物は少なく約20点の土器片が覆土から出土した。図示した遺物は全てカマドから出土したものである。

遺物 34・35は甕である。34は胴部下半を欠損し、また現存部分も全周の約3/4の遺存である。口縁部は短かいが大きく開き、横ナデで整える。胴部は若干丸味を有し、縦位にヘラ削りを施している。内面は平滑にナデているが、横方向の破損は粘土紐接合痕となる。胎土には砂粒を多く含み、焼成は比較的良好、色調は赤褐色ないし暗赤褐色を呈している。35は口縁部を約1/4欠損している。法量は口径13.1cm、底径5.9cm、器高12.8cmを計る。口縁部は短かく外傾し、横ナデで端部を丸く調整している。胴部は丸味を有し、縦位のヘラ削りが施され、下半には横位のヘラ削りが加えられる。底部は不定方向のヘラナデで、特に丁寧な調整とは言いかたい。内面は平滑にナデしているが、上半に粘土紐接合痕を1条残している。胎土には細砂粒を多く含み、焼成はやや良く、色調は赤褐色及び灰褐色を呈している。36~38は壺である。36は全体に歪みがあり、口縁部の約1/4を欠損している。法量は口径12.2cm、底径6.1cm、器高3.7~4.9cmを計る。体部はロクロ調整で、内窓気味に立ち上がる。下端にはヘラ削りはされない。切り離しは回転糸切りで、ロクロ回転方向は右である。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は赤褐色及び黒色を呈している。37は底部がほぼ完存するものの、体部は約1/6程度しか遺存していない。体部はロクロ調整で、やはりヘラ削りは施されない。切り離しは回転糸切りで、ロクロ回転方向は右である。胎土には砂粒を多く含み、焼成は不良である。色調は明褐色を呈している。38は体部上半のみが遺存している。体部はロクロ調整となる。

#### 19号住居跡（第48・51図、図版15）

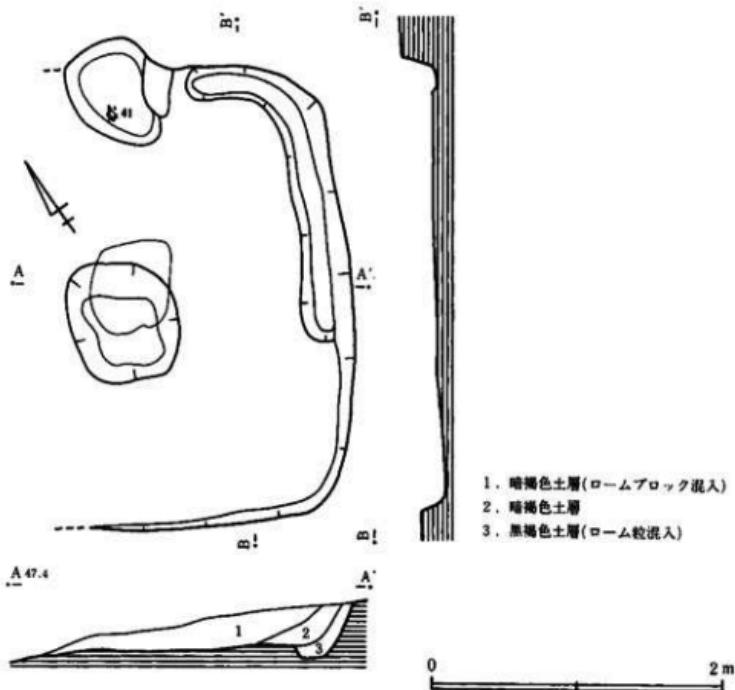
調査区の東端に位置し、縄文時代の24号住居跡と重複している。平面プランは南に向って下がる緩斜面に構築されているため、南壁はすでに消失しているが、かなり整然とした方形を呈していたようである。規模は東西3.4mを測り、南北辺は、P3・P4を考慮して3m前後と推定される。主軸方向はN-17°-Eを指す。確認面からの深さは遺存の良好な北側で30cmを測り、残存している壁はいずれも垂直に近い角度で立ち上がっている。覆土は3層に分層したが、ローム粒をやや多く含む黒褐色土層、褐色土層が主体を占める。また、壁際には黄褐色土層の三角堆積が見られる。床面は平坦で、堅緻な床面が構築されているが、南側に至ってはすでに



第48図 19号住居跡実測図

削平されてしまっている。壁溝は、北壁には設けられていないが、東西の両壁には設けられており、南壁にも巡っていたと考えられる。ピットは5か所に検出され、P1～P4は柱穴と考えられる。直径はP1が最も小さく15cm、P4が最も大きく25cmを測る。床面からの深さはP4が最浅18cm、P2が最深38cmであるが、絶対高としては10cmの開きはない。P5は貯蔵穴としての機能が考えられ、直径は50cmと大きく、床面からの深さも10cmである。覆土は暗褐色土層で、やや粘質で焼土粒を若干含んでいる。

カマドは北壁中央に設けられ、遺存状態はあまり良くない。袖は左右とも遺存し砂質粘土で構築されている。天井部は明確ではないが、あるいは2層が天井部の残骸であるかもしれない。



第49図 39号住居跡実測図

カマド下掘り込みは直径70cmほどで、床面から12cm低くなっている。火床は底面から8cm上位に認められ、4cmの焼土が堆積している。壁外への張り出しが60cmを測り、半円形を呈している。煙道部は二段に立ち上がり、1段目が30°、2段目が60°で立ち上がっている。

遺物はかなり少なく、覆土内から土器片が10点ほど出土したが、図示できるものはない。図示した甕はカマドから出土したものである。

遺物 39は甕の底部である。胴部下半は丸味を有し、器面は内外面ともヘラナテで、外面下端に横位のヘラ削りを加える。胎土には砂粒を多く含み、焼成は不良であるとともに、外面は造存状態が悪い。色調は外面赤褐色、内面黒褐色を呈している。

### 39(12)号住居跡 (第49-51図、図版15-33)

2次調査区の西端、40号住居跡の南6mに位置している。平面プランは方形を呈すると考えられるが、西へ向って下がる緩斜面に構築されているため、すでに西壁は残されていない。規模は主軸長3.1mを測り、東西辺はカマドが北壁の中央に設けられていたとして2.8mとなる。

主軸方向はN-32°Eを指す。確認面からの深さは遺存の良い東側で30cmを測り、壁はやや緩かに立ち上がっている。覆土はロームブロックを混入する暗褐色土層が主体をなし、壁際にローム粒を混入する黒褐色土層が堆積している。床面は東側半分に遺存しており、西側はすでに削平されてしまっている。残存している床面は平坦で、堅緻に構築されている。また、住居跡中央に、住居構築以前の根などの痕跡があり、その部分には砂質粘土を使用して貼り床が構築されていた。住居跡実測図には擾乱塗と貼り床の範囲を示したが、貼り床は若干ずれている。壁溝は北壁から東壁にかけて設けられるが、カマド手前、南東コーナー手前で終っている。ピットは検出されなかった。

カマドは北壁に設けられていたが、遺存状態はかなり悪い。袖は右側だけが僅かに遺存しているに過ぎず、構築材は砂質粘土である。カマド下掘り込みは床面から6cmくぼみ、火床は底面から5cm上位に認められる。壁外への張り出しは本来の姿を保っているとは考えられないが約20cmで、半円形を呈している。煙道部の立ち上がりは現状では45°である。

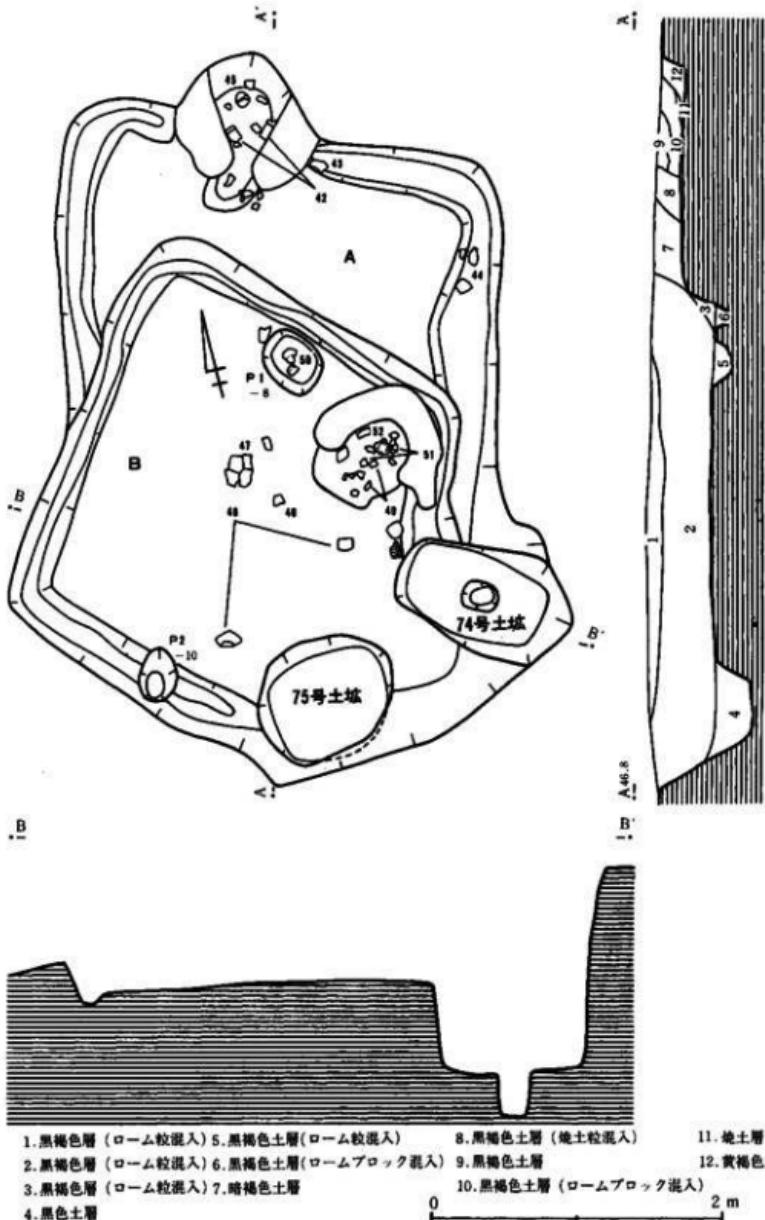
遺物は覆土内から約10点の土器片が出土したが、特に図示できるものはない。40はカマド内に逆位で入っていた。

遺物 40はほぼ完形に復原できた。法量は口径17.2cm、底径7.3cm、器高6.2cmを計り、大形である。体部はロクロ調整で、内窓気味に立ち上がり、口唇部内側が若干肥厚している。体部下端は手持ちヘラ削りを施す。底部は回転糸切りで切り離した後に一定方向のヘラ削りを行い、糸切り痕は殆ど観察できない。ロクロ回転方向は右である。胎土には砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。色調は赤褐色を呈する。

#### 40-A (13-A) 号住居跡 (第51図、図版16)

2次調査区の西端、39号住居跡の北8mに位置している。また、40-B号住居跡と重複しており、A→Bの先後関係が確認された。平面プランはやや歪んだ方形を呈していたと思われるが、40-B号住居跡の構築によって南側が大きく破壊されている。規模は東西辺が3.1m、南北辺は明らかではないが、やはり3m前後であったと考えている。主軸方向はN-11°Eを指す。住居は西へ向って下がる緩斜面に構築されているため、確認面からの深さは東壁と西壁で著しく異なり、遺存の良好な東側で45cmを測る。また、西壁はほとんど遺存しておらず、壁溝だけが確認された。覆土は暗褐色土層で、堆積はやや粗であった。床面はおおむね平坦であるが、西側がやや低くなっている。構築状況は良好で、かなり堅緻になっている。壁溝はカマドを除いて巡っており、失われてしまった南壁にも設けられていた可能性が高い。なお、ピットは検出されなかった。P1も40-B号住居跡に伴うと考えて良い。

カマドは北壁の中央より西側へ寄って設けられている。遺存状態はあまり良好ではないが、左右とも袖は遺存している。構築材は基礎にロームを敷き、その上に砂質粘土で築いている。カマド下掘り込みは袖の前面にまで張り出だが、床面から緩くくぼむだけである。明瞭な火床



第50図 40-A・B号住居跡実測図

は検出できず、12cmの焼土が堆積している。また上部には砂質粘土層（10）が認められるが、あまり火熱を受けた痕跡はない。壁外への張り出しが50cm程度で、三角形を呈する。煙道部は60°で立ち上がっている。

遺物はカマドを中心に出土し、他に東側壁溝からも土器片が出土している。覆土から出土した遺物はやや多く、100点近い土器片がある。カマドから出土したものは甕(4)であり、壺(3)はカマドの右側及び東壁の壁溝から出土したものである。

遺物 41は甕である。胴部上半が約1/2遺存しているが、約1/2ずつであり接合しない。口縁部は外反し、横ナデで整えるが、粘土紐接合痕を意識的に残し、稜を形成している。胴部はあまり膨らまず、縦位のヘラ削りを施す。胎土は比較的精緻で焼成も良く、色調は赤褐色を呈している。なお、内面は若干剥落し、また外面には袖材とみられる砂質粘土が固着している。42~44は壺である。42は全周の約3/4が遺存している。体部はロクロ調整で、ヘラ削りは施されない。底部はやや突出し、切り離しは回転糸切りである。ロクロ回転方向は右である。胎土は比較的精緻で焼成も良く、色調は橙色を呈している。但し、内面は内黒となっている。43は全周の約3/4が遺存するが底部を欠損している。体部はロクロ調整で、内面を磨いている。胎土には細砂粒を多く含み、焼成はやや不良。色調は明赤褐色を呈している。44は体部下半が約3/4遺存している。体部はロクロ調整で、下端に僅かにヘラ削りが施される。切り離しは回転糸切りで、ロクロ回転方向は右である。胎土には砂粒を含み、焼成は比較的良好であるが、外面はやや剥落している。色調は赤褐色を呈している。

#### 40-B (13-B) 号住居跡 (第50・51図、図版16・33)

2次調査区西端で、40-A号住居跡と重複しておりA→Bの先後関係がある。平面プランは方形を呈しているが、74・75号土塙と重複しており南東壁は明らかでない。規模は2.9m×2.6mで主軸方向はN-45°-Eを指す。確認面からの深さは西へ向って下がる緩斜面に構築されているため東側と西側では大きく異なる。遺存状態の良好な北東コーナーで80cmを測る。ちなみに南西コーナーでは10cmとなる。また、40-A号住居跡と重複する北コーナーでは20cmを測る。覆土は黒褐色土層が主体をなし、全体にソフトロームを多く混入している。床面はおおむね平坦であるが、南から西側にかけては北側よりやや低い。構築状況は良好で、かなり堅緻であった。壁溝は南東壁の一部を除いて巡っており、カマドの下にも検出された。ピットは2か所に検出された。P1・P2とも対面する壁の中央に配置されているが、P2は壁溝内となる。P1の方が若干大きく、45cm×35cmの方形であり、床面から20cmの深さである。P2は35cm×25cmの梢円形で、床面から18cmの深さである。

カマドは東コーナーに設けられている。袖はやや崩れているが砂質粘土を構築材として煙道部を含めてコ字形に形成している。縦って壁との間に空間があり、その部分は全く火熱を受けた痕跡がない。カマド下掘り込みは床面から僅かにくぼむ程度で、火床は底面の5cm上位に認

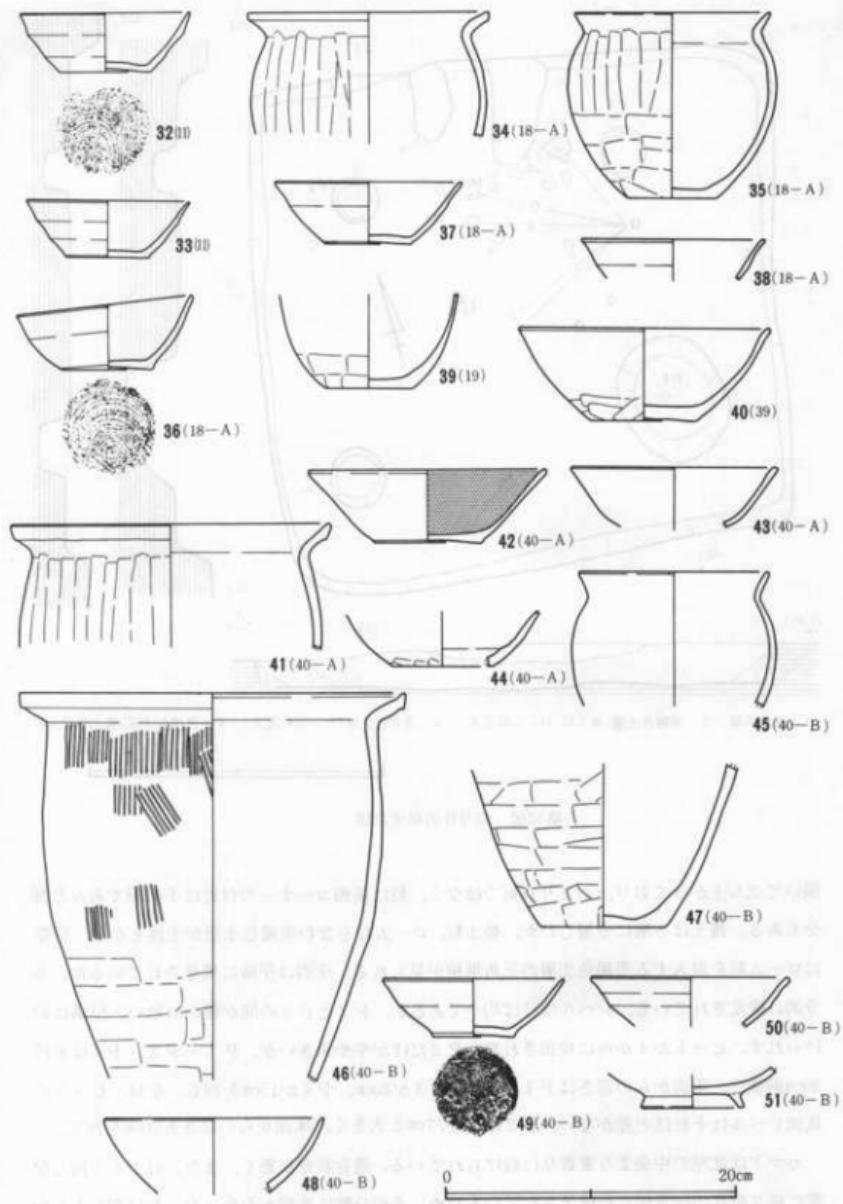
められた。煙道部の立ち上がりは明らかではないが、確認面の壁外に焼土粒が多く認められており、底面と壁上端を直線で結ぶと45°となる。

遺物は多く、覆土からは100点以上の土器片が出土した。48は4点を図示したが48・50・51はカマドからの出土であり、51は伏せてあった。また、49はP1から出土した。甕の多くは床面直上ないし覆土下層から出土している。さらに46はカマド右と住居跡中央の床面直上出土の土器片が接合したうえ、44号住居跡の覆土下層、カマド出土の土器片と接合した。

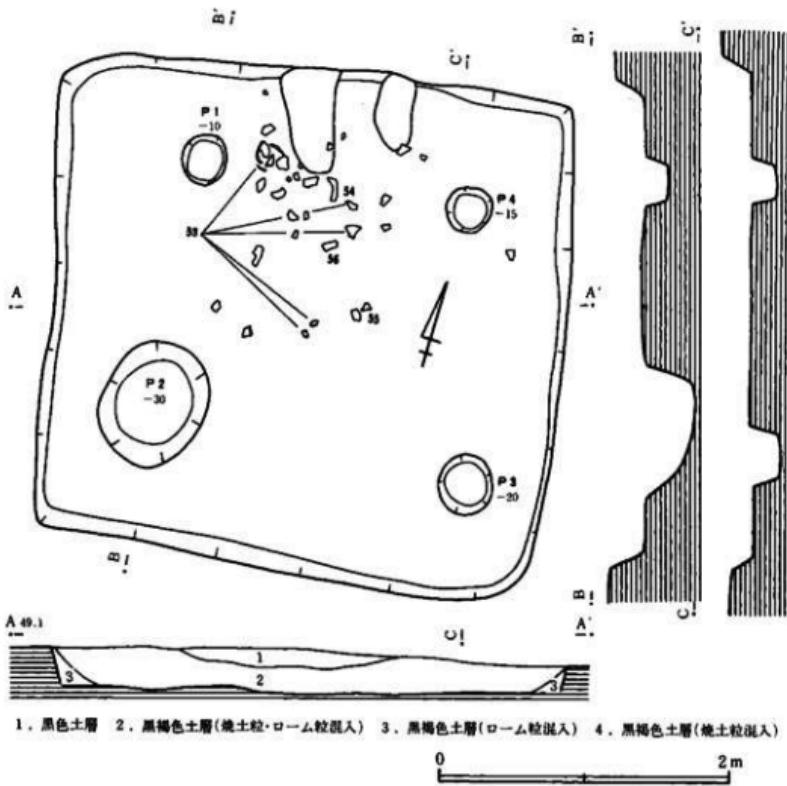
遺物 45~47は甕である。45は床面から10cm上位で出土したもので、約4分が遺存している。推定口径は13.1cmで小形である。口縁部は短く外傾し、胴部は丸味を有している。口縁部の調整は横ナデで、胴部に至ってもロクロ調整となる。胎土には細砂粒を多く含み焼成はやや不良である。色調は赤褐色を呈している。46は前述したように44号住居跡出土の土器片と接合した。本住居跡における出土状況は住居中央の床面から10cm上位となり、廃棄されたものである可能性が強い。また、44号住居跡の破片の一部がカマドから出土したとは言え、僅か1点であり、量的には本住居跡の方が多く、本来使用された住居を決定することはできない。推定口径26.7cmを測り、比較的大きい。口縁部は急激に外方へ開き、横ナデで整えるが、端部は稜を為して直立気味に立つ。胴部は張りを有さず、叩き調整がなされ、中位以下はナデで消される。下半は横位のヘラ削りが施されている。内面は横位にナデられている。胎土には砂粒を多く含むが焼成は比較的良好で、色調は赤褐色を呈している。47は胴部下半及び底部である。外面は横位のヘラ削りが施され、内面は同方向のヘラナデである。胎土には砂粒を多く含み、遺存状態がやや悪い。色調は灰褐色ないし暗赤褐色を呈している。また、外面には部分的にススが付着している。48~51は甕である。48は体部の約4分が遺存している。体部はロクロ調整で、僅かに内弯して立ち上がる。胎土には砂粒を多く含み、遺存状態は極めて悪い。色調は橙色を呈している。49は体部の約4分を欠損している。法量は口径12.5cm、底径5.6cm、器高3.9cmを計る。体部はロクロ調整で、ヘラ削りは施されていない。底部はやや突出し、切り離しは回転糸切りである。ロクロ回転方向は右である。胎土には砂粒を多く含み、色調は明褐色を呈している。50は体部が全周の約4分が遺存しているだけである。体部はロクロ調整で、上半がより開いている。胎土には砂粒を多く含むが、焼成はさほど悪くない。色調は暗赤褐色を呈している。51は高台が付くもので、貼り付け高台となる。体部はロクロ調整で、内面を粗く磨いている。底部の切り離しは回転糸切りで、切り離し後無調整で高台を付けている。ロクロ回転方向は右である。胎土には砂粒を多く含み遺存状態は悪い。

#### 42 (15) 号住居跡 (第52・57図、図版17・33)

49号住居跡の北約17m、45号住居跡の西約13mに位置している。平面プランは整った方形を呈し、規模は一辺3.5mである。主軸方向はN-10°-Wで、49号住居跡とはほぼ一致する。確認面からの深さは20~30cmで、30cmを測るのは北西コーナー付近の一部でしかない。壁はやや



第51図 住居跡出土土器実測図(3)



第52図 42号住居跡実測図

開いて立ち上がっており、あまり良好ではなく、特に南西コーナーの付近は不明瞭であった部分もある。覆土は3層に分層したが、焼土粒、ローム粒を含む黒褐色土層が主体をなし、壁際でローム粒を混入する黒褐色土層の三角堆積が見られる。床面は堅緻に構築されているが、部分的に攢乱されている。レベルはほぼ均一であるが、P2とP3の間が僅かに低い。壁溝は設けられず、ピットが4か所に検出された。P2だけがやや大きいが、P1・P3・P4は直径30cm前後で、床面からの深さはP1が10cm、P3が20cm、P4が15cmを測る。なお、ピットの底面レベルはそれほど差がない。P2は直径75cmと大きく、床面からの深さも30cmを測る。

カマドは北壁の中央より東寄りに設けられている。遺存状態が悪く、また、ほとんど同じ位置に縄文時代の68号炉穴が構築されているため、その分離に手間がかかった。袖は左右ともかろうじて残されており、砂質粘土によって構築されている。カマド下掘り込みは明瞭ではなく、

火床も明らかではない。壁外への張り出しあはほとんどないものと考えられ、壁へ向って厚く焼土が堆積していた。

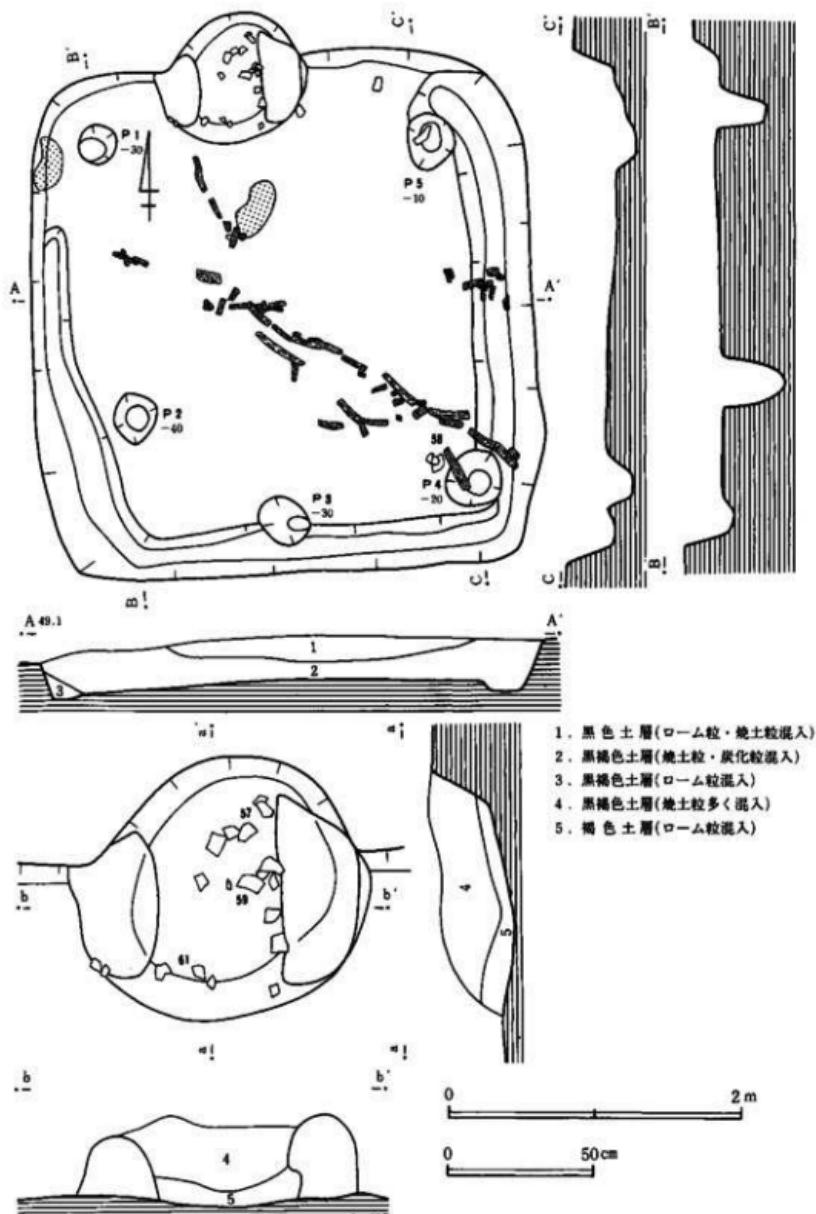
遺物はカマド前面から住居中央にかけて土器片が多く散乱しており、出土状況からは廃棄されたと考えられる。

遺物 52~54は甕である。52は胴部下半を欠損している。口径は20.4cmを計る。口縁部は横ナデで大きく外傾し、端部は直立している。胴部最大径は口径より僅かに小さく、縦位のヘラ削りを施している。しかし、内面は剥落が著しい。胎土には砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。色調は暗赤褐色を呈している。53は全周の約 $\frac{1}{4}$ が遺存しているが、胴部中位以下は全く欠損している。口縁部は“く”字状に屈折して外傾し、横ナデで端部を丸く調整する。胴部には縦位のヘラ削りが施される。器肉は比較的薄く、3~4mmを計るにすぎない。胎土には砂粒を含むが、焼成は良好で、色調は明黄褐色を呈している。54は胴部上半のみが遺存しているもので、全周の約 $\frac{1}{4}$ である。他にも同一個体と思われる破片があるが接合しなかった。胴部は縦位のヘラ削りをやや雜に施す。胎土には砂粒を多く含み、焼成はやや不良。色調は暗赤褐色を呈している。55は甕である。全周の約 $\frac{1}{4}$ が遺存しているが、底部は全く欠損している。また、現存部分の傾きで図化したため、体部はやや開いているが、本来はもう少し立つものと考えられる。体部はロクロ調整で、体部上端で更に開いている。また、現存部にはヘラ削りは認められず、他の多くの甕同様、ヘラ削りは施されていなかったとしてよい。胎土には砂粒を多く含み、遺存状態が悪く、内面は剥落が目立つ。色調は赤褐色を呈している。

#### 44 (17) 号住居跡（第53-57図、図版18-33）

2次調査区のほぼ中央、39号住居跡の南東約24mに位置している。平面プランは正方形に近く、規模は3.5m×3.4mと僅かに南北に長い。主軸方向はN-0°を指す。確認面からの深さは20~30cmで、所謂新期テフラ層で住居跡の掘り込みを確認した。壁はやや開いているが、黒褐色土層中でも比較的容易に検出できた。覆土は3層に分層した。ローム粒、焼土粒を含む黒色土層、焼土粒、炭化粒を多く含む黒褐色土層が主体を占めている。床面はおおむね平坦であるが、カマドの周辺が僅かに低い。構築は良好で、かなり堅緻である。床面が構築されている面は、ほぼソフトローム層の上面である。壁溝は北壁と西壁の一部を除いて巡っており、南西コーナーではやや内側へ出てきている。ピットは5か所に検出された。P1・P2・P4・P5は各コーナーに配置され、P3がカマドに対する壁の中央に位置している。直径は25~30cmで、床面からの深さは最浅がP5の10cm、最深がP2の40cmである。

カマドは北壁の中央より若干西側へ寄った位置に設けられている。遺存状態はあまり良好ではないが、かろうじて左右の袖は検出された。構築材は砂質粘土で、右側袖の内側は若干オーバーハングしている。カマド下掘り込みはあまり顕著なものではなく、壁外への張り出しを含めて直径80cmの円形である。火床は明確ではなく、5層はあまり火熱を受けていない。なお、



第53図 44号住居跡実測図

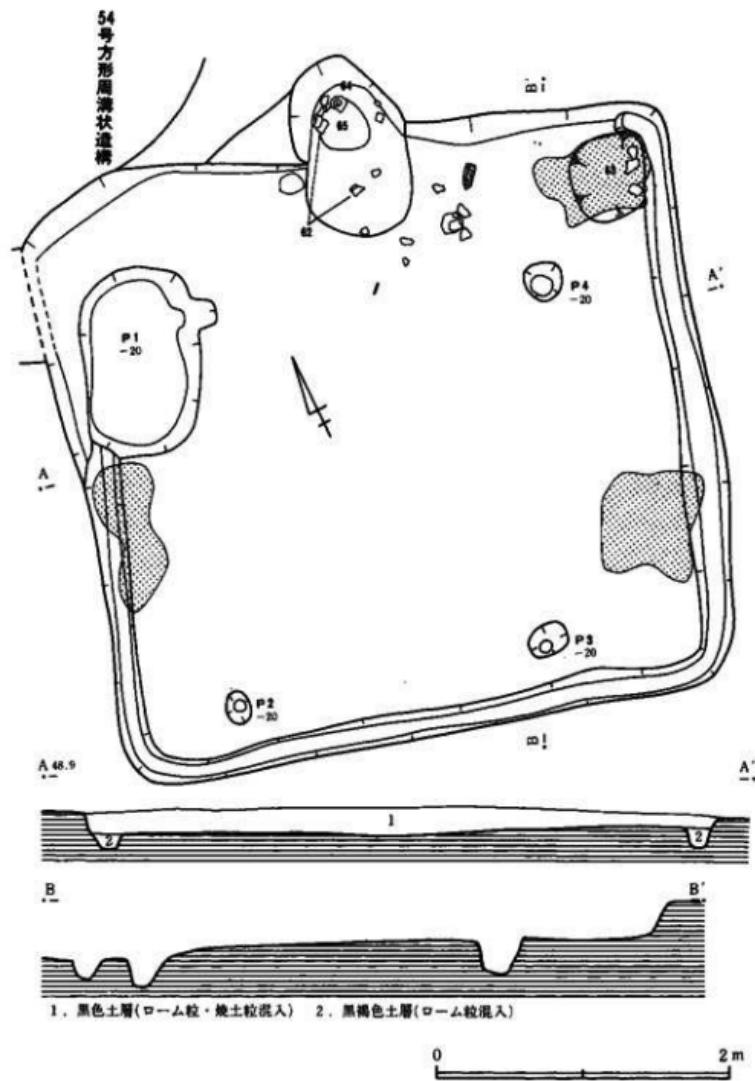
4層には多量の焼土粒が含まれている。壁外への張り出しが30cmで、半円形を呈しており、煙道部は60°の角度で立ち上がっている。

床面には炭化材及び焼土が堆積していた。炭化材は、P4からP1及びカマドに向けて2本、東側の壁溝上面に僅かに散乱している。P4から床面に斜めに連っている炭化材は、出土状況から2本と見られるが、本来それぞれが1本の材木として良いかは疑問が残る。炭化材は30~50mmの太さで、樹皮が遺存していないことを考えると本来はさらに5mm前後太かったと考えられる。しかし、樹皮が剥ぎ取られたかどうかは不明である。樹種はナラ属である可能性が強い。焼土は東北コーナー、カマド前面に僅かに堆積しているだけである。土器は壺、甕があるが、あまり多くない。59は覆土上層から出土したものであるが、他の57・58・60はP4の脇、カマドから出土している。甕はカマド内から出土している。46は前述したように40-B号住居跡の遺物と接合した。

遺物 56は甕である。底部のみが全周の約1/2が遺存している。残存する胴部は横位のヘラ削りが施され、底部も一定方向へ全面ヘラ削りを行っている。57~60は壺である。57はほぼ完形に復原できたもので、口径12.5cm、底径6.2cm、器高4.2cmを計る。体部はロクロ調整で、内窓気味に立ち上がり、ヘラ削りは施されていない。底部はやや突出し、切り離しは回転糸切りで、拓影図を示したように大胆な糸切り痕が残っている。ロクロ回転方向は、本住居跡出土の壺だけ左回転である。胎土には若干砂粒を含むが、焼成良好で、色調は赤褐色を呈している。58は全周の約1/2が遺存している。体部はロクロ調整で内窓にして立ち上がる。内面は粗雑ではあるが磨いている。胎土には細砂を含み、遺存状態が悪く剥落が著しい。色調は橙色を呈している。59も全周の約1/2が遺存である。体部はロクロ調整で、僅かに内窓して立ち上がる。胎土には砂粒を多く含み、色調は極暗赤褐色を呈している。60も体部は全周の約1/2が遺存している。体部はロクロ調整で内窓して立ち上がる。体部下端のヘラ削りは施されず、底部は円形の粘土板貼り付けによる蛇ノ目高台となり、一見削り出し高台のようである。ロクロ回転方向は58同様左である。内面は丹念に磨かれており、内黒となる。胎土には砂粒を含み、遺存状態が悪い。外面の色調は明褐色となる。

#### 46 (19) 号住居跡（第54・57図、図版18・33）

48号住居跡の東2m、51号住居跡の西6mに位置し、54号方形周溝状遺構と重複している。平面プランは方形を呈し、規模は4.3m×4.1mで東西がやや長い。主輪方向はN-20°-Eを指し、48号住居跡と一致する。確認面からの深さは遺存の良い北側で20cm、南側では壁溝が残るのみである。従って壁の遺存も良くないが、54号方形周溝状遺構と重複する北壁は白色の砂質粘土で構築している。すなわち54号方形周溝状遺構より後出の住居跡であることは確実である。覆土はローム粒、焼土粒を混入する黒色土層で、壁溝はローム粒を混入する黒褐色土層が堆積していた。床面は堅緻に構築されているが、南側は徐々に低くなっている、北壁際より7cm低



第54図 46号住居跡実測図

い。壁の遺存状態を考えれば、すでに削半されているものと思われる。壁溝は北壁を除いて巡っている。ピットは5か所に検出されたが、P1は土塙と重複している。いずれもコーナー近くに配置されている。P2～P3の直径は25cm前後で、床面からの深さはすべて20cmである。しかし床面が南へ向って低くなっている。ピットの底面レベルはP4よりP2・P3が8cm低い。P1と重複する土塙は120cm×80cmの方形を呈し、床面からの深さは20cmである。覆土はローム粒を含む暗褐色土層で、遺物は出土していない。またP5は北東コーナーに検出されたが、ピットというよりはむしろ浅くぼくとした方が適当である。

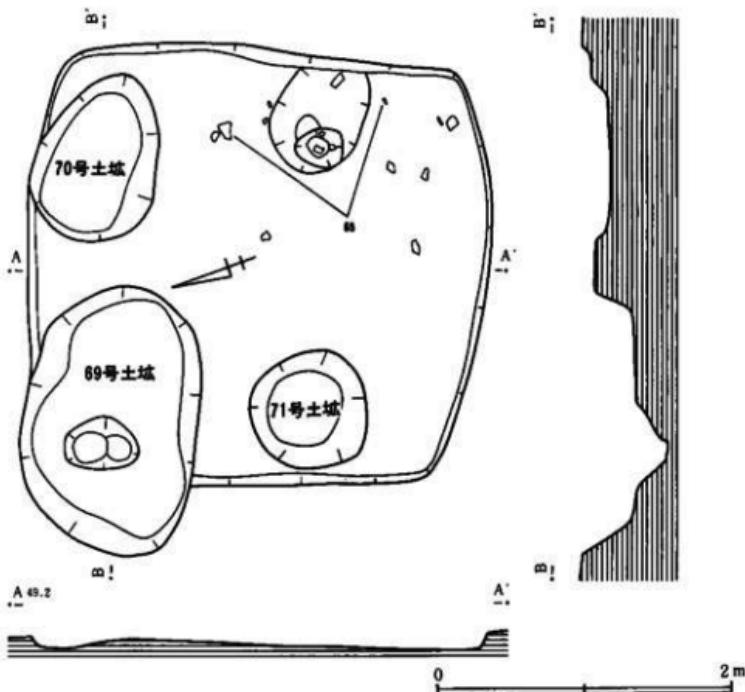
カマドは北壁の中央に設けられるが、遺存状態はかなり悪い。袖は左右ともすでに失われている。カマド下掘り込みは床面から5cmくぼみ、火床は明らかでない。壁外への張り出しあは50cmで三角形を呈し、煙道部は70°近い角度で立ち上がっている。

床面には西壁付近、南東コーナー付近、P5上面に焼土が堆積している。また、カマドの右側に小さな炭化材が1点あるが、この状況からだけでは焼失住居とは断定できない。遺物は多くなく、カマド、カマド前面、P5から出土した。P5から出土した土器片は甕で、カマドから出土した土器片と接合した。また、62はカマド及びカマド前面から出土した土器片が接合したものである。カマド内にはさらに、支脚が立っており、环(63)がかぶせてあったようである。环は土圧で落としているが、支脚の上面に环底部が、下位に环がそのままはまっていた。

遺物 61・62は甕である。61は口径20.4cmを計り、胴部最大径は口径よりやや小さい。口縁部は“く”字状に屈折して外傾し、横ナデで、端部は内傾する。胴部は斜位のタタキ調整の上をナデで消し、タタキ目は部分的に残るのみである。胎土には砂粒を多く含むが、焼成は比較的良好で、色調は暗褐色を呈している。62は61よりやや大きくなるものである。口縁部は外傾し、横ナデで整え、端部を丸く納めている。胴部は縱位のヘラ削りを施す。胎土には砂粒を多く含み、焼成不良。色調は暗赤褐色を呈している。63は环である。前述したようにカマド内で支脚(64)にかぶせてあった。ほぼ完形に復原でき、法量は口径12.2cm、底径5.8cm、器高4.3cmを計る。体部はロクロ調整で直線的に立ち上がり、下端に手持ちで横位のヘラ削りを施す。切り離しは静止糸切りである。胎土には砂粒を若干含むが、焼成は比較的良好で、色調は黒褐色を呈している。64は支脚である。本遺跡では最もしっかりしたものである。全長24cm、最大径7.2cm、最小径4.7cmを計る。カマド内では細い方を上にして、約10cmは火床下位に埋まっていた。また孔が貫通している。

#### 47 (20) 号住居跡 (第55-57図、図版34)

48号住居跡の北約9mに位置している。平面プランは方形を呈し、規模は南北3.1m、東西2.9mを測る。掘り込みが浅く、69・70・71号土塙が重複しているため、住居の内容はあまり明確にできなかった。主軸方向はN-112°-Eを指し、本遺跡では他に例をみない方向である。確認面からの深さは約10cmで、壁の状態も悪く、かなり不鮮明な部分もあった。覆土は僅かに



第55図 47号住居跡実測図

焼土粒を含んだ黒褐色土層が堆積していたが、詳細は不明である。床面の状態もかなり悪く、部分的に堅緻な面が検出できたが、多くの部分は擾乱され、軟弱であった。壁溝はなく、土塙も本住居跡より新しいものと考えられる。

カマドは東壁の中央より南に寄って設けられている。遺存状態は当然ながら極めて悪く、いくぶん砂質の部分もあったが、袖として残せるようなものではなかった。壁外への張り出しありなく、壁に接して80cm×55cmの横円形の掘り込みがある。床面から5cmほどくぼめられているが、底面の床面寄りに直径30cmのピットは底面からさらに8cmの深さがある。

遺物はカマド及びカマドの周辺に土器片が散乱しているだけである。図示した坏もカマド及びカマド左側から出土した。

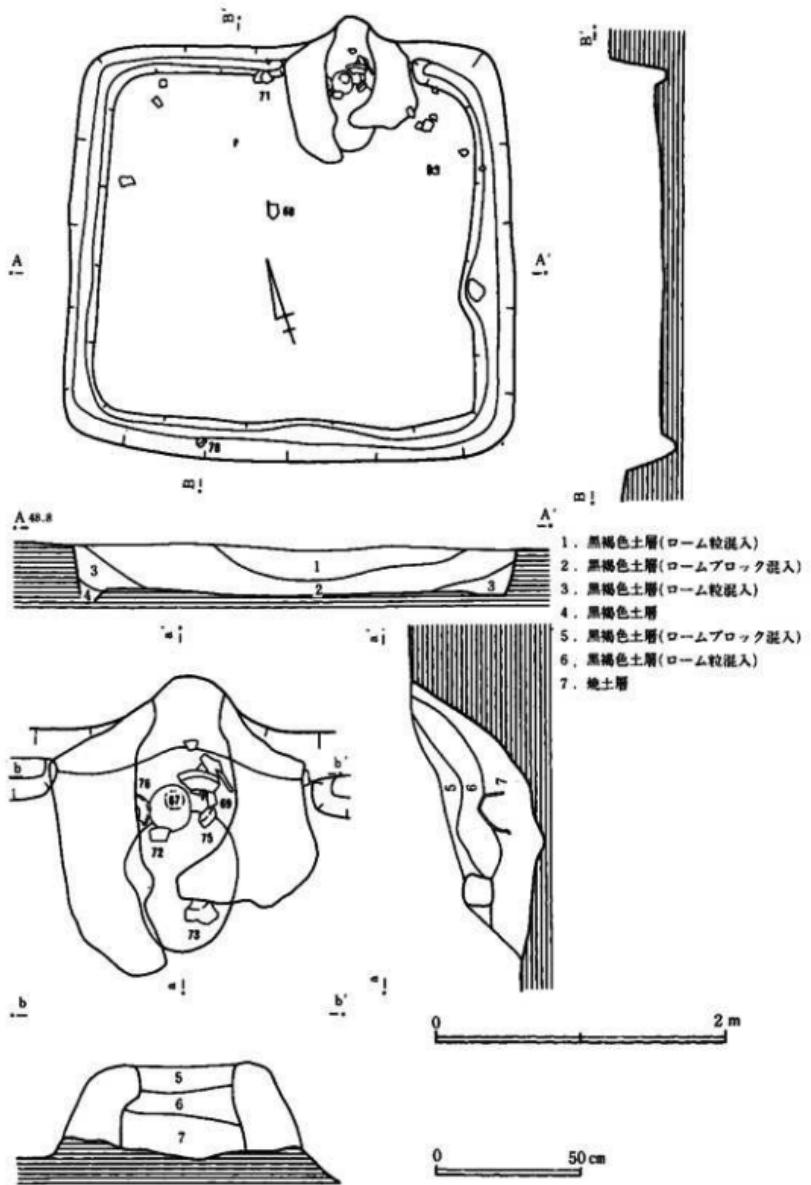
遺物 65は坏である。口径12.9cm、底径6.4cm、器高4.7cmを計り、体部の約 $\frac{1}{3}$ を欠損している。体部はロクロ調整で直線的に開き口唇部が僅かに開く。体部下端にヘラ削りは施されない。切り離しは回転糸切りで、ロクロ回転方向は右である。胎土は比較的精緻で、焼成も良く、色調は褐色を呈している。

#### 48 (21) 号住居跡（第56-57-59図、図版18-19-34）

46号住居跡と隣接しており、54号方形周溝状遺構と重複している。平面プランは方形を呈し、規模は東西3.1m、南北2.8mを測る。主軸方向はN-20°-Eを指し、隣接する46号住居跡と一致する。確認面からの深さは北側で40cm、南側で20cmを測り、壁も垂直に近い角度で立ち上がっている。壁はそれぞれ直線的でコーナーもしっかりしている。しかし、54号方形周溝状遺構と重複する部分では、46号住居跡で見られたような壁の構築はなされていない。いずれにしても54号方形周溝状遺構より新しい住居であることは確実である。覆土は4層に分層した。ロームブロックを含んでいる黒褐色土層が主体を占め、實際では、よりロームを多く含む黒褐色土層が堆積している。床面は平坦かつ堅緻で、本遺跡で最も遺存のよい床面であった。壁溝はカマドを除いて巡っているが、東壁でやや膨らんでいる。なお、ピットは全く検出されなかった。カマドは北壁の中央よりかなり東に寄った位置に設けられている。天井部は崩落しているが、比較的遺存状態が良い。左右の袖は床面をやや掘り残して高くし、その上に砂質粘土で構築されている。右側の袖では、天井部が遺存しており、また左袖も内側がオーバーハングして、天井部へ連る様子が窺える。壁外への張り出しあは15cmと短かいが、煙道部は45°とやや緩かに立ち上がっている。

遺物は住居跡北側に多く、南側ではあまり多く出土していない。図示したもののうち南側から出土したものは77だけで、南壁の壁溝に入っていた。住居跡北側では坏、破片が多く出土しており、そのうち、67・70が図示できた。カマド内にも多くの遺物が残されており、66はほぼ完形で、転落した状態である。その他にも68・69・71・72・74がカマドから出土した。

遺物 本住居跡からは比較的多くの遺物が出土し、12点を図示した。66～69は甕である。66は完形で、法量は口径13.0cm、底径7.3cm、器高13.4cmを計り、小形である。口縁部は短く外傾し、横ナデで整えられる。胴部は口径よりやや大きく、胴部中位まで横ナデが施されている。横ナデの下端には細い沈線が1条廻っている。胴部下半は横位のヘラ削りが施され、底部も全面ヘラ削りとなっている。胎土にはやや砂粒を含み、焼成は比較的良好が、一部分で二次的火熱を受け脆弱となる。色調は橙色を呈しているが、火熱を受けた部分は灰褐色に変色している。67は胴部上半が全周の約1/4遺存している。口縁部は横ナデで調整され、外方へ大きく開くが、端部は直立する。胴部は縦位のヘラ削りが施され、内面は斜位にナデている。胎土には砂粒を多く含み、焼成はやや不良。色調は暗赤褐色を呈している。68も胴部上半が全周の約1/4遺存している。口縁部は緩かに開き、端部を丸く納める。内外面とも横ナデで調整されるが、内面には磨きを加えている。胴部は頸部から急激にふくらむので、口径よりもはるかに大きくなるようである。外面は縦位のヘラ削りが施されているが、内面は剥落が著しい。胎土には砂粒を多く含むが、焼成は比較的良好。69も胴部上半が全周の約1/4遺存している。堆定口径15cmの小形の甕で現存部分は胴部に至るまでロクロ調整である。口縁部は“く”字状を呈して屈折し、端

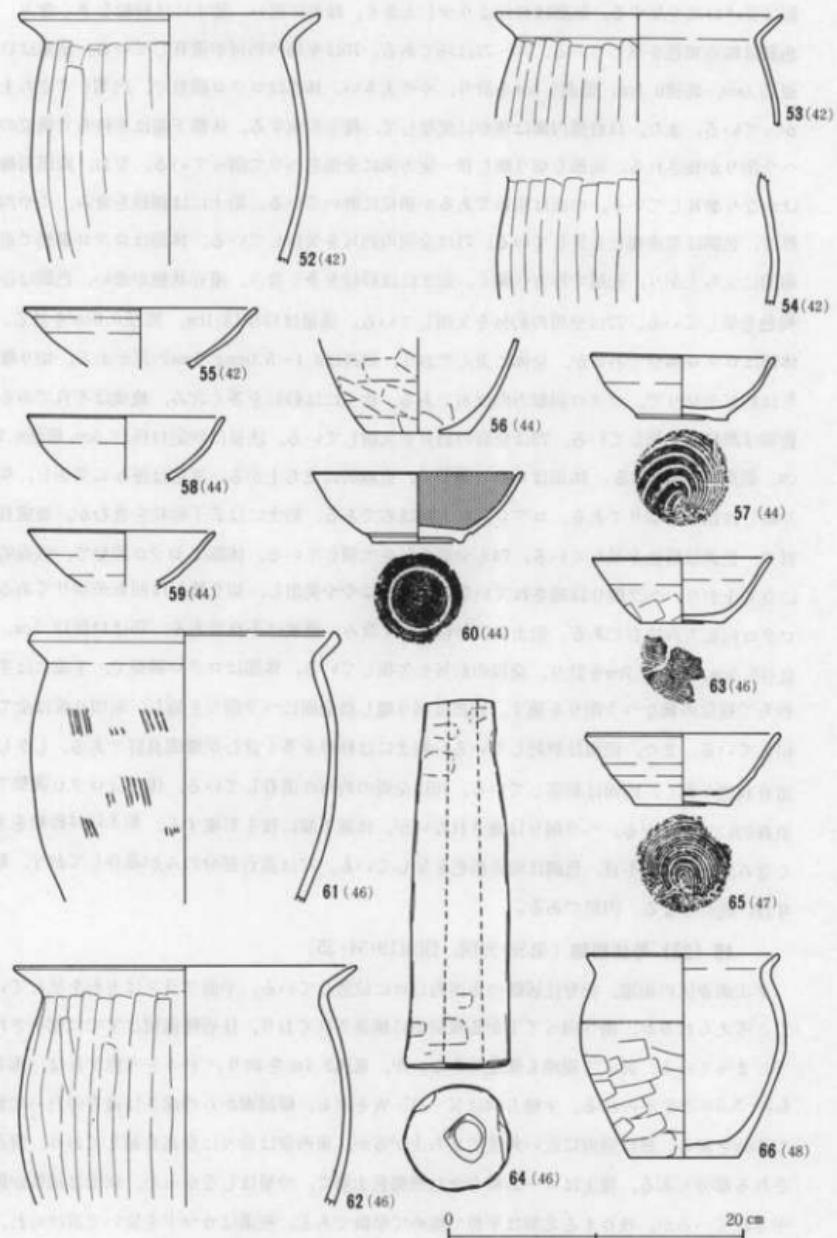


第56図 48号住居跡実測図

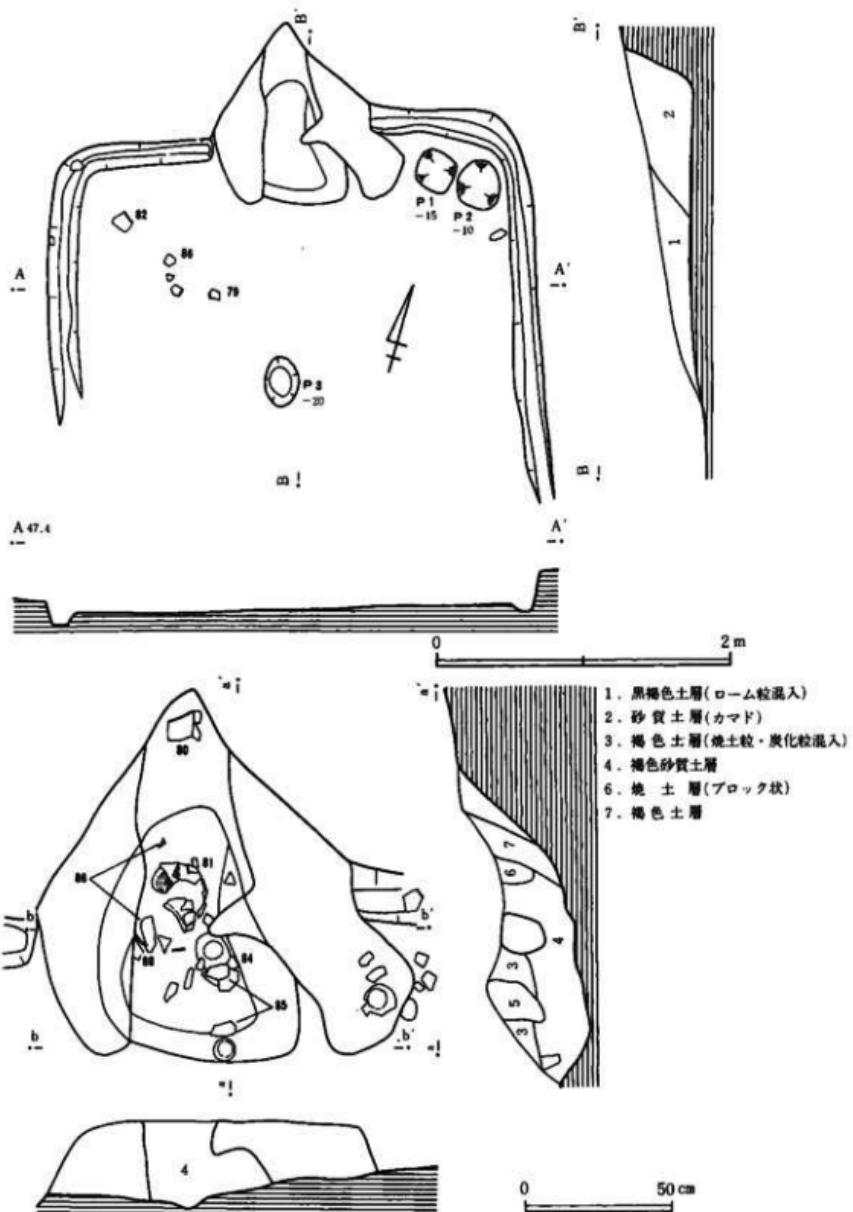
部は受け口状を呈する。胴部は口径より少し大きく、球形に近い。胎土には砂粒が多く含み、色調は暗赤褐色を呈している。70~77は壺である。70は全周の約 $\frac{1}{2}$ が遺存している。法量は口径15.0cm、底径6.1cm、器高5.6cmを計り、やや大きい。体部はロクロ調整で、内窓して立ち上がりっている。また、口唇部内面は僅かに肥厚して、棱を形成する。体部下端は手持ちで横位のヘラ削りが施される。底部も切り離し後一定方向に全面をヘラで削っている。なお、底部周縁はかなり磨耗している。内面は粗雑であるが横位に磨いてある。胎土には細砂を含み、やや肉厚で、色調は暗赤褐色を呈している。71は全周の約 $\frac{1}{2}$ を欠損している。体部はロクロ調整で直線的に立ち上がり、先端で外方へ開く。胎土には砂粒が多く含み、遺存状態が悪い。色調は赤褐色を呈している。72は全周の約 $\frac{1}{2}$ を欠損している。法量は口径13.1cm、底径6.0cmを計る。体部はロクロ調整であるが、全体に歪んでおり、器高は4.1~5.0cmと9mmの差がある。切り離しは回転糸切りで、ロクロ回転方向は右である。胎土には砂粒が多く含み、焼成は不良である。色調は黒褐色を呈している。73は全周の約 $\frac{1}{2}$ を欠損している。法量は堆定口径12.5cm、底径6.1cm、器高3.8cmを計る。体部はロクロ調整で、直線的に立ち上がる。底部は僅かに突出し、切り離しは回転糸切りである。ロクロ回転方向は右である。胎土には若干砂粒を含むが、焼成良好で、色調は橙色を呈している。74も全周の約 $\frac{1}{2}$ を欠損している。体部はロクロ調整で、直線的に立ち上がり、ヘラ削りは施されていない。底部はやや突出し、切り離しは回転糸切りである。ロクロ回転方向は右である。胎土には砂粒が多く含み、焼成は不良である。75は口径12.5cm、底径5.3cm、器高3.7cmを計り、全周の約 $\frac{1}{2}$ を欠損している。体部はロクロ調整で、下端には手持ちで横位の複数のヘラ削りを施す。底部は切り離し後全面にヘラ削りを施し、糸切り痕は全て消えている。また、底面は磨耗している。胎土には砂粒が多く含むが焼成良好である。しかし、遺存状態が悪く、内面は剥落している。76は全周の約 $\frac{1}{2}$ が遺存している。体部はロクロ調整で、直線的に立ち上がる。ヘラ削りは施されないが、体部下端に稜を形成する。胎土には砂粒を多く含み、焼成やや不良。色調は暗赤褐色を呈している。77は高台部分のみが遺存しており、貼り付け高台となる。内黒である。

#### 49 (22) 号住居跡 (第58・59図、図版19・34・35)

2次調査区の南端、48号住居跡の南西約13mに位置している。平面プランは方形を呈していると考えられるが、南へ向って下がる緩斜面に構築されており、住居跡南側はすでに削平されてしまっている。従って規模も確定できないが、東西3.4mを測り、P4を考慮すれば、南北も3~3.5mと考えられる。主軸方向はN-11°-Wを測る。確認面からの深さは遺存の良い北側で20cmを測る。壁は垂直に近い角度で立ち上がるが、東西壁は徐々に壁高を減じておらず、擾乱される部分もある。覆土はローム粒を含む黒褐色土層で、分層はしなかった。床面は南側が削平されているが、残存する北側は平坦で極めて堅緻である。壁溝はカマドを除いて設けられ、南壁にも設けられていたとして良いと思う。ピットは4か所に検出した。P1・P2は床面を



第57図 住居跡出土土器実測図 (4)



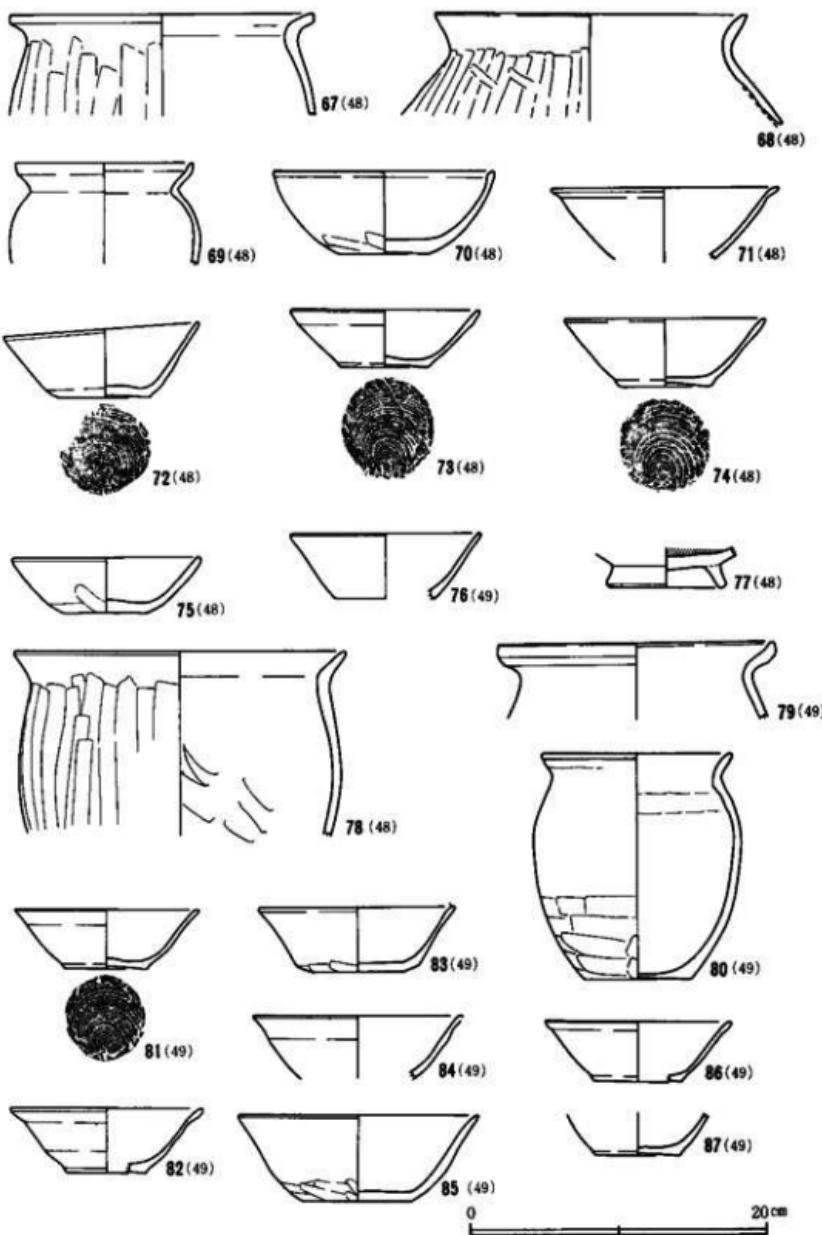
第58図 49号住居跡実測図

浅く掘りくぼめただけの施設であり、46号住居跡も同位置に同様な施設が検出されている。P3・P4は直径20cm程度で、床面からの深さはともに20cmである。底面レベルはP4が15cm低くなっている。

カマドは北壁の中央に設けられている。遺存状態は良くないが、左右袖と右袖から連って僅かに天井部が残っている。袖は砂質粘土を用いて構築されており、右袖内側はオーバーハングしている。遺存する天井部は若干スサを含み、かなり火熱を受けけて硬化している。また3・4とした土層も砂質粘土層で、特に4は火熱を受け、天井部残骸として良い。しかし、これらはカマド内にブロック状に認められ、本来の形状を復原させるようなものではなかった。壁外への張り出しは60cmとやや長く、三角形を呈している。煙道部の立ち上がりは緩く、煙り出しの部分に妻の胴部破片があった。

遺物はあまり多くなく、北東コーナーの付近から82が出土した他はあまり見るものはない。カマド内には多くの遺物が残されている。80・82-87がそれであるが、煙道部の談、袖右側の遺物は図示できなかった。

遺物 48号住居跡とともに多くの遺物が出土し、10点を図示した。78~80は談である。78は胴部上半が全周の約 $\frac{1}{4}$ だけ遺存している。口縁部は横ナデで、緩かに外反して端部を丸く調整している。胴部は若干丸味を帯びるがそれほど膨まず、縦位のヘラ削りを施している。内面は横位ないし斜位のヘラナデであるが、部分的にヘラを強く押圧した痕跡が認められる。胎土には砂粒を多く含むが、焼成は比較的良好で、色調は赤褐色から暗赤色を呈している。79は口縁部だけが全周の約 $\frac{1}{4}$ 遺存しており、推定口径は18.7cmとなる。口縁部は緩かに外反して横ナデで整えられるが、端部に2条の稜を形成して最終的に直立する。現存する胴部にはヘラ削りは認められない。胎土には砂粒を多く含むが、焼成は比較的良好である。但し、遺存状態は悪く、内面は剥落している。80はほぼ完形である。口径12.9cm、底径7.3cm、器高18.0cmを計る。口縁部は横ナデで整えられ短く外傾する。端部には横ナデによって浅い沈線様の凹みを廻らせるが、丸く納めている。また、粘土紐接合痕が僅かに残る。胴部は若干丸味を有し、最大径を上位に有する。器面は粗いナデで、中位以下に横位のヘラ削りを施している。内面は部分的に粘土紐接合痕が残るが、平滑にナデされている。しかし、遺存状態が悪く剥落も認められる。胎土には砂粒を含むが、焼成はさほど悪くない。但し、前述したように遺存状態は悪く、二次的火熱を直接受けた部分は脆弱である。なお、胴部中位にはカマド構築材と考えられる砂質土が固着している。81~87は坏である。81は完形で、口径12.4cm、底径5.6cm、器高3.9cmを計る。体部はロクロ調整で、直線的に立ち上がっている。底部はやや突出し、切り離しは回転糸切りである。ロクロ回転方向は右である。胎土には砂粒を含むが、焼成は比較的良好、色調は明赤褐色を呈している。なお、内外面とも口唇部から底部へ向けて斜めに黒変しており、特に内面は炭化物が付着している。82は全周の約 $\frac{1}{4}$ が遺存している。体部はロクロ調整で、直線的に立



第59図 住居跡出土土器実測図(5)

ち上がり、上端で更に開いている。ヘラ削りは施されておらず、底部はやや突出している。切り離しは回転糸切りで、ロクロ回転方向は右である。83は口径13.1cm、底径6.2cm、器高5.3cmを計り口縁部を約1/4欠損している。体部はロクロ調整で、外反気味に立ち上がっている。体部下端には手持ちで横位のヘラ削りを施す。底部も切り離し後全面に一定方向のヘラ削りを施す。胎土には砂粒を含み、カマド内出土のためか内面は剥落している。色調は暗赤褐色を呈している。84は全周の約1/4を欠損している。体部はロクロ調整で、ヘラ削りは施されていない。胎土には砂粒を多く含み、遺存状態は良くない。色調は暗赤褐色を呈している。85はほぼ完形で、法量は口径16.3cm、底径7.3cm、器高5.6cmを計り、大形である。体部はロクロ調整で、下端に手持ちで横位のヘラ削りを施している。底部は切り離し後全面に一定方向のヘラ削りを施している。胎土には砂粒を含み、遺存状態がやや悪く、内面は剥落している。色調は暗赤褐色を呈している。86は全周の約1/4が遺存している。体部はロクロ調整で、直線的に開き、ヘラ削りは施されていない。底部はやや突出し、切り離しは回転糸切りである。ロクロ回転方向は右である。87は体部下半、底部のみが遺存しており、底径は5.6cmを計る。体部はロクロ調整で、ヘラ削りは施されていない。底部はやや突出し、切り離しは回転糸切りである。ロクロ回転方向は右である。

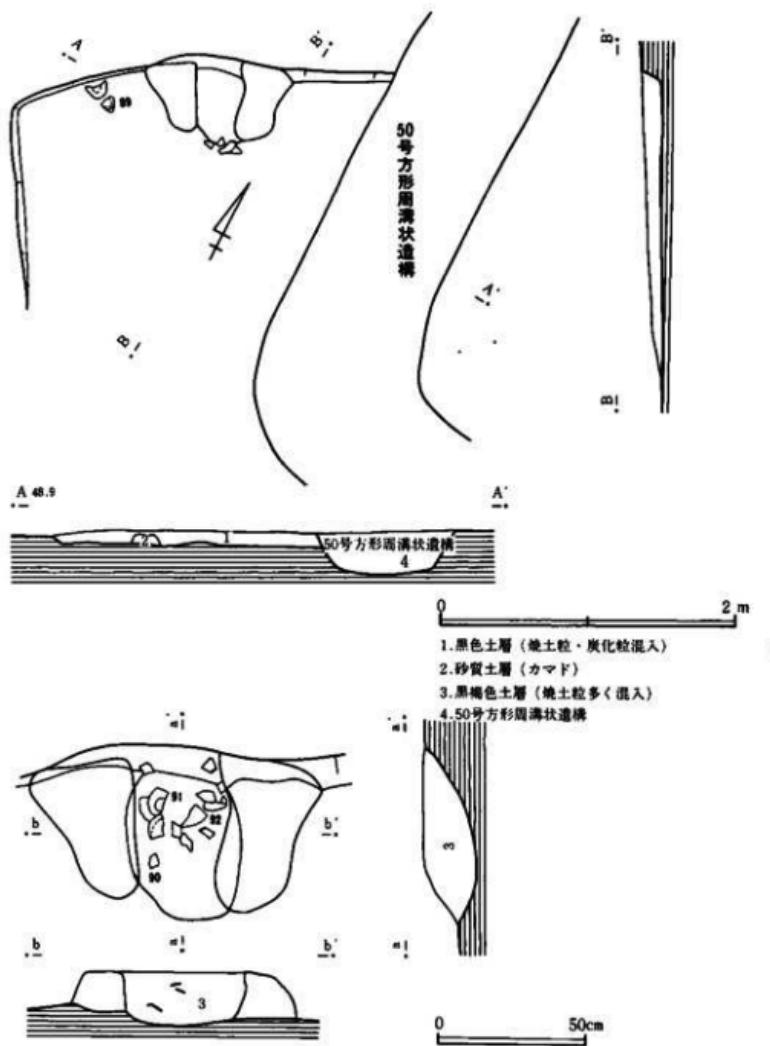
#### 51 (24) 号住居跡（第60-67図、図版35）

2次調査区の東端で、46号住居跡の東約7mに位置している。また、50号方形周溝状造構と重複しているが、先後関係は明らかにできなかった。平面プランは方形を呈していたと考えられるが、南へ向って下がる緩斜面に構築されており、南側はすでに削平されてしまっている。従って規模は確定できないが、カマドの位置を北西壁の中央とすれば、東西辺は3m前後と推定できる。主軸方向はN-30°-Wを指す。確認面からの深さは遺存状態の良好な北側でも10cm前後と非常に浅いもので、壁の状態はかなり悪く、かろうじて検出できた。床面は堅緻に構築されているが、本来の床面が遺存しているのはカマドの周辺だけである。なお、壁溝は設けられておらず、ピットも検出されなかった。

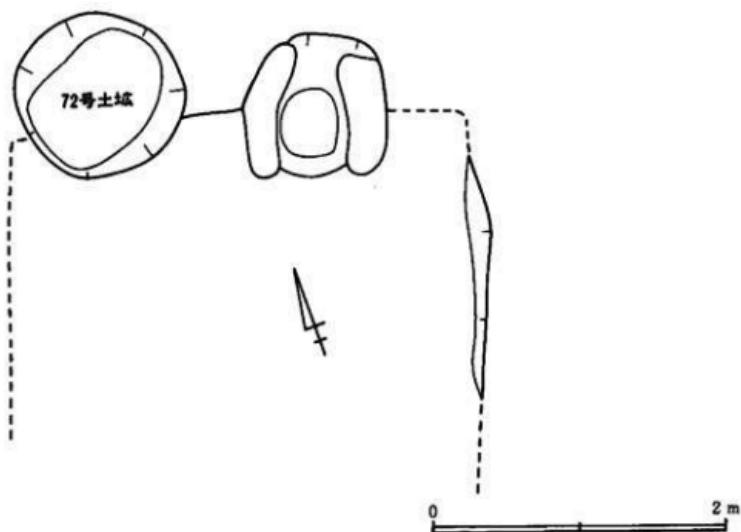
カマドは北壁に設けられているが、遺存状態は悪い。袖は左右とも検出でき、砂質粘土で構築されている。カマド下掘り込みは、床面から5cmほどくばんでいるが、火床の位置は確定できない。壁外への張り出しもほとんどなく、8cmを測るに過ぎない。煙道部の立ち上がりは、上面を削平されているため、本来の形状とは考えられず、現状では35°とかなり緩かである。

遺物は住居跡実測図に示したものが全てで、カマド及びカマド左側から出土した壺は88である。また、カマド前面の壺は図示に至らなかった。

遺物 図示したものは全て壺である。88は口縁部を約1/4欠損している。法量は口径12.8cm、底径5.3cm、器高4.2cmを計る。体部はロクロ調整で直線的に立ち上がり、やや歪んでいる。体部下端にヘラ削りは施されていない。底部は僅かに突出し、切り離しは回転糸切りである。ロク



第60図 51号住居跡実測図



第61図 55号住居跡実測図

ロ回転方向は右である。胎土には砂粒を多く含むが、焼成はさほど悪くなく、色調は暗赤褐色から極暗赤褐色を呈している。89は全周の約 $\frac{1}{4}$ が遺存しているだけである。体部はロクロ調整で、口唇部外面が僅かに肥厚している。底部はやや突出し、切り離しは回転糸切りである。ロクロ回転方向は右であろうか。胎土には砂粒を多く含むが、焼成はかなり良かったようである。但し、内面は遺存状態が悪く、剥落する部分もある。色調は赤褐色を呈している。90は全周の約 $\frac{1}{4}$ が遺存している。法量は口径14.0cm、底径6.0cm、器高4.1cmを計る。体部はロクロ調整で、内窓気味に立ち上がっている。体部下端には手持ちで横位のヘラ削りが施され、底部も切り離し後、全面に不定方向のヘラ削りを施している。胎土には若干砂粒を含み、焼成は比較的良好、色調は暗褐色を呈している。91は全周の約 $\frac{1}{4}$ が遺存しているだけである。現存部分の傾きで図化したため、体部がやや開いているが、全体的には本来はもう少し立ち上るものと考えている。体部はロクロ調整で、比較的精緻な仕上がりである。胎土には砂粒を若干含むが、焼成は良い。色調は黄褐色を呈している。

#### 55 (28) 号住居跡 (第61-67図)

47号住居跡の北約11mに位置している。また、72号土塙と重複している。あまり時期差はないようであるが、検出状況からは72号土塙がより新しい。平面プランは方形を呈していたと考えられるが、ロームへの掘り込みが浅いため、壁は殆ど残されていない。規模も確定できない

が、僅かに残る西壁、カマド等を考慮すれば大きくても3m前後であったようである。主軸方向はN-23°-Eを指す。確認面からの深さは、壁が検出できた西壁でも10cm以下である。従って覆土の観察も行えなかった。床面は点線で推定したプランの中に3m×2.3mの範囲で残存していた。構築状態は良好で、残存部分は平坦で堅緻である。なお、壁溝、ピットは検出されなかった。

カマドは北壁に設けられており、残存する床面から推定して、北壁中央よりやや東へ寄った位置であったとしてよい。遺存は当然のことながら悪いが、グリッド杭があったため、やや上層から調査が可能であった。袖は左右とも遺存しており、砂質粘土で構築している。火床は底面から約5cm上位に認められる。壁外への張り出しは40cmを測り、半円形を呈する。なお、袖は壁外への張り出し部分まで続いている。しかし、かなり削平されているため、本来の形状であるとは考えられず、煙道部の立ち上がりも全く不明である。

遺物はカマドから僅かに土器が出土し、そのうち杯1点が図示した。

遺物 92は壊で全周の約 $\frac{1}{2}$ が遺存している。体部はロクロ調整で、直線的に立ち上がる。切り離しは回転糸切りと思われるが、底部は殆ど遺存していないため、具体的に示すことはできない。胎土には砂粒を多く含むが、焼成は比較的良好、色調は赤褐色を呈している。

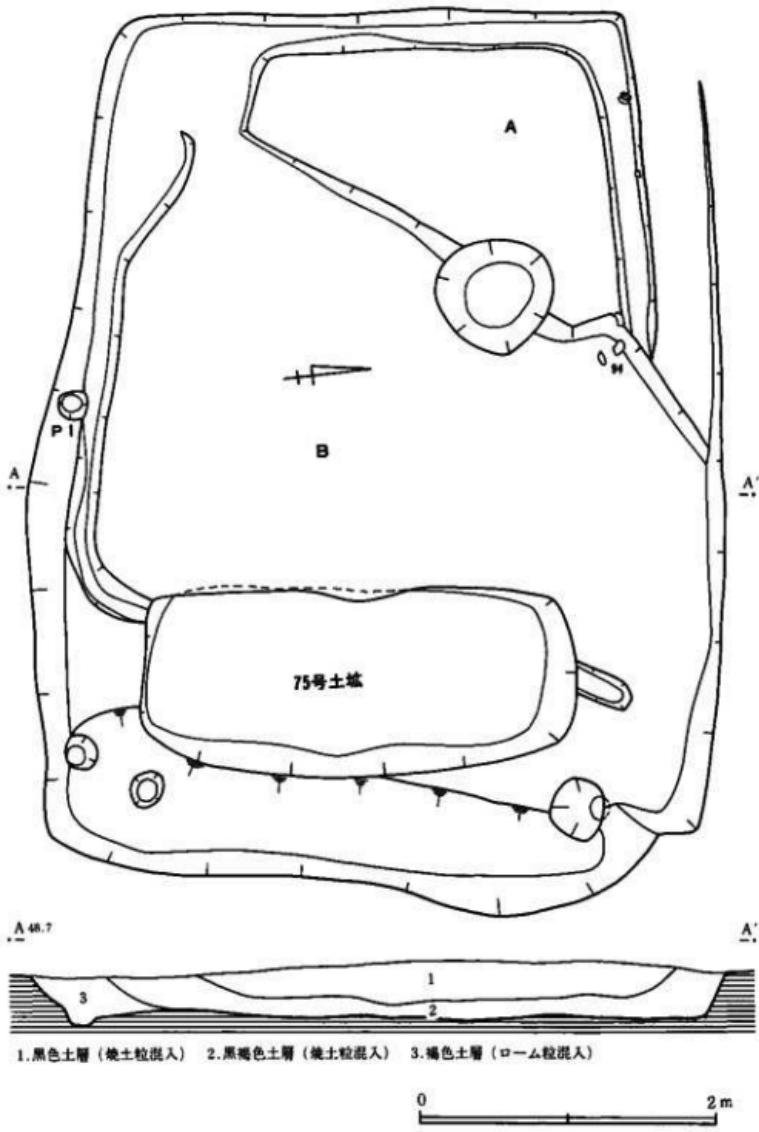
#### 56-A (29) 号住居跡 (第62図、図版20)

40号住居跡の東約15mに位置している。A・Bの2軒が重複しており、更に75号土塙と重複している。A・Bの先後関係はBのカマドが遺存していることからA→Bという構築を考えられる。また、土層の観察からは75号土塙がさらに新しいことが窺える。A・Bとも平面プランを具体的に確定することはできず、該期の住居跡として方形のプランが想定される。壁溝により北西、南西の2か所のコーナーが明らかである。コーナー間の距離は3.3mを測るが、さらに北側に平行する壁があり、壁溝との間に40cmの平坦面が存在する。この壁をAの北壁とするとな南北径は3.7mとなる。北壁の壁高は10cm前後である。南西コーナーでは、壁溝が著しく太くなるが、どのように理解するかは判明することはできなかった。南北を主軸とした場合の主軸方向はN-0°を指す。床面は軟弱で、ピットは検出されなかった。

カマドは現存部分には検出されず、設けられていたとした場合、東壁であったと考えられる。遺物は北側の壁溝から壊の破片が2点出土したが図示はできない。

#### 56-B (29) 号住居跡 (第62-67図、図版20)

Aを破壊して構築されているが、Aを斜めに切って壁が検出された。Aの床面より8cm低く掘り込まれている。しかし、他の壁は検出できず、プラン規模とも不確定である。また、南壁から東壁にかけて壁溝が巡っているが、カマドが設けられている壁(B)と対応するとなると、プランはかなり不整形となり、問題が残る。むしろこの壁溝はAに伴うと考えた方が自然である。主軸方向は北西壁とカマドを考慮するとN-50°-Wを指す。床面は平坦であるが、やや軟



第62図 56号住居跡実測図

判で、カマドの周辺に硬化面が検出できた。

カマドは北西壁に設けられているが、遺存状態は極めて悪い。袖は左右ともすでに残存しておらず、円形の掘り込みだけが検出された。直径は75cmで、壁外へ25cm張り出している。床面からは8cmくぼみ、火床は底面から10cm上位に認められた。

遺物はカマド右側の壁に接して壊れた破片が出土した。

遺物 93・94の2点を図示した。ともに全周約4分の1が遺存するのみである。体部はロクロ調整で、ヘラ削りは施されていない。94の方が、やや大きいようで、作り方も丁寧である。94の内面は磨かれており、平滑となる。いずれも胎土には砂粒が多く含むが、焼成は比較的良好で、94はより堅緻である。色調は93が赤褐色、94が極端赤褐色を呈している。

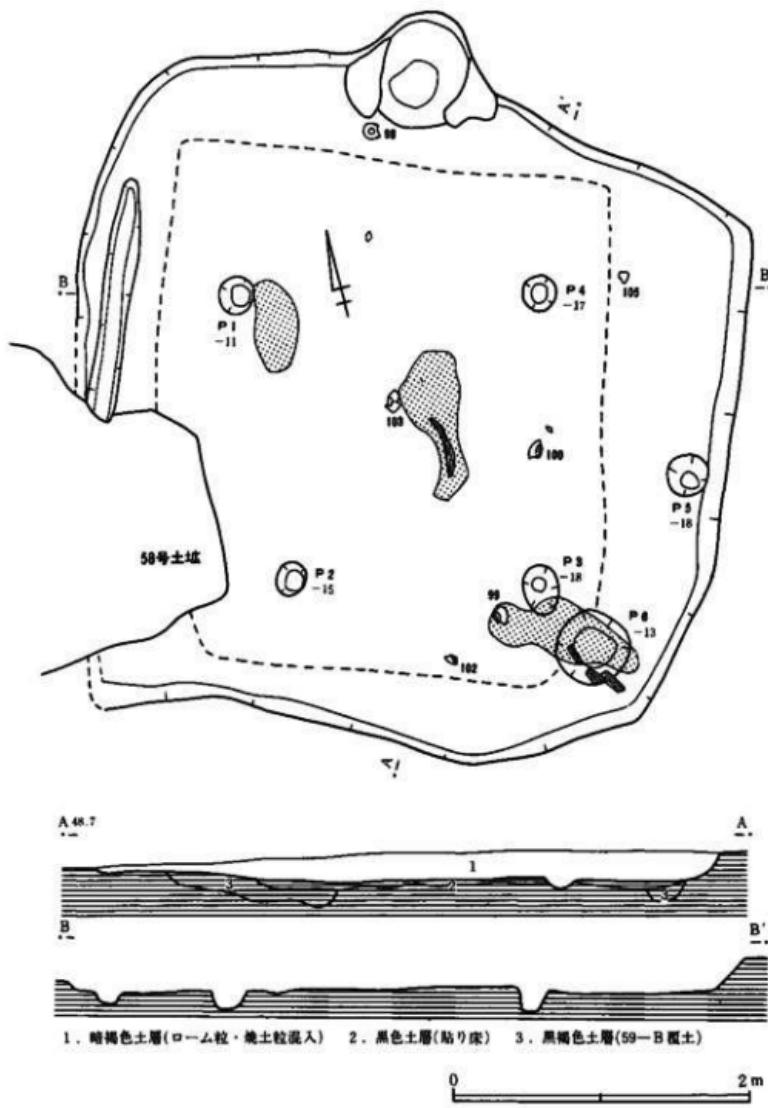
#### 59-A (32-A) 号住居跡 (第63・64・67図、図版20・35)

60号住居跡と隣接し、56号住居跡の北約16mに位置している。また、本住居跡床面の下に59-B号住居跡が構築されており、B→Aの先後関係を有する。さらに、西側は58号土塙に破壊されている。平面プランはやや歪んだ方形を呈し、規模は4.5m×4.3mを測る。主軸方向はN-22°Eを指し55、59-B号住居跡とは一致する。確認面からの深さは北側で15cm、西側で5cmを測る。壁は南側が浅いためやや不明瞭であったが、他の壁の検出は容易であった。床面はおおむね平坦であるが、住居中央が緩くくぼんでいる。点線の範囲は堅緻な貼り床が施されているが、壁際では軟弱な箇所もある。また、南東コーナーには60cm×60cmで掘り残した部分があり、周囲より5~6cm高くなっている。柱溝は西壁にのみ設けられており、壁との間に約10cmの平坦面がある。また、西壁の南半分は58号土塙に破壊されており、どこまで壁溝が設けられていたかは不明である。ピットは6か所に検出されP1~P4は柱穴として良い。P1~P4はいずれも直径20~25cmで、床面から15cm前後の深さである。なお、底面のレベルはほとんど差がない。P5は東壁の際にあり、直径25cm、床面からの深さは18cmである。P6はやや大きく、直径45cmを測り、床面からは13cmの深さである。

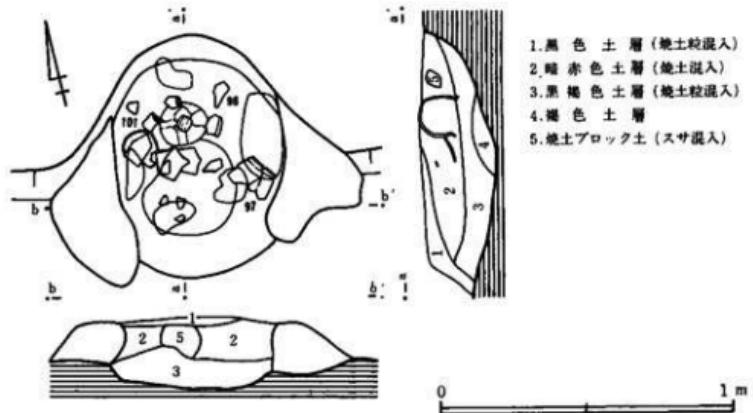
カマドは北壁の中央に設けられている。袖は砂質粘土で構築され、やや短かい。掘り込みは直径80cmの円形で、そのうち40cmが壁外へ張り出している。底面は床面から5cmくぼみ、火床は床面とほぼ同レベルであったと思われる。なお、5層は天井部崩落土層と考えられ、スサを混入し、さらに火熱を受けて硬化している。なお、同様に天井部崩落土層と考えられるものはカマド平面図にその範囲を示した。煙道部は40°と緩かに立ち上がり、煙り出して急角度となっている。

床面には僅かではあるが焼土、炭化材が検出された。遺物は多く、覆土中から約50点の土器片が出土した。床面には5点の壊れ残されており、カマド内にも壊れ3点、甕2点があり、特に95はほぼ完形で正位で出土した。

遺物 95~104の10点を図示した。95・96は甕で、大小2タイプがそろっている。95はほぼ完

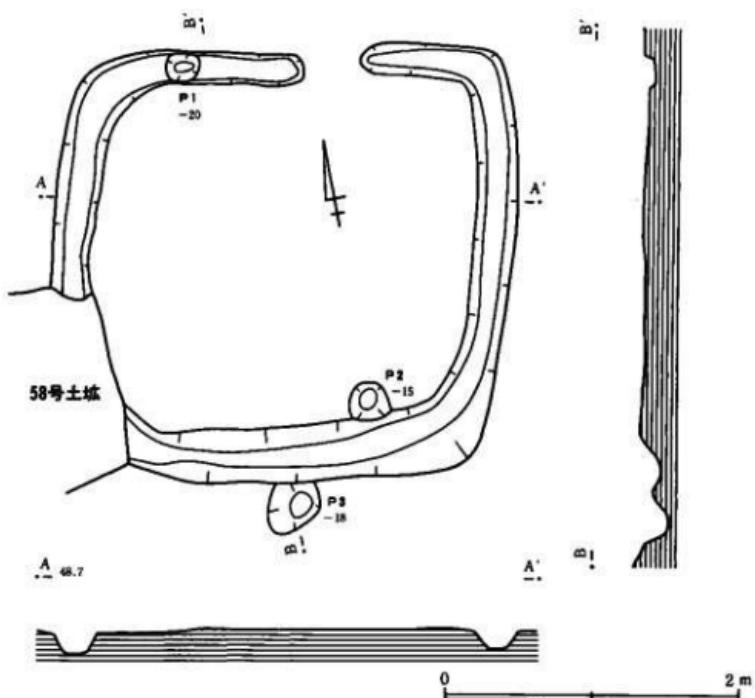


第63図 59-A号住居跡実測図



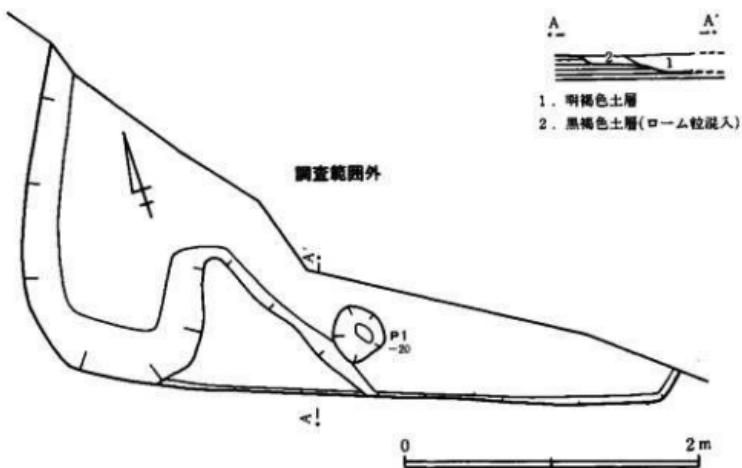
第64図 59-A号住居跡カマド実測図

形で、法量は口径14.5cm、底径6.6cm、器高14.0cmを計る。口縁部は短く外傾し、端部を丸くなめている。胴部はやや丸く、最大径を上位に有し、口径よりも僅かに大きい。口縁部から胴部上半にかけては横ナデで、中位以下に横位のヘラ削りを施す。内面は胴部下位まで横ナデである。底部は剥落している。胎土には砂粒を多く含み、遺存状態が悪く、二次的火熱を直接受けた部分は脆弱である。色調は赤褐色から赤色を呈している。96はやや欠損部分が多い。口縁部は短く外傾し、横ナデで整え、端部が直立する。胴部はあまり膨らまないが、若干丸味を有し、最大径は上位に有する。器面はタタキ調整の上をナデで消し、タタキ目は殆ど残っていない。また、胴部下半には横位のヘラ削りを施している。内面は横位にナデているが、粘土紐接合痕は完全に消えてない。胎土には砂粒を多く含むが、焼成はさほど悪くなく、色調は赤褐色を呈している。しかし、胴部下半では二次的な火熱を受け脆弱となる部分もあり、その部分は灰褐色となる。更に、接合する破片同志においても、火熱を受けたものと、受けないもののが存在し、火熱を受けたのが、破損後であることが窺える。97~104は坏である。97は口縁部を僅かに欠損するが、ほぼ完形である。法量は口径12.7cm、底径5.5cm、器高4.3cmを計る。体部はロクロ調整で、僅かに内寄して立ち上がる。また、口唇部内側は肥厚し、ゆるい稜を形成する。底部はやや突出し、切り離しは回転糸切りである。ロクロ回転方向は右である。胎土には砂粒を多く含むが、焼成は良好で、色調は明褐色を呈している。98は全周約3分が遺存している。体部はロクロ調整で、やや内寄気味に立ち上がり、上端で開いている。底部はやや突出し、切り離しは回転糸切りで、ロクロ回転方向は右である。胎土には砂粒を多く含むが、焼成は良好で、色調は明褐色を呈するが、黒色となる部分もある。99は口縁部の一部を欠損するだけで、



第65図 59—B号住居跡実測図

ほぼ完形である。法量は口径13.9cm、底径5.7cm、器高4.8cmを計る。体部はロクロ調整であるが、歪みが著しい。切り離しは回転糸切りで、ロクロ回転方向は右である。胎土には砂粒を多く含み、焼成不良。色調は暗赤褐色を呈している。100も口縁部の一部を欠損するが、ほぼ完形である。法量は口径12.5cm、底径6.0cm、器高4.3cmを計る。体部はロクロ調整で、外反気味に立ち上がり、下端に手持ちで横位のヘラ削りを施している。底部も切り離し後、全面に不定方向のヘラ削りを施し、糸切り痕は全く残されていない。胎土には砂粒を多く含むが、焼成は比較的良好、色調は赤褐色を呈している。また、内面には炭化物が付着している。101は全周の約1/4が遺存している。体部はロクロ調整で、外反して立ち上がり、下端には手持ちで横位のヘラ削りを施している。底部の切り離しは明確ではなく、全面にヘラ削りが施されているようである。102は体部を全周の約1/4欠損している。体部はロクロ調整であるが、全体に歪みが著しく、特に体部下半が潰れて丸くなっている。口唇部内面及び、内面底部にはヘラの痕跡が深く残されている。底部は中央がかなり凹み、切り離しは回転糸切りである。ロクロ回転方向は右



第66図 60号住居跡実測図

である。胎土には砂粒を多く含むが、焼成はそれほど悪くない。色調は黒褐色を呈している。103は全周の約 $\frac{1}{4}$ が遺存しているだけである。体部はロクロ調整で、ヘラ削りは施されていない。104も全周の約 $\frac{1}{4}$ が遺存しているだけである。体部下端にはヘラ削りが施され、稜を形成するほど鮮明なものである。

#### 59-B (32-B) 号住居跡 (第65図、図版20)

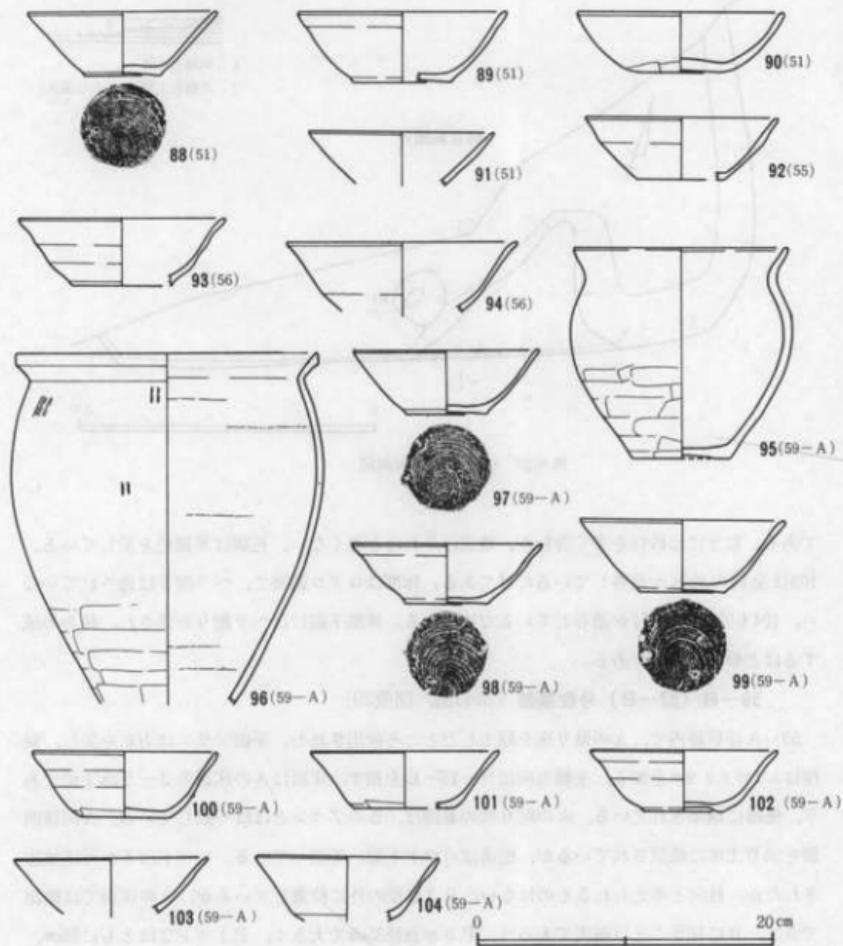
59-A 住居跡内で、Aの貼り床を除去したところ検出された。平面プランは方形を呈し、規模は $3.1\text{m} \times 2.9\text{m}$ を測る。主軸方向はN-15°-Eを指す。床面はAの床面の3~5cm下位であり、堅緻に構築されている。Aの貼り床の範囲は、Bのプランとほぼ一致している。A同様西側を58号土塙に破壊されているが、壁溝はカマドを除いて巡っている。ピットは3か所に検出されたが、柱穴と考えられるものはない。P3は壁の外に位置しているが、Aの床面では検出できず、Bに伴うことは確実であろう。P3が直径35cmで大きく、P1・P2はともに25cm、30cmである。床面からの深さはP2が最浅で15cm、P1が最深で20cmを測る。

カマドは残存していないが、壁溝が途切れている部分があり、そこに設けられていたと考えられる。

遺物は覆土がほとんど無いため、皆無に近く、壁溝中から4点の土器片が出土しただけであった。

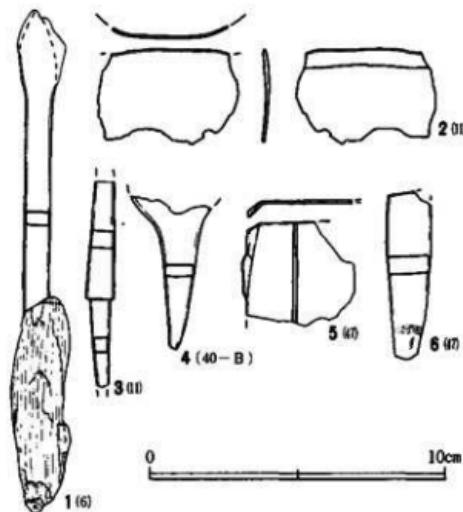
#### 60 (33) 号住居跡 (第66図)

59号住居跡と隣接し、北側半分以上は調査範囲外へ続いている。平面プランは方形を呈すると考えられ、南側の2か所のコーナーが検出された。規模は東西3.5mを測り、南北も3~4



第67図 住居跡出土土器実測図 (6)

mと推定される。主軸方向は確定できないが、北西壁の状況からN-55°-E前後を指すと考えられる。確認面からの深さは西側で30cm、南側で10cmを測り、北西壁は若干開いて立ち上がっている。覆土は2層に分層した。暗褐色土層、黒褐色土層で、2層にはローム粒が含まれている。床面は南西壁に接する部分が140cm×90cmの範囲で掘り残されており、周囲より約20cm高くなっている。そのほかの部分も決って良好な床が構築されているとは言えず、現況では多少凹凸があり、やや軟弱であった。壁溝、カマドは調査範囲内には認められなかった。



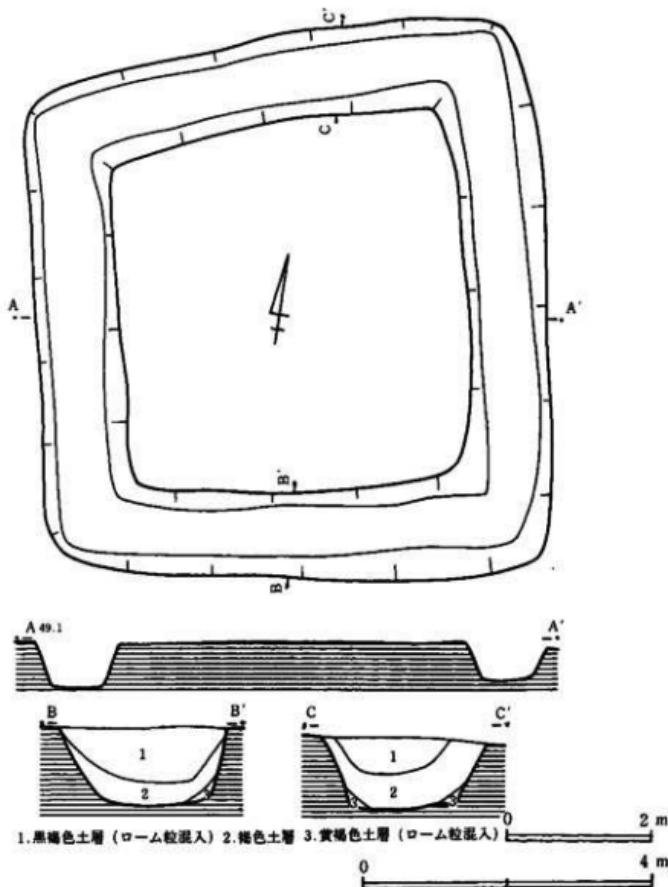
第68図 住居跡出土鉄・銅製品実測図

## 2. 方形周溝状造構

本遺跡では3基の方形周溝状造構が検出された。いずれも2次調査区であり、50号方形周溝状造構だけが、僅かに1次調査区にかかっている。これは1、2号墳と比べ、はるかに小規模のものであり、また、内部主体は検出されていない。

### 34(6)号方形周溝状造構（第69図、図版21）

3基並ぶ方形周溝状造構のうち西側に位置するもので、54号方形周溝状造構の北西約19mにあたる。また、縄文時代の35号炉穴・57号住居跡と重複している。3基の中では最も周溝がしっかりしている。周溝のプランは台形に近く、各辺の長さは北辺6.5m、南辺6.7m、東辺7m、西辺6.2mを測る。各コーナーはかなり明瞭で、特に底面のプランは垂直に近い角度で曲っている。また底面プランは比較的直線である。なお、東西辺が平行であり、南北方向を主軸と考えると主軸方向はN-15-Wを指す。周溝の幅はほぼ一定で1.1~1.2mを測り、底面は南東コーナーが狭いが0.7~0.8mを測る。確認面からの深さは40~50cmで、断面形は逆台形を呈している。底面レベルは南西コーナーがやや低いが、他の3か所のコーナーはほぼ同一レベルである。また、各辺は中央がコーナーより5cm前後低い。覆土はローム粒を含んだ黒褐色土層、褐色土層が主体となり、自然埋没と考えられる。但し、周溝に区画された中には旧表土は認められず、墳丘は築造されていなかった可能性が高い。周溝に区画された範囲の面積は44m<sup>2</sup>で、周溝を除くと20m<sup>2</sup>となる。ここで興味深いのは、対する辺の長さの和は内外線とも一致する。即



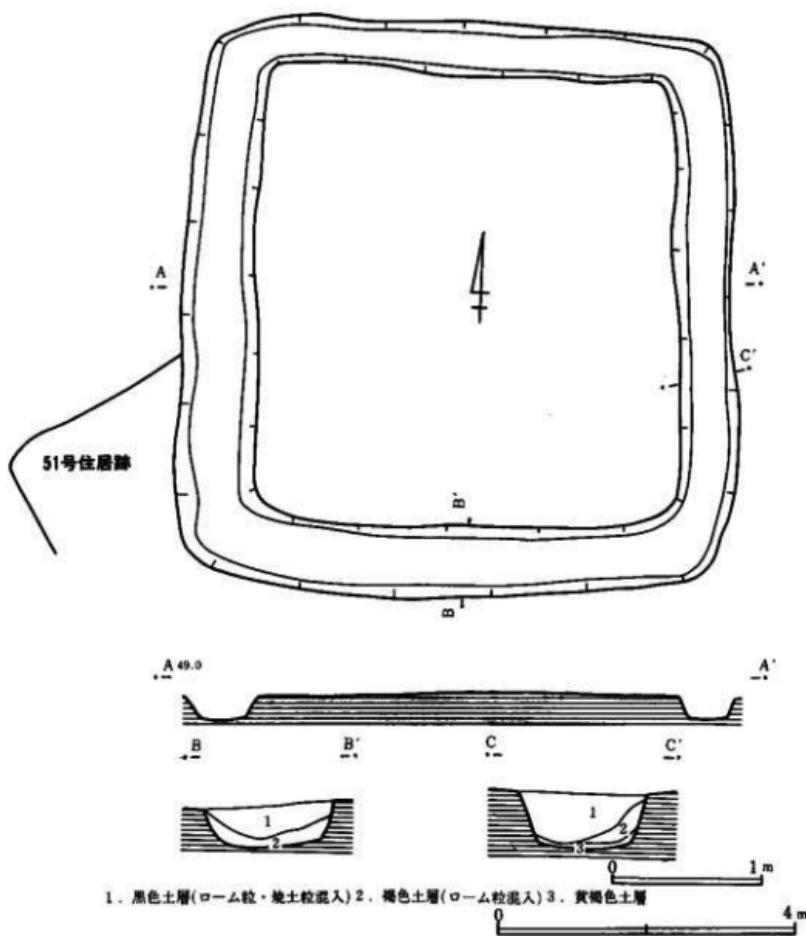
第69図 34号方形周溝状遺構実測図

ち、北辺(6.5m) + 南辺(6.7m) = 東辺(7m) + 西辺(6.2m)となる。

本周溝に伴うと考えられる遺物は出土しておらず、覆土内から多量の縄文式土器が出土した。

#### 50(28)号方形周溝状遺構 (第70図、図版21)

54号方形周溝状遺構の東11m、1号墳の西12mに位置している。また、歴史時代の住居跡51号住居跡と重複している。なお、南西コーナーは1次調査区にかかっている。周溝が区画するプランは整った方形を呈し、各辺の長さは北辺6.6m、南辺7m、東辺7.1m、西辺7mを測る。また、各辺はほぼ直線で、コーナーは垂直に近い角度で曲っている。さらに、各辺はおおよそ方位と対応し、南北軸を主軸と考えた場合の主軸方向はN-0°を指す。周溝の幅は北辺が70cm



第70図 50号方形周溝状遺構 実測図

で他の3辺より狭い。他の3辺は80~100cmで、南西コーナー付近が最も広い。確認面からの深さは20~25cmで、断面形は逆台形を呈している。底面レベルは地形の傾斜に従って低くなっている、南辺は北辺より約15cm下位となる。覆土は基本的には3層であり、ローム粒、あるいは焼土粒を含む黒褐色土層である。34号方形周溝状遺構同様自然埋没と考えられ、また周溝に区画された中には旧表土は認められなかった。内部主体は存在しない。

また、遺物もほとんど出土せず、北東コーナー付近でわずかに土器片が検出されたが、細片であり、図示には至らなかった。

#### 54 (27) 号方形周溝状遺構（第71-77図、図版21-36）

3基の方形周溝状遺構の中央に位置するもので、34号方形周溝状遺構の南東約19m、50号方形周溝状遺構の西約10mにあたる。また、歴史時代の住居跡46・48号住居跡が南辺に構築され、その部分は破壊されている。周溝のプランは方形を呈しているが、南東コーナーがやや不明瞭である。各辺の長さは北辺6.3m、東辺8.8mで西辺及び南辺は確定できないが、46号住居跡と48号住居跡の間にわずかに残る南辺を考慮すると南辺約7m、西辺約7.5mとなる。各辺は直線とは言えず、北辺は内側に反り、東辺、西辺は北側に張り出している。南側の2か所のコーナーの位置が明確でないため、どの程度張り出しているかは明言できない。形状は若干歪んでいるが、主軸方向はN-15°-W前後を指すと推定される。周溝の幅は一定ではなく、東辺が80~90cmと比較的そろっている他は、北辺が60~90cm、西辺が70~100cmと30cm程度の変化がみられる。このことは周溝のプランが歪んでいることも含めて、上面がかなり削平されていることが一因となっているようである。確認面からの深さは各辺とも10~20cmと浅く、また、底面レベルは地形の傾斜に伴って南へ行くほど低くなる。従って北辺と南辺の底面は約35cmの高低差がある。壁の状態も悪く、浅い部分では底面から自然に皿状に立ち上がっている。覆土は基本的に2層で、いずれもローム粒を多く混入している。周溝に区画された範囲の面積は推定56m<sup>2</sup>で、周溝を除くと推定46m<sup>2</sup>となる。なお、主体部は検出されなかったが西辺周溝内から甕形土器が出土し、ほぼ完形に復原できた。

遺物 1は甕ではほぼ完形に復原できた。法量は口径17.0cm、底径8.1cm、器高16.3cmを計る。口縁部は緩かに外反し、横ナデで整え、端部は直立している。肩部は球形に近く、上半で斜位、下半で横位のヘラ削りを施している。また、底部にも2方向のヘラ削りを施す。内面は平滑にナデているが、遺存状態が悪く、かなり剥落している。胎土には砂粒を含むが、焼成はやや良好である。色調は赤褐色を呈しているが、黒色となる部分もある。外面の器壁は荒れが少なく、内外面の遺存状態は大きく異なっている。

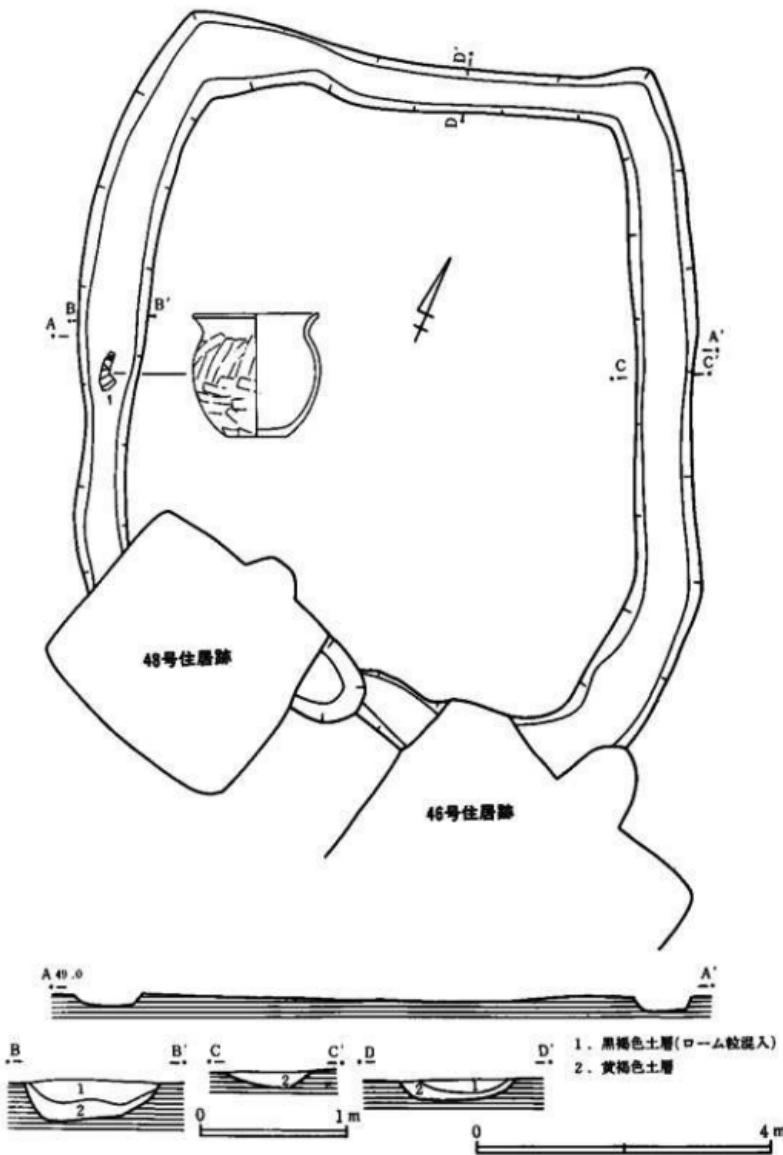
### 3. 土 塚

本遺跡では20基の土塚が検出された。形状によりいくつかの分類が可能であるが、一括して扱うこととする。また、多くの土塚は該期の集落が営まれた時期に属すると考えられる。

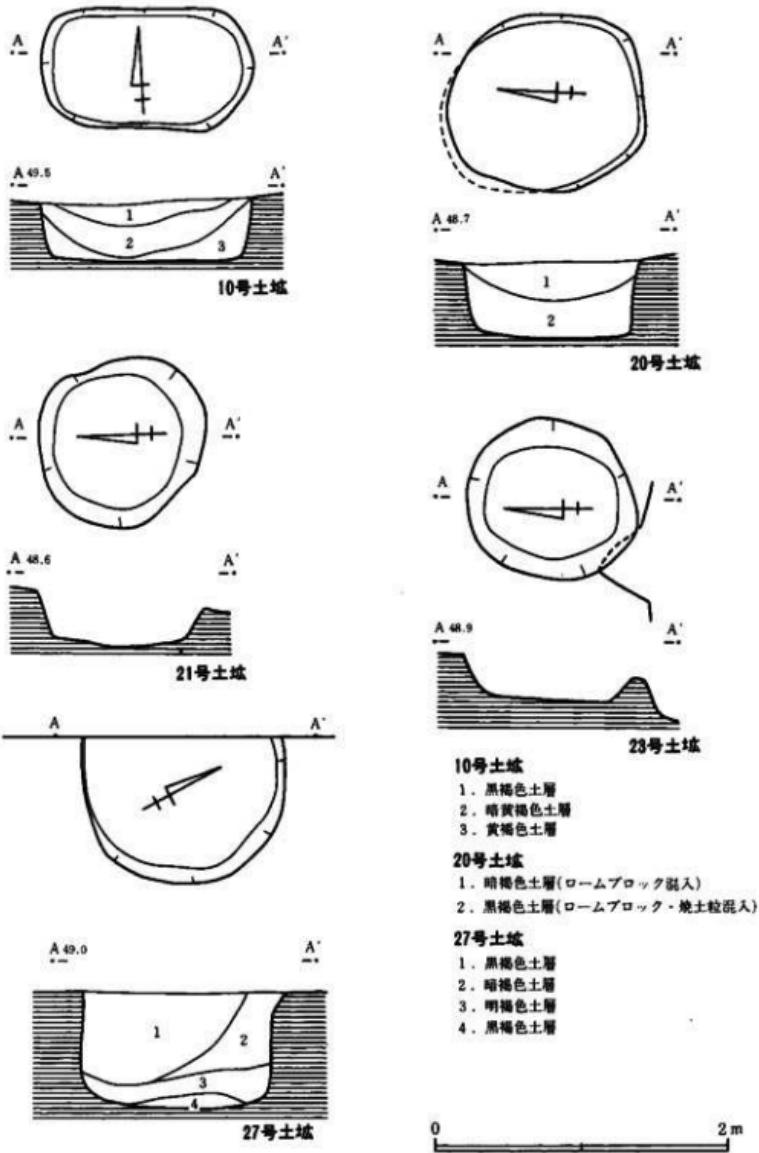
#### 10号土塚（第72-77図、図版22-36）

1次調査区の南東端に位置している。平面プランは隅丸長方形を呈し、規模は1.5m×0.8mを測る。長軸方向はN-90°-Eを指す。確認面からの深さは40~50cmで、壁は垂直に近い角度で立ち上がっている。覆土は3層に分層したが、下層ではロームが主体となり、黒色土粒を含んでいるなど、人為的に埋め戻された可能性が指摘できる。底面は殆ど平坦で、壁との境いもかなり明瞭である。

遺物は覆土2層から墨書きのある壺の破片が1点出土したが、その他には数点の土器片がある



第71図 54号方形周溝状遺構実測図



第72図 10・20・21・23・27・土坡実測図

だけである。

遺物 2は环の口縁部破片で、外面に墨書きが見られる。現存部分には2文字が認められるが、2文字目は途中から破損していて明らかでない。1文字目は「正」である。体部はロクロ調整で、胎土には若干焼粒を含んでいるが焼成良で、色調は黄褐色を呈している。

#### 20号土塙（第72図）

11号住居跡の北壁に重複しており、11号住居跡のカマドを一部破壊している。平面形は円形を呈し、規模は1.4m×1.3mと南北が僅かに長い。確認面からの深さは50cmを測り、しっかりととした掘り込みである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、北側の壁は僅かにオーバーハングしている。底面は殆ど平坦で、ハードローム層中に構築されているため、堅緻である。覆土の観察は、当初11号住居跡として調査をしたため、ややすれた位置の観察となった。その結果覆土は2層に分層し、ともにロームブロックを混入している。また11号住居跡のカマドを破壊しているためか、焼土粒の混入も目立った。ただ、ロームブロックの混入状況は自然埋没とは考え難いものである。遺物は少なく、覆土から土器片が僅かに出土しただけで、図示できなかった。

#### 21号土塙（第72・77図、図版22）

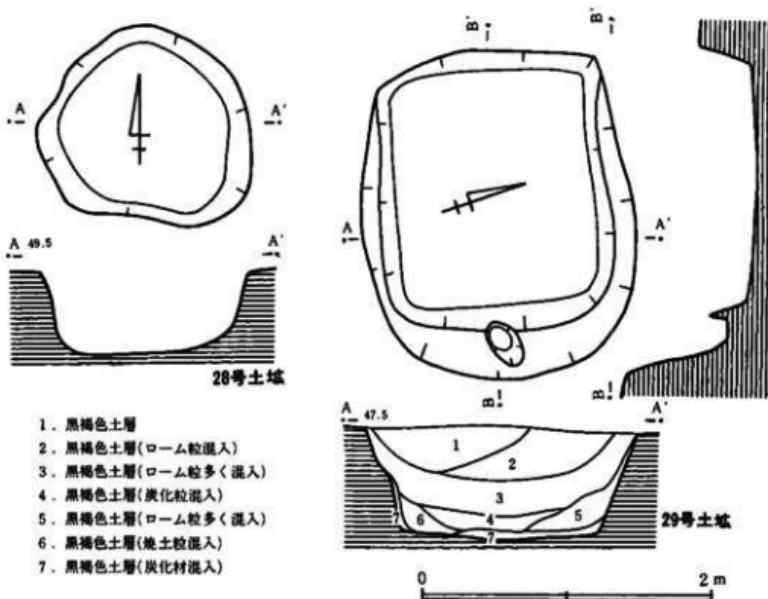
1号住居跡と4号住居跡に接している。平面プランは円形を呈し、南東側がやや膨むが、底面プランはより円形に近く、直径1.1mを測る。確認面からの深さは北側で35cm、南側で20cmであるが、地山面の傾斜によるもので、底面はほぼ水平である。壁はやや開いて立ち上がるが、検出は容易で、また、底面との境いも明瞭であった。覆土は分層が不可能で炭化粒を含んだ黒褐色土層が堆積している。底面の状況はすでに記したが、わずかに凹凸が見られ、壁際がやや高くなっている。遺物は覆土から土器片が僅かに出土したが、図示できなかった。

#### 23号土塙（第72図）

21号土塙の北約3mに位置し、4号住居跡のカマドを一部破壊している。平面プランは円形を呈し、直径は1mを測る。確認面からの深さは25cmを測り、壁は若干開いて立ち上がっている。覆土の観察は4号住居跡のカマドと重複していたため充分ではないが、黒褐色土層が堆積し、特に焼土粒の混入は見られなかった。底面は南へ向って傾斜しているが平坦で、やや軟弱であった。遺物は土器片が数点あり、図示はしなかったが、4号住居跡とさほど隔らない時期として良い。

#### 27号土塙（第72・77図、図版36）

1次調査区の西端に位置し、5号住居跡の西側に近接している。また、本土塙の西側は調査範囲外となり未調査である。平面プランは円形を呈したと考えられ、直径は1.4mと推定できる。確認面からの深さは65~70cmを測り、壁はしっかりと構築され、ほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は黒褐色土層並びに暗褐色土層が主体となり、上層ではローム粒、焼土粒、炭化粒を含むが、下層にはロームブロックを主体とする層が認められ、人為的な埋め戻しと考えて



第73図 28・29号土塙実測図

良い。底面は平坦で、ハドローム層に達しているため堅緻である。覆土からは加曾利E式の土器片が4点出土したが、本遺跡での同形態の土塙を考慮して本節に含めた。

遺物 1点を図示した。3は壺で全周の約1/4が遺存している。体部はロクロ調整で直線的に立ち上がりっている。底部は回転糸切りで切り離し、ロクロ回転方向は右である。胎土には砂粒を多く含み、焼成は不良で、色調は赤褐色を呈している。なお、体部外面に墨書きが見られる。文字は2文字で「万」と判読できる。

#### 28号土塙（第73図、図版22）

2号境内に位置し、23号土塙の北約4mにあたる。平面プランは不整円形を呈し、規模は1.5m×1.3mを測る。確認面からの深さは50cmで、壁の状態も比較的良好。覆土は黒褐色土層の単一層で、混入物も少ない。底面はおおむね平坦であるが、壁との境はやや不明瞭である。遺物は全く出土しなかった。

#### 29(1) 土塙（第73図、図版22）

1次調査区の西端に位置し、30号住居跡の西約4mにあたる。平面プランは方形を呈し、底面ではかなり整った方形となる。規模は2.2m×1.9mを測り、長軸方向はN-110°-Eを指す。確認面からの深さは、地山が西へ向って下がる緩斜面であるため東側と西側では大きく異なり、

遺存の良好な東側で80cm、西側で40cmとなる。壁はしっかりとした構築で南側は2段となる。底面は中央が緩かに凹むがおおむね平坦で、ハードローム層に達しているため堅緻である。覆土は黒褐色土層が堆積し、ローム粒、焼土粒、炭化粒を含んでいる。特に最下層には細かい炭化材（竹を含む）が全面に堆積していた。底面及び下位の壁は火熱を受け硬化しており、小規模な炭窯としてよい。また、東壁（斜面上位）の中段に径20cmほどのピットが1か所設けられている。

遺物は出土せず、詳細な時期決定はできないが、新しい時期の構築かもしれない。

#### 58 (31) 号土塙（第74図、図版22）

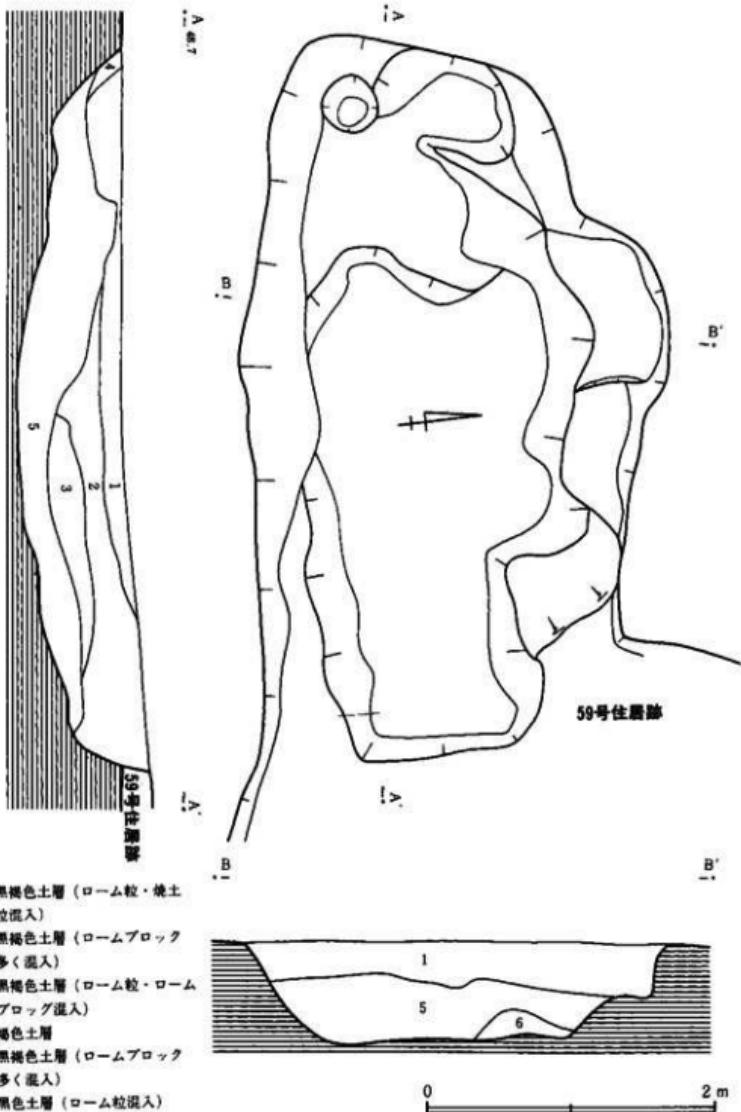
2次調査区の北側で59号住居跡の一部を破壊して構築されている。平面プランは不整形で何回も掘りかえされた結果と考えているが、個々の掘り込みを分離することは不可能であった。全体の規模は4.8m×2.8mを測り、長軸方向はほぼ東西方向を指す。確認面からの深さは最も深い部分で80cmを測るが、底面は何段もあり、最も浅い部分は10cm程度でしかない。覆土は黒褐色土層が主体となり、全体にロームブロックを多く含んでいる。また、部分的に住居跡の床面様の硬化面をブロック状に含んでおり、これらの土層を廃棄したものと思われる。遺物は安行I式の土器片が1点出土したが、本土塙に伴うものではない。

#### 61 (34) 号土塙（第75-77図、図版22-36）

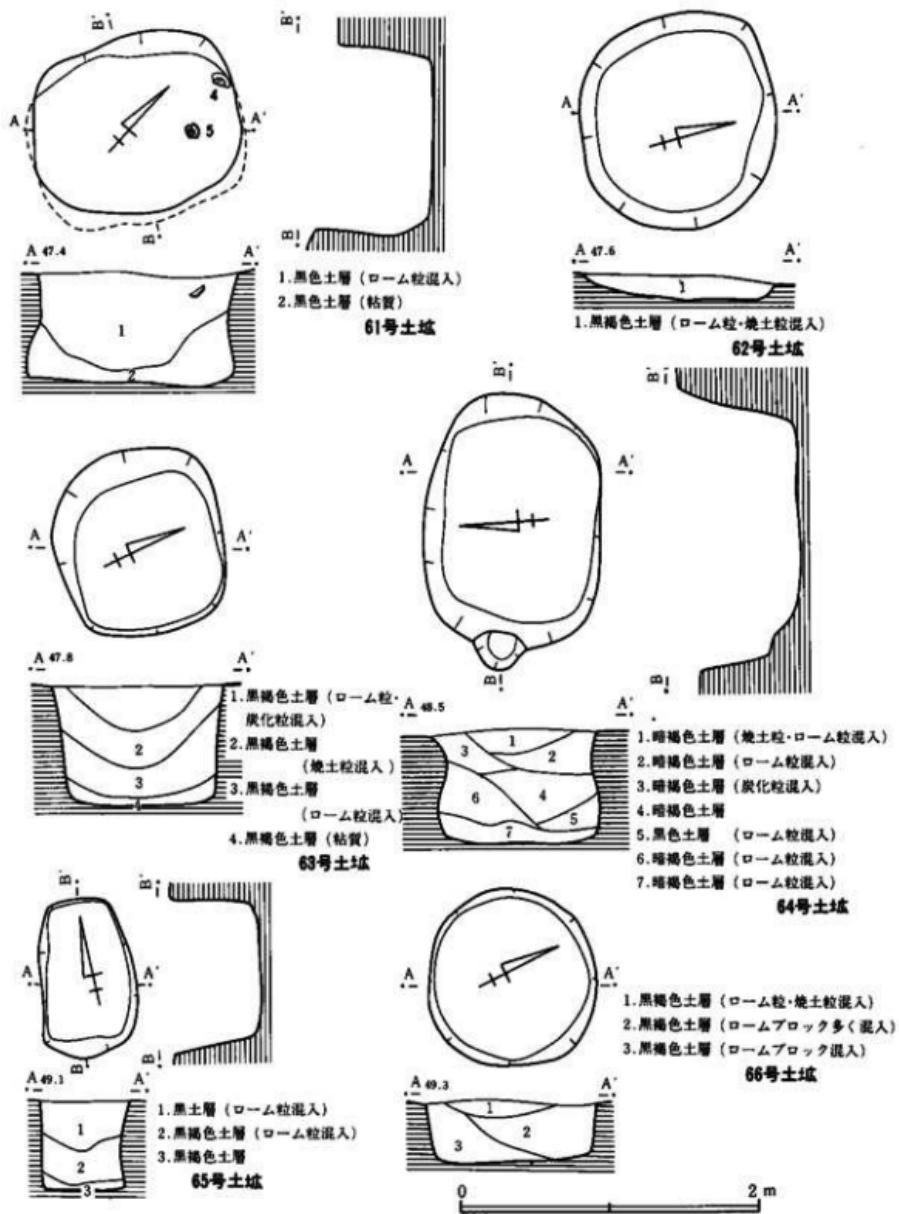
2次調査区の北端に3基並ぶ土塙の1基である。平面プランは隅丸方形を呈し、規模は1.4m×1.2mを測る。長軸方向はN-34°-Eを指す。確認面からの深さは40cmで、壁は東側が若干オーバーハングしている。また、西側も垂直に近く、かなりしっかりとした掘り込みである。覆土は黒色土層で、上層ではローム粒を混入している。また、堆積は極めて粗であり、確認面では足が沈むほどであった。このような事は通常の堆積では考えられないことである。あるいは有機質の蓋が存在したのかもしれない。底面はやや凹凸があるが、ハードローム層に達し、堅緻である。

遺物は土塙としては多くの土器片が出土し約30点を数える。このうち3点の杯が図示できた。うち2点は覆土上層から出土したが、1点は底面に近い位置であった。

遺物 4は全周の約 $\frac{1}{3}$ が遺存している。体部はロクロ調整で、直線的に開く。ヘラ削りは施されず、底部内面は粘土紐巻き上げの際の凹凸が残される。切り離しは回転糸切りで、ロクロ回転方向は右である。胎土には砂粒を多く含むが、焼成は良好で、色調は赤褐色を呈している。5は全周の約 $\frac{1}{3}$ を欠損している。法蓋は口径13.7cm、底径4.8cm、器高3.8cmを計る。体部はロクロ調整で、下半で膨れるが上半は大きく外反している。切り離しは回転糸切りで、ロクロ回転方向は右である。胎土には砂粒を多く含むが、焼成は4より良く、色調は赤褐色を呈している。6は高台が付くもので、貼り付け高台となる。高台は比較的高く1.1cmを計る。胎土には砂粒をやや含むが、焼成は良好で、色調は黄褐色を呈している。また、内黒処理がなされ、



第74図 58号土塙実測図



第75図 61・62・63・64・65・66号土壠実測図

内面は磨いている。

#### 62 (35) 号土塙 (第75・77図、図版22)

61・63号土塙の北約3mに位置している。平面プランは円形を呈し、規模は1.4m×1.2mと東西がやや長い。確認面から深さは20cmと浅く、壁の状態も不良である。覆土は単一で、ローム粒、焼土粒を含む黒褐色土層が堆積している。底面は掘り込みが浅く、また壁の状態が良くないにもかかわらず、極めて堅緻な底面が構築されていた。遺物は7が1点出土しただけである。

遺物 4は瓶で、口縁部が全周の約1/4遺存している。推定口径は30.8cmとなる。口縁部は外方へ大きく開き、横ナデで整える。また、粘土紐接合痕を残として、端部は内傾している。肩部は継位のタタキ調整の上をナデしており、部分的にタタキ目は消されている。タタキは幅広のもので、間隔は7mmである。内面は現存部分まで横ナデで、器面の荒れも少ない。なお、外面には1か所に突起が遺存しており、形状は円錐形を呈し、器面からやや下へ向って貼り付けられている。胎土には砂粒を含むが、仕上がりは精緻で、焼成も良い。色調は赤褐色を呈している。

#### 63 (36) 号土塙 (第75・77図、図版22)

61号土塙の東約1.5m、62号土塙の南約2mに位置している。平面プランは隅丸方形を呈し、規模は1.2m×1.0mを測る。長軸方向はN-71°-Wを指す。確認面からの深さは80cmを測り、壁はしっかりととした掘り込みで、ほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は黒褐色土層が堆積し、4層に分層した。上層では炭化粒、焼土粒を含み、下層は若干粘質である。堆積はやはり粗であったが、62号土塙ほどではない。底面は平坦で、プランはより方形に近い。底面と壁との境は明瞭で、またハードローム層に達しているため堅緻である。遺物は約30点の土器片が出土したが、図示し得たのは1点だけである、また多くは覆土上層から出土したものである。

遺物 8は壺で全周の約1/4が遺存しているにすぎない。体部はロクロ調整で、直線的に立ち上がるが、下半でやや丸味を有する。底部は僅かに突出し、切り離しは回転糸切りである。ロクロ回転方向は右である。胎土には砂粒を多く含むが、焼成は良く、色調は赤褐色を呈している。

#### 64 (37) 号土塙 (第75図、図版22)

56号住居跡の北約5mに位置している。平面プランはやや歪んだ隅丸方形で、底面はより明確な方形となる。規模は1.7m×1.2mを測り、長軸方向はN-80°-Wを指す。確認面からの深さは70cmを測り、壁はしっかりととした掘り込みで南北壁が僅かにオーバーハングしている。また西壁には直径30cmのビットが1か所設けられるが、断面図でもわかるように土塙の底面までは達していない。覆土は暗褐色土層が主体となり、ローム粒を含む層が多い。また、焼土粒、炭化粒を含む層も分層できた。下層では特にローム粒の混入が多い。底面は北西コーナー側がわずかに低くなっているが、とりわけ段を形成するようなものではない。構築状況は底面がハードローム層に達しており、堅緻である。遺物は土器片が僅かに出土しただけである。

### 65 (38) 号土塙 (75図、図版22)

47号住居跡の北約3mに位置している。平面プランは長方形を呈し、規模は1.1m×0.6mを測る。長軸方向はN-6°-Eを指す。確認面からの深さは60cmを測り、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。覆土は3層に分層したが、黒色土層、黒褐色土層が主体となり、ともにローム粒を混入している。底面は全く平坦で、堅緻である。また、壁との境も直角に近く、きわめて明瞭である。なお、遺物は全く出土しなかった。

### 66 (39) 号土塙 (第75図、図版22)

55号住居跡の北東約7mに位置している。平面プランは整った円形を呈し、直径は1.2mを測る。確認面からの深さは40cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は黒褐色土層が堆積しており、上層ではローム粒、焼土粒を混入するが、下層ではロームブロックを多く混入し、人為的埋戻しの可能性が指摘できる。底面は平坦であるがやや軟弱で、部分的に硬化面が認められるに過ぎない。遺物は土器片が数点出土しただけで、図示できるものはなかった。

### 69 (20) 号土塙 (第76図)

47号住居跡と重複しており、住居跡の床面を破壊している。平面プランは梢円形を呈し、規模は1.8m×1.2mを測る。長軸方向はN-70°-Wを指す。確認面からの深さは30cm程度で、壁の立ち上がりは緩かである。覆土は單一で黒褐色土層が堆積しており、状況はやや粗であった。底面はやや凹凸があり、プランはかなり歪んでいる。また、軟弱な部分が多くあったが、中央にピットが1か所設けられている。ピットは1回掘り変えられたようで、底面に僅かな段が認められる。土塙底面からの深さは25cmとなる。なお、遺物は全く出土しなかった。

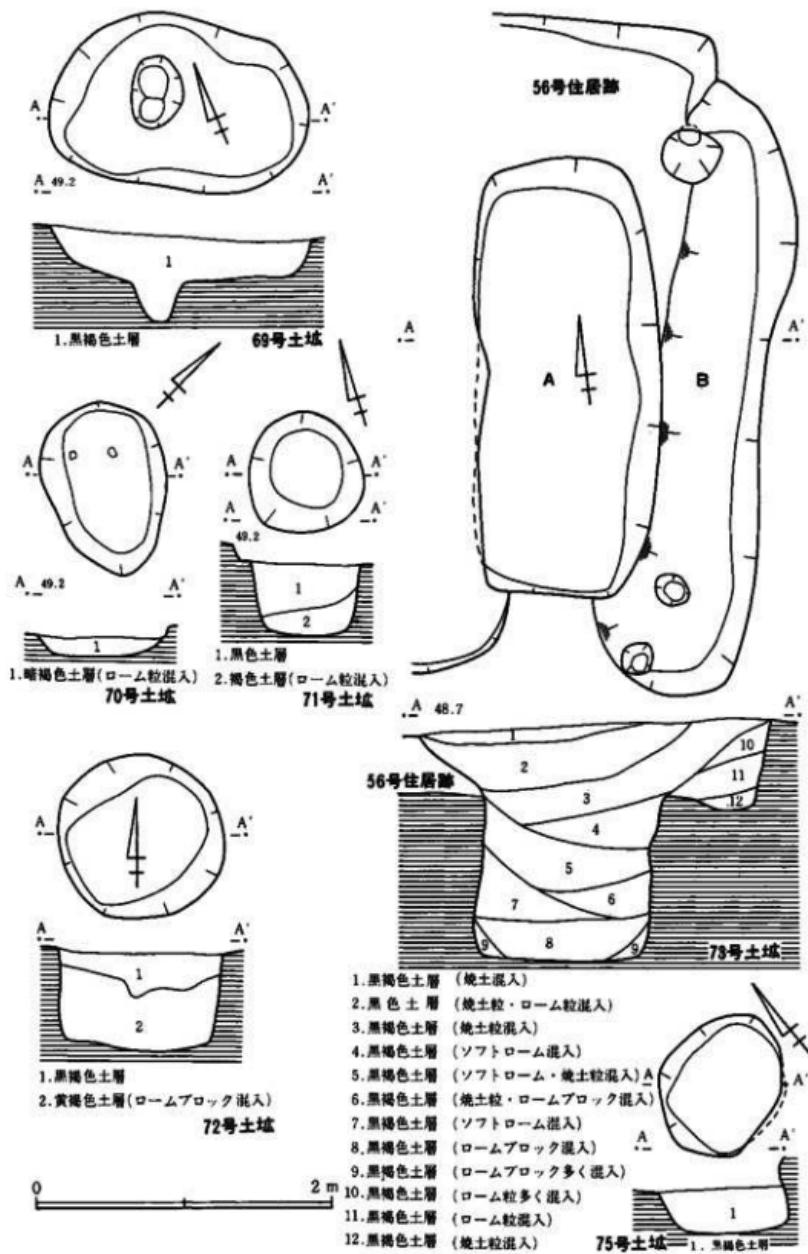
### 70 (20) 号土塙 (第76図)

47号住居跡と重複しており、住居跡床面を破壊して構築している。平面プランは不整梢円形を呈し底面プランはやや方形に近い。規模は1.2m×0.8mを測り、長軸方向はN-43°-Eを指す。住居床面からの深さは10cm前後で、住居跡の壁高を加えても20cmでしかない。覆土は單一で、ローム粒を混入する暗褐色土層が堆積していた。底面は中央に向けて緩かに傾斜し、やや軟弱である。

遺物は壺の底部破片が2点出土したが、図示できるものではなかった。

### 71 (20) 号土塙 (第76図)

47号住居跡と重複しており、住居跡の南西コーナー付近の床面を破壊して構築されている。平面プランは円形を呈し、直径は0.8mを測る。住居跡床面からの深さは30cmを測り、住居跡の壁高を加えて40cmとなる。壁はやや外方へ開くが、検出は容易で滑らかであった。覆土は2層に分層し、上層は黒色土層、下層はロームを混入する褐色土層であった。底面は壁際から中央に向けて若干低くなっているが、おおむね平坦として良い。遺物は土器片が数点出土しただけであった。



第76図 69・70・71・72・73・75号土壠実測図

### 72 (28) 号土塙（第76図、図版22）

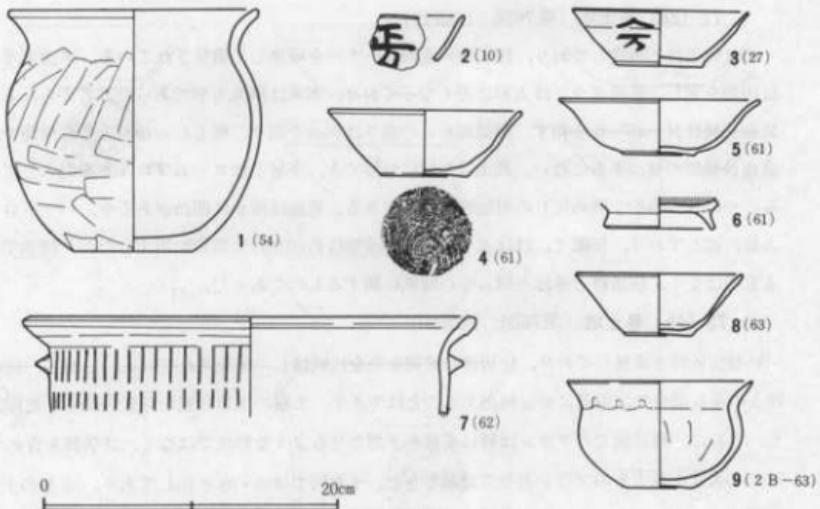
55号住居跡と重複しており、住居跡の北西コーナーを破壊して構築されている。平面プランは円形を呈し、底面プランは方形に近くなっており、本来は隅丸方形であったと考えられる。底面長軸はN-45°-Eを指す。確認面からの深さは70cmを測り、壁もしっかりとした構築で、底面長軸側の壁は垂直に近い。覆土は2層に分層でき、下層ではロームブロックを混入している。やはり人為的な埋め戻しの可能性が指摘できる。底面は僅かに凹凸があるが、ハードローム層に達しており、堅緻で、ほぼ水平である。遺物は約20点の土器片が出土したが、図示できるものではなく、住居跡とさほど隔らない時期に属するものであった。

### 73 (29) 号土塙（第76図、図版20）

56号住居跡と重複しており、住居跡の東側を完全に破壊して構築されている。しかし、住居跡との重複部分では明確に壁を検出することはできず、土層の堆積状態から先後関係を把握した。さらに、確認面でのプランは特に重複を予想させるような形状ではなく、住居跡を含めて、一つの大きな長方形のプランとして認識できた。平面図ではA・Bと示してあり、2基の土塙が重複しているようであるが、BはAに伴う施設であると考えるのが妥当である。機能としてはAへの入り口（昇降部）と考えている。Aの平面プランはおよそ長方形を呈し、規模は3.0m×1.2mを測る。長軸方向はN-10°-Eを指している。B底面からの深さは80~90cmと深く、Bの壁高を加えると、確認面からの深さは1.4mとなる。壁は垂直に近く、また西壁は全体にわずかではあるがオーバーハングしている。またごく僅かではあるが、構築の際の鋤跡も観察できた。底面には特に段差などは認められず南北壁へ向けて徐々に高くなっている。したがって底面中央と壁際のレベル差は5~7cmとなる。Bは前述したようにA底面より80~90cm上位に底面が位置している。平面プランは梢円形を呈し、規模は4.0m×0.8mと長軸長がAより長い。確認面からの深さは50cmを測り、東壁は垂直に立ち上がっている。底面は東壁際が最も低く、Aと接する部分はそこより10cm高くなっている。また底面には3か所のピットが検出され、北側のP1は直径40cmとやや大きいが、南側のP2・P3は直径20cmほどである。底面からの深さはいずれも30cmを測る。覆土はA・Bとも細かい分層が可能であったが、基本的な層だけの分層にとどめた。黒褐色土層が主体となって堆積しており、上層で焼土粒を混入する層が多く、中一下層ではロームブロックを混入する層が多い。堆積状況は左右からの互層となっているが、ロームブロックの混入について自然堆積とは断定しかねるが、むしろ人為的な要素を考慮すべきである。遺物は約20点の土器片が出土しただけであったが、土塙の形態からして土塙墓と考えられよう。

### 75 (13) 号土塙（第76図、図版16）

40号住居跡と重複し、住居跡が先行するようである。平面プランは隅丸方形を呈し、底面でより明瞭となる。規模は1.0m×0.8mを呈し、長軸方向はN-90°-Eを指す。住居床面からの



第77図 土器実測図

深さは30cmで、住居跡の壁高を加えると確認面からの深さは70cmとなる。壁は南壁側が若干オーバーハングしており、形態としては61号土壙に近い。覆土は單一で黒褐色土層が堆積し、焼土粒、炭化粒、ロームブロックを混入している。堆積はやや粗で、上位の土層について観察できなかつたが、ロームブロックの混入状況からは自然堆積とは断定できない。底面は平坦で、堅緻であった。遺物は約20点の土器片が出土したが、特に図示できるものはなく、40号住居跡とそれほど隔らない時期に属する。

### 第3章 大膳野北遺跡について

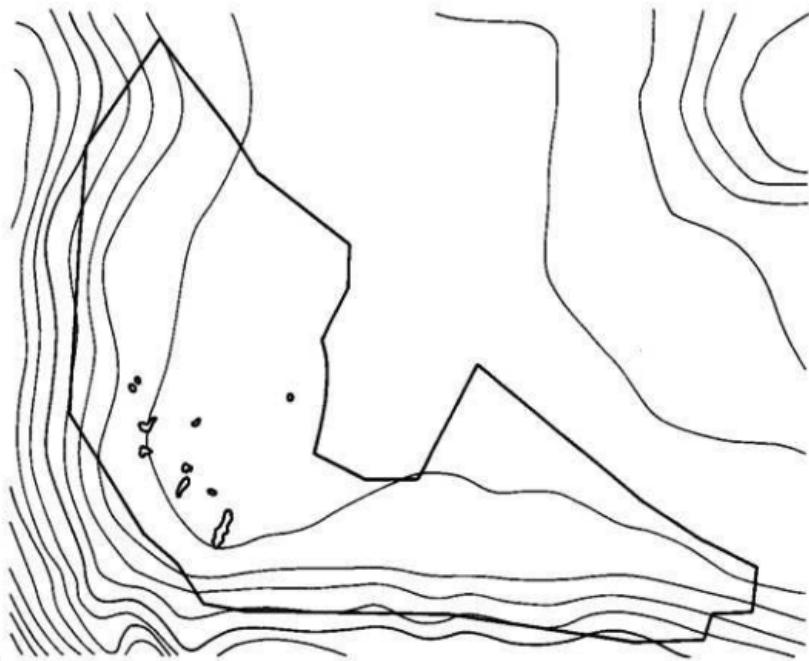
大膳野北遺跡からは縄文時代、古墳時代、歴史時代の遺構、遺物が検出され、各時代に人間が生活した足跡を刻んでいる。本書では第2章において個々の遺構、遺物について述べてきたが、本章ではそれらの遺構、遺物から読み取れる大膳野北遺跡の性格について触れてみたい。

本遺跡に構築された遺構は互いに大きな空白期間を有しており、大きく6期の区分が可能である。この6期の区分は本台地を直接利用し、その痕跡が遺構として残された時期に限ったものであり、単に遺物だけが残される。あるいは近隣する遺跡の時期を考慮に入れると、各期の空白期間はやや短縮できる。しかし、それもあくまで村田川支谷の最奥部のこの台地が利用された期間を示すものであり、それ以上の何ものも示すものではない。また、本遺跡の発掘調査面積は8,800m<sup>2</sup>と、それほど広大な面積の調査ではないが、各期の遺構が存在していると考えられる範囲にかなり近いものをカバーしていると考えられる。そういう意味では遺跡の全容がほぼ明らかになっており、各期とも遺構が分布する領域はそれほど広いものではない。さらに、時期ごとに遺構は偏在しており、台地の利用のしかたには特徴的なものが認められる。以下具体的に各期の概略を述べ、若干の私見を加えまとめとしたい。

#### I期

縄文時代早期末葉の炉穴群をI期とした。32・33・35・36・37・38・45・53・67・68・号炉穴が当該期の遺構として捉えられる。前章すでに述べたように、67号炉穴を除いた全てが2次調査区の台地南西縁辺部に占地している。遺構数は21基で、このうち20基が一群となって集中している。この範囲は約400m<sup>2</sup>の面積となる。これらは単独で存在するものと、数基が重複するものがあり、45号炉穴は7基以上の炉穴が重複している。形態としては他の遺跡での検出例と異なることはなく、規模も長軸長が3mを超えるものはない。長軸方向は足場を南西側に向けるものが主体をなし、N-30°E(33-A号炉穴)からN-70°E(35-B号炉穴)の間に11基が納まる。この向きはおおむね足場が谷を指すが、単に炉穴が占地する局所的な部分における谷の方向であり、一支谷の指す方向に向けられているわけではない。上記以外の方向性を有するものは33-B号炉穴、36-C号炉穴、45-A・B・C・D号炉穴がある。45-C・D号炉穴は南東方向に足場を有し、一応谷に向けて足場が設けられている。また、36-C号炉穴についても炉穴群の北端に位置し、地形に左右されて方位はずれるが、谷に向けて足場が構築されている。残された33-B、45-A・B号炉穴はこれらと反して台地内部に向けて足場が構築されている。

近隣の遺跡について見ると小金沢古墳群の下層<sup>1</sup>、ムコアラク遺跡<sup>2</sup>、六通金山遺跡<sup>3</sup>、バクチ穴遺跡<sup>4</sup>で同様に多くの炉穴が検出されている。小金沢古墳群下層では49基が南東に谷を臨んで群を形成している。明確な伴出遺物はないが、茅山上層式土器が出土している。ムコアラク遺跡

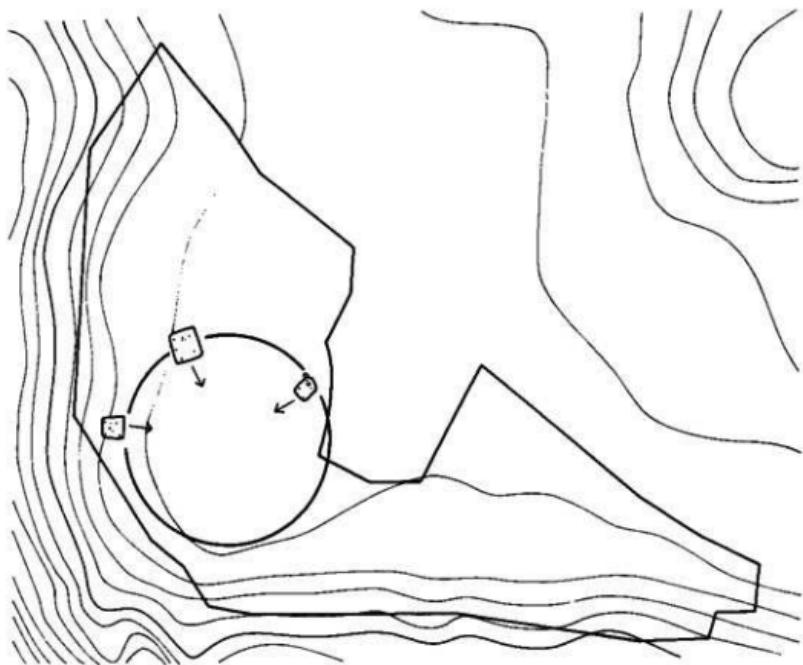


第78図 I期遺構分布図

ではやや散漫な状況であるが、一応群として捉えられ、東側に谷を臨んでいる。六通金山遺跡では43基が3群に分かれて集中している。このうち2群は小金沢古墳下層の炉穴群を凌ぐ規模で、西側に谷を臨んでいる。全てを明確な時期に区分することはできないが、FP11, FP15からは茅山上層式土器が出土している。バクチ穴遺跡は部分的な調査であったため全容は把握できないが、やはり群として捉えられそうで、北西側に谷を臨んで占地している。ここで問題となるのは、その構築時期で、多くの炉穴は時期決定されるような遺物が伴っていないのである。本遺跡で明確に遺物が伴うのは36号炉穴だけであり、具体性に欠ける。ほかにも33号炉穴出土土器2点を図示したが、いずれも細片で、鶴ヶ島台式土器として識別はできるが、遺構の時期決定となると、その可能性が指摘できるだけである。36号炉穴から出土した土器は内外面とも条痕で覆い、口縁部で横走、胴部では縱走ないし斜走する。また、口唇端部を棒状工具で押圧している。口唇部の調整はバクチ穴遺跡45号址出土土器に近似しているが、本例は尖底となる可能性が強く、茅山上層式よりは古いものと考えられる。

#### II期

縄文時代前期の集落をII期とした。30・31・52号住居跡が当該期の住居跡として捉えられ、



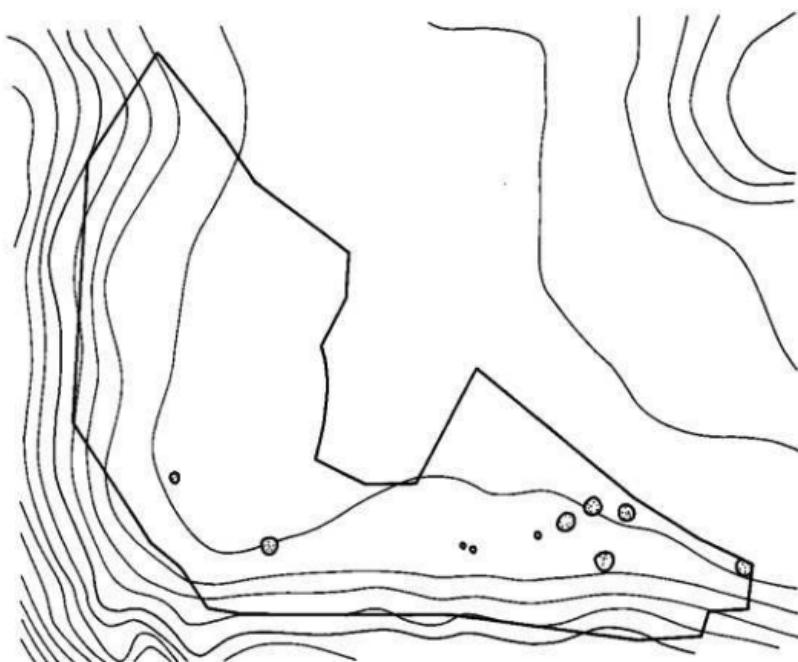
第79図 II期遺構分布図

黒浜式土器が伴っている。僅か3軒の住居跡ではあるが、千葉東南部地区で当該期の住居跡が検出されたのは初めてである。これまでの調査では有吉遺跡（3次）の1・2号墳墳丘<sup>5</sup>、バクチ穴遺跡B区包含層から比較的多くの土器が出土しているが、明確に遺構に伴う例はなかった。但し、本遺跡でのI期とII期の空白期間では有吉遺跡（2次）204号址<sup>6</sup>、バクチ穴遺跡28号址が僅かに検出されている。このうちバクチ穴遺跡は距離的にも非常に近く、特にB区包含層から出土した土器の中には、本遺跡の住居跡出土土器と共通する要素を含むものも見られ、その関係が注目される。

さて、本期の住居はI期同様2次調査区にのみ検出され、30号住居跡がやや斜面にかけて構築されているが、31・52号住居跡は台地平坦部に構築されている。平面プランは3軒とも方形を呈し、規模は31号住居跡が他の2軒に比べて大きい。主軸方向は30号住居跡がN-90°-W、31号住居跡がN-20°-W、52号住居跡がN-55°-Eと三者三様である。炉の位置も基本的には長軸の一端に片寄って設けられるが、住居跡の主軸方向が一定していないため、住居北側を原則としていない。柱穴もあまり規則的ではなく、主柱穴と考えられるのは、30号住居跡ではP1・P2・P7・P8、31号住居跡ではP1・P7・P8・P9・P13・P17・P19、52号住居跡では

P1・P5・P7・P10・P12が考えられる。それぞれを結ぶと、ほぼ長方形が描けるが、あまり整っているとは言いかたい。当該時期の住居の研究には笹森健一氏の論考があり、そこで言うCピット（炉または炉付近に位置するピット）も3軒とも炉と重複して存在するが、その機能は明らかではない。更に、3軒とも壁柱穴、また、それに変わる壁溝も有していない。

ここで特徴的なのは遺跡内における住居の配列である。本遺跡では明確な入口としての施設は明らかではないが、住居の奥に炉が設けられたと考えた場合、住居はある空間（地点）を中心として弧状に配置され、住居の正面はそれぞれ円の中心を向いている。この円の半径は約20mを測り、同時に台地の南側では円周がちょうど斜面にかかる。更に、各住居間の弧上の距離は円の半径とほぼ等しく、20m前後となる。住居の全体が明らかでない30号住居跡についても、現状で炉は住居東側に設けられたことはほぼ間違いない、住居の正面は谷に向くのではなく、台地中央を向いている。このようなことは飯山満東遺跡<sup>19</sup>、鴻ノ巣遺跡でも認められ、飯山満東遺跡ではいくつかのグルーピングの可能性も指摘できる。ここで問題となるのは、個々の住居跡の詳細な時期であり、特に本遺跡では3軒と数少ない住居で集落が構成されているため、その同時性はより大きな問題でもある。本遺跡の場合52号住居跡で比較的豊富な遺物が残されてはいるが、30・31号住居跡の遺物はやや貧弱な内容である。31号住居跡は規模も大きいことからことさら貧弱な感を受けた。逆に言えば、遺物が少ないとすることは残されていない、あるいは廃棄されていないとも考えられる。52号住居跡の遺物出土状況からは、住居内に廃棄された可能性が窺える土器も含まれ、極論ではあるが本来他の住居（30・31号住居跡）で使用された土器が混在しているかもしれない。そうなると30・31号住居跡と52号住居跡との間には先後関係が存在することとなる。それでは個々の遺物に目を向けてみよう。30号住居跡では9点を図示した（第21図）。1は本住居跡が炉穴群の範囲と重複することから混入したものと考えられるが、他は細片ではあるものの本住居跡とは決して無関係なものではないと思う。2～5は繩文の他に半截竹管を用いた平行沈線、有節平行沈線が施され、3のようにコンパス文が簡略化されたようなモチーフも観察できる。また、6のように細沈線が施されるものも含まれる。31号住居跡出土の土器も細片ではあるが、30号住居跡同様半截竹管を用いて平行沈線、有節平行沈線を施している。また、12のようにコンパス文に由来すると思われるモチーフも含んでいる。30・31号住居跡とも破片は小さく速断はできないが、これらの土器の文様構成からは両住居跡の土器を分離することは不可能である。52号住居跡の土器についても半截竹管を用いて平行沈線、有節平行沈線を施し、その構成も特に30・31号住居跡と分離できる要素はない。ただ1点異なることは竹管刺突文を施す土器が含まれていることである。第18図1、第22図27がそれで、1は円形竹管、27は半截竹管を用いた刺突が観察できる。しかし、現時点で他の遺跡での出土例を見ても刺突文を分離することは不可能であり、同様に52号住居跡でも33のように肋骨文が含まれることから殆ど先後関係は無いとするのが妥当のようである。これらの土器の示



第80図 Ⅲ期遺構分布図

す特徴は鴻ノ巣遺跡10号住居址、11号住居址の出土土器が近い例として掲げられ、新井和之氏の細分の第Ⅳ段階となり、黒浜式土器でも新しい段階に位置付けられる。従ってⅡ期の集落は比較的短期間に数少ない住居で構成され、円を基本とした空間を居住の領域としていたとして良い。また、集落は谷に向けて開放しており、谷を隔てた対岸には先に述べたバクチ穴遺跡が位置した。

### Ⅲ期

縄文時代中期の集落をⅢ期とした。3・12・13・18-B・24・43・57号住居跡が当該期の住居跡として捉えられ、加曾利E式土器を伴っている。この他にも縄文時代の土塙のうち、15・16・17号土塙が本期に属すると思われる。但し、住居跡と同じく加曾利E式土器が出土したのは15号土塙だけで、17号土塙からは図指しなかったが阿玉台式土器が出土している。集落を構成する住居は先の如く7軒を検出したが、Ⅰ期・Ⅱ期とは異なり、1次調査区の東端に分布の中心を置き、さらに東へ続くことが考えられる。本遺跡の東端は大膳野南貝塚（保存）へ繋ることから、むしろ大膳野南貝塚に集落の中心があったとも考えられる。しかしながら、2次調査区においても2軒の住居跡が検出されており、1次調査区の住居跡群とは約60m隔っている。

個々の住居跡は円形のプランを基本とし、規模は57号住居跡を除いて直径 3.5~4.0mと、ほぼ同じ床面積を有している。57号住居跡だけは直径約 2.5mと小さく、むしろ小竪穴的要素を含むが、前章で触れたようにP4の覆土内に焼土を若干含むことからこれを炉とし、住居と判断したものである。各住居跡の炉は床のほぼ中央に設けられ、著しい偏りはない。このうち1次調査区で検出された3・12・13・18-B・24号住居跡の炉は規模も大きく、多量の焼土が堆積しているのに対して、2次調査区で検出された2軒は先の57号住居跡のように粗末なもので大きな格差がある。ここで注目されるのは24号住居跡の炉で、炉の上面を貝層で覆っており、意図的な廃絶が考えられる。柱穴は5か所以上で構築されていたようで、完存する住居を例にとると、12号住居跡が6か所、13号住居跡が7か所、24号住居跡が8か所となる。後世の遺構に一部を破壊された3号住居跡、18-B号住居跡とも現存している柱穴で5か所を数える。柱穴の位置は比較的壁に近い位置にあり、当該時期の住居としては、ティピカルな例である。但し、43号住居跡だけはかなり炉に近い位置に設けられている。

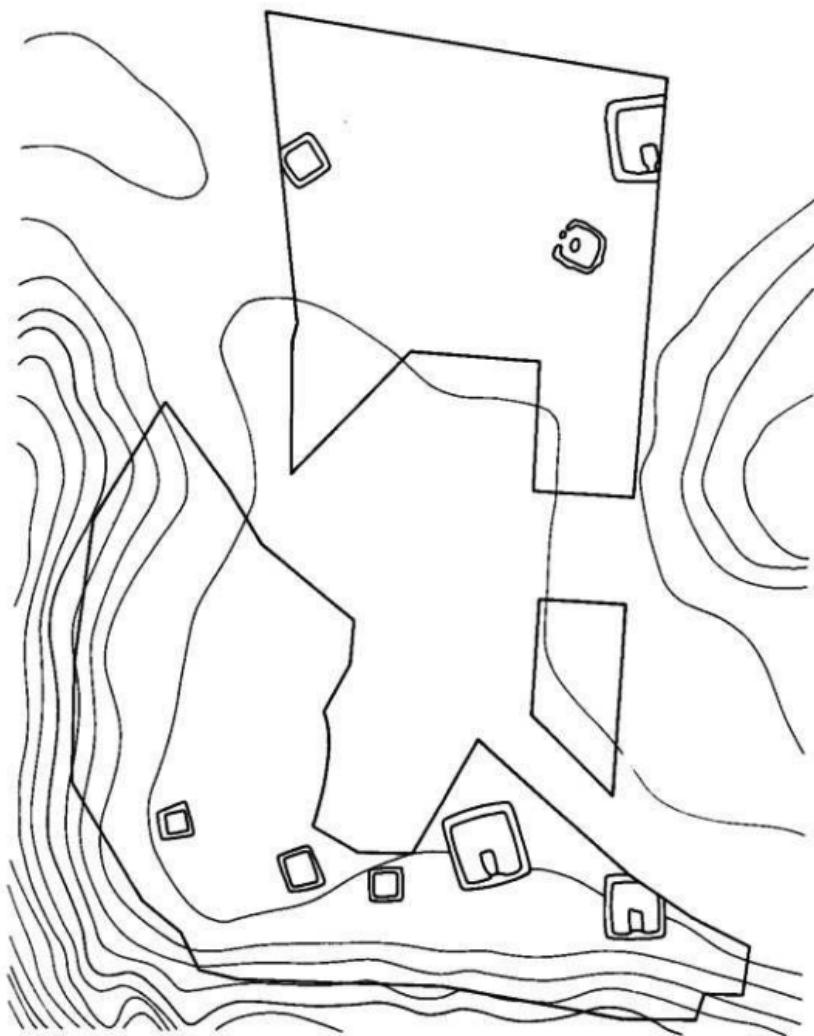
さて、千葉東南部地区における当該期の集落は、他にも六通金山遺跡、南二重堀遺跡で調査がなされている。六通金山遺跡は比較的近距離に位置しており、5軒の住居から集落が構成されている。占地は本遺跡と酷似し、支谷の最奥部となる。南二重堀遺跡では7軒の住居から集落が構成され、半径約40mの馬蹄形を呈している。六通金山遺跡での出土遺物は埋甕U02・03出土の土器に加曾利E II式の要素が残される。六通金山遺跡の住居跡出土の土器はそれより新しいもので、J04号跡では微隆帯で渦巻文を形成し、さらにJ01号跡を除いた全ての住居跡の土器はすでに「匂」字状の懸垂文が観察され、加曾利E III式土器としての特徴を備えている。<sup>13</sup> 南二重堀遺跡ではそれほど多くの土器を伴っていないが、13・18号住居址、81・82・88号址の遺物を見る限り、六通金山遺跡、U02・03の土器に近く、それよりやや新しいとも考えられる。ここで大猪野北遺跡の遺物に目を向けてみたい。12号住居跡では六通金山遺跡 J04号跡と同様微隆帯で上下2段の渦巻文を構成する土器が出土しており、大木96式併行として良い。中野僧御堂遺跡第1・2・3号住居址<sup>14</sup>の出土例を見ると、加曾利E III式ないし、E IV式にかけて伴うようである。13号住居跡出土の土器は、口縁部文様帶の退化が明瞭であるが、13などは加曾利E II式としての特徴を残しており、12号住居跡に先行するものとして捉えられる。3号住居跡は1点を図示しただけであるが「匂」字形の懸垂文が見られ、57号住居跡をも含めて13号住居跡より新しい様相を呈している。遺物の少ない18-B・24号住居跡についても拓図に示したように、ほぼ同様の土器であり、13号住居跡に近いものと考えられる。43号住居跡はII期の遺物の混入が多く、住居跡に直接伴う遺物が少ないので、14のように器台形を呈する土器も出土しており、ほぼ同時期であろう。このように見てくると、土器に現われた様相から13号住居跡(18・24号住居跡)→57号住居跡→3・12号住居跡の順序が考えられる。しかし、近年調査された茨城県筒戸A遺跡などの出土例を見る限り、加曾利E III式土器の様相ものと微隆帯、あるいは

「匚」字形の懸垂文が共伴することもあり、大きな隔たりはないと考える。但し、中野僧御堂遺跡での在り方で、微隆帯でモチーフを描く土器は分離できるとしてよい。そうなると、集落全体の傾向として、南二重堀遺跡（13号住居址・81・82・88号址）→六通金山遺跡（U02・03）→大膳野北遺跡→六通金山遺跡（J 02・03・04号跡）と捉えられよう。また小金沢貝塚1号跡<sup>16</sup>はさらに後出の段階である。

#### IV・V期

所謂古墳が築造された時期をIV期とし、方形周溝状遺構はV期として分離した。当該期の古墳は2基が検出され、また先述したように職業訓練校建設に伴い調査された003も含めて群が構成されていたようである。古墳はいずれも一辺13~18mの方墳であり、内部主体には横穴式石室が設けられている。これらは一墳一室を原則としているが、六通金山5号墳、ムコアラク8号墳、ひいては岩屋古墳のように一墳二室（ムコアラク8号墳は横穴式石室と箱式石棺の組み合わせ）の例も僅かに見られる。墳形、内部主体それぞれの主軸方位はN-17°WからN-0°の範囲に納まるものの、それほど大きな規制はなされていないようで、一応各辺が方位に対応できる程度となる。また、石室は南向きに開口するものが全てで、基本的には墳形の主軸に近い方向を指している。奥壁の位置は墳形対角線の交点に達することは希であり、達する例としてはムコアラク古墳群中の3・4号墳の2基でしかない。

本地域で終末期的様相を呈して方墳が現れるのは7世紀中葉以降であり、千葉東南部地区では先のとおりムコアラク古墳群、六通金山古墳群、そして大膳野北遺跡と同一支谷の比較的奥まった地域に集中する傾向がある。但し、木戸作1号墳だけは単独で存在し、内部主体は検出されなかったものの、墳丘も僅かに残存していた。県内ではその他にも東間部多古墳群、公津原古墳群をはじめ、いくつかの古墳群で方墳が採用されている。千葉東南部地区に限って言えば、その殆どが軟質砂岩の截石を積んだ单室の横穴式石室を内部主体としており、大膳野北1・2号墳も例外ではない。むしろ箱式石棺、あるいは木棺直葬は極めて例外的な存在である。この点村田川以南の方墳群とは対象的であり、栗田則久氏の指摘<sup>17</sup>のとおりである。これらの方墳群の群構成、変遷は先の栗田氏の論攻に詳しいが、最近渡辺修氏が後出の方形周溝状遺構を含めて論じている。それによると、ムコアラク古墳群はさらに2つのグルーピングが可能で、A群は前方後円墳（1号墳）を中心として占地し、前方後円墳から方墳への移行が考えられている。これに対してB群は方墳だけで構成され、A・Bともに方形周溝状遺構を含んでいる。六通金山古墳群も同様に2つのグルーピングが可能で、A群・B群とも円墳（1・4号墳）が先行して方墳へ移行することが出土遺物から確認されている。しかしながら、本地域に方墳が出現した以降も円墳は存続しており、小金沢1号墳第2主体部、8号墳第2主体部は明確に時期決定できる遺物が伴っていないものの、その形骸化した石室はムコアラク古墳群においてもかなり新しい位置付けが可能な9号墳に近いものと考えられる。小金沢古墳群とムコアラク古

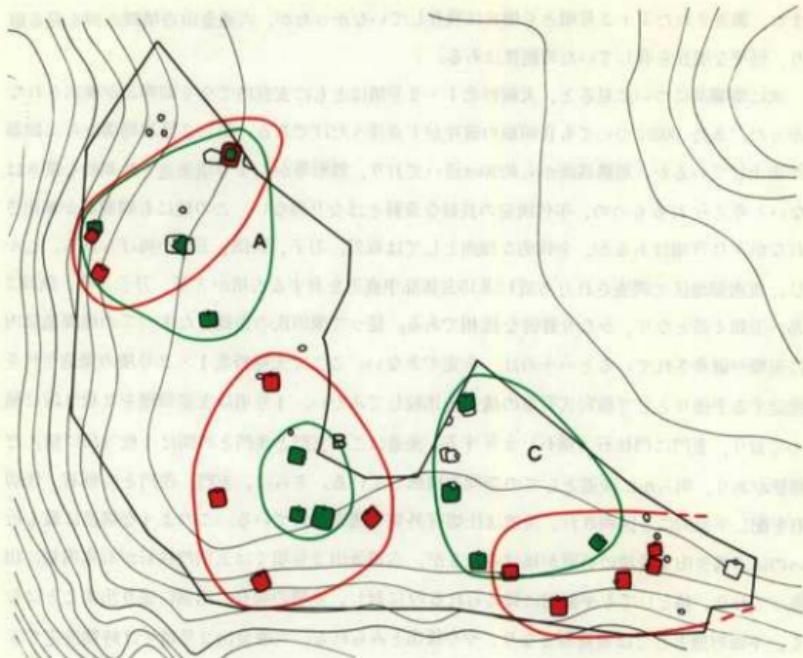


第81図 IV・V期遺構分布図

墳群は非常に近い位置関係にあり、小金沢2号墳などはむしろ椎名崎古墳群との関係が重視されるが、1~6号墳はムコアラク古墳群と対面している<sup>22</sup>。このような状況は集団の相違、さらには集団の相違に起因する墓制の相違があったようにも思われる。本遺跡では方墳に先行する古墳は検出されておらず、あるいは墳丘が低平であり、現在確認されていないかもしれない。

また、調査された1・2号墳とも墳丘は残存していなかったが、六通金山古墳群の例を見る限り、低平な墳丘を有していた可能性はある。

次に副葬品についてみると、大膳野北1・2号墳はともに玄室内で全く副葬品が検出されなかった。また003についても長頸瓶の破片が1点伴うだけである。但し2号墳周溝から土師器が出土しているが、周溝底面から約20cm浮いており、器形等から2号墳築造と時期的な開きはないと考えられるものの、年代決定の良好な資料とはなり得ない。この他にも副葬品が検出されなかった古墳はあるが、全体的な傾向としては直刀、刀子、鐵鎌、玉類が掲げられる。しかし、東南部地区で調査された方墳13基15主体部中直刀を有する古墳が3基、刀子3基、鐵鎌2基、玉類4基となり、かなり貧弱な様相である。従って栗田氏の指摘したすべての埋葬施設内に玉類が副葬されているというのは、肯定できない。ここで大膳野北1・2号墳の築造年代を推定する手掛りとして横穴式石室の構造を比較してみたい。1号墳は玄室側壁を2枚3段に積んでおり、玄門に門柱石（袖石）を有する。羨道はこの玄門と羨門との間に1枚3段に積んだ側壁があり、明らかに羨道としての空間を構成している。さらに、玄門、羨門とも框石、仕切石を配し平面的に区画され、羨道は仕切石外側で閉塞されている。このような構造に最も近いのは六通金山2号墳の石室が掲げられるが、六通金山2号墳では玄門門柱石が石室内側に出張っており、袖としても平面的に捉えられるのに対し、本墳の場合、内側に張り出すことはなく、平面形態としては短冊形となり、やや後出とみられる。六通金山2号墳では時期決定できる遺物がなく、六通金山2号墳の前段階の築造とみられる同1号墳の出土の須恵器から同1号墳を7世紀第1四半世紀から第2四半世紀とし、同2号墳はそれより下降するところから、本墳は7世紀第3四半世紀前後の築造と推定される。次に2号墳の石室は1号墳より後出のもので、玄室の側壁は2枚2段に積んでおり、同様に玄門に門柱石を有する。2号墳の場合門柱石は、やや石室内側に出て、袖としての平面形態を有するが、やはり短冊形に近いものである。ここで1号墳と大きく異なるのは、玄門、羨門の両門柱石が並んで据えられており、それぞれに框石、仕切石が配されている点である。即ち、側壁の構造としては明確な羨道を意識しておらず、両門柱石に挟まれた框石と仕切石との平面的空間を羨道として捉えることが可能となる。1号墳と比較してかなり形態化した羨道となるが、玄門を直接閉塞する段階にまでは至っていないようである。このような構造の石室はムコアラク4・8号墳、六通金山5号墳第2主体部があり、大膳野北003もほぼ同じ構造となる。これらも明確に年代決定をできるものは少ないが、六通金山5号墳第2主体部出土の長頸瓶蓋は7世紀後半として良く、大膳野北003の長頸瓶破片も8世紀に入る可能性がある。従って本墳も7世紀終末の築造が推定される。所謂古墳は8世紀に入って姿を消し、方形周溝状遺構、円形周溝状遺構として引き継がれているようである。<sup>25</sup> 本遺跡でも3基の方形周溝状遺構が検出され、うち54号方形周溝状遺構周溝出土器から8世紀前半の年代が与えられる。時期的に墓制の変化からIV・V期と区分したが、年代とし



I期　II期

第82図 IV期遺構分布図

この辺りの状況は所謂陵墓として扱えられる古墳が7世紀に入り前方後円墳から円墳・方墳あるいは上円下方墳へと変質し、特に大王陵とされるものは7世紀中葉から八角形墳となる。

そして7世紀後半から古墳は消滅に向かうのであるが、この東国における方墳の出現はこのような大王陵並びに支配者階層墓の変質が少なからず影響しているのではないだろうか。

#### VI期

平安時代の集落をVI期とした。VI期は本遺跡で最も多くの遺構が構築された時期であり、住居跡29軒、土塙20基を数える。住居跡、土塙とも1次・2次両調査区で検出されているが、北側の職業訓練校では当該期の住居跡は検出されていない。従ってすでに述べたように集落の範囲にかなり近い面積を調査したと言つて良い。

住居跡の規模は概して小さく、長軸長が4mを超すものは46・56-A・59-A号住居跡の3軒でしかない。また壁溝を廻らすことが原則となっているようで、多くの住居跡で壁溝が検出されている。しかし、明確な柱穴を有するものは少ない。カマドの構築方向は住居跡北側に設

けられるものが19軒を占め、東側、西側がそれぞれ3軒で、残りは位置が確定できない。なお、東側にカマドを設けた住居跡のうち40-B号住居跡は隅カマドとなっている。住居内で使用された土器の基本的セットは甕2種（大・小）、壺2種（大・小）があり、量的には少ないか甕、皿が加わるようである。しかし、これらの器種が揃っている住居は1軒もない。これらの器種のうち量的にも多く、さらに多くの住居跡から出土したのが壺であり、19軒の住居で完形あるいは完形に近い形で出土している。これらの壺は全てロクロ調整で、底部に糸切り痕を残し、切り離し調整を加えるものはごく僅かである。その次に多いのが器高20cm以上の大形の甕で、14軒で見られ、そのうちの6軒が2個体を有している。但し、完形で出土したものではなく、40-B号住居跡のように明らかに廃棄の結果と考えられるものも含まれ、実数は確定できない。器高15cm以下の小形の甕はさらに少なく、8軒の住居跡から出土し、うち5軒は完形で、カマド内に残されていた。皿、甕はそれぞれ1軒ずつで、甕に関しては底部の破片が出土したにすぎない。これらの関係を表に記したので参考されたい。なお、便宜的にそれぞれの器形を細部の特徴からいくつかに細分してみた。細分の基準は次のとおりである。

壺 器高及び体部の立ちあがりによって6細分した。5・6は壺的な大形の壺である。

1. 体部が直線的に立ち上がるもの。
2. 体部が内窩気味に立ち上がるもので、棱をなすものと、曲線的なものがある。
3. 体部が外反して立ち上がるもの。
4. 体部が上半で開くもの。
5. 大形の壺で体部が内窩気味に立ち上がるもの。
6. 大形の壺で体部が直線的に立ち上がるもの。

甕 器高及び口唇部の形態で4細分した。

1. 大形の甕で、口唇部を丸く納めるもの。
2. 大形の甕で、口唇部が直立するもの。
3. 大形の甕で、口唇部が内傾するもの。
4. 器高15cm以下の小形の甕。

本遺跡で最も多くの住居から出土した壺は、先述したように殆んどに糸切り痕が残されたままで、切り離し調整が施されるものはごく僅かである。表には切り離し調整の有無を表示しなかつたが、タイプとして3・4・5・6には例外なく施され、特に5・6は底部全面、及び体部下端に手持ちでヘラ削りを施す。3は器形的にやや古式な感を受けるが、後に述べるI・IIそれに伴っている。しかし全体に器形にはそれほど大きな違いはなく、かなり近接した時期に納まるようである。口径と底径の比は2つのグループとして捉えられるようで、口径が底径の約2倍と2.3倍に集中している。表では前者をI、後者をIIとして表示し、時間的先后関係を有する可能性があるものとして考えた。このI・IIの区分は遺構分布図にも表示した。

		杯						表				皿
		1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	1
I	A	59-B 40-A 56 44	●					●		●		
	B	47 48 46	● ● ●	●		●	●	● ●	● ●		●	
	C	5 11 7 18-A		● ● ●	●	●		●		● ●	● ●	
II	A	59-A 40-B 39	●	●	● ●	●		●	● ●	●		●
	B	55 42 49 51		● ● ● ●	● ● ● ●	● ● ● ●		● ● ● ●	● ● ● ●			
	C	8 6 2 1 4		● ● ● ● ●		● ● ● ● ●		● ● ● ● ●	● ● ● ● ●			

土器分類表

その結果雖然と分布しているかのように見えた住居跡は3つの群に分かれて1つの集落を構成していることが明らかとなった。これらを便宜的に北からA・B・Cとし、表でもこの群によって住居跡を区別した。従ってA・B・Cの各群に先述したI・IIの区分が成立立つ。これらは各群が逐一的に移行したものではないにしろ、全体的な傾向としてはII期区分が可能である。但し、Iとした住居に先行する住居も僅かではあるが存在している。例えば56-A号住居跡は出土遺物がないものの、56-B号住居跡(I)に先行することは間違いない。また、C群の中でも11・18-A号住居跡は坏の口径と底径の比が2倍に満たないもので、同群の5・7号住居跡に先行する可能性を含んでいる。住居跡の占地は、5・55号住居跡を除いて台地周縁となる。A群では40-A号住居跡を除いて平坦部にあったものが56・44号住居跡が廃絶し、新たに39号住居跡が斜面に構築されている。また、40・59号住居跡は同じ位置に建て替えられているが、40号住居跡では40-A号住居跡の礎土を切っており、時期差があまりないことを考えると、40-A号住居跡を撤去し埋め戻した後にB号住居跡を構築したと考えられる。A群の特徴として

は半分の住居がほぼ同じ位置に再び建てられていることである。B群はIが3軒、IIが4軒となり、外方へ拡大しているが、斜面への進出は49号住居跡1軒だけである。また46・48号住居跡は主軸方向をともにN-20°Eにとるが、かなり接近しており、同時存在したとするにはやや疑問である。48号住居跡の坏にはIIに近いものも若干含まれ、あるいは46→48となるかもしれない。C群では台地平坦部に位置していた住居が悉く斜面に降りてきている。1つの傾向として捉えられよう。

さて、土器のセットとの関係を見てみたい。ここでは坏を中心的に扱ってきているが、坏1・2・3については各群I・IIともほぼ同じように出現している。ただ、坏4が若干IIに多く出現するようで、宮内勝巳氏のⅦ期の特徴を現わしている。また、壇的な5・6についてはI・IIとも各群で1軒ずつ所有しており、1~4の坏とは明らかに性質の異った器種である。坏5・6を所有する住居と他の住居を区別する根拠は何も無いが、有吉遺跡等でも数軒に1軒での割合でこのタイプの坏が出土している。土器セットのより詳細な検討によって、何らかの性格が導き出されるのであろうが、本遺跡ではセット関係が整っておらず、課題として残されよう。壇についても1・2・4の出現にはI・IIに何ら違いはないものの、3はIIにのみ伴っている。大形の壇の出土状態からは明白できないが、やはり口唇部が内傾するものは新しい様相とみられ、下總国分遺跡の例に共通する。これらの具体的年代を決定する資料は当遺跡内に無く、坏の形態は駒形遺跡C-2土塙、布佐・余間戸遺跡などで近似したものが出土しているが、足高高台付坏は見られず、それよりは若干古いものと見られる。しかし、所謂すべ焼成や須恵器の坏は全く見られず、10世紀代であることは確実である。本遺跡では明確な灰陶陶器の共伴はないが、江原台遺跡、有吉遺跡等では、K-90からO-53が伴うようで10世紀第2四半世紀から第3四半世紀としてよいであろう。

本期では住居跡の他に20基の土塙が検出されている。いずれも明確な遺物を伴う例は少ないが、10・27号土塙で墨書きされた坏が出土している。また、61・62・63号土塙で実測しうる土器が出土し、62号土塙が壇であるほかは坏となる。坏の形態は住居跡出土の坏と大差ではなく、先の分類に基づくならば8が坏1、3・4が坏2、5は口縁部が開くが、やはり坏2としてよい。さらに、口径と底径の比は3がI、4・5・8がIIとなる。土塙の形態は円形ないし隅九方形となるものが主体であり、このような土塙は当該期の各遺跡で少なからず検出されている。73号土塙は明らかに土塙墓として捉えられる形態で、IV・V期の周溝という区画を有する墓域が消失して後の墓制であり、佐倉市立山遺跡のように、円形周溝の周溝内土塙として同様な形態の土塙が採用されている例もある。この他の円形、隅九方形を呈する土塙も61号土塙の埋土の状況を考えると、土塙墓としての可能性は非常に高いものである。

以上6期に分けて、本遺跡の在り方を述べたが、各期それぞれの占地をとり、集落あるいは墓域を構成している。I期とII期は時期が近いためか似たような占地形態で、台地先端の利用

が窺えた。このような意味では台地全体を利用するという点でⅣ・Ⅴ期とⅥ期も同じ占地と言えないこともない。個々の事象についての詳述には及ばず、各期の問題点をかいつまんで述べてみた。

## 註

- 1 白井久美子 「小金沢古墳群」 『千葉東南部ニュータウン8』 1979 (財) 千葉県文化財センター
- 2 田坂 浩 「ムコアラク遺跡」 『千葉東南部ニュータウン8』 1979 (財) 千葉県文化財センター
- 3 関口達彦 「六通金山遺跡」 『千葉東南部ニュータウン11』 1981 (財) 千葉県文化財センター
- 4 大野・鶴田 「バクチ穴遺跡」 『千葉東南部ニュータウン14』 1983 (財) 千葉県文化財センター
- 5 栗田・大野 「有吉遺跡(第3次)」 『千葉東南部ニュータウン14』 1983 (財) 千葉県文化財センター
- 6 前出
- 7 種田齊吾 「有吉遺跡(第2次)」 『千葉東南部ニュータウン5』 1978 (財) 千葉県文化財センター
- 8 笹森健一 「縄文時代前期の住居と集落」 『土曜考古3・4』 土曜考古学研究会
- 9 清藤一順他 「飯山溝東遺跡」 1975 (財) 千葉県都市公社
- 10 古内 茂他 「柏市鴻ノ巣遺跡」 1974 (財) 千葉県都市公社
- 11 新井和之 「黒浜式土器」 『縄文文化の研究3 縄文土器I』 1982 雄山閣
- 12 このような例は比較的近距離にある六通金山遺跡J04号跡でも見られる。
- 13 伊藤智樹 「南二重塁遺跡」 『千葉東南部ニュータウン12』 1983 (財) 千葉県文化財センター
- 14 中村恵次他 「千葉市中野僧御堂遺跡」 1976 (財) 千葉県文化財センター
- 15 桜井二郎他 「筒戸A遺跡」 『水海道都市計画事業、小胡土地区調整事業地内埋蔵文化財調査報告書2』 (財) 茨城県教育財團
- 16 鶴田・小宮 「小金沢貝塚」 『千葉東南部ニュータウン10』 1982 (財) 千葉県文化財センター
- 17 白石 浩 「千葉市大膳野北遺跡」 1982 (財) 千葉県文化財センター
- 18 昭和58年度に調査された六通神社南遺跡では木棺直葬を内部主体とする方墳が調査されており、現在整理作業中である。
- 19 栗田則久 「千葉県東南部地区における方墳の様相」 1983 千葉県文化財センター研究連絡誌第5号
- 20 渡辺修一 「群小区画墓」の終戸期—所謂方形周溝造構をどう見るか— 1983 千葉県文化財センター研究連絡誌第6号
- 21 前出 なお第1主体部の石室もさほど遙からぬ時期と考えられる。また周溝内から出土した短頭壺は7世紀後半と考えられるものである。
- 22 栗田氏も方墳の立地を「限られた台地上」としている。
- 23 金丸 誠 「房総半島における方形、円形周溝について」 1982 千葉県文化財センター研究連絡誌第1号  
山岸良二 「『方形周溝状造構』研究序説(1)一千葉県の現状分析」 『東邦大学附属東邦中学校研究紀要第2号』 1983  
渡辺 修一前出

- 24 宮内勝巳 「東京湾沿岸における奈良・平安時代の土器の様相」 『房総における奈良・平安時代の土器』  
1983 史館同人
- 25 寺村光晴他 「下総国分の遺跡」 和洋女子大学  
宮内勝巳 「下総国分遺跡第1地点」 『昭和56年度埋蔵文化財発掘調査報告』 1982 市川市教育委員会  
宮内勝巳 「下総国分遺跡第2地点」 『昭和57年度埋蔵文化財発掘調査報告』 1983 市川市教育委員会  
石田 勝 「下総国分遺跡第3地点」 「同上」 同上
- 26 金丸 誠 「佐倉市立山遺跡」 1983 (財) 千葉県文化財センター

## 結語

これまで述べて来たように、本報告書は、昭和55年度、57年度の2次にわたって実施された、大膳野北遺跡の調査報告書である。大膳野北遺跡は、千葉東南部ニュータウン計画地外の、職業訓練校建設に伴い昭和56年度に実施された大膳野北遺跡と同一のものである。先の調査でも方形周溝状遺構を中心とした成果が得られたが、今回の調査でも、各時代にわたる良好な資料が得られている。

縄文時代では、早期条痕文土器を伴う炉穴群のほか、前期前半、中期後半の集落が検出されている。炉穴群については、バクチ穴遺跡など、数か所の周辺遺跡などでも検出されており、それぞれに時間差も認められる事から、各遺跡の変遷、また、炉穴の各時期における変化を知る良好な一資料である。また、東南部地区では初めて検出された前期集落については、これまで確認されていた当該期の包含層との関連により、この集落の人間達の行動を理解する上で基礎的資料と成り得るだろう。また、中期後半の集落については、周辺に存在する貝塚群との関連の上で、貝塚を有する集落と有しない集落がどのような補完関係にあったのかを知る好資料である。

古墳時代では2基の方墳が検出されているが、いづれも7世紀終末の築造である。本遺跡の主体部は、いづれも横穴式石室であったが、副葬品は検出しなかった。東南部ニュータウン内には多くの古墳（群）が存在するが、7世紀代のものが圧倒的に多く、隣接する千原台ニュータウン内には6世紀代の古墳（群）が多い事はすでに指摘されているところである。

8世紀代の遺構として方形周溝状遺構が3基検出されている。いづれも主体部は検出できていない。本地区は、7世紀代の古墳に引き続く8世紀代の方形周溝状遺構も例が多い。

この他、平安時代の集落が調査された。29軒の住居跡、20基の土塙が確認されており、比較的短期間に営まれた集落の、ほぼ全域を調査したもので、この時期の集落の実体を明らかにし得るものである。集落は10世紀代のものと考えられ、環の分類により、特定のタイプの出土状況から、集落の構成単位を試みている。

千葉東南部ニュータウン造成地内の発掘調査は、昭和49年4月に開始されて以来10年が経過した。この10年の間に、約35か所の調査予定の遺跡に対し、すべてが完了していないものの約25か所の調査が実施されている。その結果、今年度調査分を含めると、住居跡約1,000軒、古墳約100基などの調査が行われた事となる。これらの調査により、数量的には勿論、質的にも多大な成果が得られて来ている。しかし、これらの成果が、はたして、考古学的にも、又、生きた歴史資料として充分生かされて来たかどうかを見る時、この10年間、充分納得できる事が成されていない感がある。

11年目を迎える、1,001軒目の住居跡、101基目の古墳の調査に際し、調査、整理、活用のあり方などに関して、一層充実した内容を追求する事が、今日の我々の課題であろう。

## SUMMARY

This is the report of the excavations at Daizenno-Kita site, located in lots 543-2, Ohkanezawa-cho, Chiba-shi, Chiba prefecture. The Japan Housing and Urban Development Corporation planned the Chiba South-eastern New Town Housing project in southern part of Chiba-shi where this site was located. Because of the project, it came to be destroyed. So for the purpose of leaving the records of archaeological data from the site, the Chiba Prefecture Center for Cultural Properties carried out the excavations conducted by the Education Bureau of Chiba Prefecture prior to destruction activities.

The site is situated in a tableland above a tributary of the upper Murata river which flows through the boundary of Chiba-shi and Ichihara-shi. Its elevation is about 50 meters above sea level.

Two seasons of excavations during from December 1 in 1980 to January 31 in 1981 and from November 1 in 1982 to March 31 in 1983 have unearthed about 8800 square meters and uncovered many features and remains in Jomon, Kofun and Nara-Heian periods.

### JOMON ERA

There were recovered many features and remains from three phases, Earliest, Early and Middle Jomon. On the south-western slope of the tableland, there were twenty one fire-pits of Earliest Jomon. Some of them cutting each other, they could be divided into ten groups (Nos. 32, 33, 35-38, 45, 53, 67, 68). There was few artificial remains in fire-pits without some Jokommon (shell-scraped) potsherds from Nos. 33 and 36.

Three pit-houses were uncovered of Early Jomon ( Nos. 31, 32, 52). They were square in plan ranging in size from 4 to 6 meters on a side. From the No. 52 pit-house, some quantities of potsherds were unearthed but others contained a few. All pottery from this phase had characteristics of Kurohama type.

There were uncovered seven pit-houses of Middle Jomon (Nos. 3, 12, 13, 18B, 24, 43, 57) which were round in plan, ranging from 3 to 4 meters in diameter. Each house had a fireplace in the center of the floor and only No. 13's was surrounded by fragments of pottery. The pottery from these houses were Kasori E III type.

Other features in this era were eight pits (Nos. 14-17, 25, 26, 41, 74) which could not be dated precisely. Two of them (Nos. 41, 74) were thought to be trap-pits.

### KOFUN PERIOD

Two mounds of Kofun were discovered. Both were square in plan, one was 14 meters on a side and another 16 meters. They had so-called 'horizontal burial stone chambers' which was popular in this district. Although there were no grave-goods, they were thought to have been constructed in the second half of 7th century from the style of burial chamber.

### NARA-HEIAN PERIOD

There were three square ditches (Nos. 34, 50, 54) without any facilities. The nature of these features could not be determined but the date of diggings was clear from the jars of Haji pottery in No. 54 that it was the first half of 8th century.

There were uncovered twenty six pit-houses (Nos. 12, 4-9, 11, 18A, 19, 39, 40A, 40B, 42, 44, 46-49, 51, 55, 56, 59A, 59B, 60). All houses were square in plan ranging in size from 2.5 to 4.5 meters on a side. They were equipped with clay oven which were

located in a niche usually in the center of the north wall, but mostly poorly preserved. These houses can be divided in two subphases and three groups within the first half of 10th century. Twenty pits (Nos. 10, 20, 21, 23, 27-29, 58, 61-66, 69-73, 75) were also uncovered. The pit No. 73 could be regarded as burials and other small pits might be so.

As mentioned above, it was clear from the investigations that this site had been occupied or utilized during from Jomon era to Heian period intermittently. Though large settlements were not formed at any stages, pretty good living conditions seemed to be continued throughout these periods.

## CONTENTS

Preface

Prefatory remarks

### CHAPTER I INTRODUCTION

1. Location and Surroundings of the Site
2. Process and Method of the Excavations

### CHAPTER II FEATURES AND ARTIFICIAL REMAINS

1. Jomon Era
  - (1) Fire-pits
  - (2) Pit-houses
  - (3) Pits
  - (4) Remains out of features
2. Kofun Period
3. Historical Period
  - (1) Pit-houses
  - (2) Square ditches
  - (3) Pits

### CHAPTER III ABOUT DAIZENNOKITA SITE

Summary

# 写 真 図 版



1. 遺跡遠景



2. 遺跡遠景

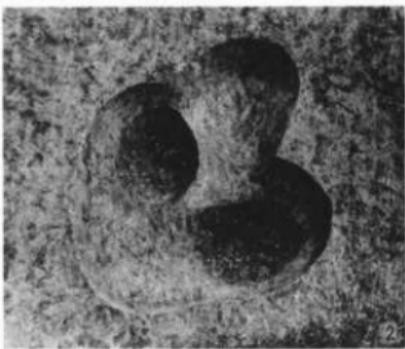


3. 遺跡近景（調査中）

1. 32·35号炉穴



2. 33号炉穴全景



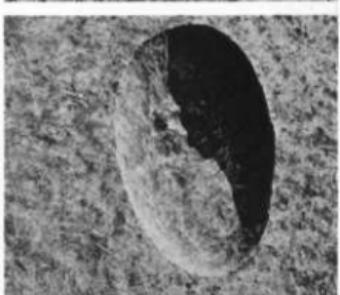
3. 35号炉穴全景



4. 36号炉穴全景



5. 32号炉穴全景

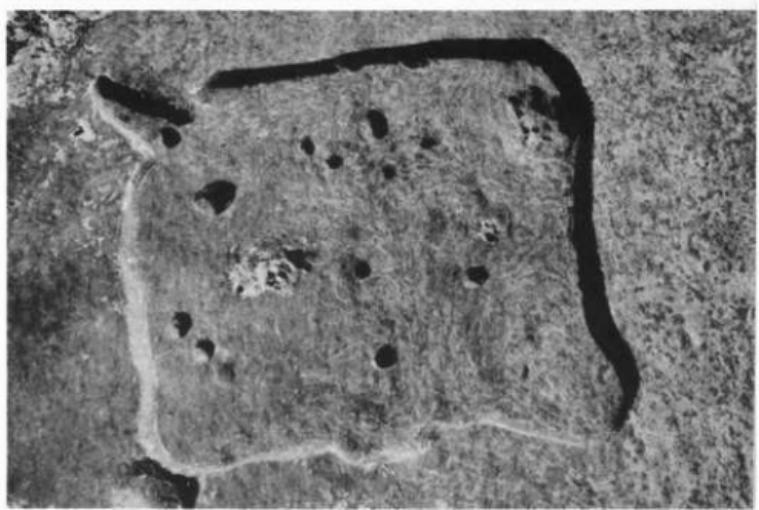
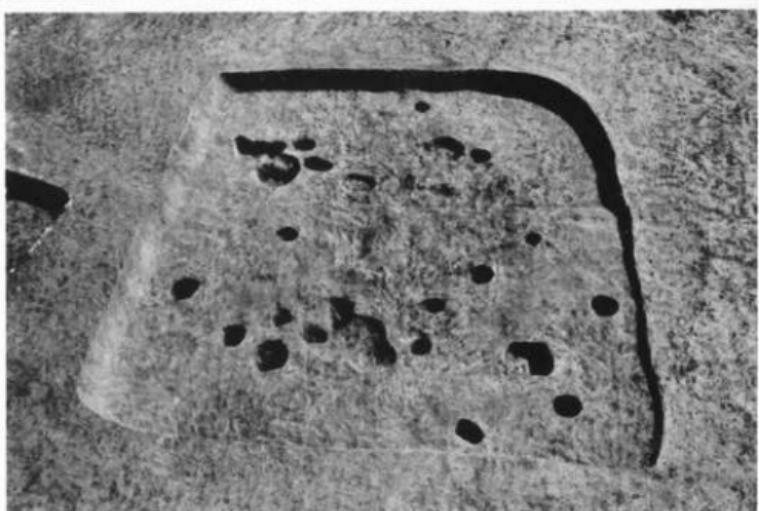
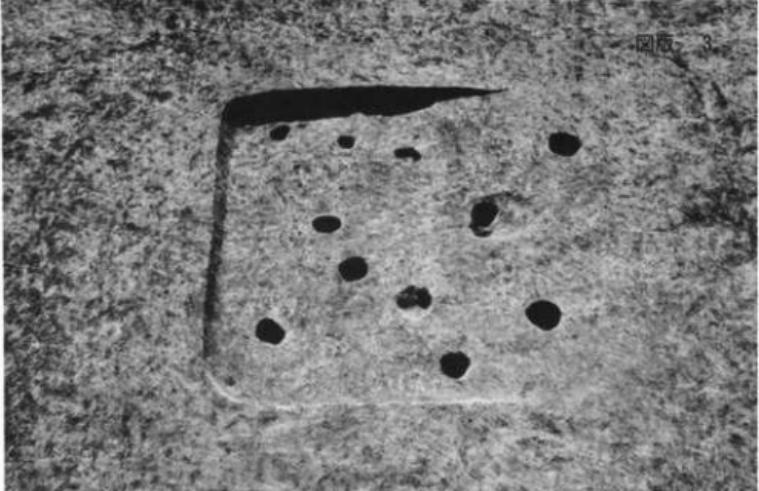


6. 37号炉穴全景



7. 45号炉穴全景





1. 3號住居跡全景



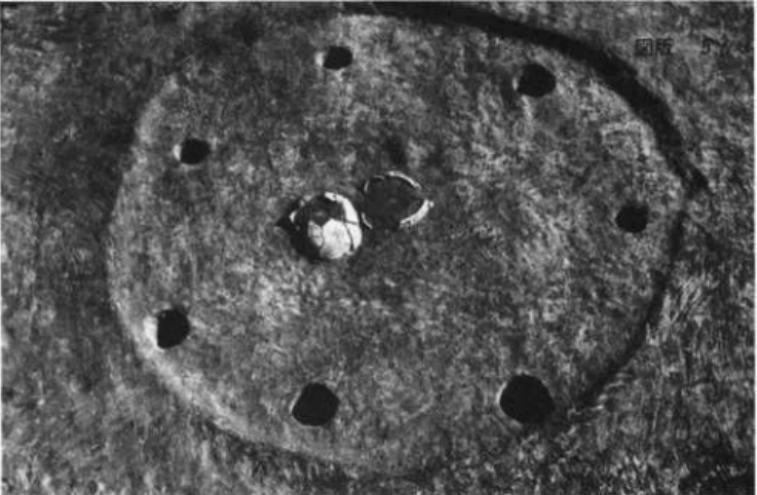
2. 12號住居跡全景



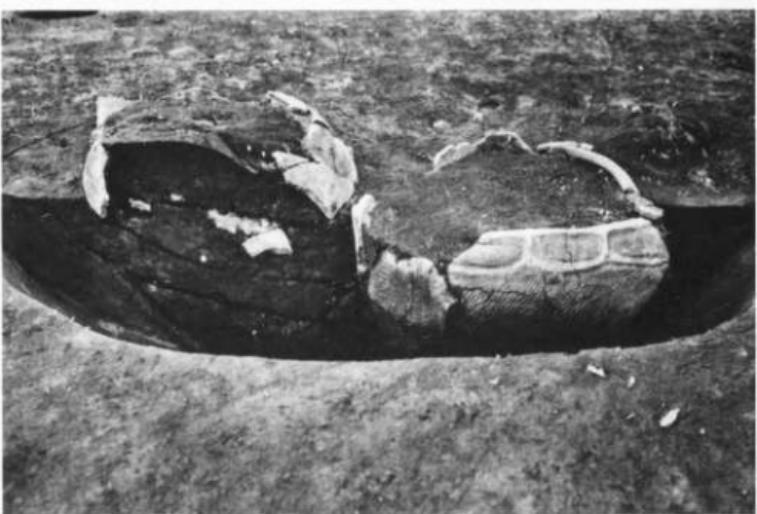
3. 12號住居跡遺物出土  
狀況



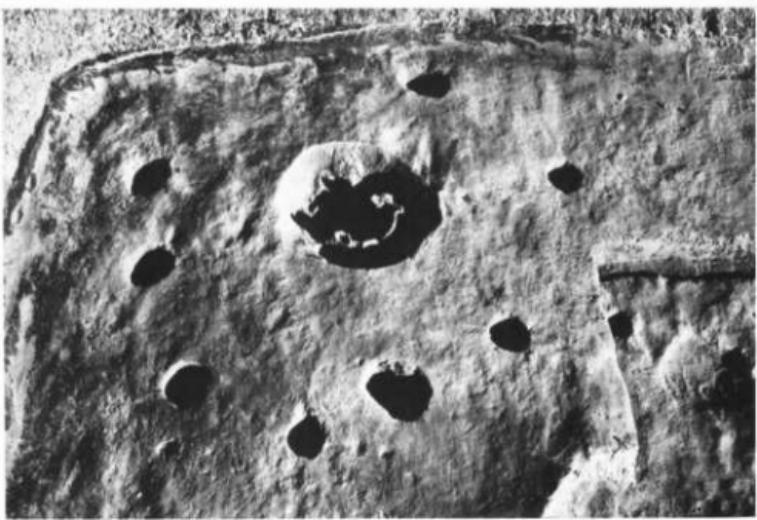
1. 13号住居跡全景



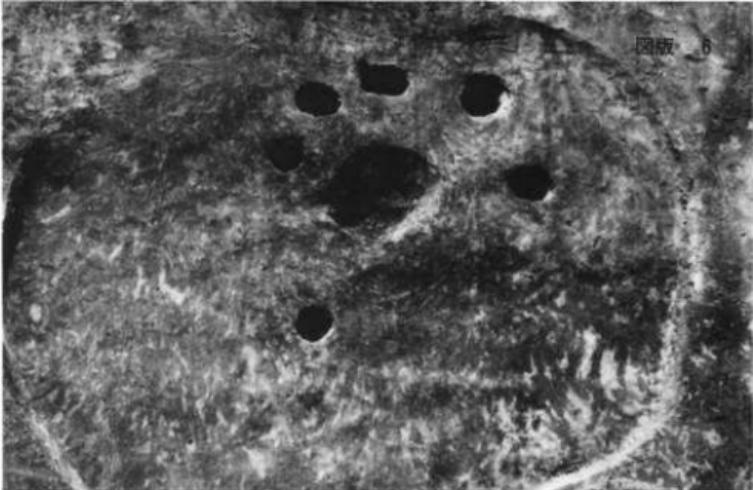
2. 13号住居跡炉断面



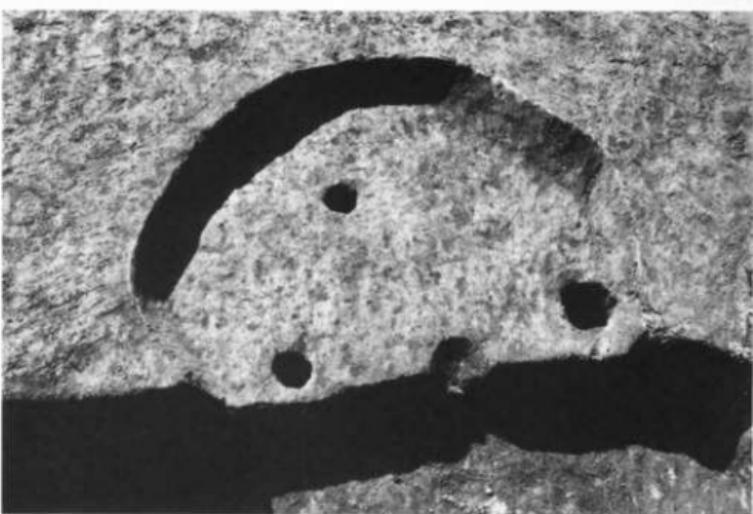
3. 24号住居跡全景



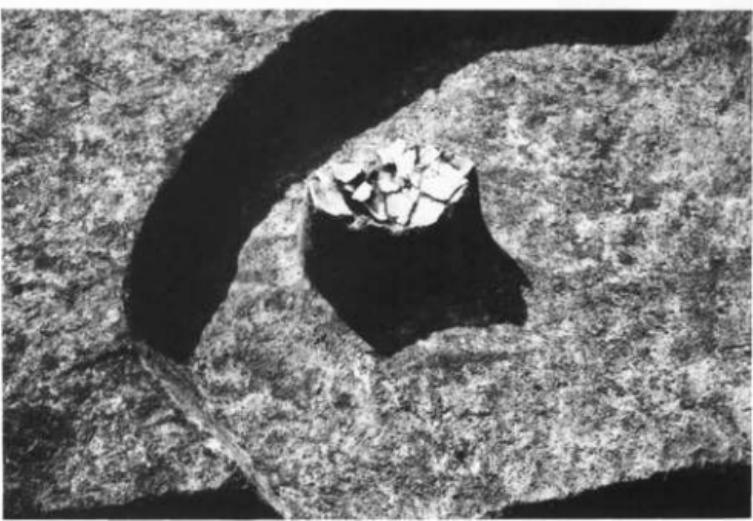
1. 43号住居跡全景



2. 57号住居跡全景



3. 57号住居跡遺物出土  
狀況



1. 1号墳全景



2. 1号墳石室全景

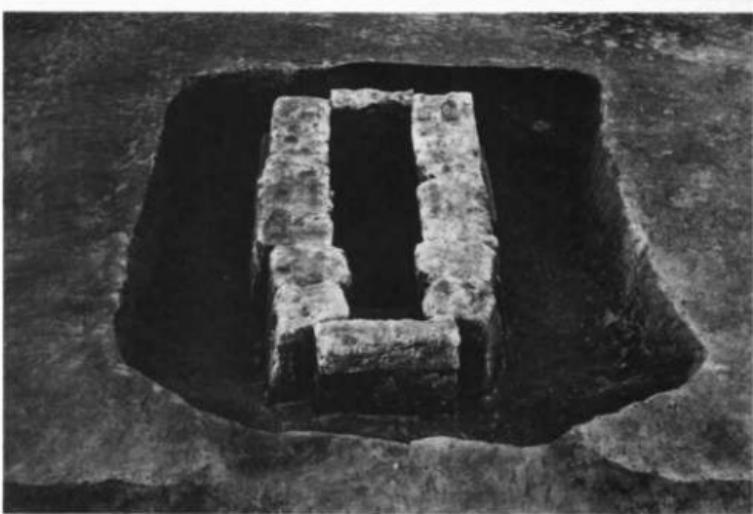


3. 1号墳石室掘り方





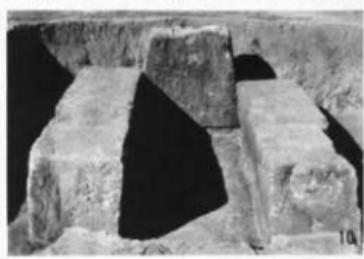
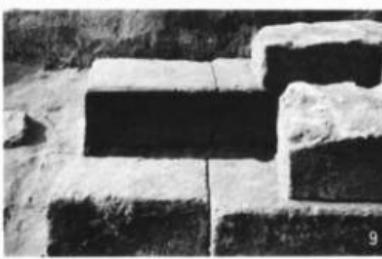
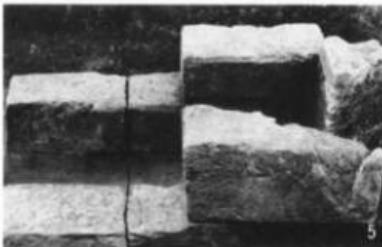
1. 2号填全景



2. 2号填石室全景



3. 2号填周溝遺物出土  
狀況

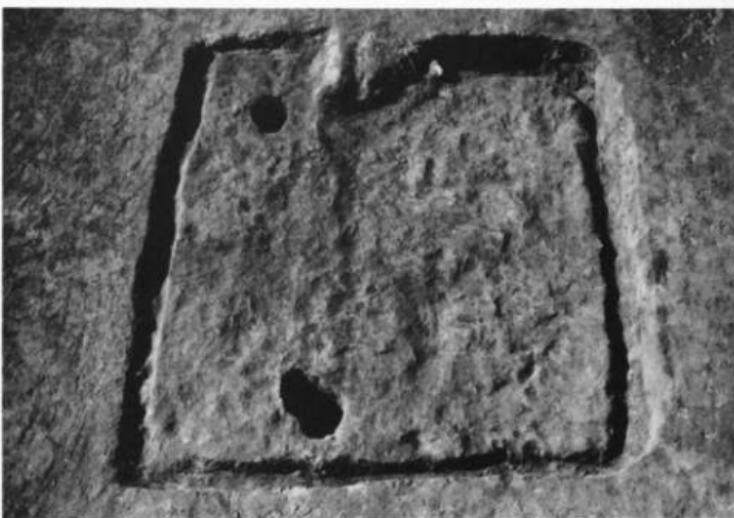


1 ~ 6  
1号填石室解体状况

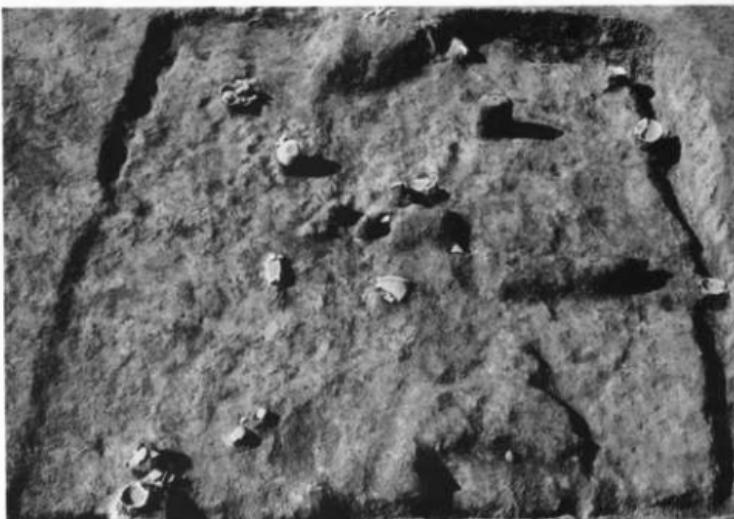
7 ~ 12  
2号填石室解体状况



1. 1号住居跡全景



2. 2号住居跡全景



3. 2号住居跡遺物出土  
状况

1. 4號住居跡全景



2. 4號住居跡遺物出土  
狀況



3. 5號住居跡全景



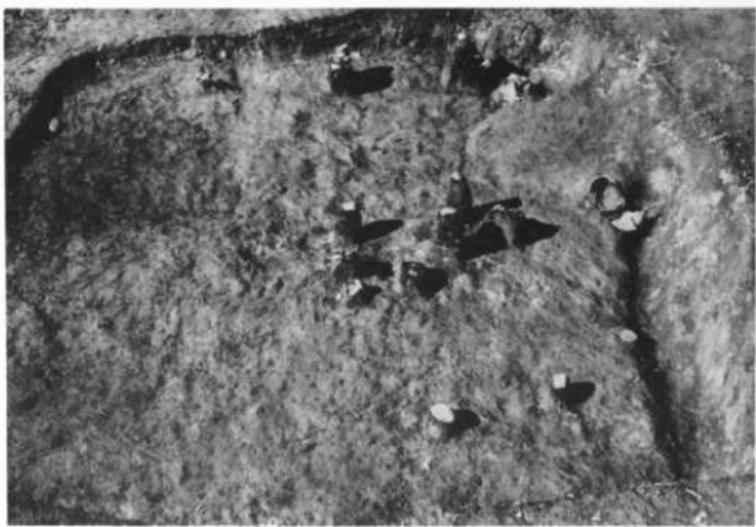
1. 5號住居跡遺物出土  
狀況



2. 6號住居跡全景

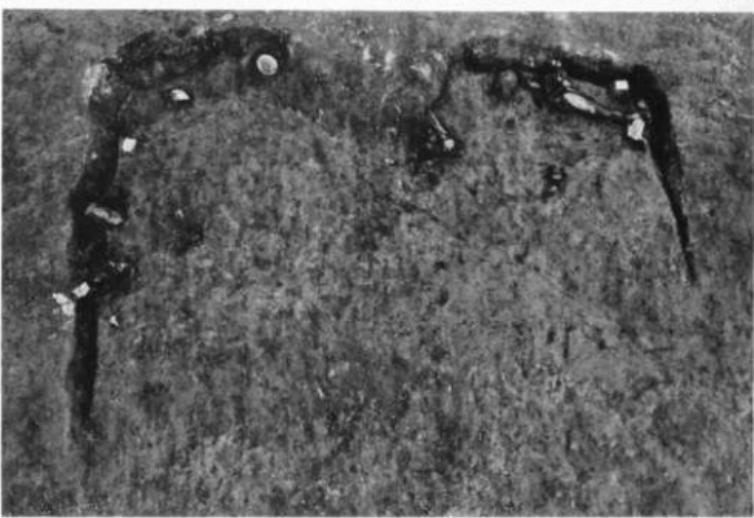


3. 6號住居跡遺物出土  
狀況





1. 7号住居跡全景



2. 7号住居跡遺物出土  
状况



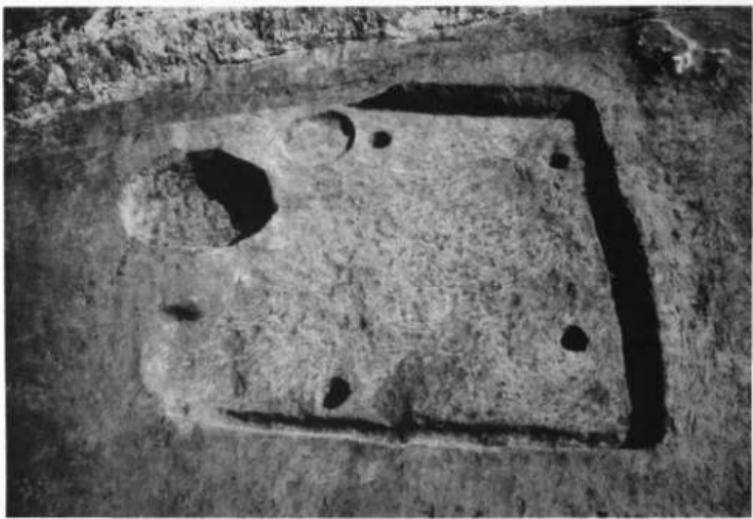
3. 8号住居跡全景



1. 9号住居跡全景

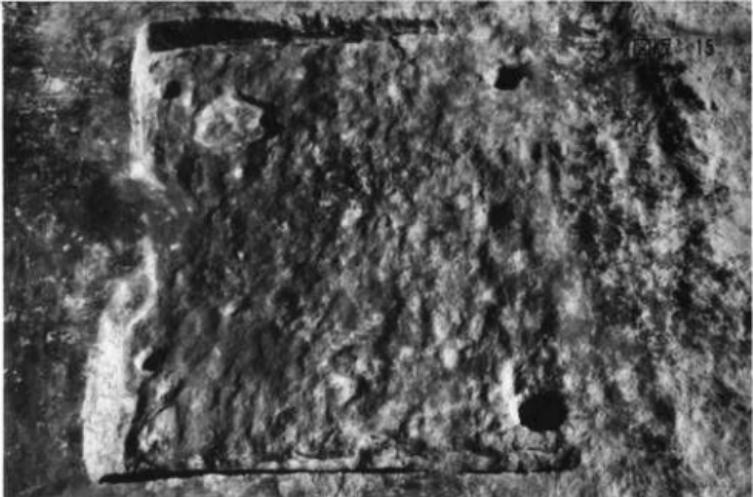


2. 9号住居跡遺物出土  
狀況



3. 11号住居跡全景

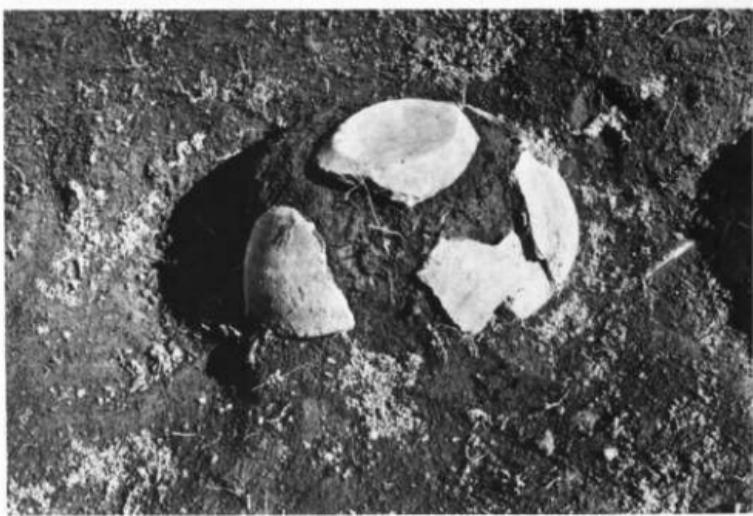
1. 19號住居跡全景

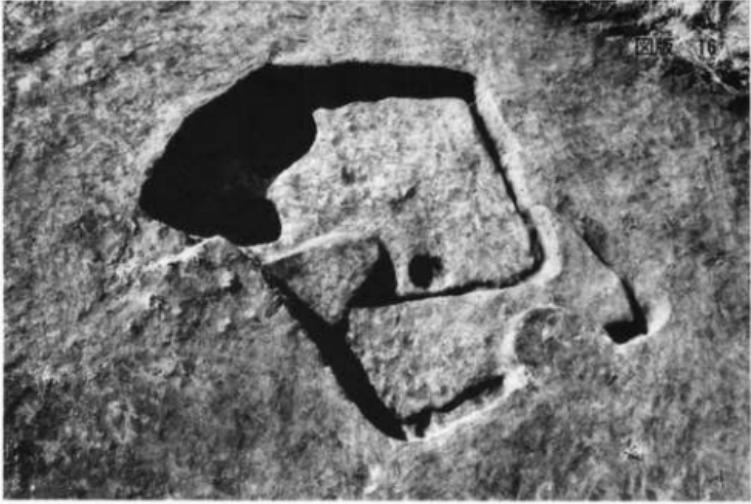


2. 39(12)號住居跡全景



3. 39(12)號住居跡遺物  
出土狀況

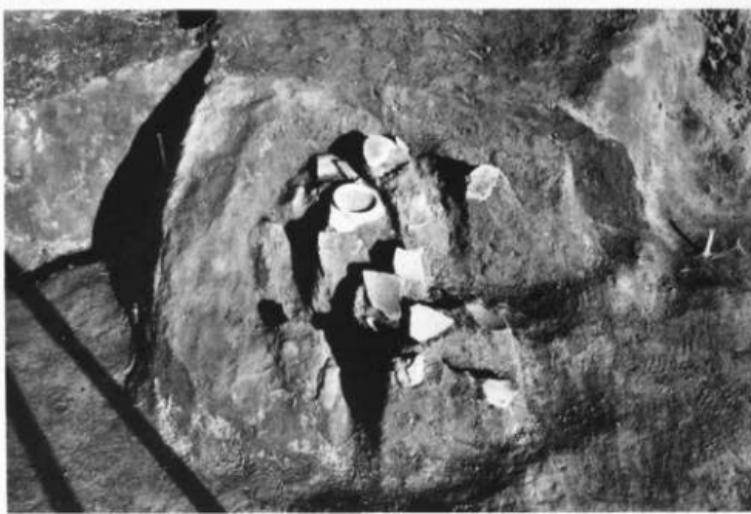




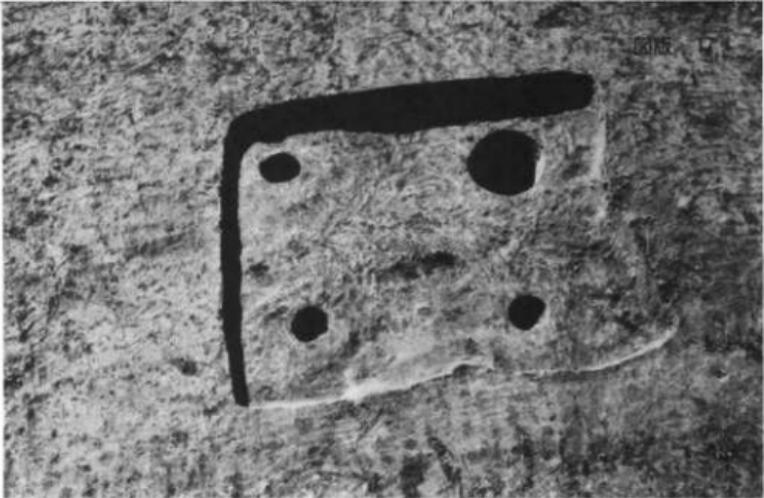
1. 40(13)号住居跡全景



2. 40(13)号住居跡遺物  
出土状況



3. 40(13)号住居跡遺物  
出土状況



1. 42(15)号住居跡全景

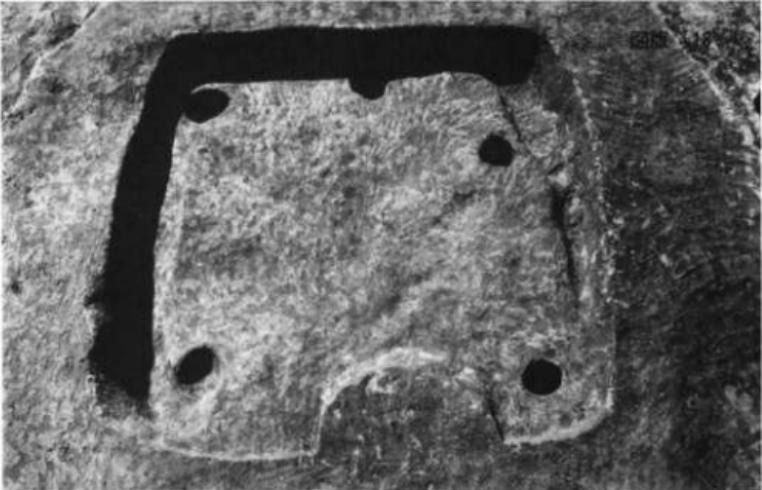


2. 42(15)号住居跡遺物  
出土狀況



3. 42(15)号住居跡遺物  
出土狀況

1. 44(17)号住居跡全景



2. 46(19)·48(21)号住居跡全景



3. 46(19)号住居跡遺物  
出土狀況





1. 48(21)号住居跡全景

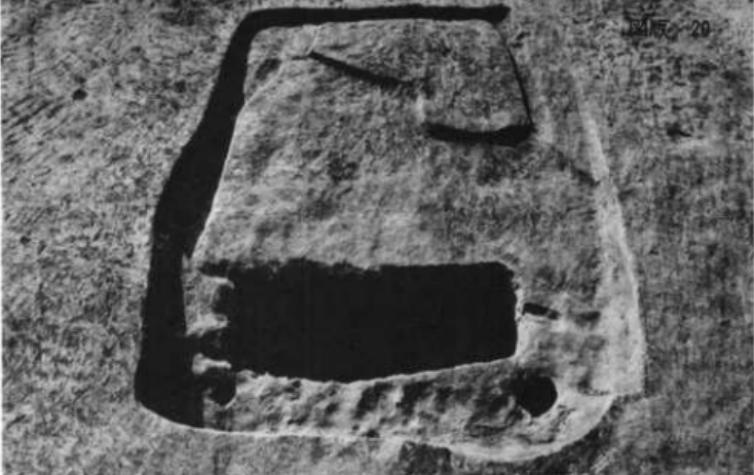


2. 48(21)号住居跡遺物  
出土狀況



3. 49(22)号住居跡全景

1. 56(29)号住居跡・73号  
土塁全景



2. 59(32)号住居跡全景



3. 59(32)号住居跡遺物  
出土状況

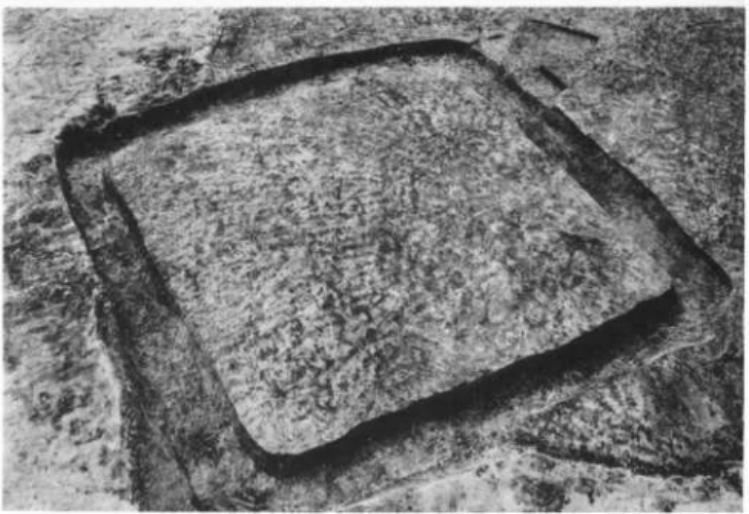




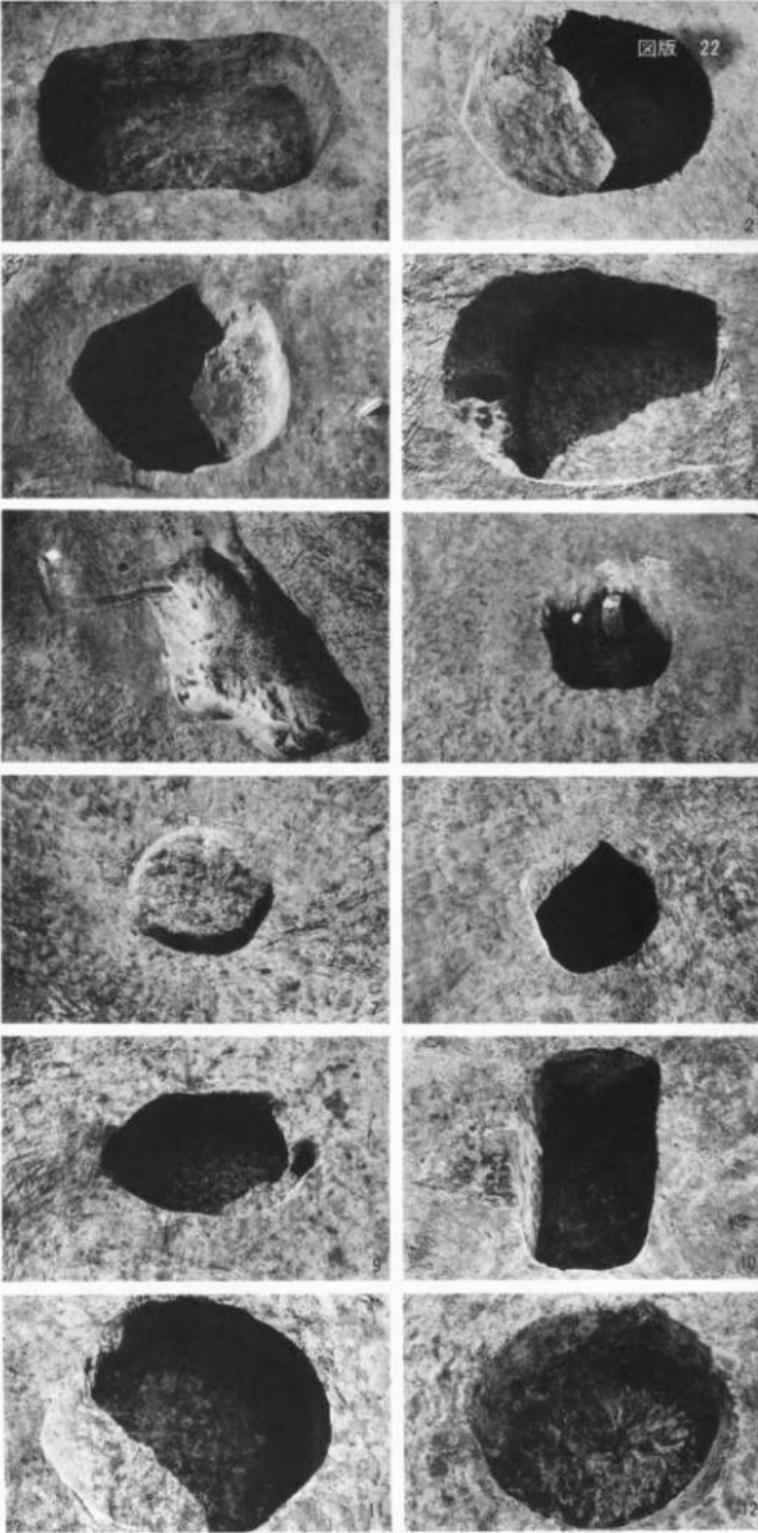
1. 34(6)号方形周溝状  
遗構全景



2. 54(27)号方形周溝状  
遗構全景



3. 50(23)号方形周溝状  
遗構全景



1. 10号土塚全景
2. 21号土塚全景
3. 28号土塚全景
4. 29(1)号土塚全景
5. 58(31)号土塚全景
6. 61(34)号土塚全景
7. 62(35)号土塚全景
8. 63(36)号土塚全景
9. 64(37)号土塚全景
10. 65(38)号土塚全景
11. 66(39)号土塚全景
12. 72号土塚全景



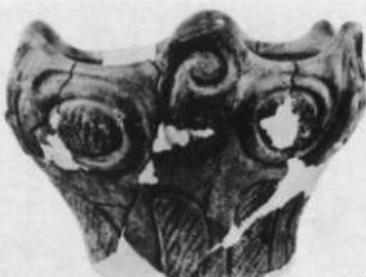
1 (52)



2 (52)



3 (3B)



4 (3)

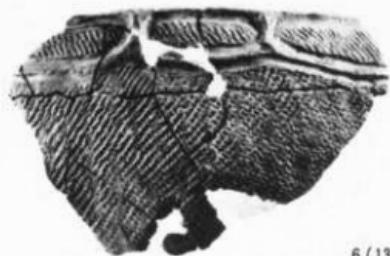


7 (12)



5 (13)

3・12・13・52号住居跡、グリッド出土土器



6 (13)



8 (13)



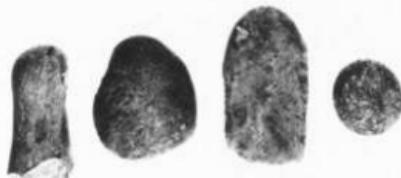
9 (43)



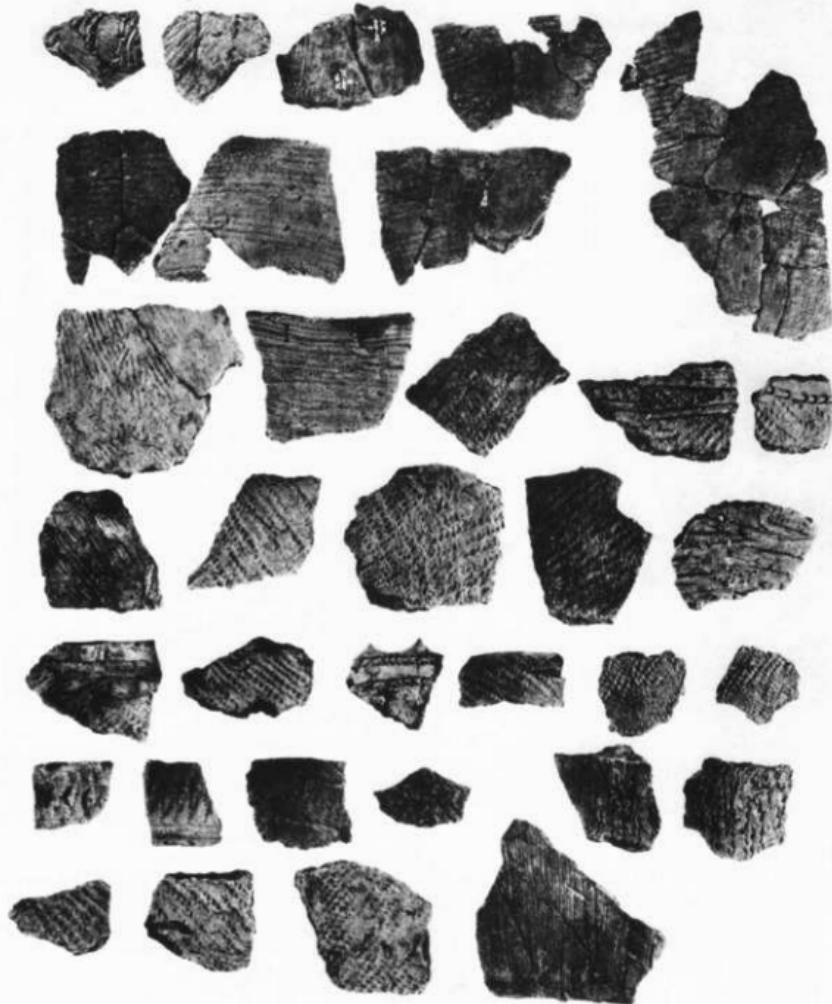
10(57)



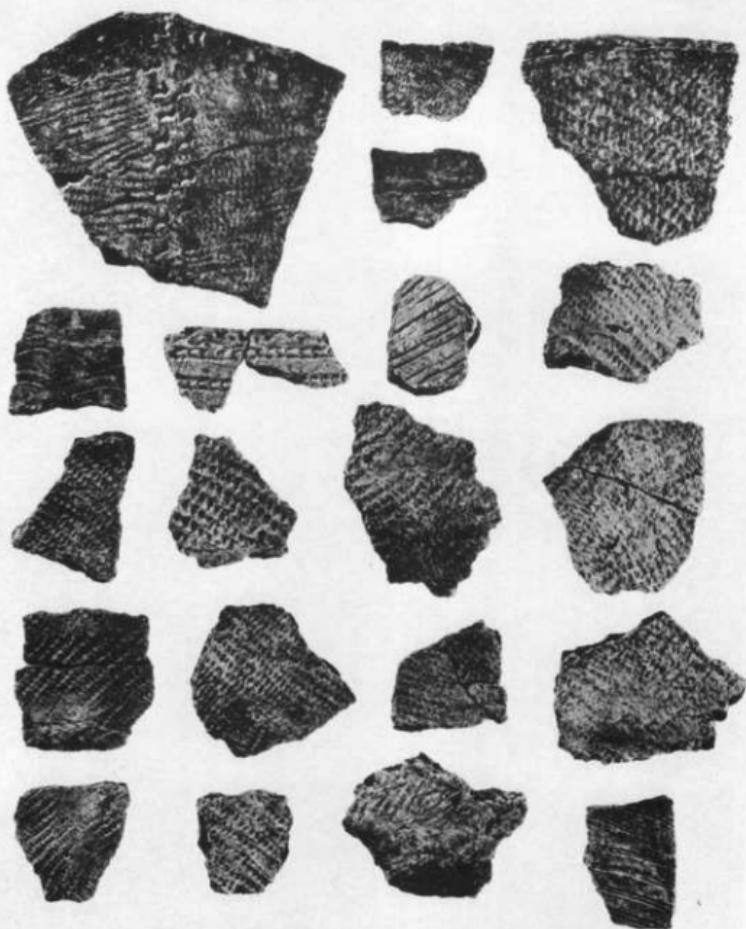
11(2-A)



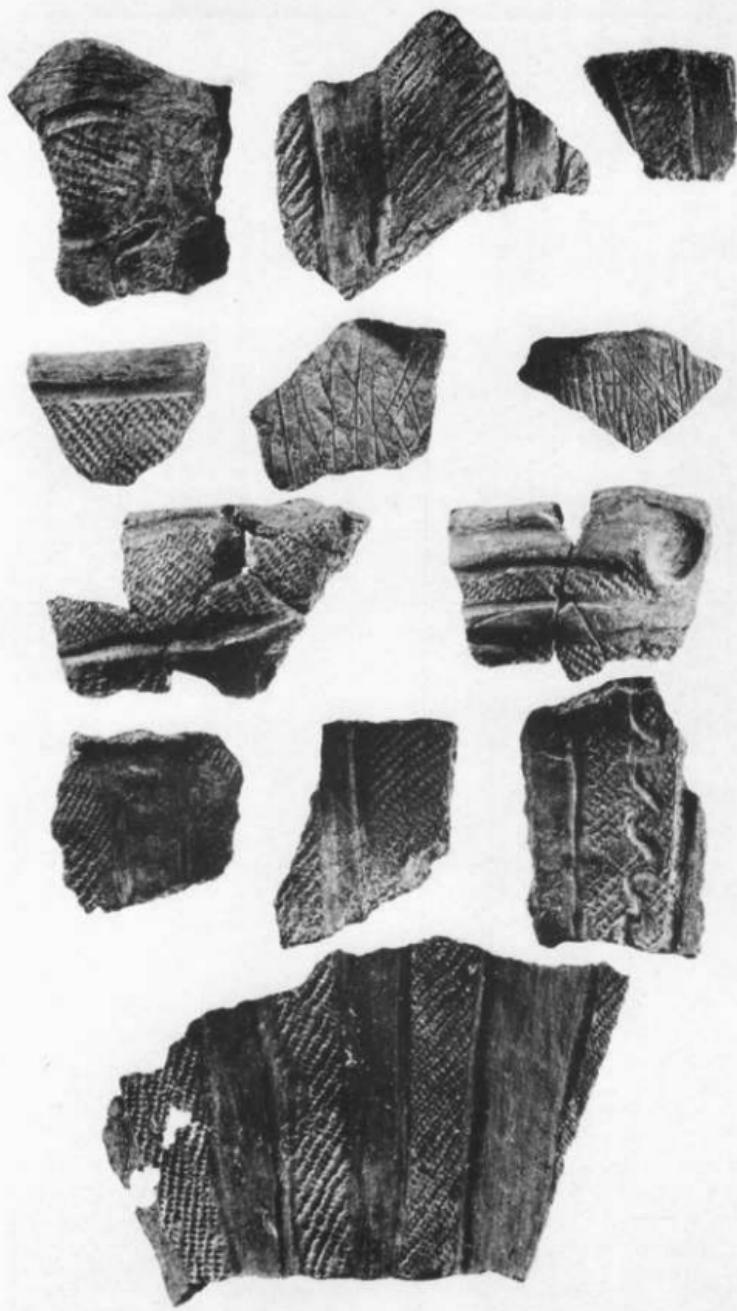
13・43・57号住居跡、グリッド下出土土器、石器



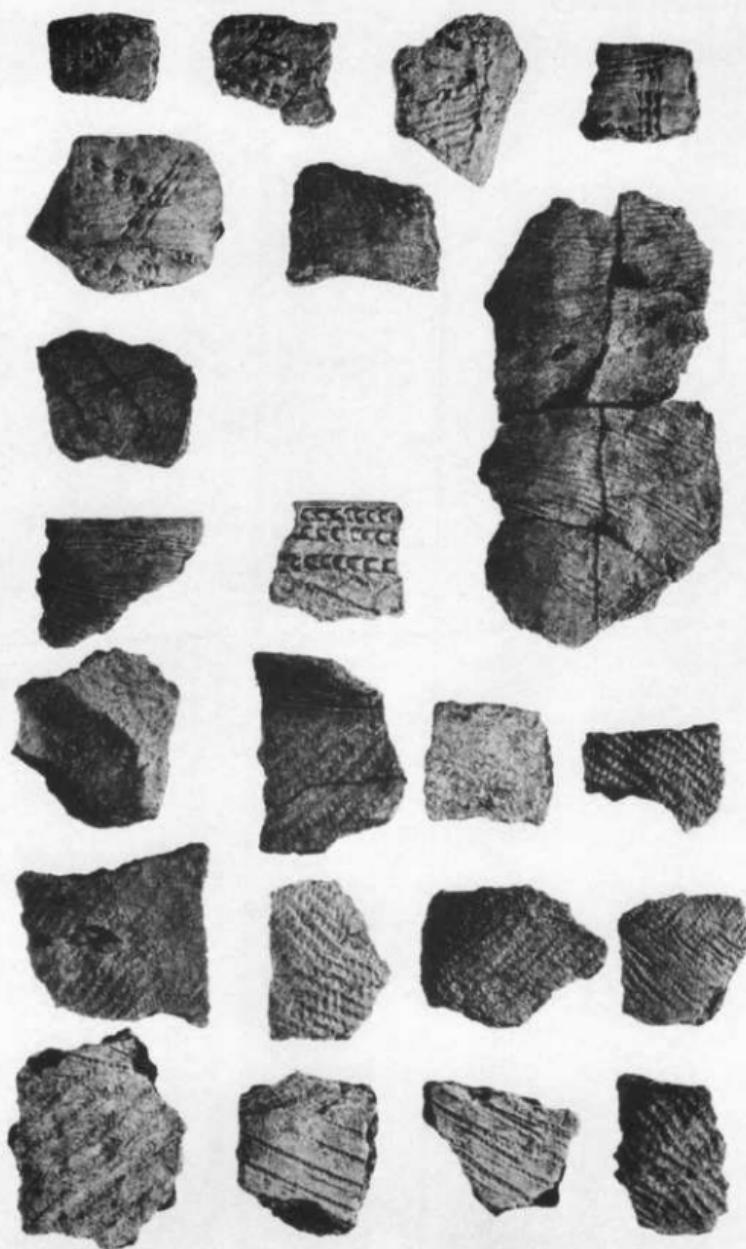
33·36号炉穴、30·31·43号住居跡出土土器



52号住居跡出土土器



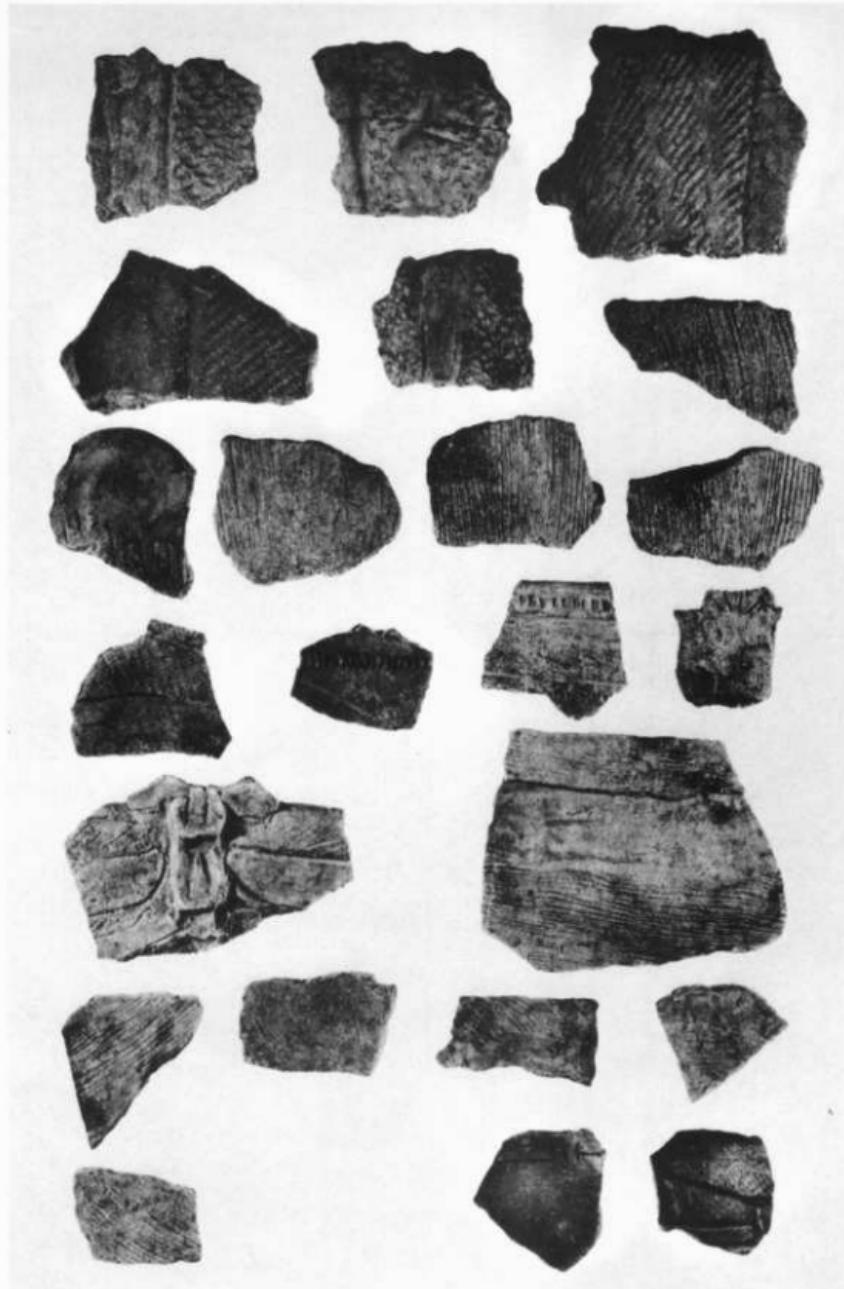
5・12・15・18・24号住居跡出土土器



グリッド出土土器



グリッド出土土器



グリッド出土土器



2号墳

2号墳



7(2)



6(2)

16(5)



18(5)



21(6)

19(5)



2号墳、2・5号住居跡出土土器、鉄鎌



22( 6 )



17( 5 )



23( 6 )



26( 7 )



24( 6 )



31( 8 )



27( 7 )



34(18-A)



32(11)



37(18-A)

5・6・7・8・11・18-A号住居跡出土土器



35(18-A)



36(18-A)



40(39)



52(42)



49(40-B)



57(44)



61(46)



60(44)



63(46)

18-A・39・40-B・42・44・46号住居跡出土土器



65(47)



70(48)



66(48)



72(48)



71(48)



75(48)



83(49)



80(49)

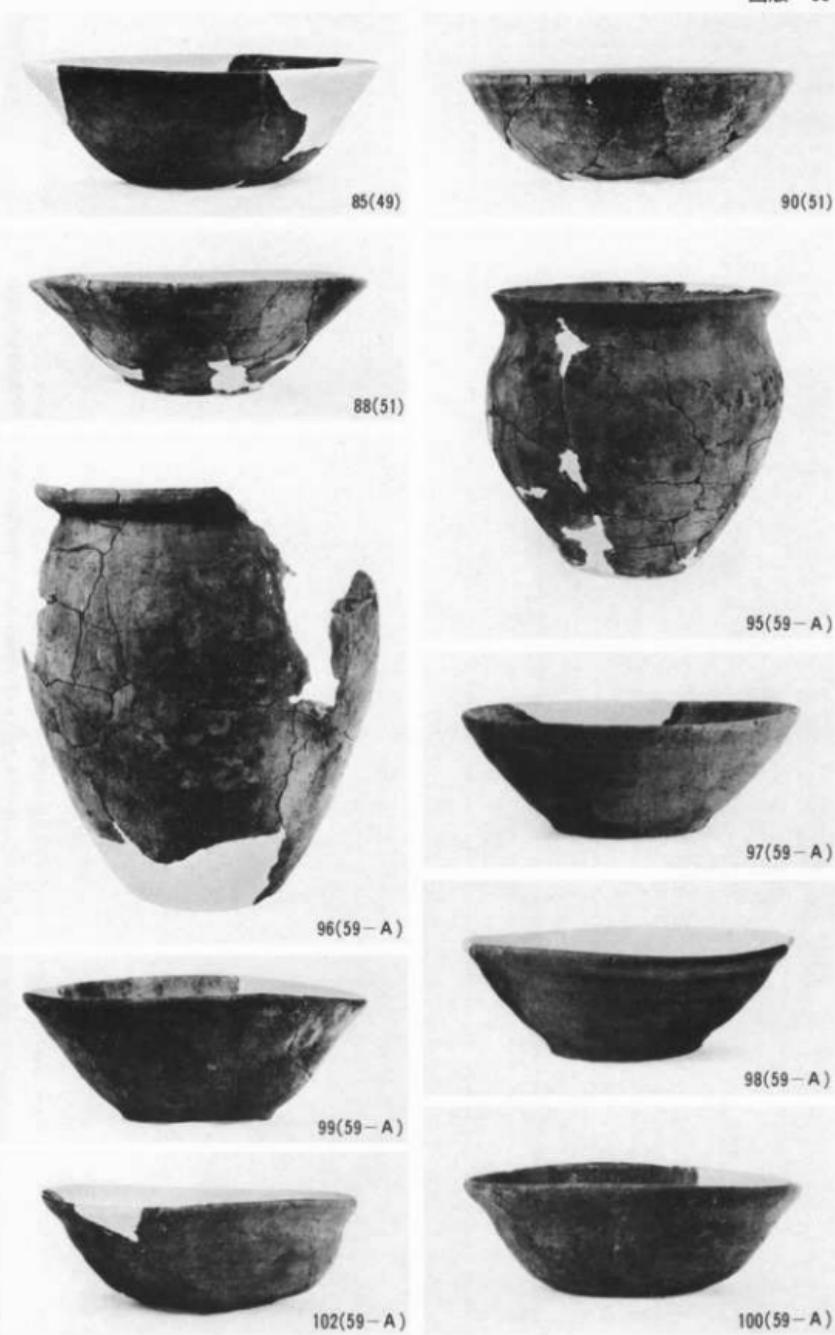


84(49)



81(49)

47・48・49号住居跡出土土器



49・51・59-A号住居跡出土土器



1 (54)



4 (61)



5 (61)



5

6



2 (11)



9 (28-63)



3 (27)



2 (10)

住居跡出土鉄・銅製品、方形周溝状遺構、土塙出土土器

Y = 32120

Y = 32200

Y = 32280

X = 32000

X = 32000

X = -51000



00	01	02	03	04	05	06	07	08	09
10	11								
20		22							
30			23						
40				44					
50					55				
60						66			
70							77		
80								88	
90									99

遺跡全体図

---

昭和60年3月25日 印刷

昭和60年3月30日 発行

## 千葉東南部ニュータウン 16

### —大勝野北遺跡—

発行 住宅・都市整備公団 首都圏都市開発本部  
東京都新宿区新宿4-3-17( H K新宿ビル内)

財團法人 千葉県文化財センター  
千葉県千葉市葛城2-10-1  
TEL 0472(25)6478

印刷 ホマレ印刷株式会社  
千葉市新田町232-3  
TEL 0472(46)3588㈹

---